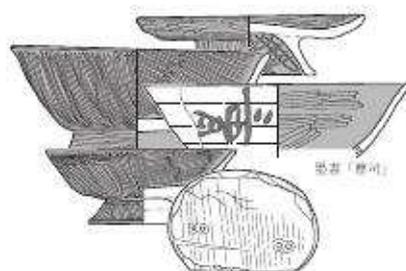


茨城県石岡市

杉ノ井遺跡

(旧 泉台遺跡)



2012

石岡市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi

例 言

1. 本書は茨城県石岡市杉並一丁目 12807-1 に所在する杉ノ井遺跡（旧 泉台遺跡）の発掘調査報告書である。なお、発掘調査の概要は既に報告済み（下記文献）であるが、本書をもって正式報告とする。

山武考古学研究所編 1999『茨城県石岡市泉台遺跡—発掘調査報告書—』石岡市教育委員会

2. 調査は、民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。
3. 調査は、石岡市教育委員会の指導のもと、有限会社山武考古学研究所（当時）が実施した。
4. 整理作業は、市教育委員会の指導のもと、平成 23 年度茨城県雇用創出等基金事業として旧石岡市立高浜幼稚園において、有限会社勾玉工房 Mogi が実施した。
5. 調査内容及び調査機関については下記のとおりである。

調査面積 約 1,438 m²

発掘調査期間 平成 10 年 6 月 26 日～8 月 7 日

整理作業期間 平成 23 年 9 月 1 日～12 月 5 日

調査担当者 発掘 平岡 和夫 高野 浩之 土生 朗 治（有限会社山武考古学研究所（当時））

整理 大賀 健 大賀さつき 長谷川秀久 谷 旬 大越直樹 鈴木 徹
石山 啓 高橋歩美 森 優里絵（有限会社勾玉工房 Mogi）

調査参加者 発掘 今川 貞男 高橋 薫英 小松崎健蔵 大和田謙蔵 三輪 英行 小野 豊
木村 毅 中島とみ子 矢口多美子 石黒よし子 中野富美子 富田 玲子
大久保敦子 高野 敏江 鏡原美和子 河合 淳子 小角みや子 吉田 京子
石黒 勇 佐藤隆文 立原勝則 齊藤 尽志 中村 仁 市原 静代
長谷川 久

整理 須賀澤一憲 根本 時子 岩崎美奈子 饗庭 紀子 阿天坊弥生 篠原美代子
石津弘子 千葉 静枝 永瀬 敬子 塚本 祐司 田村 光清 西出品子
稲川 千紜 緒方美枝子 原田良秋 佐藤 洋子 川並 恵子 諸川由美子

6. 本書は大賀健・谷・鈴木が分担執筆した。編集は小杉山大輔・曾根俊雄（市教育委員会生涯学習課）の助言のもと、大賀健・森が行った。

7. 分担執筆は下記のとおりである。

第 4 章第 3・4 節：鈴木、第 5 章第 2 節：谷、その他：大賀健

なお、第 1 章の発掘調査関係は概要報告書から転載、第 3 章は同書記述を改変・転載した。

8. 本遺跡から出土した緑釉陶器及び灰釉陶器は、小松崎博一・山本吉一著「常陸国府城出土施釉陶器集成」（『茨城県考古学協会誌』第 19 号所収、2007 年刊）にすべて掲載されている。したがって、本遺跡の資料として報告がすでに終了していることになるが、同集成は実測図のみの提示であり、他の遺物との共伴関係を示すためにも、遺物図面を遺構ごとに再録した。再録に当たっては、両氏及び市教育委員会の了承の上、小松崎氏作成の実測図を基にデジタルデータ化して掲載を行っている。また、遺物の観察表作成及び産地同定については、実測図の注記、及び川井正一氏指導の基『国分遺跡—確認調査報告書—』『国分遺跡出土施釉陶器の検討』の基礎資料として纏められた一覧表の記載内容をそのまま掲載している。

9. 本報告の作成に当たり、平成 10 年実施の調査資料を基に整理作業を行ったが、13 年の年月の経過による資料の散逸・調査記録の不備や未整理などで明確にし得なかった部分が多々ある。整理作業を担当した者

として最大限資料・記録の理解に努めたが、限界があり、調査時の混乱や調査後に一部資料の持ち出しなどによる不具合な部分が残ったことをここに明記しておく。

10. 発掘調査及び整理作業に関わり、次の諸氏並びに諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略、順不同）

平川 南 川井正一 黒澤彰哉 小松崎博一 山本吉一

ハローワーク石岡 関東日本重機 ㈱新成田総合社 亀下薬局 ハイマート㈱ 開成測量㈱

11. 調査記録及び出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書に記してある座標値は日本測地系を用いている。全体図・遺構図の方位は座標北を示す。
2. 文中の色調表現は『新版標準土色帖』2008年度版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
3. 標高は東京湾の平均海拔を示している。
4. 挿図は以下の縮尺で表した。

全体図	調査区全体図	1/200
遺構図	住居跡、掘立柱建物跡、土坑、柵・掘立柱塀跡	1/60
	カマド個別切り出し図	1/30
遺物図	土玉、紡錘車、石製品	1/3
	土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、瓦、土製品	1/4
	金属製品	1/2

なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。

5. 遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。なお写真のみ掲載のものは2分の1である。
6. 本文や挿図・挿表中に用いた略記号は以下を示す。

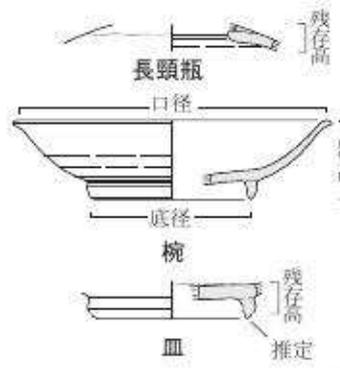
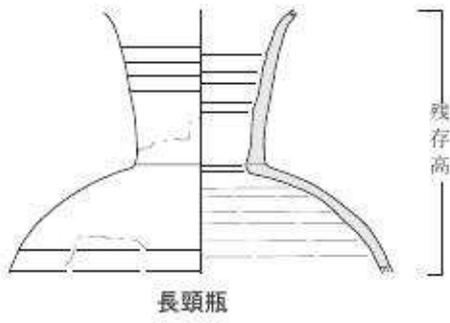
SI：住居跡 SK：土坑 SB：掘立柱建物跡 SA：柵・掘立柱塀跡 P：ピット K：攪乱

7. 挿図中のスクリーンパターンは以下を示す。

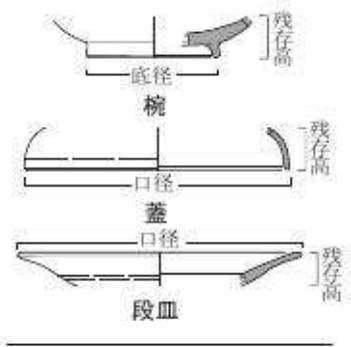
遺構図		山砂・カマド軸範囲		粘土		焼土		炭化物		硬化面範囲		
遺物図		須恵器断面		灰釉陶器断面		緑釉陶器断面		黒色処理		漆附着範囲		施釉範囲
遺物出土状況図		土器		石製品		金属製品						

8. 遺物観察表の法量単位はcm、重量単位はgである。法量に付した（ ）は復元値、〈 〉は残存値を示す。また、備考欄の【 】：小松崎・山本 2007 所収図の掲載番号、実+数字：小松崎氏実測原図番号を示す。
9. 掘立柱建物跡（SB）属性表中、法量の（ ）値は確認長。「柱痕」は柱痕跡、「柱当」は柱のあたりの略である。
10. 本遺跡の略称はイズミダイ-1998とした。出土遺物の注記もこれに従っている。
11. 検出された遺物の種類・器種の呼称及び計測位置は次ページ以降の基準に従っている。

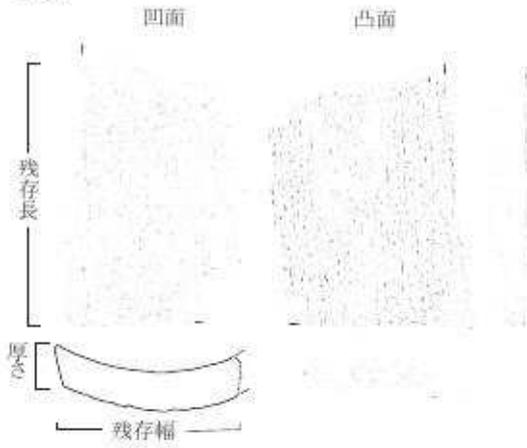
灰釉陶器



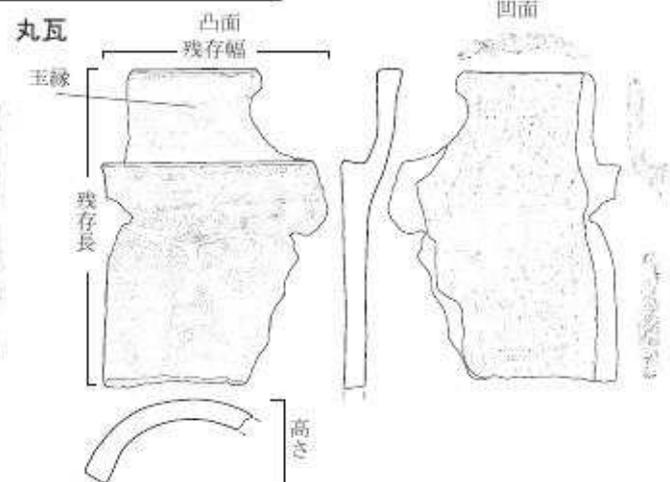
緑釉陶器



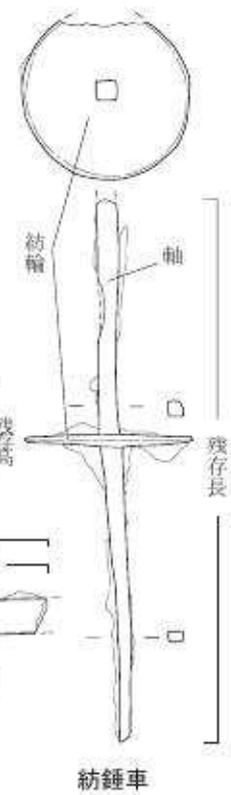
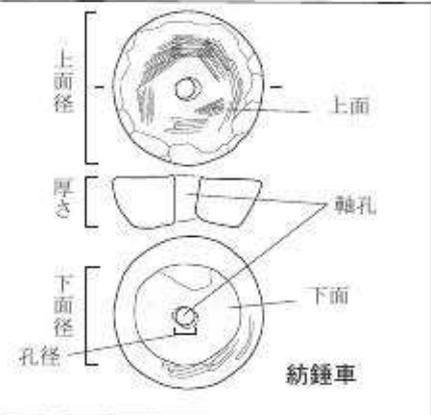
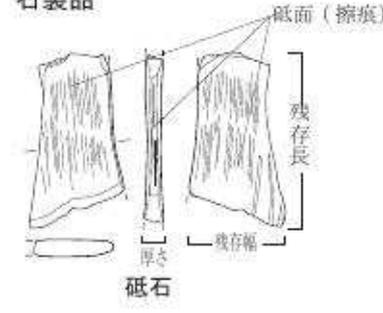
平瓦



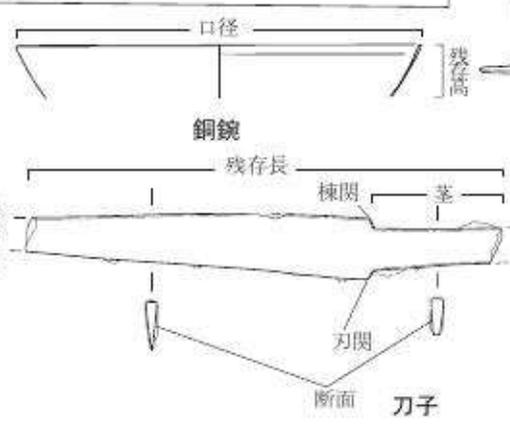
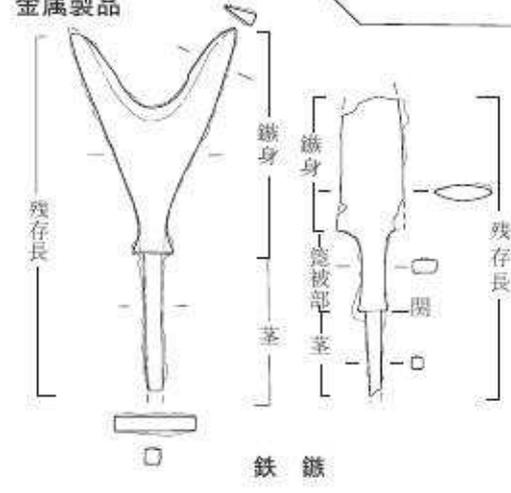
丸瓦



石製品



金属製品



紡錘車

本文目次

例言

凡例

目次

第1章 調査の方法と経過	1
第1節 調査の方法	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 標準堆積土層	4
第4章 検出された遺構と遺物	6
第1節 住居跡	6
第2節 土坑	74
第3節 掘立柱建物跡	84
第4節 柵・掘立柱塀跡	93
第5節 遺構外出土遺物	94
第5章 まとめ	95
第1節 緑釉・灰釉陶器の出土状況	95
第2節 文字資料	95
第3節 出土遺物の年代観	97
第4節 住居跡の形態と年代、及びその性格	102
第5節 まとめ	103

写真図版

抄録

挿図目次

第1図 試掘調査トレンチ出土遺物	2	第13図 SI04	10
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第14図 SI04 出土遺物	11
第3図 調査地点位置図	4	第15図 SI05	12
第4図 標準堆積土層	4	第16図 SI05 出土遺物	12
第5図 調査区全体図	5	第17図 SI06	13
第6図 SI01	6	第18図 SI06 出土遺物	13
第7図 SI01 出土遺物	7	第19図 SI07	14
第8図 SI02	8	第20図 SI07 出土遺物	14
第9図 SI02 出土遺物	8	第21図 SI08	14
第10図 SI03	9	第22図 SI08 出土遺物	15
第11図 SI03 出土遺物 (1)	9	第23図 SI09	16
第12図 SI03 出土遺物 (2)	10	第24図 SI09 出土遺物	18

第25図	SI10・11	19	第63図	SI30 出土遺物 (1)	52
第26図	SI10 出土遺物	19	第64図	SI30 出土遺物 (2)	53
第27図	SI11 出土遺物 (1)	21	第65図	SI31	53
第28図	SI11 出土遺物 (2)	22	第66図	SI31 出土遺物	54
第29図	SI12	23	第67図	SI32	55
第30図	SI12 出土遺物	24	第68図	SI32 出土遺物	55
第31図	SI13	25	第69図	SI33	56
第32図	SI13 出土遺物	26	第70図	SI33 出土遺物	57
第33図	SI14・15	28	第71図	SI34	58
第34図	SI14 出土遺物	29	第72図	SI34 出土遺物	59
第35図	SI15 出土遺物	30	第73図	SI35	59
第36図	SI16 出土遺物	31	第74図	SI35 出土遺物	60
第37図	SI16・17・18	32	第75図	SI37	61
第38図	SI17 出土遺物 (1)	33	第76図	SI37 出土遺物 (1)	62
第39図	SI17 出土遺物 (2)	34	第77図	SI37 出土遺物 (2)	63
第40図	SI18 出土遺物	36	第78図	SI38	65
第41図	SI19	36	第79図	SI38 出土遺物 (1)	66
第42図	SI19 出土遺物 (1)	37	第80図	SI38 出土遺物 (2)	67
第43図	SI19 出土遺物 (2)	38	第81図	SI39	69
第44図	SI20	39	第82図	SI39 出土遺物	70
第45図	SI20 出土遺物	40	第83図	SI41	71
第46図	SI21	41	第84図	SI41 出土遺物	71
第47図	SI21 出土遺物 (1)	42	第85図	SI42	72
第48図	SI21 出土遺物 (2)	43	第86図	SI42 出土遺物	73
第49図	SI22	43	第87図	SI43	74
第50図	SI22 出土遺物	44	第88図	SI43 出土遺物	74
第51図	SI24・25	45	第89図	SK01～03・06・13～16・19～22・24・ 25・27・28	76
第52図	SI24 出土遺物	46	第90図	SK29～31・33～37・39～43	77
第53図	SI25 出土遺物	46	第91図	土坑出土遺物 (1)	78
第54図	SI26・27	47	第92図	土坑出土遺物 (2)	79
第55図	SI27 カマド	48	第93図	土坑出土遺物 (3)	80
第56図	SI26 出土遺物	48	第94図	SB01	84
第57図	SI27 出土遺物	48	第95図	SB01 出土遺物	84
第58図	SI28	49	第96図	SB02 出土遺物	85
第59図	SI28 出土遺物	50	第97図	SB02	85
第60図	SI29	51	第98図	SB03・04	86
第61図	SI29 出土遺物	51	第99図	SB03・04 出土遺物	87
第62図	SI30	52			

第100図	SB05	88	第108図	遺構外出土遺物	94
第101図	SB05 出土遺物	88	第109図	緑釉・灰釉陶器出土遺構分布図	96
第102図	SB06	89	第110図	墨書土器集成図	98
第103図	SB06 出土遺物	89	第111図	刻書土器集成図	99
第104図	SB09 出土遺物	90	第112図	土器編年1 (8～9世紀)	100
第105図	SB07・09・SA03	91	第113図	土器編年2 (10～11世紀)	101
第106図	SB08	92	第114図	住居跡重複関係	104
第107図	SA01・02	93			

表 目 次

第1表	試掘調査トレンチ出土遺物観察表	2	第28表	SI21 出土遺物観察表 (2)	43
第2表	SI01 出土遺物観察表 (1)	7	第29表	SI22 出土遺物観察表	44
第3表	SI01 出土遺物観察表 (2)	8	第30表	SI24 出土遺物観察表	45
第4表	SI02 出土遺物観察表	8	第31表	SI25 出土遺物観察表	46
第5表	SI03 出土遺物観察表	10	第32表	SI26 出土遺物観察表	48
第6表	SI04 出土遺物観察表	11	第33表	SI27 出土遺物観察表	48
第7表	SI05 出土遺物観察表	12	第34表	SI28 出土遺物観察表	50
第8表	SI06 出土遺物観察表	13	第35表	SI29 出土遺物観察表	51
第9表	SI07 出土遺物観察表	14	第36表	SI30 出土遺物観察表	53
第10表	SI08 出土遺物観察表	16	第37表	SI31 出土遺物観察表	54
第11表	SI09 出土遺物観察表	17	第38表	SI32 出土遺物観察表 (1)	54
第12表	SI10 出土遺物観察表	20	第39表	SI32 出土遺物観察表 (2)	56
第13表	SI11 出土遺物観察表 (1)	20	第40表	SI33 出土遺物観察表	57
第14表	SI11 出土遺物観察表 (2)	23	第41表	SI34 出土遺物観察表	58
第15表	SI12 出土遺物観察表	25	第42表	SI35 出土遺物観察表	60
第16表	SI13 出土遺物観察表	27	第43表	SI37 出土遺物観察表 (1)	63
第17表	SI14 出土遺物観察表 (1)	29	第44表	SI37 出土遺物観察表 (2)	64
第18表	SI14 出土遺物観察表 (2)	30	第45表	SI38 出土遺物観察表 (1)	67
第19表	SI15 出土遺物観察表	31	第46表	SI38 出土遺物観察表 (2)	68
第20表	SI16 出土遺物観察表	31	第47表	SI39 出土遺物観察表 (1)	69
第21表	SI17 出土遺物観察表 (1)	34	第48表	SI39 出土遺物観察表 (2)	70
第22表	SI17 出土遺物観察表 (2)	35	第49表	SI41 出土遺物観察表	71
第23表	SI18 出土遺物観察表	36	第50表	SI42 出土遺物観察表	73
第24表	SI19 出土遺物観察表	38	第51表	SI43 出土遺物観察表	74
第25表	SI20 出土遺物観察表 (1)	39	第52表	土坑一覽表	75
第26表	SI20 出土遺物観察表 (2)	40	第53表	土坑出土遺物観察表 (1)	81
第27表	SI21 出土遺物観察表 (1)	41	第54表	土坑出土遺物観察表 (2)	82

第55表	土坑出土遺物観察表(3)	83	第67表	SB07 属性表	90
第56表	SB01 属性表	85	第68表	SB09 出土遺物観察表	90
第57表	SB01 出土遺物観察表	85	第69表	SB09 属性表	92
第58表	SB02 属性表	86	第70表	SB08 属性表	92
第59表	SB02 出土遺物観察表	86	第71表	SA01 属性表	93
第60表	SB03 属性表	87	第72表	SA02 属性表	93
第61表	SB04 属性表	87	第73表	SA03 属性表	93
第62表	SB03・04 出土遺物観察表	87	第74表	遺構外出土遺物観察表	94
第63表	SB05 出土遺物観察表	88	第75表	緑釉・灰釉陶器分類表	96
第64表	SB05 属性表	89	第76表	住居跡属性一覧表	105
第65表	SB06 出土遺物観察表	89			
第66表	SB06 属性表	90			

写真目次

遺構図版1

- 1 標準堆積土層 西から
- 2 SI01 東から
- 3 SI01 鍛冶炉 南から
- 4 SI02 南から
- 5 SI02 P1 セクション 西から
- 6 SI03 西から
- 7 SI03 鍛冶炉セクション 北から
- 8 SI04 南から

遺構図版2

- 1 SI05 東から
- 2 SI05 P1 遺物出土状況 北から
- 3 SI06 南から
- 4 SI07 西から
- 5 SI08 遺物出土状況 北から
- 6 SI08 カマド 西から
- 7 SI08 西から
- 8 SI09 南から

遺構図版3

- 1 SI10 カマド遺物出土状況 南から
- 2 SI10 カマド袖セクション 南から
- 3 SI10 南から
- 4 SI11 南から

- 5 SI11 カマド遺物出土状況 南から
- 6 SI11 カマド 南から
- 7 SI11 発掘付け穴確認状況 東から
- 8 SI12 西から

遺構図版4

- 1 SI12 カマド遺物出土状況 南から
- 2 SI13 遺物出土状況 南から
- 3 SI13 南から
- 4 SI14 南から
- 5 SI14 P1 遺物出土状況 北から
- 6 SI14 鍛冶炉 東から
- 7 SI15 南から
- 8 SI16 西から

遺構図版5

- 1 SI17 カマドA 遺物出土状況(1) 西から
- 2 SI17 カマドA 遺物出土状況(2) 東から
- 3 SI17 カマドBセクション 南から
- 4 SI17 遺物出土状況 西から
- 5 SI17・18 西から
- 6 SI19 南から
- 7 SI20 セクション 東から
- 8 SI21 南から

遺構図版6

1 SI22 検出状況 南から

2 SI22 南から

3 SI25 セクション 北から

4 SI24 セクション 北から

5 SI25 南から

6 SI24 南から

7 SI25 カマド 南から

8 SI26 北西から

遺構図版 7

1 SI26 カマドBセクション 西から

2 SI26 カマドB 西から

3 SI26・27 セクション 東から

4 SI27 西から

5 SI27 カマドセクション 南から

6 SI28 西から

7 SI28 カマド遺物出土状況 南から

8 SI28 カマドセクション 西から

遺構図版 8

1 SI29 西から

2 SI30 南から

3 SI30 カマド 南から

4 SI31 北から

5 SI32 南から

6 SI33 南から

7 SI33 カマド 南から

8 SI34 北側焼土セクション 西から

遺構図版 9

1 SI34 南から

2 SI35・38・SK40 セクション 南から

3 SI35 南から

4 SI36 硬化面確認状況 北東から

5 SI37 セクション・遺物出土状況 東から

6 SI37 西から

7 SI38 セクション 西から

8 SI38 遺物出土状況 西から

遺構図版 10

1 SI38 南から

2 SI39 南から

3 SI41 西から

4 SI42 南から

5 SI43 南から

6 SB01 西から

7 SB03・04 西から

8 SB05・07・09 東から

遺構図版 11

1 SB05 P3セクション 西から

2 SB06 P2セクション 南から

3 SB06 P3セクション 西から

4 SB06 東から

5 SB08 東から

6 SK01 東から

7 SK12 セクション 北から

8 SK12 北東から

遺構図版 12

1 SK39 南東から

2 SK40 セクション 北から

3 SK40 東から

4 SK41 セクション 北から

5 SK41 遺物出土状況

6 SK41 北から

7 SK42 遺物出土状況

8 調査風景 西から

遺物図版 1

SI01 出土遺物

SI02 出土遺物

SI03 出土遺物

遺物図版 2

SI04 出土遺物

SI05 出土遺物

SI06 出土遺物

SI07 出土遺物

SI08 出土遺物

遺物図版 3

SI08 出土遺物

SI09 出土遺物

SI10 出土遺物

遺物図版 4

SI11 出土遺物

遺物図版 5

SI11 出土遺物

SI12 出土遺物

SI13 出土遺物

遺物図版 6

SI14 出土遺物

SI15 出土遺物

SI16 出土遺物

SI17 出土遺物

遺物図版 7

SI17 出土遺物

SI18 出土遺物

SI19 出土遺物

遺物図版 8

SI19 出土遺物

SI20 出土遺物

遺物図版 9

SI21 出土遺物

SI22 出土遺物

SI24 出土遺物

SI25 出土遺物

遺物図版 10

SI26 出土遺物

SI27 出土遺物

SI28 出土遺物

SI29 出土遺物

SI30 出土遺物

遺物図版 11

SI30 出土遺物

SI31 出土遺物

SI32 出土遺物

SI33 出土遺物

遺物図版 12

SI34 出土遺物

SI35 出土遺物

SI37 出土遺物

遺物図版 13

SI37 出土遺物

SI38 出土遺物

遺物図版 14

SI38 出土遺物

SI39 出土遺物

SI41 出土遺物

SI42 出土遺物

SI43 出土遺物

SK01 出土遺物

遺物図版 15

SK03 出土遺物

SK06 出土遺物

SK12 出土遺物

SK16 出土遺物

SK18 出土遺物

SK26 出土遺物

SK33 出土遺物

SK35 出土遺物

SK39 出土遺物

SK40 出土遺物

遺物図版 16

SK41 出土遺物

SK42 出土遺物

SK43 出土遺物

SB01 出土遺物

SB02 出土遺物

SB03・04 出土遺物

SB05 出土遺物

SB06 出土遺物

SB09 出土遺物

遺物図版 17

遺構外出土遺物

試掘調査トレンチ出土遺物

第1章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

発掘調査

調査はトレンチ試掘調査結果にもとづき、重機による表土除去を行った。各遺構の掘り下げは、人力によって行い、遺物の出土状況の記録、各遺構の正確な検出と切り合い関係の把握、土層の堆積状況の把握に努めた。土層断面はすべて実測を行い、土色帖を用いて記録・写真撮影を行った。

調査区内には公共座標に沿って10m四方のグリッドを設定し、北から南へアルファベット（A～E）を、西から東へアラビア数字（1～6）を付して実測や遺物取り上げの基準とした。遺構・遺物の出土状況の記録は原則として20分の1縮尺を基準とし、遺構全体図は200分の1縮尺とした。

写真撮影は、白黒35mm、カラースライド35mm、白黒6×7判を用いて調査の過程で随時行った。

整理作業

遺物はすべて水洗いを行なった後に注記を行った。注記は一部「泉台」「イズミ台」「イズミダイ」とされていた。平成23年度の整理作業時点で遺跡名が杉ノ井遺跡と変更になっていたが、混乱を避けるために、遺跡の略称は「イズミダイ-1988」とした。その他の略記号は奈良文化財研究所の仕様に従った。接合を行った後、遺物の台帳を作成し、未掲載遺物は種類別に分類してその重量を示した。実測は遺物量が多量で、紙面の都合上かなりの量を絞らざるを得なかったが、でき得る限り多くの器種を提示するように心掛けた。

遺構測量図はデジタルトレースを実施し、個別図から全体測量図を起こした。デジタルトレースはAdobe社Illustrator CS2・4で実施した。

遺構写真は現地で撮影した35mmモノクロネガフィルムをデジタル化、JPEGデータを作成して用いた。遺物写真はデジタルカメラ700万画素で撮影を行い、Photoshop CS2・4で処理して掲載した。

原稿はWord、Excelで入力し、編集はInDesign CS4を用いた。

第2節 調査の経過

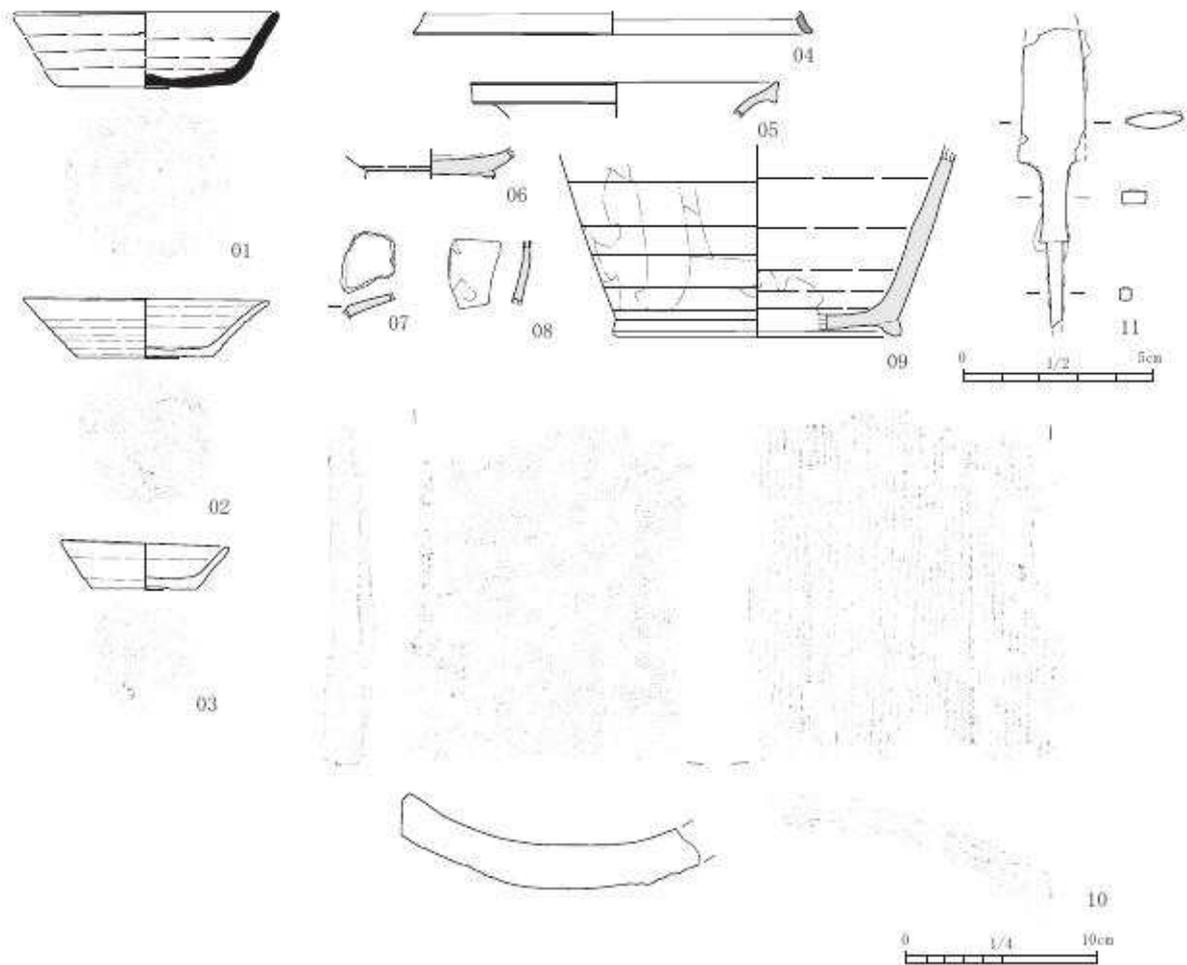
発掘調査

平成10年6月26日～7月15日 重機による表土除去作業を行う。表土の搬出場所が確保できず、面積の半分まで表土除去し残り部分に仮置きして、遺構の掘り込みを開始する。住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、その他土坑の掘り込みを終了し、各図面作成・写真撮影を行って残りの部分の表土切り返しを行う。

平成10年7月20日～8月7日 残り半分の表土除去作業を行い、住居跡20数軒、掘立柱建物跡数棟を確認する。各遺構の掘り込み、遺物取り上げ、作図、写真撮影を行い、調査をすべて終了する。

整理作業

平成23年9月5日から作業を開始。実施場所は旧高浜幼稚園舎屋。同7日から遺物の水洗いを開始、順次、接合・実測を進める。同12日から遺構図、同21日から遺物実測図のトレースを開始、順次、図版の版組を進める。10月11日から遺物観察表の作成、同14日から遺物の写真撮影を行う。同21日から原稿執筆を開始。同25日遺構図、11月11日遺物実測図トレース終了。同22日観察表作成を終了。同24日から全体の編集作業に取り掛かる。並行して、遺物の収納・納品準備を行う。同30日、初稿を市教育委員会に提出。12月5日、調査資料を返還、作業を終了する。



第1図 試掘調査トレンチ出土遺物

第1表 試掘調査トレンチ出土遺物観察表

発掘 番号	日記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	形状の特徴	土質	状況	色調	備考
01	No.2 トレンチ	須恵器	飯台形	13.7	4.0	9.9	238.4	ほぼ完全	ロクロ製形、底面一方向の手持ち のヘラケズリ。穴ダスキあり。	灰母多い。白色針状物質 少量。長・右等小線多い。	良好	内外面 にごい黄 褐色	
02	No.3 トレンチ	土師器	飯台形	12.9	3.05	7.0	94.3	定形	ロクロ製形、底面回転車切り (左)。	灰母・白色粒子・スコリア 少量	良好	内外面 にごい黄 褐色	
03	No.3 トレンチ	土師器	小皿	8.5	2.35	5.5	71.5	定形	ロクロ製形、底面回転車切り (左)。	灰母・白色粒子や多い。 スコリア・白色針状物質 微量	良好	内外面 にごい黄 褐色	
04	No.2 トレンチ	須恵器	透切針	—	(1.2)	(25.8)	1.8	脚台部片	原形は比較的薄く内傾して左 上がり上位で更に内傾へ前後。	精良	良好	粘土 明茶色 緑 赤緑	長さ590 発行a 【28】 実98-1-001
05	No.1 トレンチ	須恵器	長頭鉈	(17.0)	(4.9)	—	12.3	口縁10%	原形は薄く口縁付近で強く外反 し傾斜に平る。口縁部分の傾り 傾りが大きい。	精良	良好	粘土 灰白 緑 赤赤緑	長さ400 【29】 実98-1-002
06	No.2 トレンチ	須恵器	鉈	—	(1.6)	—	30.2	底縁1/4	ロクロ製形、底面回転車切り。 両台は下平を欠損しているが底 面三日井状を呈すると考えら れる。原形は比較的厚く緩やかに 内湾する。	鉄分の堆出し微量	良好	粘土 灰白 緑 赤赤緑 (赤褐色 多)	長さ150 【29】 実98-1-003
07	No.3 トレンチ	須恵器	透切針	—	(1.4)	—	5.4	体部片	原形は比較的薄く加曲長線や左 に外反し立ち上がる。	鉄分の堆出し少量	良好	粘土 灰白 緑 赤赤緑	長さ100 【29】 実98-1-004
08	No.3 トレンチ	須恵器	長頭鉈	—	(3.5)	—	6.1	胴部片	ロクロ製形、外面回転ヘラケ ズリ。	鉄分の堆出し少量	良好	粘土 赤灰 緑 赤赤緑	発行114 【29】 実98-1-005
09	No.3 トレンチ	須恵器	灰白皿	—	(9.3)	(11.8)	256.7	底子板〜 底縁1/3	ロクロ製形、外面下位回転ヘ ラケズリ。両台は比較的強く断面 知形の内傾を有し足付が粗 雑。	鉄分の堆出しやや多い	良好	粘土 灰白 緑 赤赤緑 (細白 多)	長さ054 【29】 実98-1-006
10	No.2 トレンチ	瓦	平瓦	タテ (19.8)	ヨコ (15.9)	厚 2.3	1,150.0	下縁・右 側縁欠損	両面直目圧痕。下縁・側縁ケス リ。凸面側目縁圧痕。端・側 面ケズリ。	白色粒子多い	良好	内外面 赤灰	
11	No.3 トレンチ	鉄製品	鉄針	長 (2.9)	幅 (1.8)	厚 0.4	12.3	身元・左 部欠損	平頭形棒状。身部に筋なし。身元厚0.4cm。尖部の木質は採取されない。				

第2章 遺跡の位置と環境

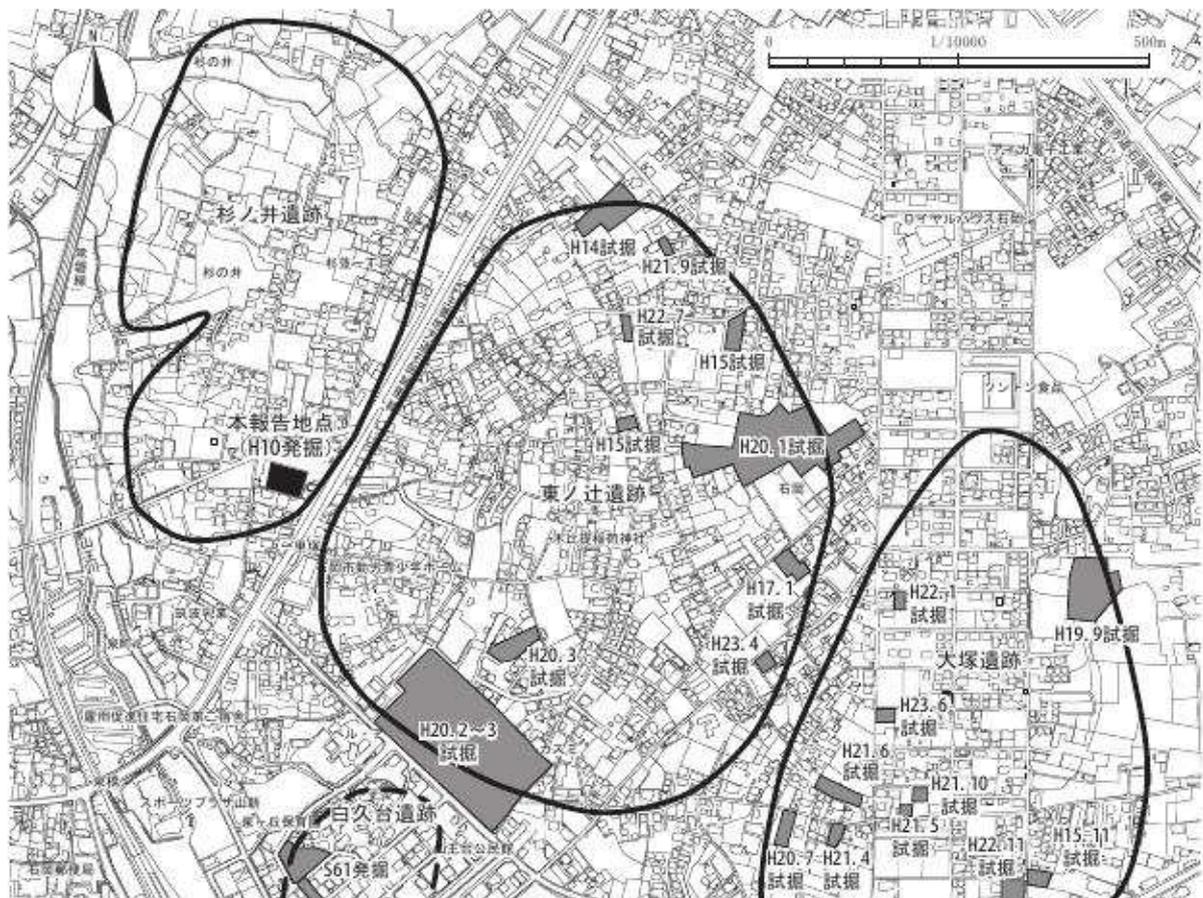
石岡市の中心部から北東方向約1km、常陸国分寺跡から山王川の谷を挟んで700mほど東方の標高25メートルの台地上にある。東・南方からは恋瀬川を渡河して台地上に上がった、現在の石岡小学校が常陸国衙・国庁跡に比定されており、周辺には常陸国分寺跡、同国分尼寺跡、漆紙文書の出土で著名な鹿の子遺跡等、奈良～平安時代の遺跡が数多く分布し、古代常陸国の中心地域の一角にある。官道である東海道の経路については、現在の石岡市城のどの部分を通過するか明瞭にはなっていないが、国府、国分寺、国分尼寺周辺に駅路の存在が想定されている（木下1996）。仮に官道が国道355号線沿いに存在していたとすれば、本遺跡の西側を通過することになり、官道は本遺跡と国庁の間を北上することになる。

2009年に纏められた『常陸国衙跡』Ⅱ-2-3「国衙周辺の遺跡」に詳しいが、周辺の集落遺跡としては国分遺跡、鹿の子遺跡、常陸国分寺跡、尼ヶヶ原遺跡、代官屋敷遺跡が発掘調査されている。また2011年に調査が行われた府中城跡（石山ほか編2011）がこれに加わることになり、本遺跡を含め7遺跡が調査されている。国衙周辺域の集落についての性格が問われるところである。鹿の子遺跡が国衙付属工房跡と想定されているものの、その他の遺跡では一般集落に比べ大きな差は見出せない。

本遺跡を含めた山王川東岸側には、木間塚遺跡、東ノ辻遺跡、大塚遺跡、白久台遺跡が存在しているが、多くの遺跡で部分的な試掘調査にとどまっており、今後の調査及びその成果報告によってこれらの地域の性格がより明確にされるのを待ちたい。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行2万5千分の1地形図『石岡』）



第3図 調査地点位置図

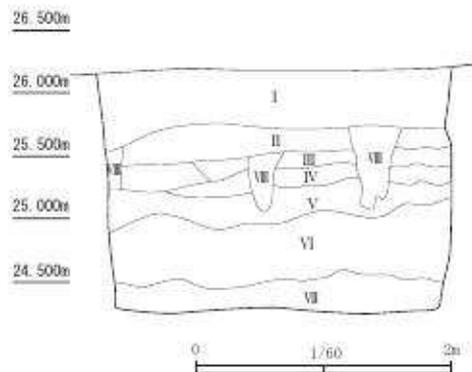
第3章 標準堆積土層 (第4図、遺構図版1)

調査区東北端に地表面から約2mの深さまで垂直に掘り込み標準堆積土層の記録を行う。表層を覆う黒褐色土(I層)の厚さは50cmを測り、この黒褐色土の下から奈良・平安時代の竪穴住居跡の確認ができた。II層は暗褐色土で奈良時代以前の堆積土層である。III層以下は自然堆積の厚いローム層でIII・IV層は漸移層、V層がソフトローム層、VI層以下がハードロームである。

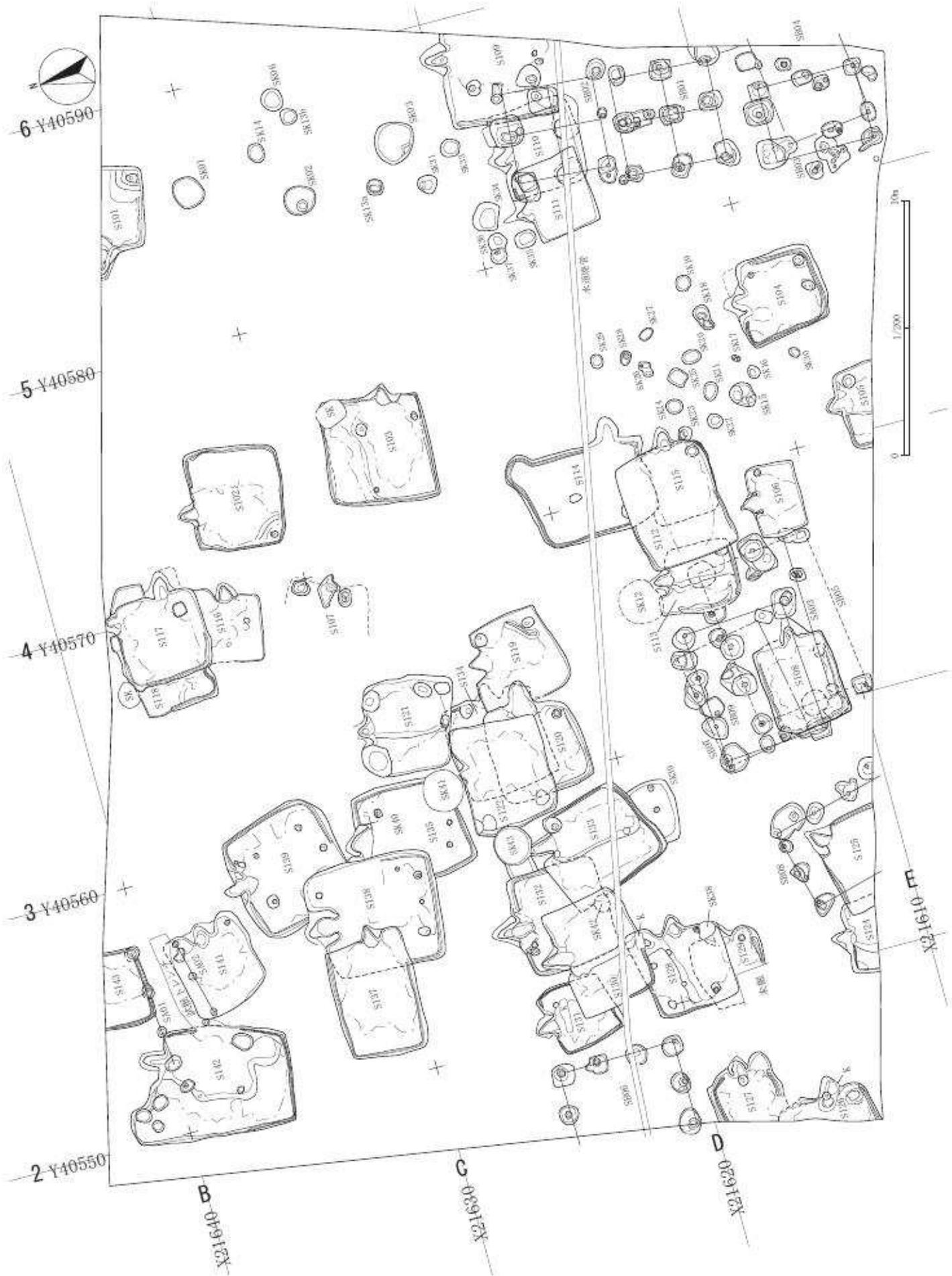
標準堆積土層の観察位置は記載がなく示すことができていない。表土層からの記載が行われていることからいずれかの調査区壁面にて実施されたものであろう。

テストピット

- I 7.5YR3/2 黒褐色 ロームブロックφ1~2mm少量。
- II 7.5YR3/3 暗褐色 ロームブロックφ1~2mm少量。(遺構確認面)
- III 7.5YR4/4 褐色
- IV 7.5YR4/4 褐色
- V 7.5YR5/6 明褐色 (ソフトローム層)
- VI 7.5YR4/6 褐色 (ハードローム層)
- VII 7.5YR6/8 橙色 (ハードローム層) 白色粒子を少量含む。
- VIII 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロックφ1~2mm多量。



第4図 標準堆積土層



第 5 图 調査区全体图

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 住居跡

検出された住居跡は1～43号の41軒で、SI23・40は欠番である。分布状況は調査区域の北東側でやや疎になるものの、全体にまんべんなく検出されており、西側中央部分では重複が多い。住居跡の形状については、おおむね正方形に近いものと長方形を呈するものの二者に分類できるが、正方形の住居跡では北側カマドが主体で、長方形の住居跡は東カマドが多い。西カマドは1軒のみ確認されている。床面に段を有するもの、棚状の施設を有するもの、鍛冶炉を有するもの、柱穴を有するものなど、様々である。以下、検出された住居跡及びその出土遺物について記述する。

なお、各計測値については以下の基準に従って行っている。規模は南北長×東西長。主軸はカマドの設置された壁との直角方向とした。床面の深さは確認面からの深さ。ピット等の計測値は長軸×短軸×深さで示した。

ところで重複する遺構はほとんど同時に覆土の掘り下げを行っているようであり、形状や切り合い関係の記録が十分ではない。

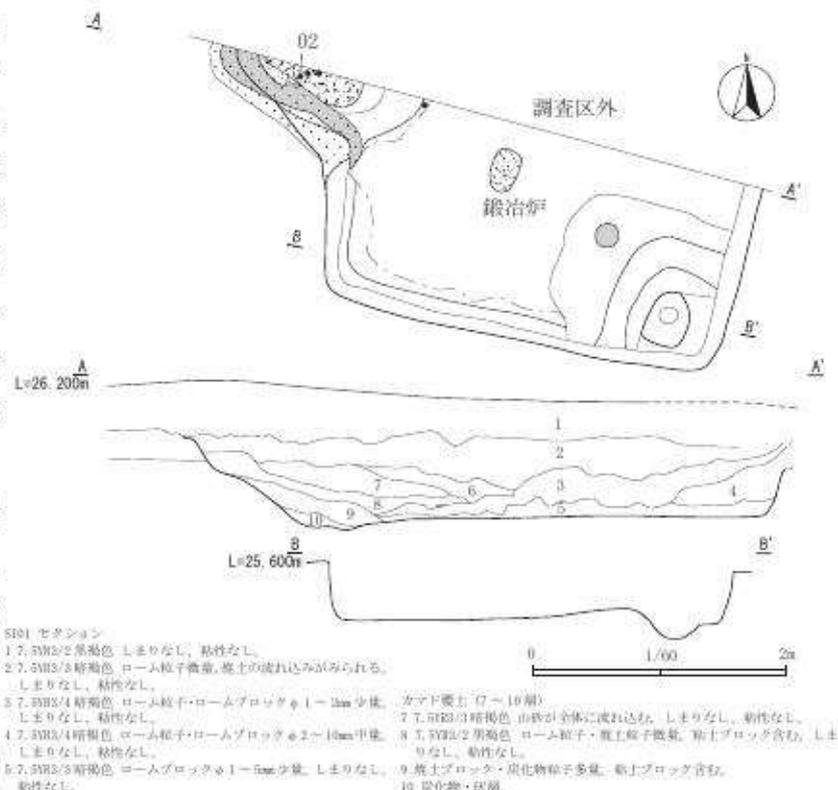
SI01 (第6・7図、第2・3表、遺構図版1、遺物図版1)

検出位置：調査区北東端部 B5 グリッド。北側半分が調査区域外となる。**平面形状：**不明。**主軸方向：**N-86°-W。**規模：**一×3.4m。**確認面下の深さ：**42cm。**覆土：**6層に分層され自然堆積。**柱穴：**検出されていない。**壁溝：**西及び南壁際に浅い掘込が巡る。**床面：**平坦。**カマド：**西壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は187cmで、西壁から130cmほど掘りだされ、山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置されている。中央部分には火床面が楕円形に設けられる。カマド覆土は4層に分層され、最下層には灰層が検出されている。**その他付帯施設：**南東コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。掘込は上位で方形を呈し、下位では円形となる。上端部での規模は67×64cm、

深さは45cm。穴の周囲は緩やかな周堤が巡り、硬く踏み固められている。また、周堤の一部には直径18cm程度の円形に粘土の堆積が認められる。住居中央やや南西寄りのカマド前面に、隅丸方形の鍛冶炉が1基検出されている。長軸は35cm、端軸24cmを測る。重複関係：なし。

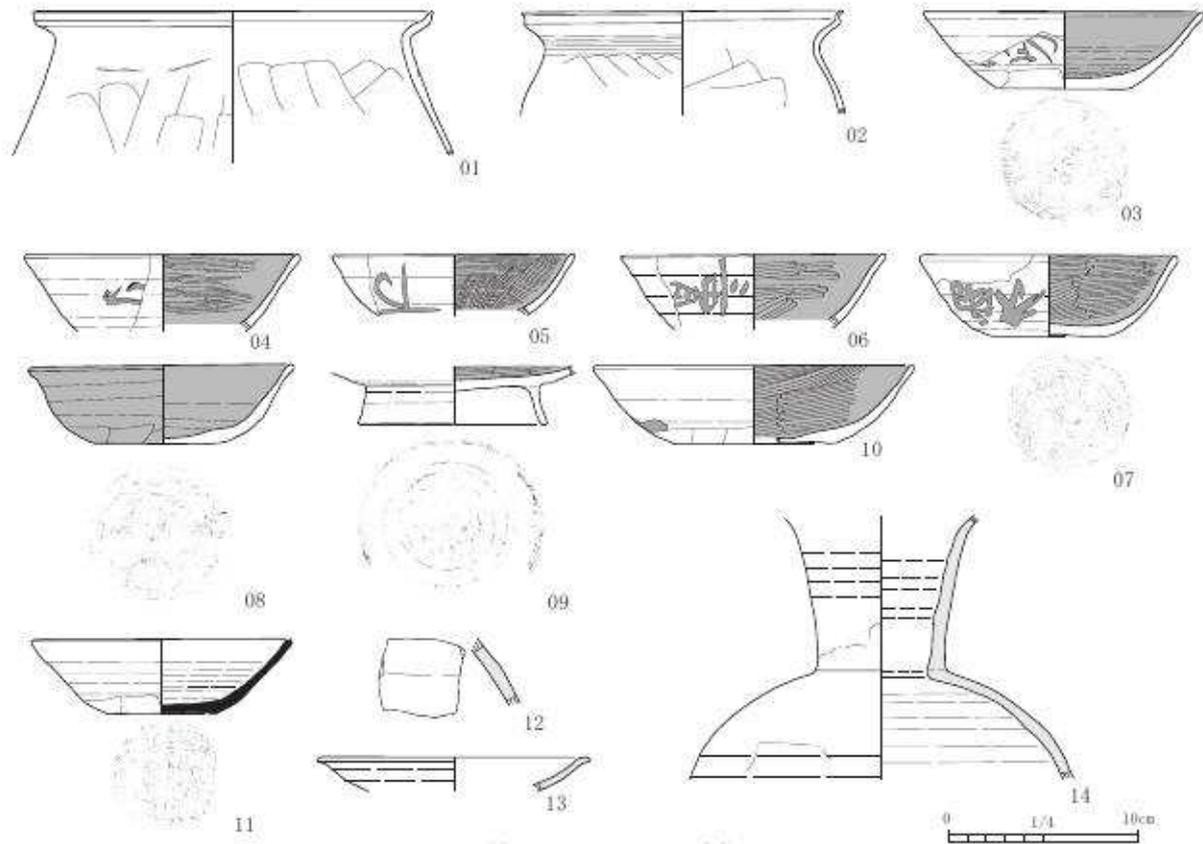
掲載遺物：土師器無台坏7点(墨書土器6点「曹司」「万」「福」ほか)、有台付碗1点、甕2点、須恵器無台坏1点。灰釉陶器長頸瓶2点(猿投053)、皿1点(猿投K90)。

その他未掲載遺物：土師器1182.5g、須恵器312.0g、瓦163.8g。



第6図 SI01

遺構の帰属時期：出土遺物から判断される遺構の帰属時期は、内面に黒色処理を施す無台杯（墨書土器）03～07・10、11の須恵器杯の形状から9世紀前半と判断される。一方で、灰釉陶器では黒笹90号窯式に折戸53号窯式が混在しており、09の高足高台の壺を含め、一部10世紀代の遺物が混入している等、齟齬が見られる。



第7図 SI01 出土遺物

第2表 SI01 出土遺物遺物観察表 (1)

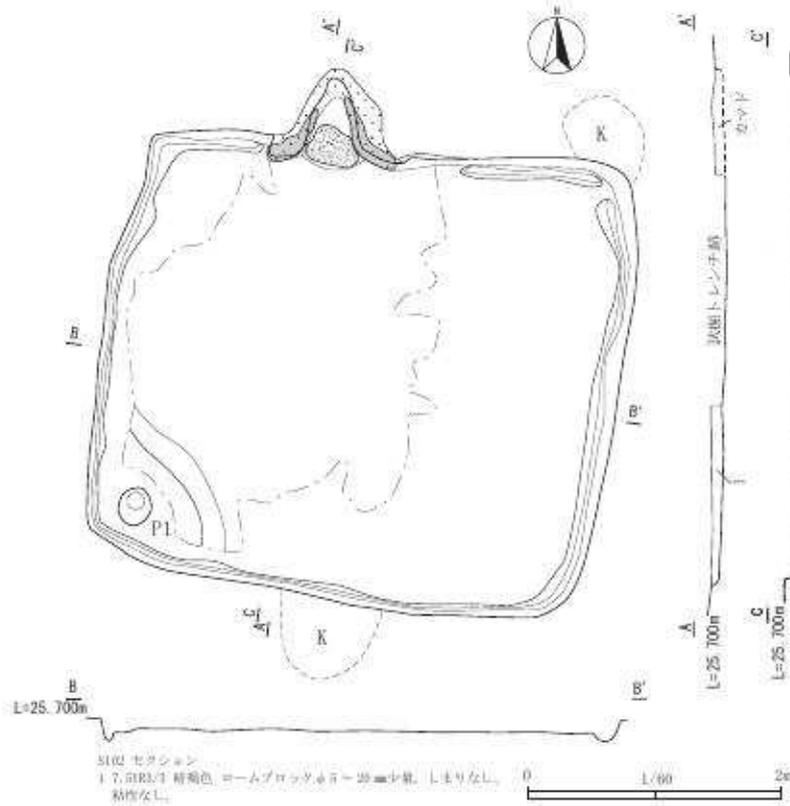
品目番号	表記	種類	群種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土・カマテ	土師器	寛	(21.0)	(7.50)	—	95.1	口縁1/4	口縁横ナズ、胴部上段内外面共にナズ。	長石・石英・雲母や多量	良好	内外面 焼	
02	801	土師器	寛	(17.0)	(6.5)	—	82.9	口縁1/6	口縁横ナズ、胴部上段内外面共にナズ。口唇縁を上げ顕著。	長石・石英・雲母や多い	良好	内面 明焼成、外面 にぶい焼	
03	覆土	土師器	無台杯	(14.8)	4.1	4.9	118.7	口縁1/8 一割割	ロクロ製形。下縁手持ちヘラケズリ。底面一方の手持ちヘラケズリ。	雲母や多い	良好	内面 黒焼、外面 にぶい・黄焼	墨書「口」 内面黒色処理
04	中層覆土	土師器	無台杯	(14.4)	(4.7)	—	19.9	口縁1/3	ロクロ製形。内面ミガキ。	雲母や多い、白色粒子微量	良好	内面 黒焼、外面 にぶい黄焼	墨書「口」 内面黒色処理
05	覆土	土師器	無台杯	(12.8)	(3.2)	—	25.9	口縁1/4	ロクロ製形。内面ミガキ。	雲母・白色粒子微量	良好	内面 黒焼、外面 にぶい黄焼	墨書「方」 内面黒色処理
06	中層覆土	土師器	無台杯	(13.8)	(2.9)	—	14.5	口縁1/8	ロクロ製形。内面ミガキ。	長石・石英・雲母や多い	良好	内面 黒焼、外面 にぶい黄焼	墨書「香」 内面黒色処理
07	覆土	土師器	無台杯	(13.4)	4.3	6.1	91.3	口縁1/8 一割割	ロクロ製形。下縁一割割回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	白色粒子・白色副状物質や多い。雲母微量	良好	内面 黒、外面 にぶい黄焼	墨書「福」・墨書「市」 墨書「カ」 内面黒色処理
08	覆土	土師器	無台杯	(13.8)	4.5	7.0	157.2	口縁2/3 欠損	ロクロ製形。下縁手持ちヘラケズリ。底部多方向の手持ちヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母や多い、少一中層少量	良好	内外面一焼	内外面黒色処理
09	覆土	土師器	有台壺	—	(8.1)	10.0	135.2	高台1/4 欠損	ロクロ製形。内面ミガキ。底面回転ヘラケリ。	雲母や多い、白色粒子少量	良好	内面 黒焼、外面 にぶい焼	内面黒色処理
10	覆土	土師器	無台杯	(17.0)	(5.30)	(9.0)	28.2	1/3	ロクロ製形。下縁手持ちヘラケズリ。底面回転を切り（左）	雲母少量、白色粒子微量	良好	内面 黒、外面 にぶい黄焼	墨書「口」 内面黒色処理
11	覆土	須恵器	無台杯	(13.8)	3.9	6.9	98.2	口縁1/3 一割割	ロクロ製形。下縁手持ちヘラケズリ。底面一方の手持ちヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母多い、長石・石英等少一中層少量	良好	内外面 灰白	黒出焼
12	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(8.5)	—	19.6	胴部片	胴部は比較的薄く、内側に今丸みを持ってたろあがる。	鉄分の抽出しや多い、白色粒子少量	良好	胎土 灰釉、釉 暗赤緑	複製061 [30] 表 98-2-011
13	下層	灰釉陶器	壺	(14.8)	(1.8)	—	8.5	口縁部片	胴部は薄く縁やかに内湾して立ち上がり口縁縁部で強く外反。部分的に火ブランクがみられる。	精製	良好	内面 灰白、外面 暗赤緑	複製599 [30] 表 98-2-012

第3表 SI01 出土遺物観察表 (2)

図版番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	整形の特徴	敷土	地味	色調	備考
04	下壁	灰釉陶器	長頸瓶	—	114.0	—	369.7	破面一部 部	ロクロ製形。	青灰	良好	敷土 灰白 釉 灰イースト	図版(6) 690以南と北4土 が相違 【101】 寛98-2-013

SI02 (第8・9図、第4表、遺構図版1、遺物図版1)

検出位置：調査区北壁側中央付近 B4 グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N-2°-E。規模：3.64m × 4.07m。確認面下の深さ：10 cm。覆土：確認面が浅く、暗褐色土の単層。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 15 cm、深さ 7 cm 前後。床面：平坦。カマド：北壁中央西寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 82 cm で、西壁から 60 cm ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。その他付帯施設：南東コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。掘込は住居跡のコーナー部分を仕切るように高さ 10 cm ほどの周堤が巡り、丸味を帯びた三角形に掘りこまれる。下層では円形になる。下層円形部の規模は 33 × 28 cm、深さは 16 cm。



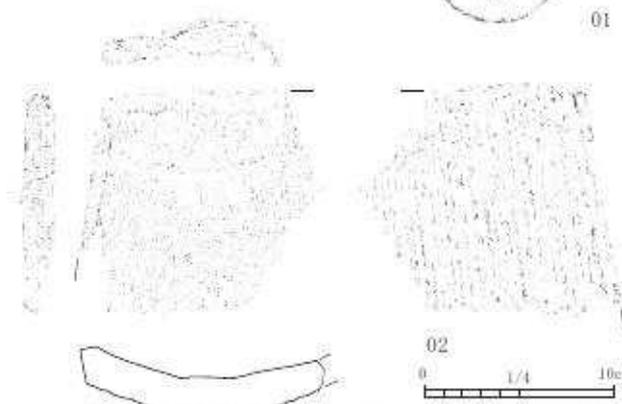
第8図 SI02

重複関係：なし。

掲載遺物：土師器有台塊1点、平瓦1点。前者は高台がハの字に開くもので、内面は磨かれて黒色処理されている。

その他未掲載遺物：土師器 386.5g、須恵器 74.6g。

遺構の帰属時期：有台塊1点のみからであるが、形状より9世紀後半と判断される。



第9図 SI02 出土遺物

第4表 SI02 出土遺物観察表

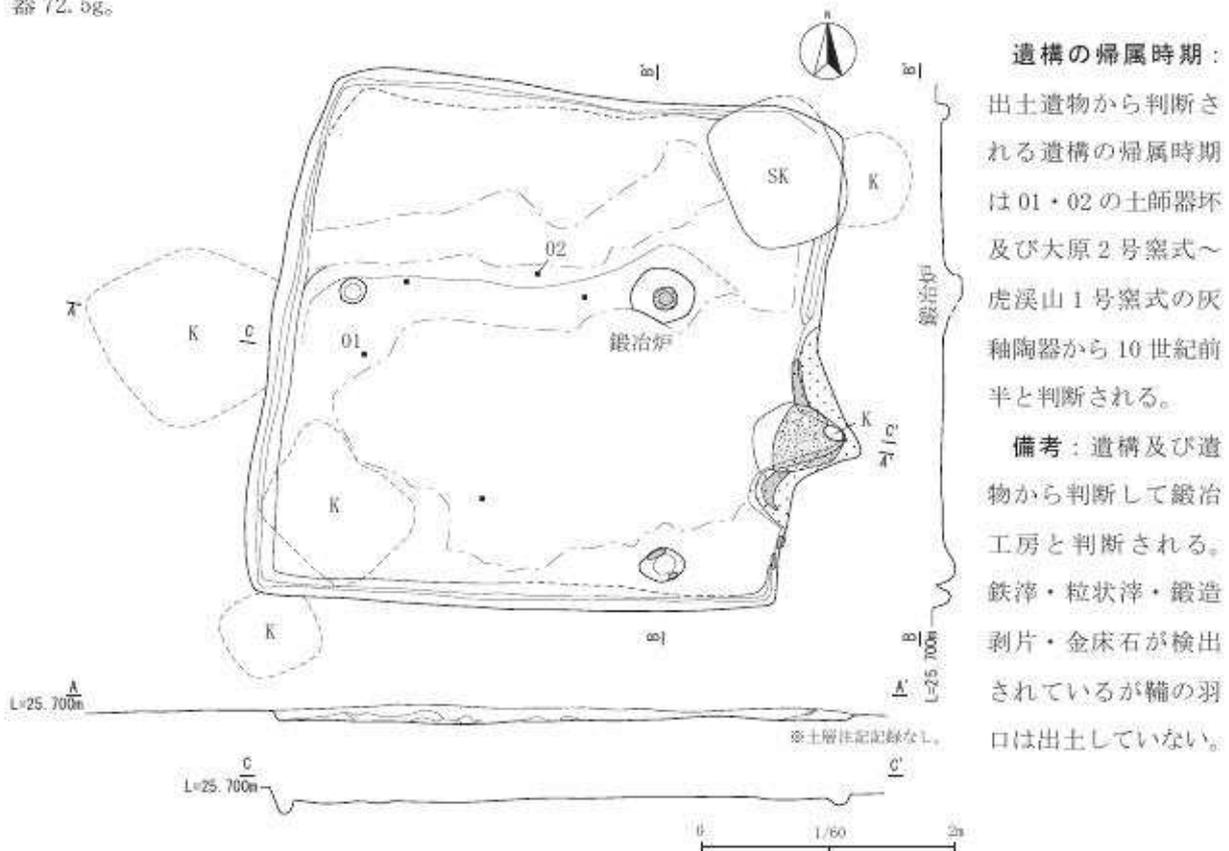
図版番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	整形の特徴	敷土	地味	色調	備考
01	覆土	土師器	有台塊	13.2	5.5	7.7	183.2	ほぼ完好	ロクロ製形。内面ミガキ。	白色粘土・灰粉少量、ス コア陶質	良好	内面 黒 外面 灰白・黄褐色	
02	覆土	瓦	平瓦	タテ (12.0)	ヨコ (12.3)	厚 2.2	455.0	土縁・土 側縁残存	両面赤褐色。表面に 赤縁あり。土縁・側縁 ケズリ。北面縁白陶質正 規。南・側面ケズリ。	白色粘土系が多い	良好	内面 オリーブ色 外面 灰	

SI03 (第10～12図、第5表、遺構図版1、遺物図版1)

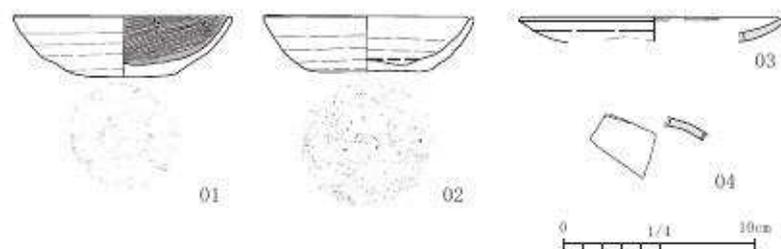
検出位置:調査区中央やや北東寄りC4グリッド。**平面形状:**正方形。**主軸方向:**N-97°-E。**規模:**4.12m×4.04m。**確認面下の深さ:**11cm。**覆土:**5層に分層され自然堆積。**柱穴:**南東コーナー付近及び西壁中央寄りに各1基が検出されている。**壁溝:**カマド部分を除きほぼ全周する。幅18cm、深さ10cm前後。**床面:**北側5分の2の部分が带状に高くなり、段差を有す。**カマド:**東壁の南寄りに設置され、主軸部分の全長は82cmで、東壁から52cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が僅かながら設置される。火袋部分には焼土が大きく広がる。**その他付帯施設:**床面中央やや北東寄りのカマド前面に鍛冶炉が検出されている。規模は48×45cm、深さ12cmを測る。円形で底部は焼土化している。**重複関係:**北東コーナー一部分に土坑(遺構番号不明)が本遺構を切っている。

掲載遺物:土師器坏2点、鉄滓(塊形滓)1点、灰釉陶器皿1点(美濃大2～虎1)、長頸瓶1点(猿投K90)、粒状滓2.2g、鍛造剥片24.6g(写真のみ)。

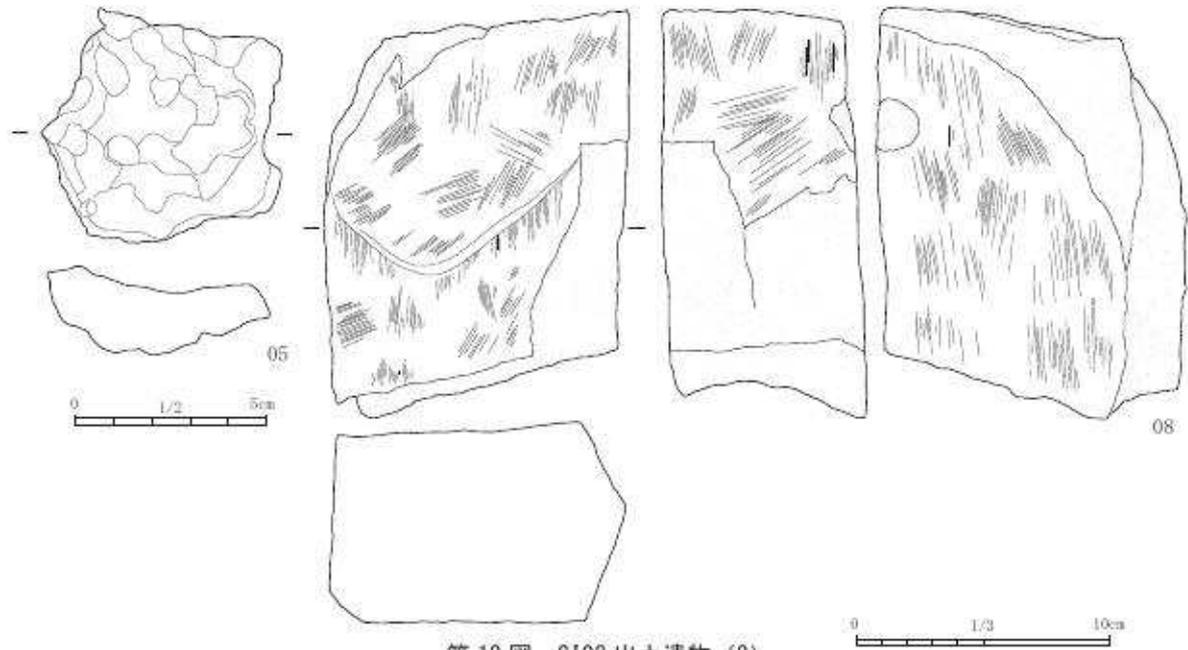
その他未掲載遺物:土師器2920g、須恵器1040g、瓦547.3g、鉄滓5g、鉄製品22.9g。**近世以降の遺物:**陶器72.5g。



第10図 SI03



第11図 SI03 出土遺物 (1)



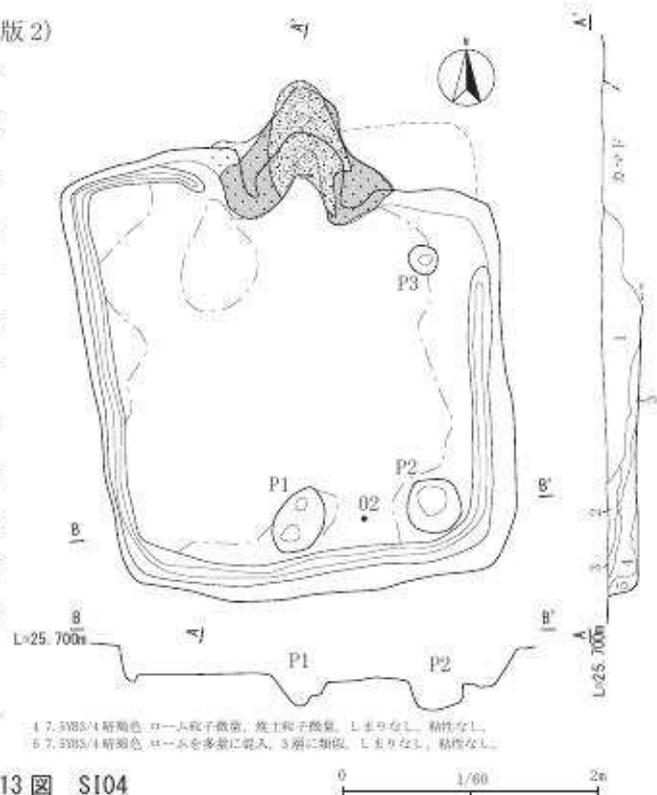
第12図 SI03 出土遺物 (2)

第5表 SI03 出土遺物観察表

品目番号	洋記	種類	部種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色澤	備考
01	No.02	土師器	黒古杯	11.4	3.2	5.4	118.0	ほぼ完全	ワケロ型形、底面凹陥系切り縁ナゲ、内面ウガキ、ワケロ型形、底面凹陥系ナゲ切り。	黄白・白色灰子少量、白色斜紋物質微量。	良好	内面 黒褐色 外面 明黄褐色	内面黒色処理
02	No.04	土師器	黒古杯	10.9	2.9	6.7	115.2	口縁一部欠損	ワケロ型形、底面凹陥系ナゲ切り。	白・中硬・雲母少量、ス・ロニア微量	良好	内面 白 外面 白	内面 白 外面 白
03	覆土	灰雑陶器	皿	13.8	1.3	—	8.8	口縁破片	胎土は比較的厚く、縁や口内に内湾して立ち上がる。	白色灰子・鉄分の噴出し微量	良好	胎土 白 胎土 暗褐色	有覆・大2〜度1口縁時内面に黒褐色塗料 【105】 宮98-2-014
04	覆土	灰雑陶器	長頸瓶	—	1.2	—	6.6	破砕片	胎土は薄く丸みを持って立ち上がる。	精白	良好	胎土 淡灰 胎土 暗褐色	長径 89 【107】 宮98-2-013
05	覆土	熟土	筒形埴	タテ 4.1 ヨコ 6.3	厚 2.1	—	16.6	—	埴形を呈する熟土、埴地に埋まったものと判断される。	—	—	—	—
06	伊内土	熟土	和形埴	直径2.1〜3.4mm			2.3	—	—	—	—	—	—
07	伊内土	熟土	和形埴片	最大径 16.5mm			24.6	—	—	—	—	—	—
08	覆土	石製品	倉庫石	タテ 12.3	ヨコ 10.3	厚 7.0	2,250.0	完整	表面面と右側面上部は雑土で、平滑に研磨されている。地表は打割面。表面と右側面下部（打割面）に紅褐色の熟土付着。全面焼結硬化。特に表面面顕著。石材：砂岩。	—	—	—	—

SI04 (第13・14図、第6表、遺構図版1、遺物図版2)

検出位置：調査区南東側コーナー寄り D・E4 グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N-1°-W。規模：3.80m × 3.25m。確認面下の深さ：24 cm。覆土：住居跡の覆土は5層に分層され自然堆積。柱穴：南東コーナー付近及び南壁中央寄り、北東コーナー寄りに各1基が検出されている。北西側は設置されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅16 cm、深さ6 cm前後。床面：平坦。カマド：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は120 cmで、北壁から44 cmほど掘りだされる。火床面は不明瞭。その他付帯施設：北東コーナー部分のカマド東側に隣接して、三角形に広がる棚状の施設が設置されている。重複関係：なし。



第13図 SI04

SI04 セクション

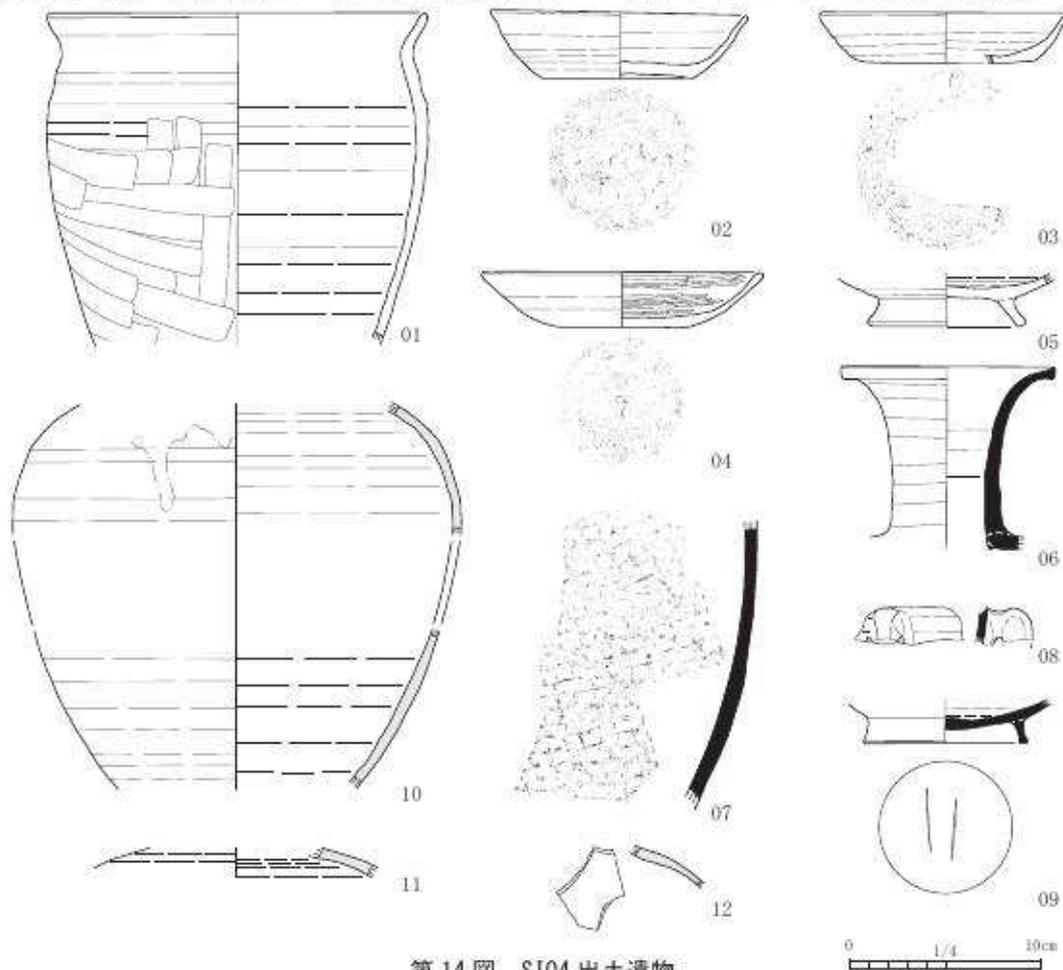
1. 5YR3/2 暗褐色 コーン灰子・ゴロツキ等 2〜5cm 中層、焼土粒子微量、しまりなし、粘性なし。
2. 5YR3/4 暗褐色 コーン灰子少量、焼土粒子微量、しまりなし、粘性なし。
3. 5YR3/4 暗褐色 コーンを多量に混入、しまりなし、粘性なし。

4. 5YR3/4 暗褐色 コーン灰子微量、焼土粒子微量、しまりなし、粘性なし。
5. 5YR3/4 暗褐色 コーンを多量に混入、3層に類似、しまりなし、粘性なし。

掲載遺物：土師器無台杯3点、有台碗1点、甕1点、須恵器有台杯1点、瓶2点、灰釉陶器長頸瓶3点（猿投K90）。

その他未掲載遺物：土師器3940g、須恵器640g、瓦167.3g、鉄滓5g。

遺構の帰属時期：土師器無台杯の形状及び灰釉陶器黒笹90号窯式の出土から9世紀後半と判断される。



第14図 SI04出土遺物

第6表 SI04出土遺物観察表

品目番号	品記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	甕土	土師器	甕	19.7	17.3	—	221.7	口縁〜胴部下半	ロクロ製形、胴部外面へツケズリ。	炭灰多い、長石・石英等少〜中量少量、スコリア微量	良好 二次焼成あり	内面 橙 外面 にぶい橙	
02	№.01	土師器	無台杯	13.4	2.4	7.7	248.0	ほぼ完整	ロクロ製形、底面凹輪へツケズリ。	長石・石英・雲母・スコリアやや多い	良好	内面 にぶい炭灰 外面 明黄緑	
03	様土	土師器	無台杯	12.9	2.7	9.3	81.8	1/2	ロクロ製形、底面凹輪を切り落とす跡へツケズリ。	炭灰・スコリアやや多い	良好	内外面 にぶい炭灰	
04	カマド	土師器	無台杯	14.6	2.9	6.8	75.3	口縁1/3〜底面完整	ロクロ製形、底面凹輪へツケズリ、内面くつき。	炭灰やや多い、白色粘土少量	良好	内面 黄緑 外面 にぶい炭灰	猿投K90
05	様土	土師器	有台碗	—	12.85	7.5	128.0	高台	ロクロ製形、底面凹輪へツケズリ。	炭灰・白色粘土・スコリア少量	良好	内面 炭黄緑 外面 黄緑	
06	様土	須恵器	長頸瓶	11.3	19.45	—	188.9	口縁〜胴部	ロクロ製形。	黒色粘土やや多い、スコリア少量、白色粘土微量	良好	内外面 炭黄	
07	様土	須恵器	甕	—	—	—	110.2	胴部破片	外面粘土目焼き。	長石・石英・雲母やや多い	良好	内面 明黄 外面 橙	粘土目焼き
08	様土	須恵器	灰皿	—	2.5	—	17.0	耳破片	胴部に付されるものも、丸みを有した板状を呈す。穿孔の数は不明であるが、存在する孔の径は7mm。	炭灰の増出し少量、白色粘土微量	良好	内外面 黄灰	
09	様土	須恵器	有台杯	—	12.25	8.4	108.6	底面	ロクロ製形、身中で縁や口に内湾する。高台は「ハ」の字に付される。	少〜中量やや多い、炭灰の増出し少量	良好	内外面 黄灰	ヘア記号管理あり
10	様土	灰釉陶器	長頸瓶	—	28.45	—	149.2	胴部〜胴部片	ロクロ製形、外面凹輪へツケズリ。	炭灰の増出し多い、白色粘土少量	良好	胎土 灰白 釉 オリーブ黄	猿投K90 【108】 実98-2-918
11	様土	灰釉陶器	長頸瓶	—	11.65	—	14.6	肩破片	胎土は比較的薄く、やや丸みを持って立ちあがる。内面に密なロクロ目。	精良	良好	胎土 灰白 釉 暗黄緑	猿投K90 【109】 実98-2-917
12	様土	灰釉陶器	長頸瓶	—	12.25	—	6.9	胴部片	胎土は薄く丸みを持って立ちあがる。	精良	良好	胎土 灰白 釉 暗黄緑	猿投K90 【110】 実98-2-918

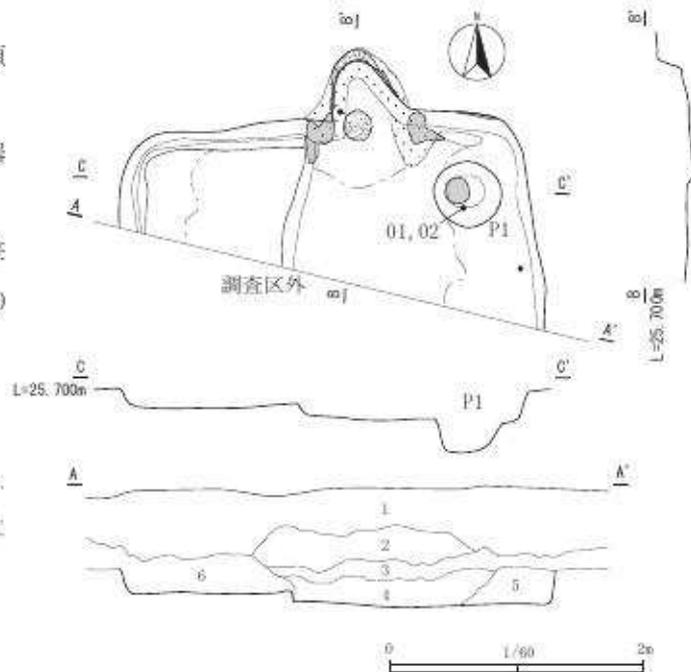
SI05 (第15・16図、第7表、遺構図版2、遺物図版2)

検出位置: 調査区南壁やや東寄り E3・4 グリッドにおいて検出されているが、南側が調査区域外となり、内容は不明。**平面形状:** 方形カ。**主軸方向:** N-1°-W。**規模:** 3.24m × ー。**確認面下の深さ:** 16 cm。**覆土:** 基本的には2～5層は自然堆積を示すが、第6層は不自然な堆積を示す。攪乱カ。**柱穴:** 北東コーナー部分に1基。**壁溝:** 東壁側は検出されていない。その他はカマド部分を除き僅かながら確認できる。幅 22 cm、深さ 2 cm 前後。**床面:** カマドの西側袖の延長部分から住居の西側 3分の1 程度は 9 cm ほど東側より高くなり、段差を有す。**カマド:** 北壁中央やや東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 108 cm で、北壁から 52 cm ほど掘りだされる。山砂及び粘土により袖が設置される。中央部分には火床面が円形に広がる。**その他付帯施設:** なし。**重複関係:** なし。

掲載遺物: 土師器無台坏 4 点、灰釉陶器長頸瓶 2 点 (猿投 K90 新 053)。

その他未掲載遺物: 土師器 600g、須恵器 940g。

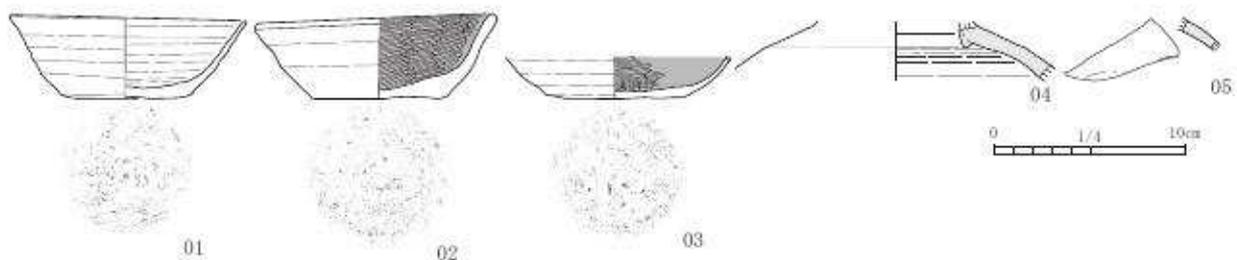
遺構の帰属時期: 土師器無台坏の形状、黒笹 90 号窯式 3 段階・折戸 53 号窯式の出土から 10 世紀前半と判断される。



SI05 セクション

- 1 7.50K3/3 褐色 コーブル等こみを含む、しまり非常に強い。
- 2 7.50K3/3 暗褐色 しまりなし、粘性なし。
- 3 7.50K3/3 暗褐色 しまりなし、粘性なし。
- 4 7.50K3/3 暗褐色 コームブロックφ1～10mm 少量、山砂を少量混入。しまりなし、粘性なし。
- 5 7.50K3/4 暗褐色 コーム砂子・コームブロックφ1～2mm 中量、しまりなし、粘性なし。
- 6 7.50K3/4 暗褐色 コーム砂子・コームブロックφ1～2mm 中量、焼土ブロックφ1～2mm 少量、しまりなし、粘性なし。エー3層より閉る。

第15図 SI05



第16図 SI05 出土遺物

第7表 SI05 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	胴径	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	PI №.01	土師器	無台坏	12.3	4.3	6.0	151.7	完形	ロクロ製形、底部は軸状傾り。	炭母多い、長石・石英等が中量やや多い、ヌコイア微量	良好	内面 黄褐色 外面 砂褐色	
02	PI №.01	土師器	無台坏	12.4	4.2	7.0	210.0	完形	ロクロ製形、底部は軸状傾り。後多方向の手摺りベタナズリ、内底にガキ。	炭母少量、白色斜状物質微量	良好 二次焼成??	内面 黒 外面 明黄褐色	内面黒色処理
03	覆土	土師器	無台坏	—	(12.2)	7.3	71.1	底部	ロクロ製形、底部は軸状傾り、内面にガキ。	炭母やや多い。	良好	内外面 黒褐色	内面黒色処理
04	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(8.3)	—	109.3	断面片	断面は比較的厚く不均質みを帯び立ち上がり部部に有る。	鉄分の抽出し少量、白色微子微量	良好	胎土 灰白 釉 灰オリーブ	猿投 K90 新 (053) 【11】 実 98-2-019
05	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(1.8)	—	9.3	断面片	断面は比較的薄く不均質を帯び立ち上がる。	精製。	良好	胎土 灰白 釉 オリーブ黄	猿投 K90 新 (053) 【12】 実 98-2-020

SI06 (第17・18図、第8表、遺構図版2、遺物図版2)

検出位置:調査区南壁側やや東寄りD3グリッド。**平面形状:**長方形。**主軸方向:**N-5°-E。**規模:**2.94m×1.95m。**確認面下の深さ:**19cm。**覆土:**住居跡の覆土は7層に分層され自然堆積を示す。**柱穴:**なし。**壁溝:**なし。**床面:**平坦。**カマド:**北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は88cmで、西壁から49cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設:**北東コーナー部分に貯蔵穴1基が検出されている。楕円形を呈し、規模は33×30cm、深さは20cm。**重複関係:**SB05・SA03を切る。

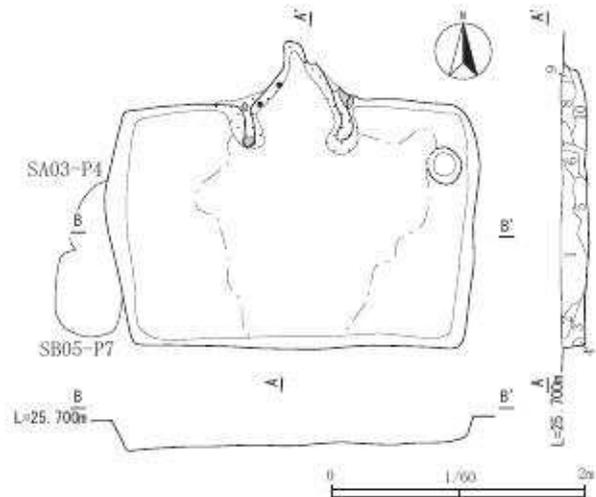
掲載遺物:土師器無台坏3点(墨書土器1点)、有台坏1点、灰釉陶器長頸瓶1点(二川カK90~053併行)。

その他未掲載遺物:土師器1700g、須恵器154g。

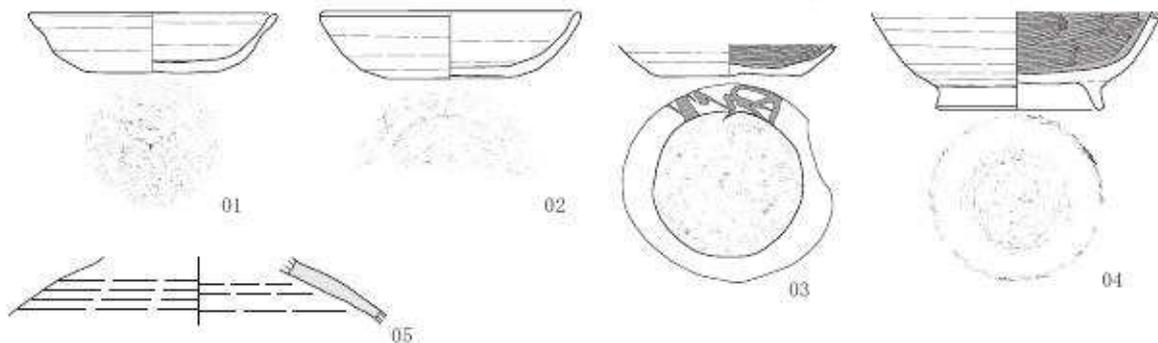
遺構の帰属時期:無台坏3点及び有台坏、黒笹90号窯式~折戸53号窯式に比定される灰釉陶器長頸瓶の出土から10世紀前半と判断される。

SI06 セクション

1. 7. 灰緑/4暗褐色 ローム粒子・ブロックより5mm中量、しまりなし、粘性なし。
2. 7. 灰緑/4暗褐色 ロームブロックより2mm少量、しまりあり、粘性なし。
3. 7. 灰緑/4暗褐色 ロームブロックより4~10mm中量、しまりなし、粘性なし。
4. 7. 灰緑/4暗褐色 ローム多量混入、しまりなし、粘性なし。
5. 7. 灰緑/2明褐色 ローム粒子・ロームブロックより2mm中量、しまりなし、粘性なし。
6. 7. 灰緑/2明褐色 ローム粒子多量、焼土ブロックより2mm少量、しまりなし、粘性なし。
7. 7. 灰緑/2明褐色 ロームブロックより4~10mm多量、しまりなし、粘性なし。
8. 暗褐色 山砂を少量含む、しまりなし、粘性なし。
9. 暗褐色 ロームブロックより2mm多量、焼土ブロックより2mm少量、山砂少量、しまりなし、粘性なし。
10. 暗褐色 ロームブロックより10mm少量、焼土ブロックより2mm少量、しまりなし、粘性なし。



第17図 SI06



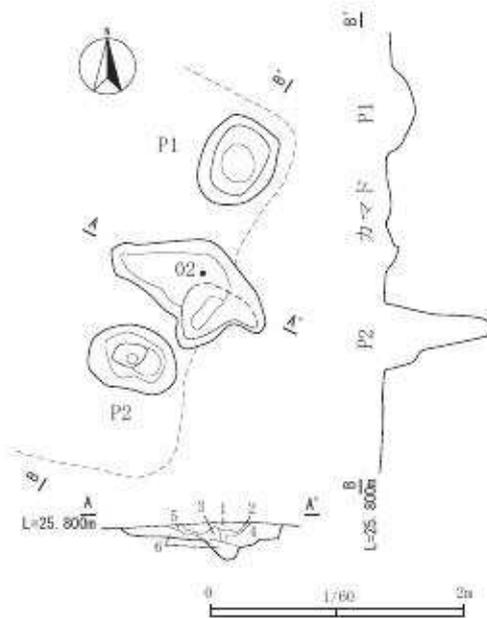
第18図 SI06 出土遺物

第8表 SI06 出土遺物観察表

品目番号	出記	種類	部種	口径	鉢径	底径	重量	存在	装彩の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	12.9	8.1	7.0	134.0	ほぼ完好	ロクロ成形、底面凹陥へク切り痕ナシ。	灰母・白色粘土少量	良好	内外面 にぶい黄褐色	
02	カマド	土師器	無台坏	(13.5)	3.5	(6.0)	65.9	6.5	ロクロ成形、下縁凹陥へク切り、底面凹陥未切り。	白色粘土やや多い、灰母少量	良好	内面 黄褐色 外面 にぶい黄褐色	
03	覆土	土師器	無台坏	—	(4.7)	7.4	84.5	下縁凹陥	ロクロ成形、底面凹陥へク切り、内面に凸キ。	白色粘土・灰母少量、スベリア微量白色針状物質微量	良好	内面 黄褐色 外面 にぶい黄褐色	墨書「口」 内面黒色処理
04	覆土	土師器	有台坏	—	(5.0)	6.4	101.8	下縁凹陥 部欠彩	ロクロ成形、底面凹陥へク切り、内面に凸キ。	灰母少量、白色針状物質微量	良好 二次焼成 有	内面 黄褐色 外面 にぶい黄褐色	内面黒色処理
05	カマド	灰釉陶器	長頸瓶	—	(9.5)	—	51.7	肩破片	上半は回転へクズリ、脚部は比較的厚くやや丸みを帯びて立ち上がる。	鉄分の噴出し微塵	良好	胎土 灰褐色 釉 暗緑色	二川カ (K90~053併行) [11] 表 98-2-021

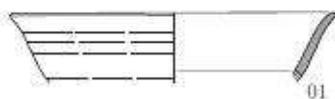
SI07 (第19・20図、第9表、遺構図版2、遺物図版2)

検出位置:調査区中央やや北寄りB・C3グリッド。**平面形状:**不明。**主軸方向:**N-115°-E。**規模:**不明。**確認面下の深さ:**不明。**覆土:**大きく削平されており不明。**柱穴:**カマド右脇に1基。**壁溝:**確認できていない。**カマド:**東壁中央付近カ。煙道は東壁から48cmほど掘りだされる。**その他付帯施設:**なし。**重複関係:**カマド左側のP1は貯蔵穴カ。平面楕円形、71.9×60cm、深さ22.1cm。



SI07 カマドセクション
 1 暗褐色 焼土ブロックφ1-5mm少量、しまりなし、粘性なし。
 2 褐色 焼土粒子少量、しまりなし、粘性なし。
 3 赤色粉化土しまりなし、粘性なし。
 4 暗褐色 褐色土を多量混入、しまりなし、粘性なし。
 5 褐色 焼土ブロックφ1-2mm少量、しまりなし、粘性なし。
 6 褐色ソフトフォーム

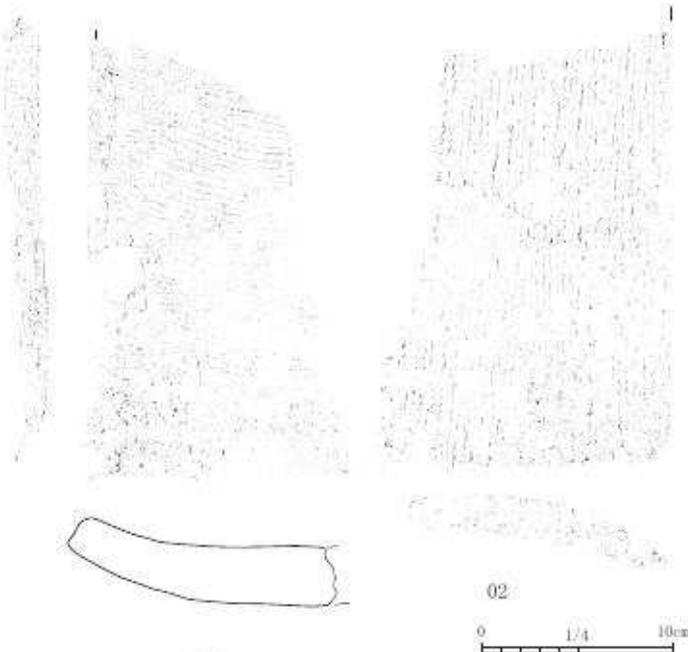
第19図 SI07



掲載遺物：緑釉陶器碗1点、平瓦1点。

その他未掲載遺物：土師器 311.7g。

遺構の帰属時期：平瓦1点のみで時期は判断できない。P1から黒笹90号窯式に並行する緑釉陶器が出土している。この土坑が本遺構に伴うものであれば、9世紀後半の可能性が考えられる。



第20図 SI07 出土遺物

第9表 SI07 出土遺物観察表

図版番号	注記	種類	群種	口径	器高	口径	重量	保存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	584	緑釉陶器	碗	(17.0)	(3.7)	—	8.9	口縁破片	器壁は比較的厚くほぼ直線的に立ち上がり口縁付近で外反し縁部にゆるい凹みがあり縁部に凹凸がある。内面体部手端に段を有す。	数分の焼出し微量の赤褐色の胎土・非常に硬質	良好		図版450併行 【29】 3198-2-007
02	カマド壁 58-05	瓦	平瓦	2ア (23.3)	3ア (14.9)	厚 3.1	363.7	下縁・左側縁破片	口縁折れ合せ、凹面あり。右目付横、下縁ケズリ、右直線目付折れ縁・側面ケズリ。	白色粒子やや多い	良好	内外面 灰白	

SI08 (第21・22図、第10表、遺構図版2、遺物図版2・3)

検出位置：調査区南壁側やや西寄り D2・3グリッド。平面形状：長方形。主軸方向：N-86°-E。規模：2.91m × 3.7m。確認面下の深さ：28cm。覆土：暗褐色を基調に8層に分層される。自然堆積。柱穴：検出されてい

SI08 セクション
 1 7.5H2/3暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1-2mm少量、焼土ブロック少量、炭化物ブロックφ1-2mm少量、しまりなし、粘性なし。
 2 7.5H2/4暗褐色 ロームブロックφ1-5mm少量、しまりなし、粘性なし。
 3 7.5H2/5暗褐色 ロームブロックφ1-3mm少量、しまりなし、粘性なし。
 4 7.5H2/6暗褐色 ロームブロック、炭化物ブロックφ1-2mm少量、しまりなし、粘性なし。
 5 7.5H2/7暗褐色 ロームブロックφ1-5mm少量、炭化物ブロックφ1-8mm少量、しまりなし、粘性なし。
 6 7.5H2/8暗褐色 山砂・焼土粒子散在、しまりなし、粘性なし。
 7 7.5H2/9暗褐色 しまりなし、粘性なし。
 8 7.5H2/10暗褐色 山砂の混入のみ層。
 カマド壁(19-13層)
 9 暗褐色 焼土ブロックφ2-3mm少量、砂質土散在、しまりなし、粘性なし。

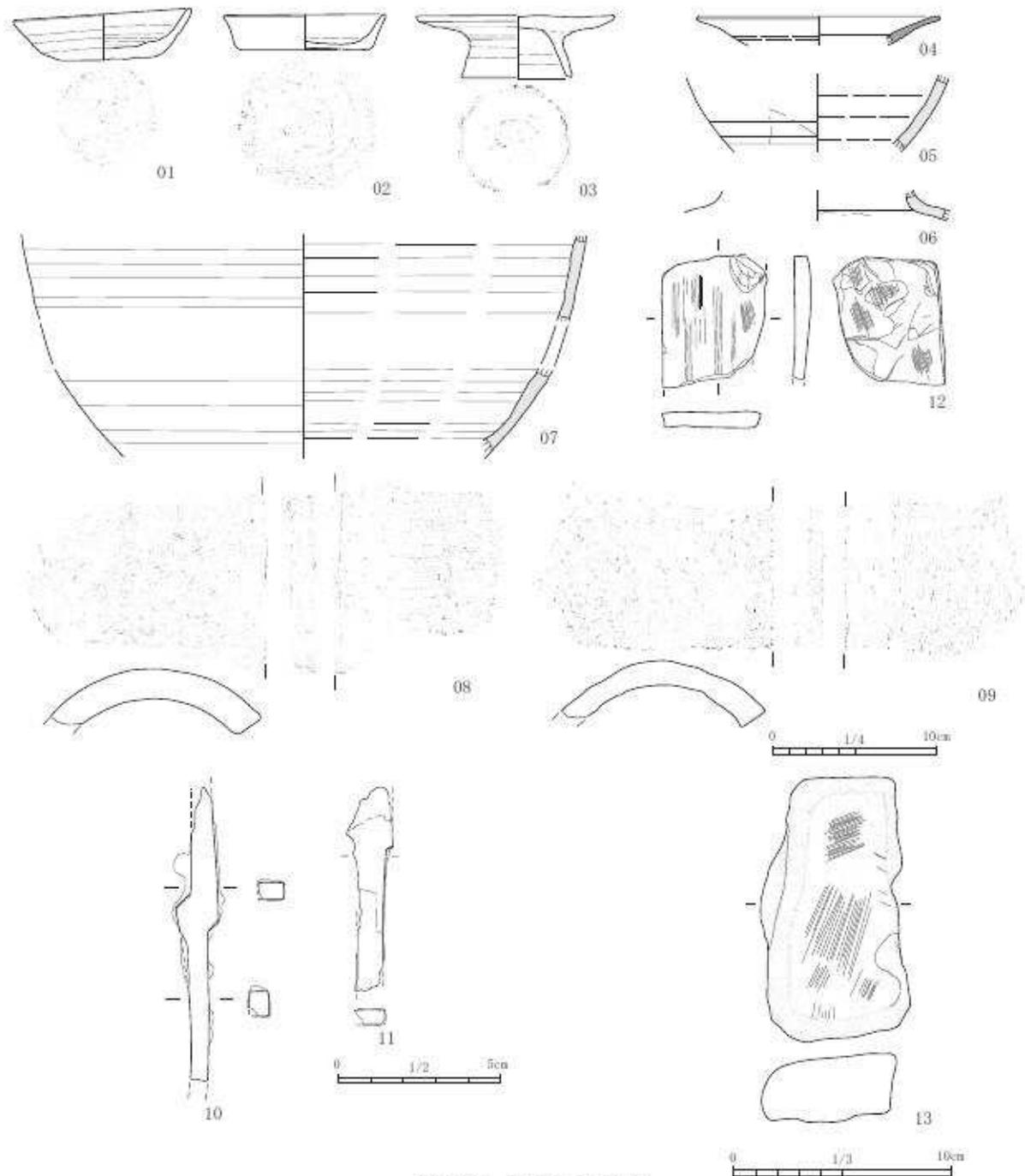


第21図 SI08

ない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周するものであろうか、カマド側の東壁は不明瞭。幅 24 cm、深さ不明。床面：平坦。カマド：東壁中央やや南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 112 cm で、東壁から 82 cm ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。その他付帯施設：なし。重複関係：SB05・07・09 と重複。本遺構が新しい。

掲載遺物：土師器無台坏 2 点、有台皿 1 点、緑釉陶器段皿 1 点（猿投 K90 併行）、灰釉陶器長頸瓶 1 点（美濃光 1～大 2）、短頸壺 2 点（猿投 K90、K90 前後）、丸瓦 2 点、棒状鉄製品 2 点、砥石 2 点。その他未掲載遺物：土師器 2940g、須恵器 900g、瓦 143g、鉄製品 18.5g。

遺構の帰属時期：土師器無台坏 01 は小型化し、02 のような皿形の土器が出土している。また、高足の有台皿が出現する時期である。共伴した灰釉陶器も大原 2 号窯式の存在などから、10 世紀後半と判断される。



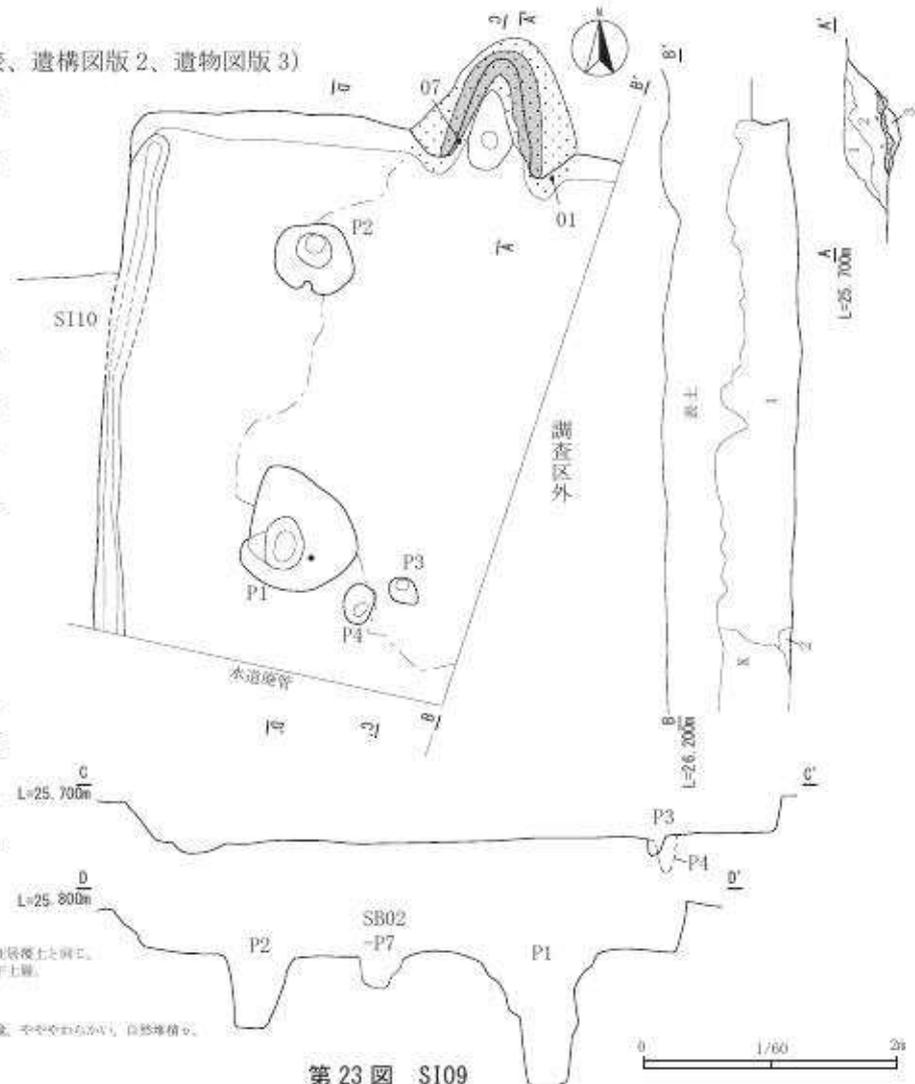
第 22 図 SI08 出土遺物

第10表 SI08 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	形状	口径	高さ	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
01	2	土師器	黒台杯	11.8	2.8	5.5	128.2	完形	ボクロ型形、底面回転ハケ切り。	白色粘土・小一中礫や多い、白色鉄質物質微量	良好	内外面 にぶい黄緑	
02	カマド	土師器	黒台杯	10.0	2.1	5.0	71.6	完形	ボクロ型形、底面回転ハケ切り。	炭母や多い、白色粘土少量	良好	内外面 にぶい黄緑	
03	1	土師器	有台杯	12.2	2.8	5.8	174.8	ほぼ完形	ボクロ型形、底面回転ハケ切り。	白色粘土・小一中礫や多い、白色鉄質物質微量	良好	内外面 黄	
04	覆土-SI02	緑釉陶器	段皿	(14.0)	(1.7)	—	13.2	口縁部片	胎壁は比較的薄く唇縁は外反して立ち上がり口縁に至る。	精良	良好	内面 赤灰陶 外面 緑黄緑	2月(09)1 総合 検長590(併行) 【19】 実98-2-091-001
05	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(4.7)	—	16.6	胴部片	下半回転ハケケズリ、胎壁は比較的薄く丸みを帯びて立ち上がる。	精良	良好	胎土 灰白 釉 緑黄緑	新渡戸一夫2 【14】 実98-2-022
06	覆土	灰釉陶器	短頸瓶	—	(4.5)	—	10.5	胴部片	胎壁は比較的薄く丸みを帯びて立ち上がる。	精良	良好	胎土 灰白 釉 緑黄緑	検長590 【15】 実98-2-023
07	土師器土	灰釉陶器	短頸瓶	—	—	—	121.4	胴部・胴部片	外面回転ハケケズリ。	鉄分の増出し多い、炭母や多い	良好	胎土 灰白 釉 オリーブ灰	検長590前後 【16】 実98-2-024
08	カマド	瓦	瓦瓦	タテ(11.4)	ヨコ(13.0)	厚1.9	444.9	右側縁残存	一部は破損り合せ(折り曲り)、凸面赤切り痕、タケナブ、凹面赤切り痕、右目尻痕、側面ケズリ、側面ケズリ。	炭母微量、白色粘土少量	良好	内外面 灰黄	カマド構築物付着、自然酸化
09	覆土	瓦	瓦瓦	タテ(9.5)	ヨコ(12.4)	厚1.9	324.8	右側縁残存	凸面ナブ、凹面赤切り痕、右目尻痕(凸面あり)。	炭母・白色粘土微量	良好	内面 にぶい黄緑 外面 灰黄	カマド構築物付着、自然酸化・凸面火傷や割傷
10	覆土	鉄製品	棒状品	タテ(9.1)	ヨコ1.3	厚0.8	24.7	両端欠損	断面方形の棒状品、中央でアタラシ状に膨張。				
11	覆土	鉄製品	棒状品	タテ(6.2)	ヨコ(1.4)	厚0.5	8.5	両端欠損	断面方形の棒状品、鈍頭著しく形状不明瞭、周状部は若干欠損。				
12	覆土	石製品	砥石	タテ(6.2)	ヨコ(4.5)	厚0.8	47.6	下端欠損	塊状型・変形砥、板状、上面・左側面に細目あり、表・裏面と右側面が使用面、右側は凹面、左側面は平坦面を呈し、表面は行刺面を呈す、石材：硬岩類。				自然酸化。
13	1	石製品	砥石	タテ(12.3)	ヨコ(6.4)	厚2.9	407.9	完形	板状型・変形、板状の自然磨使用、側面は磨行痕あり、磨面方に磨立てている、表面のみ使用、磨面平坦、裏面は凹面あり、磨材：石材、砂岩。				表面自然酸化。

SI09 (第23・24図、第11表、遺構図版2、遺物図版3)

検出位置：調査区東端部 D5 グリッド。東壁側は調査区域外。平面形状：方形カ。主軸方向：N-8°-E。規模：不明。確認面下の深さ：38cm。覆土：暗褐色土の単層。人為的な堆積の可能性がある。柱穴：西壁側2本が検出されている。四隅付近の対角線上に4基配されるものであろうか、東側は調査区域外となり不明。また、入り口ピットと考えられるP3・4が確認されている。壁溝：西側壁には検出されているが、カマド側にはない。幅24cm、深さ11cm前後。



SI09 カマドとセクション
1. 7.503/4暗褐色 粘土粘土・粘土小ブロック中量、自然覆土と同様。
2. 7.505/2に55・褐色 粘土ブロック、天井・西壁下土層。
3. 粘土粘土・灰・炭化物主体、粘土中ブロック少量。
SI09 B セクション
1. 7.503/4暗褐色 ローム粘土中・多量、炭化物粘土少量、やややわらかい、自然堆積。
2. 自然酸化なし。

第23図 SI09

床面：平坦。カマド：北壁に設置され、壁際主軸部分の全長は120 cmで、北壁から88 cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。重複関係：SI10・SB02と重複する。SI10を切るが、SB02との新旧関係は不明瞭である。

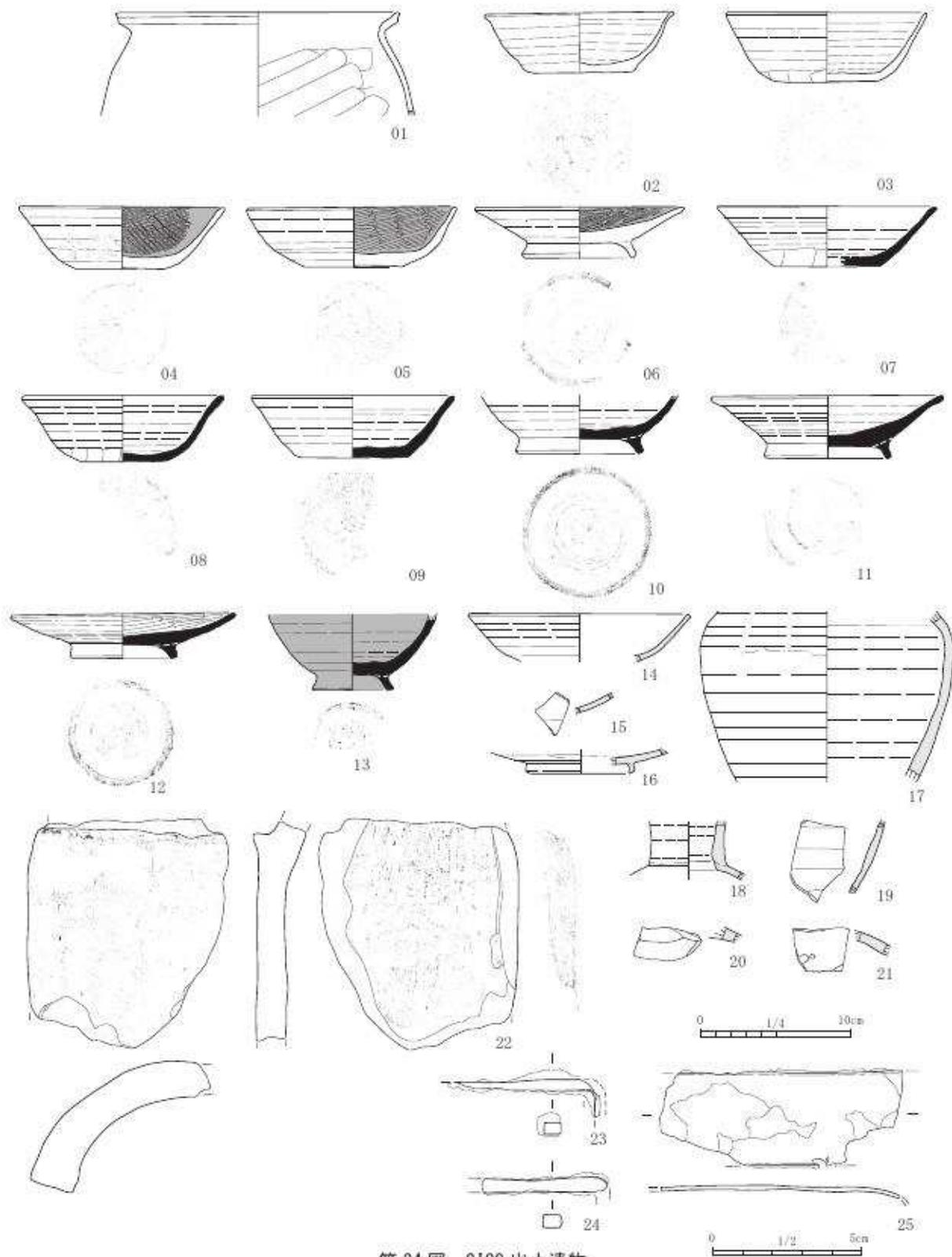
掲載遺物：土師器無台坏4点（刻書土器「丁井」1点）、有台皿1点、甕1点、須恵器無台坏3点、有台坏1点、有台皿2点、瓶1点、灰釉陶器碗1点（美濃カ光1～大2）、皿2点（猿投K90・90-2）、長頸瓶5点（猿投1G78（～K14古）・K90・K14～90・三遠系K90（～053併行）、丸瓦1点、鉢2点、板状鉄製品1点。

その他未掲載遺物：土師器5140g、須恵器1018.2g、瓦198g、鉄製品23.3g。

遺構の帰属時期：土師器無台坏に内面黒色処理を行うものが出土している。また、須恵器有台皿の出土から9世紀中葉と判断した。一方で灰釉陶器は、光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式及び黒笹90号窯式、折戸53号窯式土器から9世紀後半と判断される。

第11表 SI09出土遺物観察表

品目番号	品名	種類	器種	口径	底径	高さ	重量	残存	形状の特徴	粘土	焼成	色調	備考
01	カマド脚	土師器	甕	(18.8)	(6.8)	—	35.4	口縁一部割1/4	口縁部平直、胴部上段内外表面にナズ。	長石・石英・雲母やや多い。	良好	内面 黒陶 外面 黄	
02	覆土	土師器	無台坏	12.6	(4.0)	7.3	94.7	口縁上縁へさ	口縁部平直、底縁部へさ	雲母やや多い、スコリア少量、白色粘土微量	良好	内外面 にぶい黄褐色	
03	覆土	土師器	無台坏	13.3	4.6	6.2	98.7	2/3	口縁部平直、下縁部へさ	雲母やや多い、白色粘土・スコリア微量	良好	内外面 にぶい黄褐色	
04	覆土	土師器	無台坏	(13.6)	(4.1)	6.0	127.5	口縁1/10へさ	口縁部平直、下縁部へさ	白色粘土やや多い、雲母少量、白色針状物微量	良好	内面 黒陶 外面 黄褐色	体面刻書「丁井」
05	覆土	土師器	無台坏	13.8	3.9	6.5	212.9	完好	口縁部平直、下縁部へさ	雲母やや多い、白色粘土微量	良好	内面 黒陶 外面 にぶい黄褐色	
06	覆土	土師器	有台皿	(13.8)	(3.3)	7.1	151.6	口縁1/3へさ	口縁部平直、底縁部へさ	雲母やや多い	良好	内面 黒陶 外面 にぶい黄褐色	
07	カマド脚	須恵器	無台坏	(14.4)	(4.2)	(7.0)	58.8	1/2	口縁部平直、下縁部へさ	雲母多い、スコリア少量、長石・石英微量	良好	内外面 黄褐色	新出埋
08	覆土	須恵器	無台坏	(13.2)	(4.4)	15.7)	38.5	1/4	口縁部平直、下縁部へさ	長石・石英等やや中量、雲母多い、スコリア微量	良好	内外面 黄褐色	新出埋
09	覆土	須恵器	無台坏	(13.5)	(4.3)	17.5)	90.8	1/3	口縁部平直、底縁部へさ	長石・石英等やや中量、雲母少量	良好	内外面 にぶい黄褐色	新出埋
10	覆土	須恵器	有台皿	—	(3.9)	8.0	159.7	体へさ	口縁部平直、底縁部へさ	雲母やや多い	良好	内外面 黄褐色	新出埋
11	覆土	須恵器	有台皿	(16.2)	(4.1)	17.9)	151.2	1/2	口縁部平直、底縁部へさ	雲母やや多い	良好	内外面 にぶい黄褐色	新出埋
12	覆土	須恵器	有台皿	(14.7)	(2.9)	6.5	138.2	1/2	口縁部平直、底縁部へさ	雲母多い、長石・石英微量	還元不品	内面 灰白 外面 灰オレンジ	新出埋
13	覆土	須恵器	瓶	—	(5.2)	15.0)	74.7	体へさ1/2	口縁部平直、底縁部へさ	白色粘土・雲母少量	良好	内外面 オリーブ色	新出埋
14	SI09	灰釉陶器	碗	(14.5)	(4.2)	—	24.8	口縁一部割1/4	体面下部へさ	鉄分の抽出し少量	良好	粘土 灰白 釉 黄褐色	猿投 光1～大2 【217】 実98-2-025
15	SI09	灰釉陶器	皿	—	(3.4)	—	2.2	体面片	体面は薄く縁部へさ	精良	良好	粘土 灰白 釉 黄褐色	猿投 590 【218】 実98-2-026
16	SI09	灰釉陶器	皿	—	(3.8)	(6.0)	35.8	底面片	体面下部へさ	鉄分の抽出し・白色粘土少量	良好	粘土 灰白 釉 黄褐色	猿投 590-2 底縁部へさ 【219】 実98-2-027
17	埋土部へ SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	(11.3)	—	105.5	胴面片	下縁部へさ	鉄分の抽出し少量	良好	粘土 灰白 釉 黄褐色	猿投 1078 (～ K14古) 【220】 実98-2-028
18	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	(3.9)	—	24.0	胴部へさ	二段構成、縁部は比較的厚く	鉄分の抽出し少量	良好	粘土 灰白 釉 黄褐色	猿投 590 【221】 実98-2-029
19	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	(4.8)	—	31.7	胴面片	体面下部へさ	鉄分の抽出し少量	良好	粘土 灰白 釉 黄褐色	猿投 590 【222】 実98-2-030
20	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	(3.0)	—	7.0	胴面片	体面下部へさ	鉄分の抽出し少量	良好	粘土 灰白 釉 黄褐色	猿投 K14～90 【223】 実98-2-031
21	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	(3.7)	—	8.4	胴面片	体面下部へさ	鉄分の抽出し少量	良好 二次焼成	粘土 黄褐色 釉 黄褐色	三遠系 K90 (～ 053 併行) 【224】 実98-2-032
22	覆土	瓦	丸瓦	タテ (14.5)	ヨコ (11.0)	厚 3.1	645.3	瓦縁部・右側縁部	六角形、表面は比較的滑らか	雲母やや多い、白色粘土少量	良好	内外面 にぶい黄褐色	カマド脚部付近、黄鉄屑付
23	覆土	鉄製品	板	タテ (12.8)	ヨコ (16.7)	厚 5.7	5.0	断面長方形を呈する。					
24	覆土	鉄製品	板	タテ (5.5)	ヨコ (11.6)	厚 6.0	5.0	断面長方形を呈する。左側縁部は割断					
25	覆土	鉄製品	板状品	タテ 3.2	ヨコ (8.1)	厚 0.2	18.0	新状を呈する。右側は緩やかに湾曲					



第24図 SI09 出土遺物

SI10 (第25・26図、第12表、遺構図版3、遺物図版3)

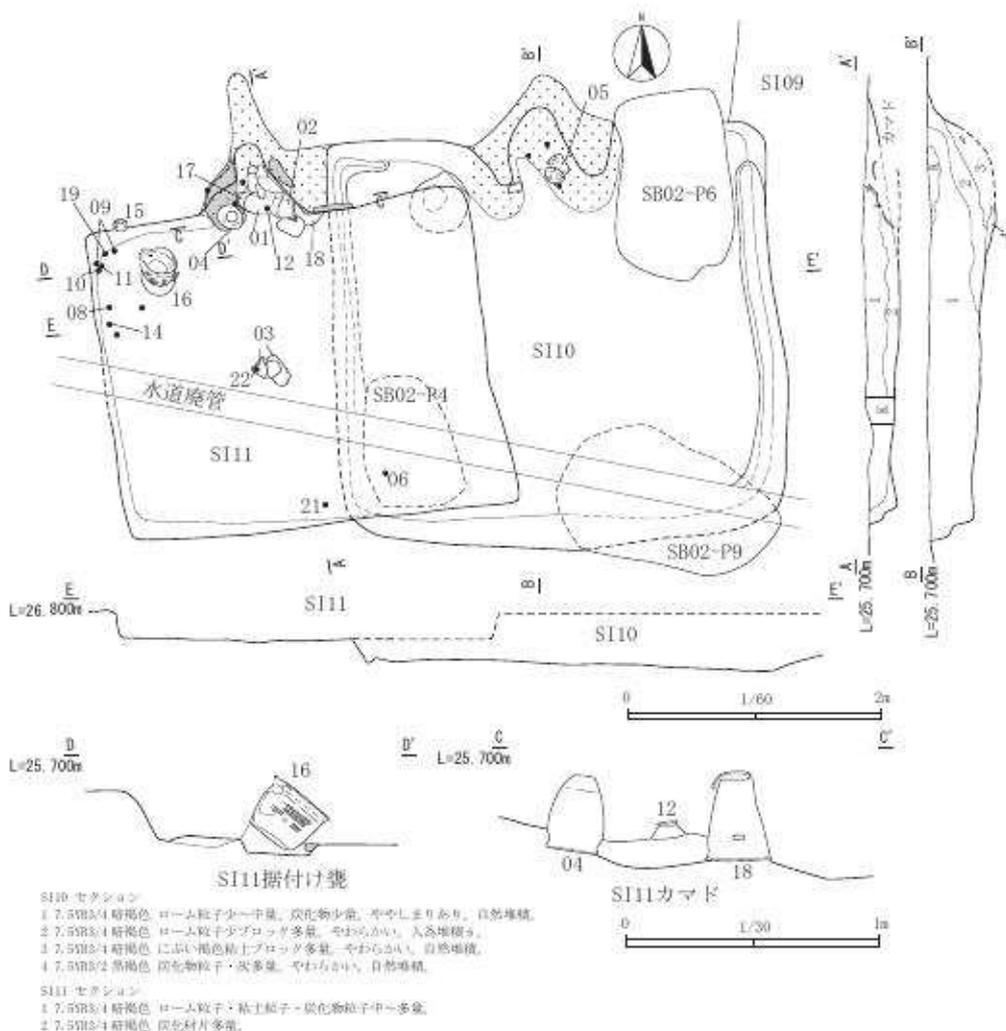
検出位置: 調査区東端部 D5 グリッド。平面形状: やや歪んだ正方形。主軸方向: N-5°-W。規模: 3.24m × 3.47m。確認面下の深さ: 20 cm。覆土: 暗褐色土の単層。自然堆積。柱穴: 検出されていない。壁溝: ほぼ全周する。幅 15 cm、深さ 4 cm 前後。床面: 平坦。カマド: 北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 112 cm で、

西壁から42cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。その他付帯施設：カマド西側袖に隣接して、SB02-P5埋没後に円形のピット状遺構が掘り込まれている。発埋設の穴カ。重複関係：SI09・11・SB02と重複し、本住居跡が最も古いが、SB02との新旧関係は不明瞭。

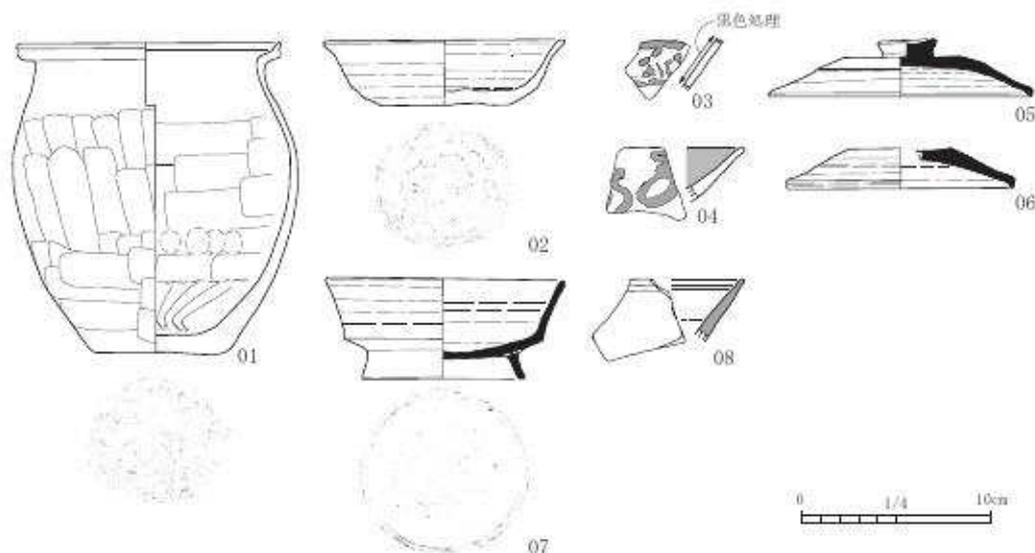
掲載遺物：土師器
無台坏2点（墨書土器1点）、有台皿1点（墨書土器1点）、甕1点、須恵器蓋2点、有台坏1点、緑釉陶器稜碗カ1点（猿投K90併行）。

その他未掲載遺物：
土師器2570g、須恵器1018.2g、土製品61.2g。

遺構の帰属時期：
須恵器有台坏・蓋の組み合わせから8世紀末から9世紀初頭と判断される。一方で、共伴した緑釉陶器08は黒笹90号窯式で9世紀後半に比定される。明らかに齧齧があり、SI11に伴う可能性が高い。



第25図 SI10・11



第26図 SI10出土遺物

第12表 SI10 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	形状	口径	器高	底径	重量	残存	整形の物遣	胎土	焼成	色調	備考
91		覆土	土師器	小甕	11.9	16.2	6.4	721.6	完形	口縁内外面に横ナズ、胴部外面へラケズリ、内面ナズ、中位筋線印、下縁へラケズリ、底面木炭痕。	良好 二次焼成 71	内外面 灰黄地	
92		覆土	土師器	第六押	(12.4)	3.4	7.0	81.2	口縁3/4欠損	ロクロ製形、底面筋線へラケズリ。	良好	内外面 に白い黄地	
93		覆土	土師器	第六押	—	—	—	4.5	残部片	ロクロ製形、内面ミガキ。	良好	内外面 黒	内面黒色処理 遺著「口」
94		覆土	土師器	有台鉢	—	—	—	11.6	残部片	ロクロ製形、内面ミガキ。	良好	内外面 黒	内面黒色処理 遺著「口」
95	ⅤB	須恵器	甕	14.8	2.9	ガケ径 3.1	168.1	ほぼ完形	ロクロ製形、口縁は無い、 底上の回転へラケズリは 1/4。	器身やや多い	還元不良	内外面 灰黄地	新治産
96		覆土	須恵器	甕	11.6	(12.1)	—	61.2	1/2	ロクロ製形、口縁は無い、 底上の回転へラケズリは 1/4。	良好	内外面 黄灰	新治産
97		覆土	須恵器	有台鉢	12.4	5.3	8.5	205.4	ほぼ完形	ロクロ製形、下縁・底面 は回転へラケズリ。	良好	内外面 黄灰	新治産
98		覆土	緑釉陶器	椀	—	(5.2)	—	12.4	口縁部片	器壁は厚くやや外反して 立ち上がり口縁付近で輪 溝に滑くなる。内面口縁 部に一糸の浅い筋線(幅 1mm 弱)が走る。	精良	内面 灰白 緑 地	【29】 京98-2-002

SI11 (第25・27・28図、第13・14表、遺構図版3、遺物図版4・5)

検出位置: 調査区東端部 D5 グリッド。 **平面形状:** 方形。 **主軸方向:** N-8°-E。 **規模:** 2.57m × 一。 **確認面下の深さ:** 30 cm。 **覆土:** 住居跡の覆土は暗褐色土を基調に2層に分けられる。自然堆積。 **柱穴:** 検出されていない。 **壁溝:** なし。 **床面:** 平坦。 **カマド:** 北壁中央に設置され、袖には甕及び甔を倒立させて設置し、山砂・粘土で固定している。また、カマド内には甕が横方向に入れ子状態で出土しており、懸架材として用いられた可能性がある。壁際主軸部分の全長は128 cmで、西壁から108 cmほど掘りだされ煙道が長い。両袖間の幅は72 cmと大きく開いて設置される。 **その他付帯施設:** 北西コーナー寄りに浅い掘り込みを有する部分に、須恵器甕が埋設された状態で検出されている。 **重複関係:** SI10・SB02 と重複し、SI10 を切るが、SB02 との新旧関係は不明瞭。

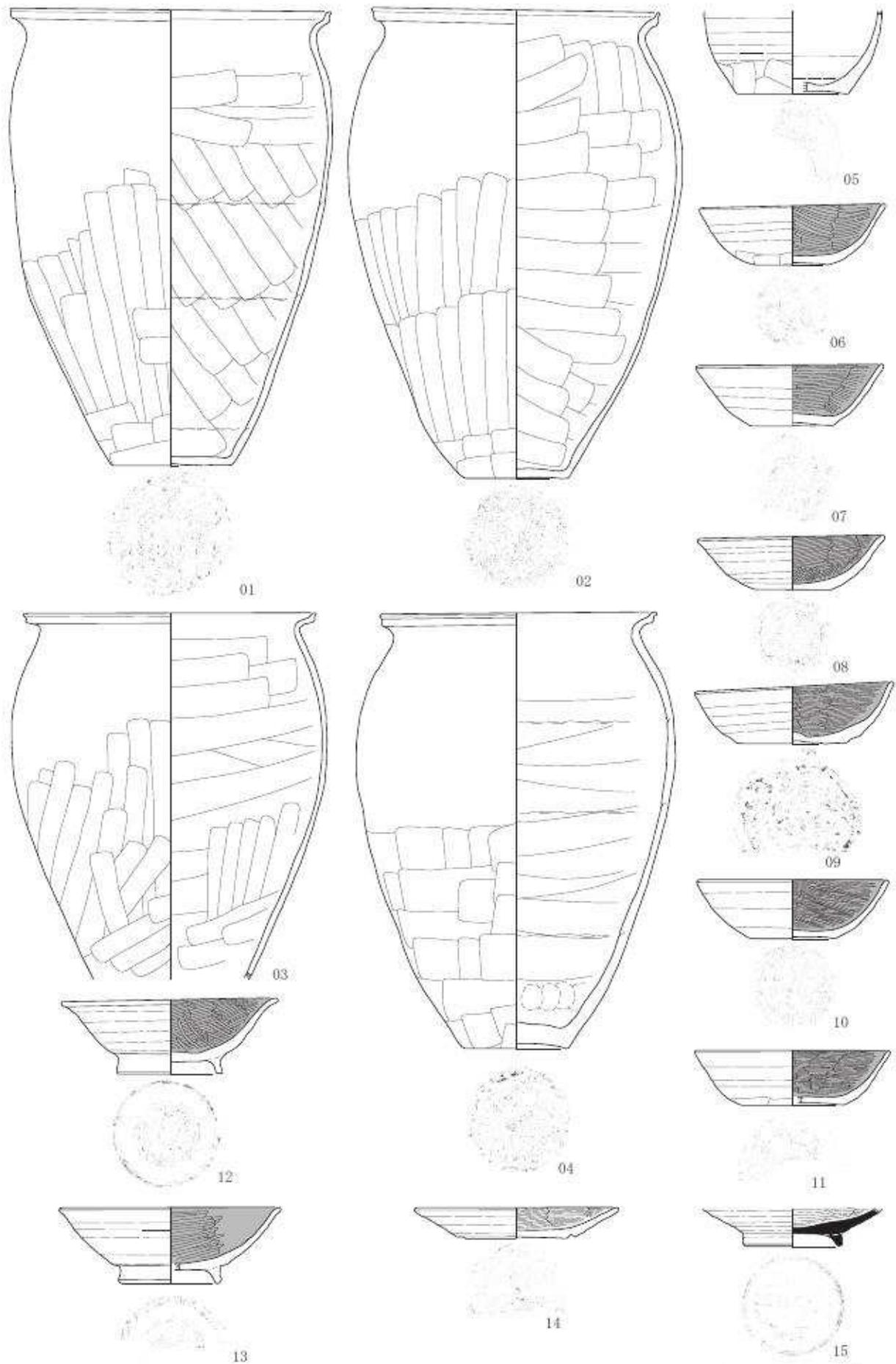
掲載遺物: 土師器無台鉢6点、有台鉢2点、皿1点、甕5点、須恵器無台鉢2点、有台鉢1点、甔1点、広口甕1点、大甕1点。灰釉陶器椀1点(猿投K90-3)、土製品紡錘車1点。

その他未掲載遺物: 土師器 3905.5g、須恵器 2985.5g、礫 435.8g、鉄製品 5.3g。

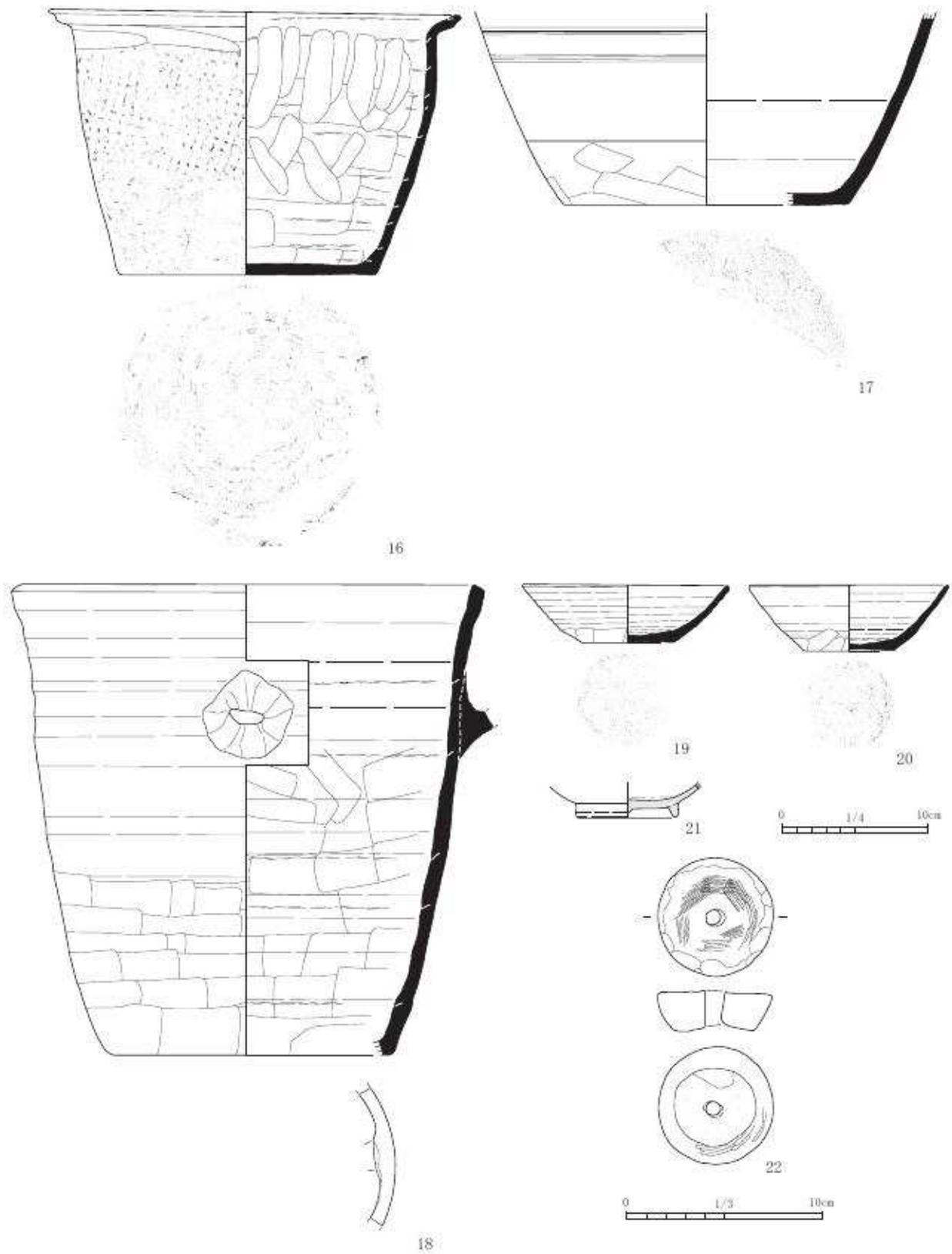
遺構の帰属時期: 出土遺物の組み合わせから9世紀後半の遺構と判断される。共伴した灰釉陶器も黒笹90号窯様式の3段階であり齟齬はない。なお、土師器皿が1点(14)出土しているが、本住居に伴う遺物と判断している。近接する鹿の子A遺跡においても該期の資料として報告されている。

第13表 SI11 出土遺物観察表(1)

品目番号	注記	種類	形状	口径	器高	底径	重量	残存	整形の物遣	胎土	焼成	色調	備考	
91	16	土師器	甕	23.4	31.7	5.8	1,274.5	胴ナズ 1/2欠損	口縁内外面に横ナズ、 胴部外面中位よりへラケ ズリ、内面ナズ。	小一中輪・器身少量	良好 二次焼成 71	内面 黒 外面 明焼		
92	17	土師器	甕	20.4	34.9	7.0	1,437.4	胴部1/3 欠損	口縁内外面に横ナズ、 胴部外面中位よりへラケ ズリ、底面筋線印。内面 ナズ。	小一中輪・器身少量	良好 二次焼成 71	内外面 に白い黄地		
93	14	土師器	甕	28.9	(25.9)	—	610.1	口縁3/4 胴部1/3	口縁内外面に横ナズ、 胴部外面中位よりへラケ ズリ、内面ナズ。	白色粘土・器身少量	良好 二次焼成 71	内面 に白い黄地 外面 に白い黄地		
94	24	土師器	甕	19.8	30.7	7.5	1,753.6	ほぼ完形	口縁内外面に横ナズ、 胴部外面中位よりへラケ ズリ、内面ナズ。	白色粘土・器身少量	良好 二次焼成 71	内面 灰黄地 外面 に白い黄地		
95		覆土	土師器	小甕	—	(5.9)	8.0	底面下縁 1/4	ロクロ製形、下縁を持ち へラケズリ、底面一方の 手持ちへラケズリ。	白色粘土やや多い、器身 少量	良好 二次焼成 71	内面 に白い黄地 外面 に白い黄地		
96	10	土師器	第六押	13.2	4.5	5.2	158.3	ほぼ完形	ロクロ製形、外面下縁持 ちへラケズリ、回転糸 切り後一方の手持ちへ ラケズリ、内面ミガキ。	器身少量、白色粘土・白 色針状物質微量、タコリ 了輪痕	良好	内面 オリーブ黒 外面 灰黄地	内面黒色処理	
97		覆土	土師器	第六押	13.3	4.3	5.9	120.9	2/3	ロクロ製形、回転糸切り (左)後二方向の手持ち へラケズリ、内面ミガキ。	器身多い、白色粘土少量	良好	内面 オリーブ黒 外面 に白い黄地	内面黒色処理
98	8	土師器	第六押	13.5	5.7	5.4	122.7	2/3	ロクロ製形、下縁・底面 は回転へラケズリ、内面ミ ガキ。	器身やや多い、小一中輪 少量	良好	内面 オリーブ黒 外面 に白い黄地	内面黒色処理	



第27図 S111 出土遺物(1)



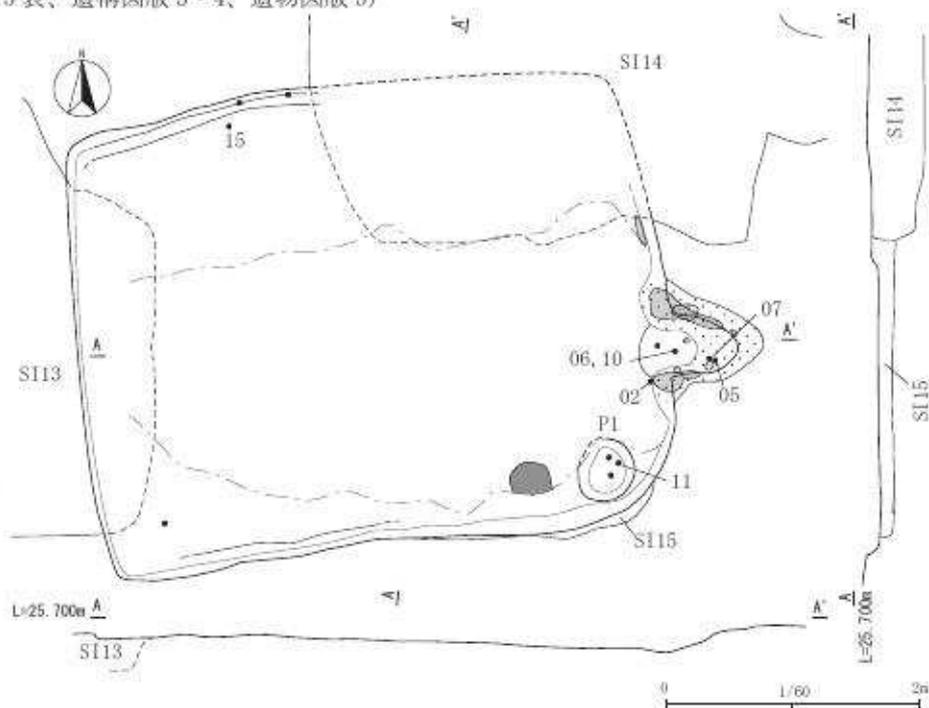
第28図 SI11 出土遺物 (2)

第14表 SI11 出土遺物観察表(2)

図録番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	地味	色調	備考
99	4・5	土師器	黒台坪	14.0	4.0	7.9	112.9	1/2	ロクロ製形。下縁が縦へツケズリ。底面が土塊により整形不明。内面がガサ。	灰目多い。小一中確や少ない。	良好	内面 オリーブ黒 外面 にぶい黄褐	内面黒色処理
10	6	土師器	黒台坪	(13.4)	4.1	6.0	97.8	1/2	ロクロ製形。下縁平持ちへツケズリ。底面が縦へツケズリ。内面がガサ。	白色粘土・雲母少量。白色針状物質・ムコリア微量。	良好	内面 オリーブ黒 外面 暗灰黄	内面黒色処理
11	7	土師器	黒台坪	13.3	4.0	7.4	104.6	1/2	ロクロ製形。下縁平持ちへツケズリ。底面が縦へツケズリ。	白色粘土・雲母少量。ムコリア・白色針状物質微量。	良好	内面 オリーブ黒 外面 にぶい黄褐	内面黒色処理
12	19	土師器	有台坪	15.3	5.2	7.1	204.7	口縁〜体部1/3 底面完形	ロクロ製形。底面が縦へツケズリ。	雲母・白色粘土少量。ムコリア微量。	良好	内面 オリーブ黒 外面 にぶい黄褐	内面黒色処理
13	カマド	土師器	有台坪	(15.7)	(6.2)	(7.1)	81.9	口縁完形	ロクロ製形。底面が縦へツケズリ。	白色粘土・雲母・小一中確少量。	良好	内面 オリーブ黒 外面 にぶい黄褐	内面黒色処理
14	1	土師器	黒	14.4	2.2	7.3	97.6	1/3	ロクロ製形。底面が縦へツケズリ。周縁にシヤーン状の流線が全廻る。	白色粘土・雲母微量。	良好	内面 オリーブ黒 外面 にぶい黄褐	内面黒色処理
15	14	須恵器	高台付形	—	(2.7)	6.7	116.4	底面	ロクロ製形。底面が縦へツケズリ。	長石・石英・雲母多い。	良好 二次焼成 付	内外面 にぶい黄褐	新出器
16	13	須恵器	底の裏	27.9	17.6	17.4	1,920.0	口縁1/2 欠損	煎籠台使用。口縁内外面共に被らず。胴縁外面格子目印。下縁へツケズリ。底面が縦へツケズリ。内面へツケズリ。内面がガサ。底面が縦へツケズリ。	白色粘土・雲母少量。白色針状物質微量。	還元不良	内面 暗灰黄 外面 黄褐	新出器
17	18	須恵器	大甕	—	(12.8)	19.4	471.0	胴〜底面 1/2	煎籠台使用。残存部分外面胴部下に4本一単位の間隔が二条送り下縁へツケズリ。内面は被らず。残存部。	雲母や少ない。長石・石英少量。	良好 二次焼成 付	内面 暗灰黄 外面 にぶい黄	新出器
18	甕上+カマド+カマド	須恵器	甕	(10.3)	(33.0)	(18.5)	2,540.0	1/3	多乳式。煎籠台使用。外面下縁へツケズリ。口縁直下に半角位の把平が付けられるが単位は不明。内面がガサ。	長石・石英等小一中確・雲母や多い。	良好	内面 灰黄 外面 灰	新出器
19	3	須恵器	黒台坪	13.9	4.0	6.3	121.4	口縁〜体部2/3欠損	ロクロ製形。下縁は平持ちへツケズリ。底面一方高の平持ちへツケズリ。	雲母多い。長石・石英少量。	良好	内面 にぶい黄褐 外面 黄褐	新出器
20	確認面	須恵器	黒台坪	13.5	4.4	6.0	104.4	2/3	ロクロ製形。下縁は平持ちへツケズリ。底面一方高の平持ちへツケズリ。	雲母や多い。長石・石英少量。	良好	内面 黄褐 外面 暗灰黄	新出器
21	5・9	区検陶器	甕	—	(2.4)	6.8	77.6	底面完形	底面が縦へツケズリ。高台は比較的高く断面三日形を呈するが幅がやや広く内側下半の内面が外側下方の腹が強い。	精製	良好	胎土 灰白 焼成跡	検出305-3 重たけき収を有す 【125】 寛98-2-383
22	15	土師器	煎籠甕	径 6.4	高 2.1	孔径 1.0	70.4	ほぼ完形	上下両面がガサが施されている。	精製	良好	内外面 黄褐	

SI12 (第29・30図、第15表、遺構図版3・4、遺物図版5)

検出位置：調査区中央南寄り C・D3・4 グリッド。
 平面形状：方形。主軸方向：N-84°-E。規模：3.67m × 4.6m。確認面下の深さ：12 cm。覆土：不明。柱穴：検出されていない。壁溝：北壁西寄り及び南壁西寄りに僅かながら確認されており、本来は全周していたものと想定される。幅 14 cm 前後。床面：平坦。カマド：東壁中央やや南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長



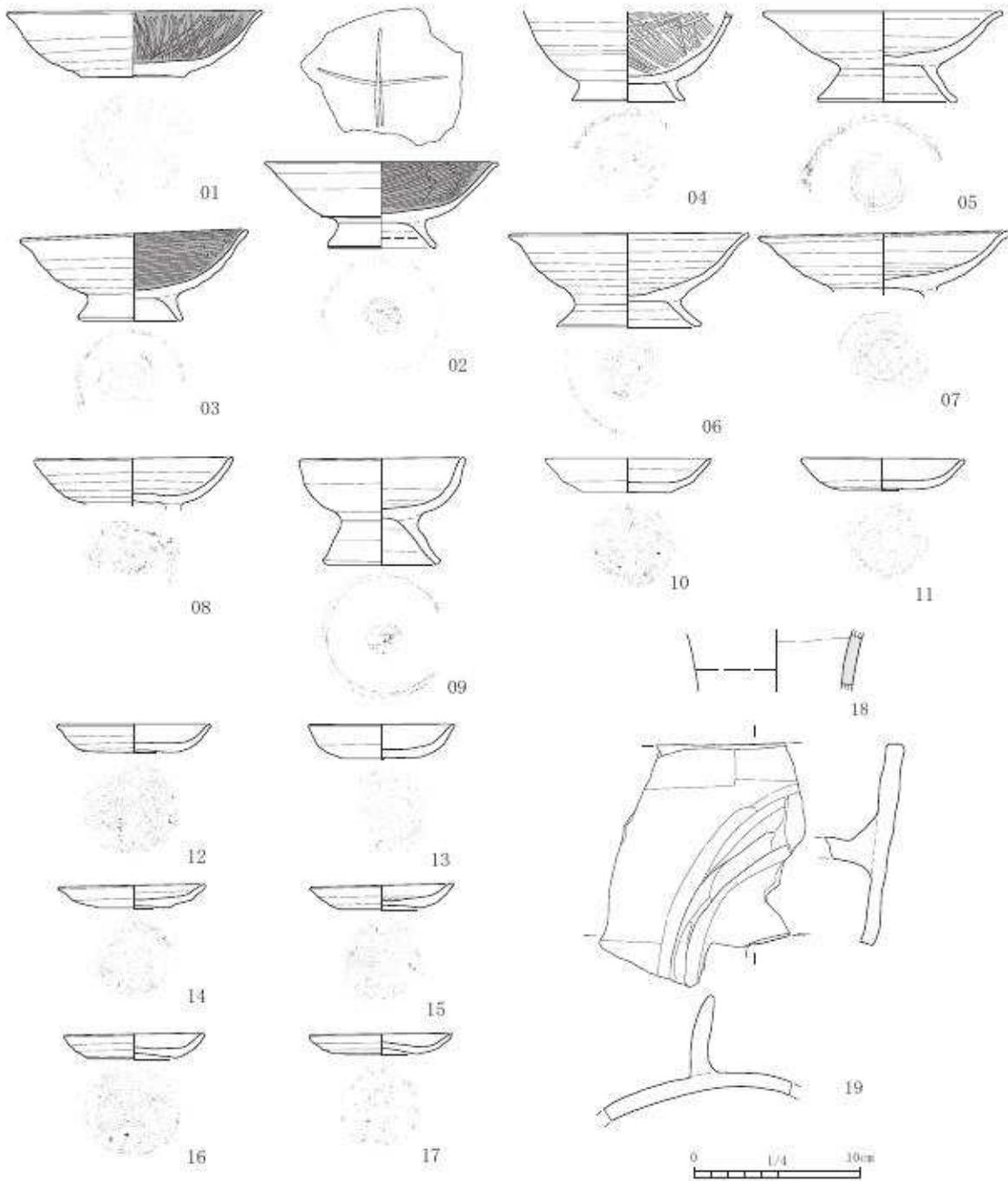
第29図 SI12

は100 cmで、西壁から72 cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築される。その他付帯施設：南東コーナー寄りに浅い掘り込みがあり (P1)、甕埋設穴か。重複関係：S113・14・15 と重複する。本住居跡が最も新しい。

掲載遺物：土師器無台坏1点、有台碗8点、小皿8点、灰釉陶器広口瓶1点(二川カ K90 ~ 053 併行)、置籠1点。

その他未掲載遺物：土師器 2150g、須恵器 169.8g、灰釉陶器 22.3g。

遺構の帰属時期：出土遺物の特徴としては土師器小皿が挙げられる。高足高台碗、内面黒色の無台坏などの出土から11世紀と判断した。



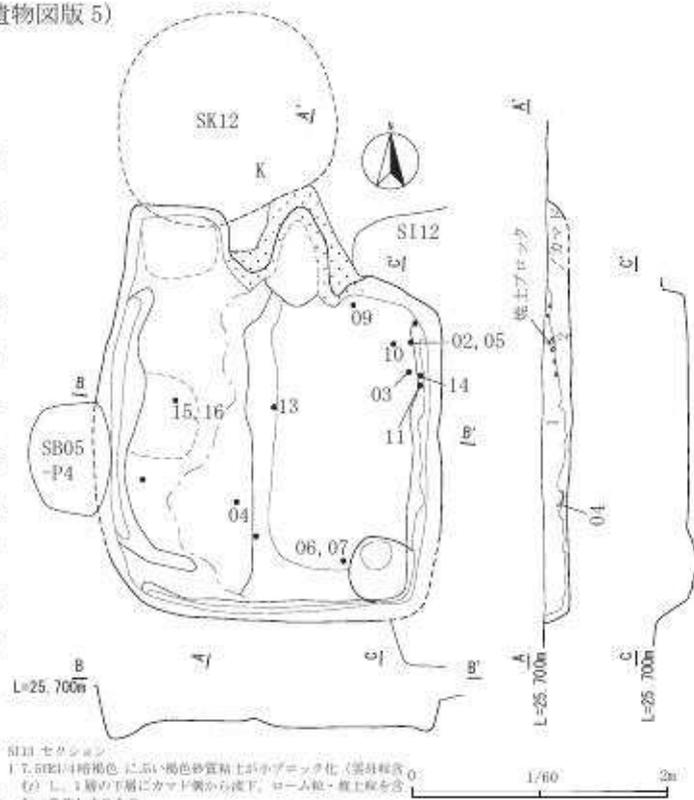
第30図 S112 出土遺物

第15表 SI12 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	形状	口径	高さ	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
01	覆土	土師器	高台杯	(15.5)	4.0	6.3	153.7	口縁1/3-底径	ロクロ製形、底部回転糸切り(左)、内面ミガキ。	炭母微量、白色針状物質微量。	良好	内面 黄褐色 外面 黄褐色	内面黒色処理
02	カマド3	土師器	有台碗	(14.0)	5.38	6.8	118.0	口縁1/4-底径	ロクロ製形、体部下端狭く回転糸切り、内面ミガキ。	炭母やや多い、白色粒子多い。	良好	内面 黄褐色 外面 にぶい黄褐色	内面黒色処理 内面ミガキ状「十」字跡あり。
03	覆土	土師器	有台碗	13.8	5.2	6.0	105.4	口縁1/3-底径	ロクロ製形、底部回転糸切り(右)、内面ミガキ。	炭母・白色粒子・白色針状物質微量。	良好	内面 黄褐色 外面 にぶい黄褐色	内面黒色処理
04	カマド4	土師器	有台碗	—	(5.10)	6.8	118.0	口縁1/4-底径	ロクロ製形、底部回転糸切り、内面ミガキ。	炭母多い、やや中継りが多い。	良好 二次地成り	内面 黄褐色 外面 にぶい黄褐色	内面黒色処理
05	カマド1	土師器	有台碗	14.6	5.5	6.5	112.4	口縁1/4-底径	ロクロ製形、底部回転糸切り残らず。	炭母多い、白色粒子微量。	良好 二次地成り	内外面 にぶい黄褐色	内面黒色処理
06	カマド2	土師器	有台碗	14.4	5.5	(5.6)	117.8	口縁欠損 底面1/3	ロクロ製形、底部糸切り残らず。	炭母・白色粒子少量。	良好	内外面 黄褐色	
07	カマド5	土師器	有台碗	15.2	(5.8)	—	109.0	高台欠損	ロクロ製形、底部糸切り後周縁ナゲ。	炭母少量、白色針状物質微量。	良好	内外面 黄褐色	
08	カマド	土師器	有台碗	12.0	2.7	6.0	85.8	3/4高台欠損	ロクロ製形、底部回転糸切り。	白色粒子やや多い、黒色粒子微量。	良好 二次地成り	内外面 黄褐色	
09	覆土	土師器	有台碗	10.0	4.4	6.7	136.4	花形	ロクロ製形。	炭母・白色粒子微量。	良好	内外面 黄褐色	
10	カマド2	土師器	小皿	10.0	2.0	5.0	78.4	3/4欠損	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母・白色粒子微量。	良好	内外面 黄褐色	
11	カマド	土師器	小皿	10.0	2.0	4.0	52.0	1/2欠損	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母・白色粒子少量、黒色粒子微量。	良好	内面 にぶい黄褐色 外面 黄褐色	
12	確認面	土師器	小皿	9.3	1.7	5.6	65.0	2/3欠損	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	白色粒子少量・炭母微量。	良好	内外面 黄褐色	
13	覆土	土師器	小皿	8.8	2.0	4.8	52.3	2/3欠損	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	白色粒子、炭母微量。	良好	内外面 黄褐色	
14	覆土	土師器	小皿	8.8	1.4	4.3	56.8	ほぼ定形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母微量。	良好	内外面 黄褐色	
15	2	土師器	小皿	6.7	1.4	5.0	88.1	花形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	白色粒子少量、白色針状物質・スコリア微量。	良好	内外面 にぶい黄褐色	
16	覆土	土師器	小皿	8.4	1.4	5.2	84.8	ほぼ定形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	白色粒子やや多い、黒色粒子少量、スコリア・炭母微量。	良好	内外面 にぶい黄褐色	
17	カマド	土師器	小皿	8.6	1.2	4.3	55.9	3/4欠損	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	白色粒子やや多い、白色針状物質・スコリア・炭母微量。	良好 二次地成り	内外面 にぶい黄褐色	
18	確認面	瓦葺陶器	瓦口草	—	(5.6)	—	22.2	断面片	断面は比較的厚くやや外反して立ち上がる。	白色粒子・炭分の堆出し微量。	良好	胎土 黄褐色 林 黄褐色	二川・R50-163併行 【126】R50-2-054
19	覆土	土師器	蓋	—	(14.5)	—	105.2	断面片	回転糸使用否。	炭母少量、白色粒子・白色針状物質微量。	良好 二次地成り	内面 黄褐色 外面 にぶい黄褐色	

SI13 (第31・32図、第16表、遺構図版4、遺物図版5)

検出位置：調査区中央南寄り D3 グリッド。
 平面形状：長方形。主軸方向：N-7°-E。規模：3.25m × 2.73m。確認面下の深さ：25cm。覆土：暗褐色土を基調に2層に分層される自然堆積。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅12cm、深さ5cm前後。床面：カマドの西側袖の延長部分の西側3分の1程度が6cmほど高くなる段差を有す。カマド：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は100cmで、西壁から74cmほど掘りだされる。その他付帯施設：南東コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。規模は75 × 44cm、深さは13cm。また、住居跡の北西コーナー部分は、方形に壁が掘り出されており、棚状の施設として用いられた可能性がある。重複関係：SI12と重複するが、本遺構の方が古い。また、SB05を切り、SK12に切られる。



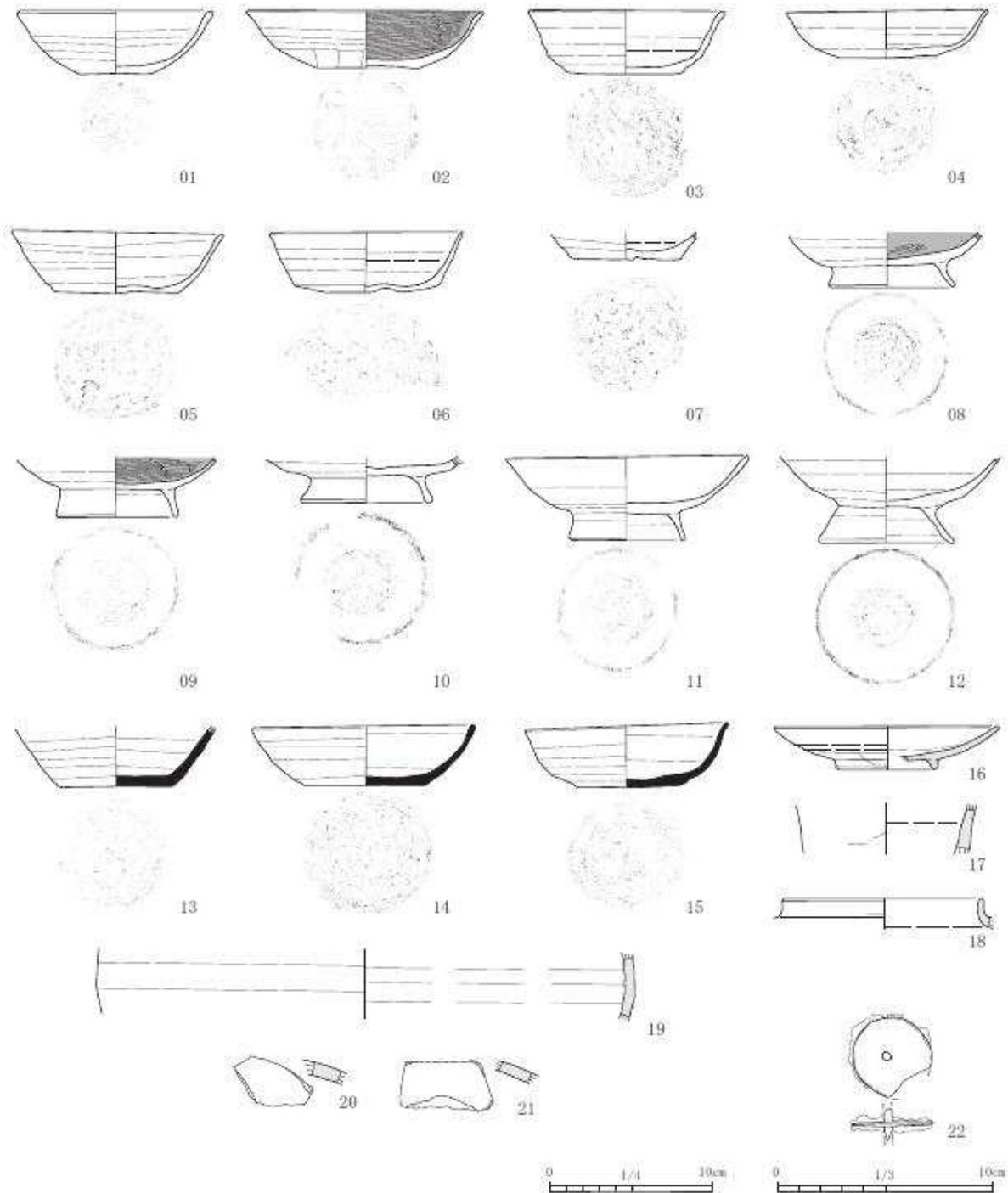
SI13 セクション
 1. 7.50R14暗褐色 にぶい褐色砂質粘土がブロック化(炭母微量)のし、1層の下層にカマド壁から浅下、ローン粒・粒土層を含む。ややしりりあり。
 2. 7.50R14暗褐色 ローン粒中量、炭化物(材片)微量、ややしりりあり。

第31図 SI13

掲載遺物：土師器無台坏7点、有台碗5点、須恵器無台坏3点、灰釉陶器皿1点（美濃光1）、長頸瓶1点（美濃光1～大2）、短頸壺3点（猿投K90・K14・三遠系K90（～053）併行）、壺・瓶類1点（三遠系K90（～053）併行）、鉄製紡錘車1点。

その他未掲載遺物：土師器 2745g、須恵器 449.4g。

遺構の帰属時期：出土遺物では、胎土中に雲母を混入する焼成がきわめて粗雑な須恵器で、ほぼ最終段階の生産品と判断される。内面黒色の碗類、足高高台の碗の出土などの要素から、10世紀前半と判断される。



第32図 SI113 出土遺物

第16表 SI13 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	形状	口径	器高	口径	重量	保存	形状の特徴	胎土	構成	色調	備考
01		土師器	無台坪	12.0	3.9	4.3	69.6	2/1	ロクロ整形。底部回転の切り欠き。	白色粘土・炭素少量	良好	内外面 濃い黄緑	
02	3	土師器	無台坪	14.6	3.6	6.4	156.0	ほぼ完整	ロクロ整形。下縁広く持ち出しヘラケズリ。底面多方向の平持ちヘラケズリ。	炭母や多い、白色粘土微量	良好	内面 黄緑 外面 濃い黄緑	内面黒色処理
03	5	土師器	無台坪	(12.0)	4.0	7.2	113.7	口縁3/4欠損	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母・小一中粒多い	良好	内面 濃い黄緑 外面 濃い黄緑	
04	11	土師器	無台坪	12.5	3.0	6.3	118.8	完整	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母や多い、白色粘土微量	良好	内外面 濃い黄緑	
05	3	土師器	無台坪	13.1	4.0	7.8	102.3	ほぼ完整	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母・小一中粒多い、スコリア微量	良好 二次焼成済	内外面 黄	
06	13	土師器	無台坪	(12.0)	(3.8)	(9.0)	66.2	1/2	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母や多い、小一中粒少量	良好	内外面 黄	
07	13	土師器	無台坪	—	(1.75)	7.0	68.1	破損	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母や多い、小一中粒・黒色粘土少量	良好	内外面 黄	
08	カマド	土師器	有台坪	—	(3.5)	7.6	90.6	破損	ロクロ整形。底面滑溜。	炭母や多い、白色粘土少量、スコリア微量	良好 二次焼成済	内面 濃い黄緑 外面 黄	内面黒色処理
09	1	土師器	有台坪	—	(2.7)	7.3	100.7	下縁一部欠損	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	白色針状物質や多い、炭母・白色粘土少量	良好	内面 黄緑 外面 濃い黄緑	内面黒色処理
10	4	土師器	有台坪	—	(2.5)	6.0	103.5	下縁一部欠損	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母多い、スコリア少量、白色粘土少量	良好 二次焼成済	内面 黄緑 外面 黄	内面黒色処理
11	7	土師器	有台坪	16.1	5.1	6.9	141.3	2/3	ロクロ整形。持ち出し平持ちによるケズリ。底面一方向の平持ちヘラケズリ。	白色粘土・炭母や多い、スコリア微量	良好	内外面 濃い黄緑	
12	確認済	土師器	有台坪	—	(5.4)	8.2	162.7	口縁欠損	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母・白色粘土微量	良好	内外面 黄	
13	5	須恵系	無台坪	—	(3.8)	7.0	150.9	口縁欠損	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	小一中粒多い、白色針状物質少量	良好	内外面 灰白	底部ヘラケズリあり 内外面黒付着
14	6	須恵系	無台坪	13.7	3.7	7.7	130.9	ほぼ完整	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母・白色粘土や多い	良好	内面 濃い黄緑 外面 濃い黄緑	新産
15	9	須恵系	無台坪	12.8	3.8	6.5	125.7	完整	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。	炭母・白色粘土少量、スコリア微量	良好 二次焼成済	内外面 濃い黄緑	新産 内外面黒付着
16	9・要土・確認済・SI14	民権陶器	皿	(13.7)	2.6	(5.8)	61.6	3/5	体部は下縁回転ヘラケズリ。胎土は比較的早く乾かして内滑して立ち上がり口縁部で厚みに変化する。高さは三日月形を見せるが幅が広く内側の内滑が強い。	鉄分の噴出しや多い	良好	胎土 灰白 黄緑	要土5点目1 電和使を有する 【327】実98-2-035
17	覆土	民権陶器	長頸瓶	—	(5.4)	—	12.9	胴部片	胎土は比較的早く乾かして内滑して立ち上がり口縁部で厚みに変化する。高さは三日月形を見せるが幅が広く内側の内滑が強い。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 黄緑	要土1-次2 【328】実98-2-036
18	覆土	民権陶器	短頸瓶	(12.1)	(1.9)	—	2.4	口縁部片	胎土は比較的早く乾かして内滑して立ち上がり口縁部で厚みに変化する。高さは三日月形を見せるが幅が広く内側の内滑が強い。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 黄緑	要土 K90 【329】実98-2-037
19	SI10 確認済・カマド	民権陶器	短頸瓶	—	(4.0)	—	95.5	胴部片	胎土は比較的早く乾かして内滑して立ち上がり口縁部で厚みに変化する。高さは三日月形を見せるが幅が広く内側の内滑が強い。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 黄緑	要土 K94 【330】実98-2-038
20	覆土	民権陶器	短頸瓶	—	(1.5)	—	13.3	胴部片	胎土は比較的早く乾かして内滑して立ち上がり口縁部で厚みに変化する。高さは三日月形を見せるが幅が広く内側の内滑が強い。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 黄緑	要土 K14-90 【331】実98-2-039
21	覆土	民権陶器	壺・煎瓶	—	(1.4)	—	32.0	胴部片	胎土は比較的早く乾かして内滑して立ち上がり口縁部で厚みに変化する。高さは三日月形を見せるが幅が広く内側の内滑が強い。	鉄分の噴出し多い	良好 二次焼成済	胎土 灰白 黄緑	三連系 K90 (一) 【332】実98-2-040
22	要土	鉄製品	新産	新産口径4.0、新産高さ0.5	11.1			新産一部・新産はとんど欠損	新産は円筒状(杖型)。胎土は黄褐色。胎土は胎土の中心からすり抜けている。				新産のみ

SI14 (第33・34図、第17・18表、遺構図版4、遺物図版6)

検出位置：調査区中央南寄り C・D3、D4 グリッド。**平面形状**：長方形。住居北東コーナー部分に張り出しが設けられる。**主軸方向**：N-84°-W。**規模**：4.9m × 3.53m。**確認面下の深さ**：45 cm。**覆土**：暗褐色土を基調に6層に分層される自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅15 cm、深さ7 cm前後。張り出し部分にも溝は巡る。また、床面下には張り出し部分を作り出す前の周溝が残る。**床面**：平坦。**カマド**：東壁の南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は82 cmで、西壁から60 cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：南西コーナー部分に貯蔵穴1基が検出されている。規模は82 × 62 cm、深さは25 cm。さらに、住居の中央やや北寄り部分に、50 × 30 cmの楕円形で浅い皿状の鍛冶炉が1基検出されている。また、炉の南側には炭化物の集中区が確認されている。**重複関係**：SI12・15と重複関係にあり、SI12とは調査時点では明確ではなかったようであるが、本住居跡の方が古く、SI15よりも新しい。

掲載遺物：土師器無台坪4点(墨書土器2点)、有台坪1点、小皿2点、土製品焼加工有孔円盤1点、須恵

器無台坏1点（墨書土器「子」）、灰釉陶器碗1点（猿投K90）、皿2点、段皿1点、長頸瓶10点、短頸壺2点、広口瓶1点、壺・瓶類1点（猿投K90・053・三遠系・K90～053・宮口カ）、平瓦1点。

その他未掲載遺物：土師器 2340g、須恵器 3720g、瓦 815g。

遺構の帰属時期：小型の皿06・07が出土する段階で、10世紀後半が想定される。一方で、共伴した灰釉陶器では黒笹90号窯式3段階、折戸53号窯式の出土が見られるこのことから10世紀中葉と判断される。若干の齟齬を感じるものの、概ね10世紀後半と判断した。

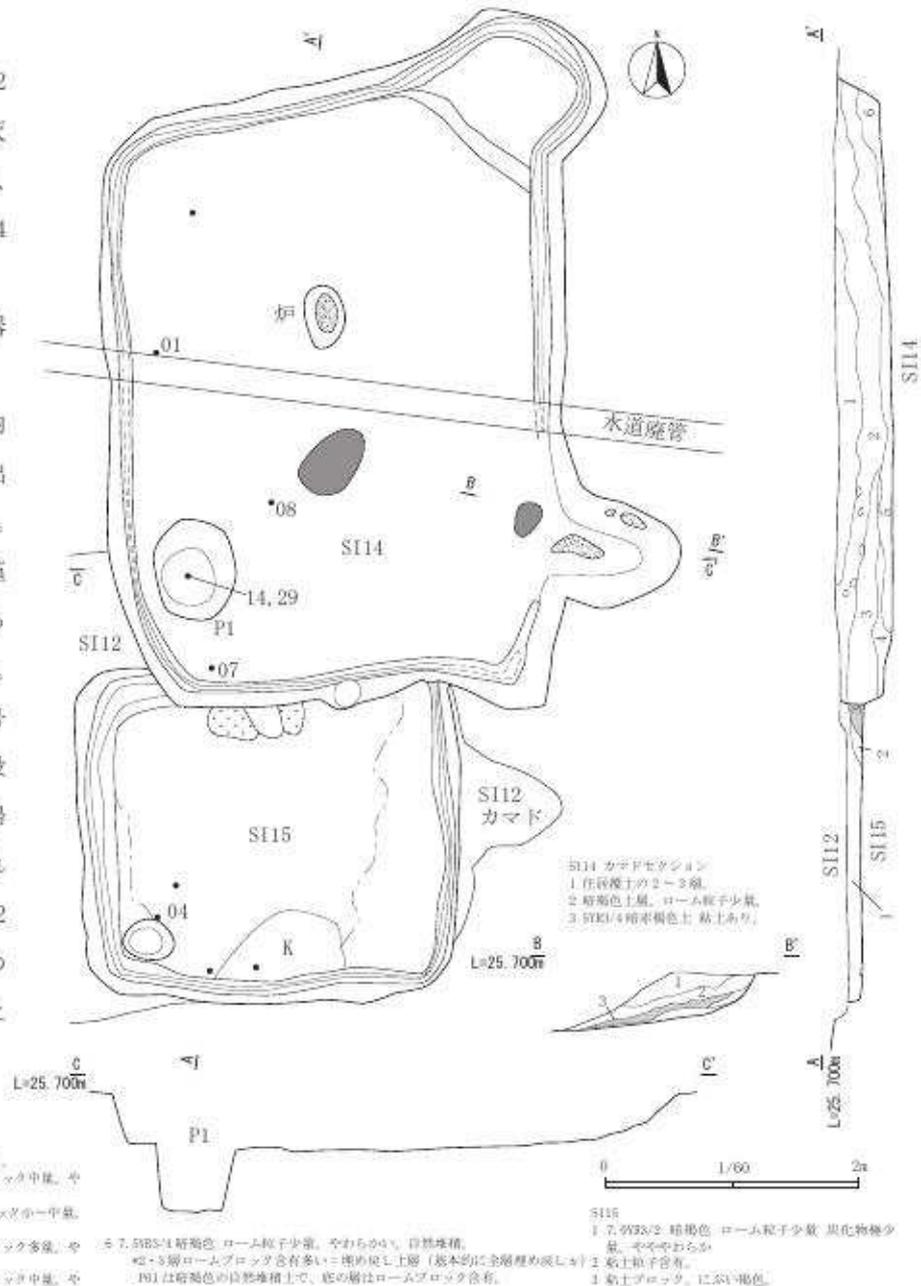
SI15（第33・35図、第19表、遺構図版4、遺物図版6）

検出位置：調査区中央南寄りD3・4グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N。規模：2.96m×2.6m。確認面下の深さ：20cm。覆土：住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅12cm前後。床面：平坦。カマド：北壁中央付近に設置され、煙道部分はSI14によって大きく削り取られている。袖は山砂及び粘土により構築される。その他付帯施設：南西コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。規模は33×28cm、深さは16cm。重複関係：SI12・14と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

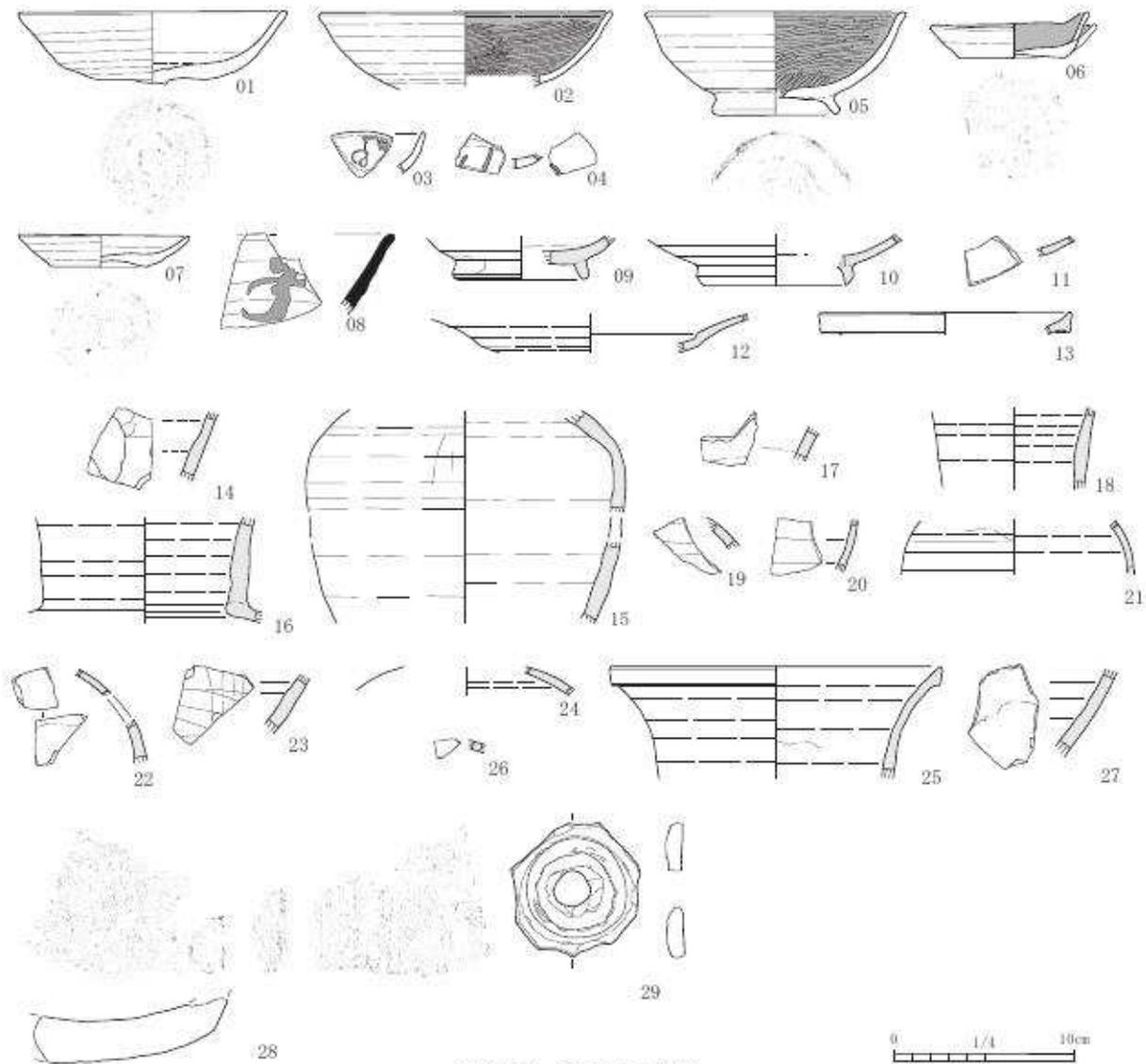
掲載遺物：土師器有台塊2点、須恵器無台坏2点、灰釉陶器碗1点（猿投K90-1）、長頸瓶2点（猿投K90・K14～90）、砥石1点。

その他未掲載遺物：土師器 1655g、須恵器 399g。

遺構の帰属時期：土師器内黒有台塊、足高高台付塊が出土し、須恵器の坏が2点伴う。この須恵器2点は胎土中に僅かながら雲母の混入が認められ、焼成は極めて粗悪である。また灰釉陶器では黒笹14号窯式から黒笹90号窯式1段階が出土しており、遺構の帰属は9世紀後半と判断される。以上から足高高台塊02の初出が9世紀後半にさかのぼる可能性を指摘しておきたい。



第33図 SI14・15



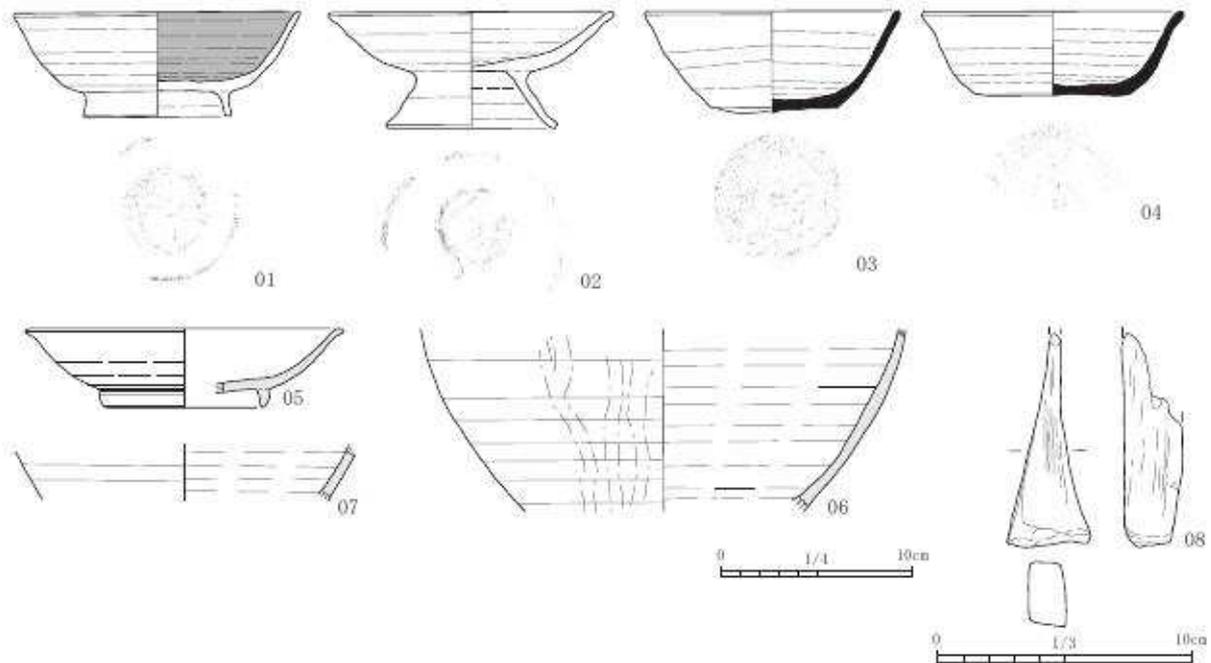
第34図 SI14出土遺物

第17表 SI14出土遺物観察表(1)

品目番号	形状	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	素材の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	5	土師器	無台坪	15.0	2.9	4.2	186.4	口縁1/2 欠損	ロクロ製形、底面回転が 切り。	灰母や少ない、小礫少量	良好	内外面 橙	
02	覆土	土師器	無台坪	(14.6)	(4.1)	—	26.8	1/4	ロクロ製形、内面ミガキ。	灰母・白色粒子少量、石 色針状物質散在	良好	内面 灰白黄 外面 橙	内面黒色感漂
03	覆土	土師器	無台坪	—	—	—	2.9	口縁部片	ロクロ製形。	灰母・白色粒子少量	良好	内外面 橙	裏面「口」
04	覆土	土師器	無台坪	—	—	—	3.7	体部片	ロクロ製形。	灰母・白色粒子少量	良好	内外面 橙	裏面「口」
05	覆土	土師器	有台坪	(14.5)	5.6	4.4	81.5	1/4	ロクロ製形、底面回転が 切り、内面ミガキ。	灰母・白色粒子少量	良好	内面 赤 外面 赤褐色	内面黒色感漂
06	覆土	土師器	小皿	最大径 7.7	2.5	4.0	76.4	ほぼ完整	ロクロ製形、底面回転が 切り(左)、体部一部分 内傾する。	精良、灰母散在。	良好	内外面 に近い黄 橙	
07	5	土師器	小皿	9.5	1.8	5.2	96.4	完整	ロクロ製形、底面回転が 切り(左)。	灰母・小一半礫少量	良好	内外面 に近い黄 橙	
08	1-4	須恵器	無台坪	—	—	—	18.8	口縁一 体部片	ロクロ製形。	灰石・石灰や多い、要 目散在	良好	内外面 灰白	裏面「子」 面出部
09	覆土	民権陶器	皿	—	(5.4)	(7.0)	86.9	体下部一 部欠	筒壁は比較的高く筒壁三 分目程を占めるが内面下 部の内傾が強い。	白色粒子・鉄分の噴出し 少量	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑(黄白 帯)	三道系 390 (一 053) 押行 重石成き板6.9 【13】 宮 98-2-043
10	覆土	民権陶器	皿	—	(5.4)	(7.0)	16.0	底縁片	体部下縁回転へクマメリ 二回転せず、筒壁は高く 筒壁が定量化した三分目 程を示す。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑	筒壁 390 重石成き板6.9 【13】 宮 98-2-042
11	覆土	民権陶器	皿	—	(4.1)	—	3.9	体部片	筒壁は比較的薄く筒壁か に内傾し立ち上がり、底 面縁は観や小に外反す。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土 灰灰 釉 暗緑緑(黄白 帯)	筒壁 390 【13】 宮 98-2-043
12	SI14・37	民権陶器	片断	—	(5.1)	—	23.5	体部片	筒壁は比較的薄く筒壁か に内傾し立ち上がり、底 面縁は観や小に外反す。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑	筒壁 390 【13】 宮 98-2-044

第18表 S114 出土遺物観察表(2)

品目番号	注記	種類	形状	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	地味	色調	備考
13	カマド	灰林陶器	長頸瓶	13.9	1.2	—	2.8	口縁部片	器壁は比較的薄く口縁付近で薄く外反し縁部に至る。器底のメリハリは比較的強い。	鉄分の噴出しが多い	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑色点斑	積段390 【137】 実98-2-043
14	P1	灰林陶器	短頸壺	—	13.50	—	13.9	胴部片	器壁は厚くほぼ直線的に立ち上がり口縁でやや外反する。	鉄分の噴出し多い	良好	灰土 灰白 釉 暗赤緑	積段390 【138】 実98-2-048
15	S114・37	灰林陶器	長頸瓶	—	—	—	48.7	胴部・胴部片	器壁は厚く胴部下半は丸味か強い。	鉄分の噴出し多い	良好	灰土 灰白 釉 暗赤緑	口口+ 【139】 実98-2-047
16	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	15.8	—	32.1	胴部片	器壁は厚くほぼ直線的に立ち上がり口縁でやや外反する。	鉄分の噴出し多い	良好	灰土 灰白 釉 暗赤緑	積段351 【140】 実98-2-048
17	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	14.90	—	5.5	胴部片	器壁は比較的薄く外反して立ち上がる。器壁の角度から胴部上段の縮みと思われる。	鉄分の噴出し少量	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑	三連赤不明 【141】 実98-2-049
18	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	14.5	—	16.2	胴部片	器壁は器壁は比較的厚くやや外反して立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	灰土 灰白 釉 暗赤緑(透明)	積段390~393 【142】 実98-2-050
19	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	14.7	—	3.8	胴部片	器壁は薄く丸みを持って立ち上がる。外側回転ヘラケスリが横方向のナズ。	鉄分の噴出し微量	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑	積段314~390 【143】 実98-2-051
20	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	12.9	—	5.4	胴部片	器壁は非常に薄くやや内湾して立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	良好	灰土 灰白 釉 赤緑(透明)	積段390 【144】 実98-2-052
21	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	13.0	—	7.1	胴部片	小型。外側回転ヘラケスリ。器壁は丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	良好	灰土 灰白 釉 赤緑	積段390 【145】 実98-2-053
22	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	13.30	—	8.6	胴部片	内面全体にハツの厚みの物敷の強み。器壁は丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑	積段390~393 【146】 実98-2-054
23	覆土	灰林陶器	壺・短頸	—	13.20	—	14.7	胴部片	器壁はやや薄く縁部に内湾し立ち上がる。外側回転ヘラケスリ後様式のものナズ。	鉄分の噴出し少量	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑	積段390~393 【147】 実98-2-055
24	覆土	灰林陶器	長頸瓶	—	14.8	—	4.1	胴部片	器壁は薄くやや丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	灰土 灰白 釉 暗赤緑	積段390 【148】 実98-2-056
25	覆土	灰林陶器	広口瓶	18.4	16.2	—	19.3	口縁部片	器壁は比較的薄く縁部に外反し立ち上がりその上半部部に至る。口縁部のメリハリは小さい。	鉄分の噴出し少量	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑	三連赤053併行 【149】 実98-2-057
26	覆土	灰林陶器	短頸	—	11.7	—	0.8	胴部片	器壁は比較的薄い。	鉄分の噴出し少量	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑	積段390 【150】 実98-2-058
27	覆土	灰林陶器	短頸壺	—	14.0	—	21.3	胴部片	器壁は比較的薄くやや内湾し立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	灰土 灰灰 釉 暗赤緑	積段351 【151】 実98-2-059
28	覆土	瓦	平瓦	タテ 16.0	ヨコ 10.8	厚 2.5	211.5	右側縁破片 存	内面赤切り痕。右日は縦凸面縁目切面出筋。裏面ケズリ。	炭母少量。白色粘土やや多い。	良好	内外面 灰黄	積段赤化(調査員見)
29	P1-1	土製品	埴輪加工有具 円盤	タテ 7.4	ヨコ 7.2	厚 1.0	96.5	断面部	有台形の体部と両面を打ち欠き成形。孔(径2mm程)は下面(底面外周)より打ち欠かれており薄減している。	炭母やや多い。白色粘土微量。	良好	内外面 灰白	



第35図 S115 出土遺物

第19表 S115 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
01		土師器	有台埴	(14.9)	5.4	7.8	84.9	1/3	ロクロ製形、底部回転ヘラ切り。	炭母少量、白色粒子・スベリア微量	良好	内面 黒 外面 に白い地	内面黒色処理	
02		土師器	有台埴	(15.4)	6.5	9.9	168.7	1/3	ロクロ製形。	炭母・白色粒子微量	良好	内外面 黒		
03		須恵器	無台埴	13.4	5.2	6.3	146.2	完整	ロクロ製形、底部回転ヘラ切り。	炭母微量、白色粒子や少ない	良好	内外面 灰白	新出産	
04	3	須恵器	無台埴	(13.6)	4.4	(8.4)	61.0	ほぼ完整	ロクロ製形、底部回転ヘラ切り、内面ノコギリ。	炭母・白色粒子や多い	還元半良	内外面 浅黄	新出産	
05		土師器	灰釉陶器	埴	(16.3)	4.1	(8.2)	19.8	口縁 5% 体部 5% 底面 10%	器壁は比較的薄く緩やかに内湾して立ち上がり縁部でやや強く外反する。腹の強はあまりみられない。高弁は比較的高く三日月形を呈する。が内湾が鈍く見形化するには至っていない。体部下部回転ヘラカズリ後回転ナズ。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土 灰白 釉 硝透緑 (含自然釉)	複製398-1 【152】 実 98-2-010・98-2-061
06		土師器	灰釉陶器	長頸瓶	—	(9.7)	—	235.3	胴部大面片	外面回転ヘラカズリ、	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土 灰白 釉 硝透緑	複製399 【153】 実 98-2-062
07		土師器	灰釉陶器	長頸瓶	—	(9.1)	—	8.6	胴部片	胴部下部回転ヘラカズリ コ回転ナズ。器壁は比較的薄くほぼ直線的に立ち上がる。内面直なロクロ性。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土 灰白 釉 硝透緑自然釉	複製314～99 【154】 実 98-2-063
08		土師器	石製品	砥石	タテ (8.2)	ヨコ (3.3)	厚 3.3	56.2	上部欠損	磨り型・磨け砥。表面左右4面が使用面。内側面は使用面として、田面を呈し、裏・後面は平地で、裏面は一部磨き面を残す。砥石面の摩耗から、上部欠損後も使用が窺われる。石材：凝灰岩。				

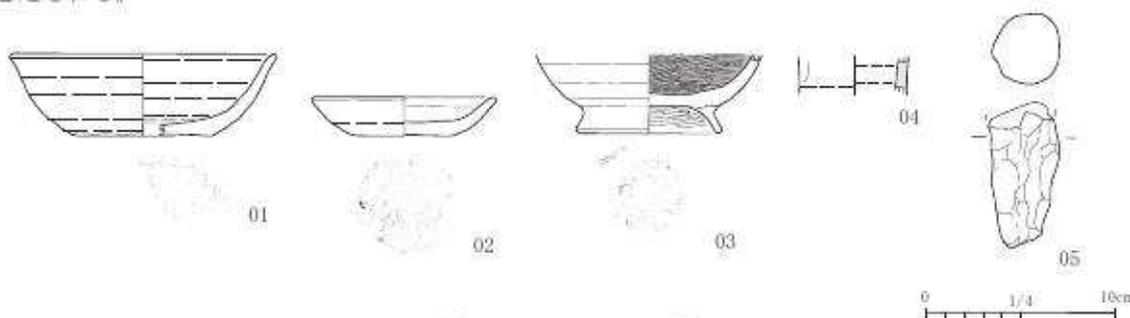
S116 (第36・37図、第20表、遺構図版4、遺物図版6)

検出位置：調査区北側中央 B3・4 グリッド。平面形状：方形カ。主軸方向：N-108°-E。規模：3.0m × 一。確認面下の深さ：14 cm。覆土：住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。柱穴：検出されていない。壁溝：なし。床面：平坦。カマド：東壁に設置され、壁際主軸部分の全長は80 cmで、西壁から56 cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖設置される。その他付帯施設：カマド北側の壁が大きく張り出している。棚状の遺構が設置されていた可能性がある。重複関係：S117 と重複し、同住居によって切られる。

掲載遺物：土師器無台埴2点、有台埴1点、脚付鍋脚1点、灰釉陶器長頸瓶1点(尾北篠岡4)。

その他未掲載遺物：土師器 817.7g、須恵器 3720g。

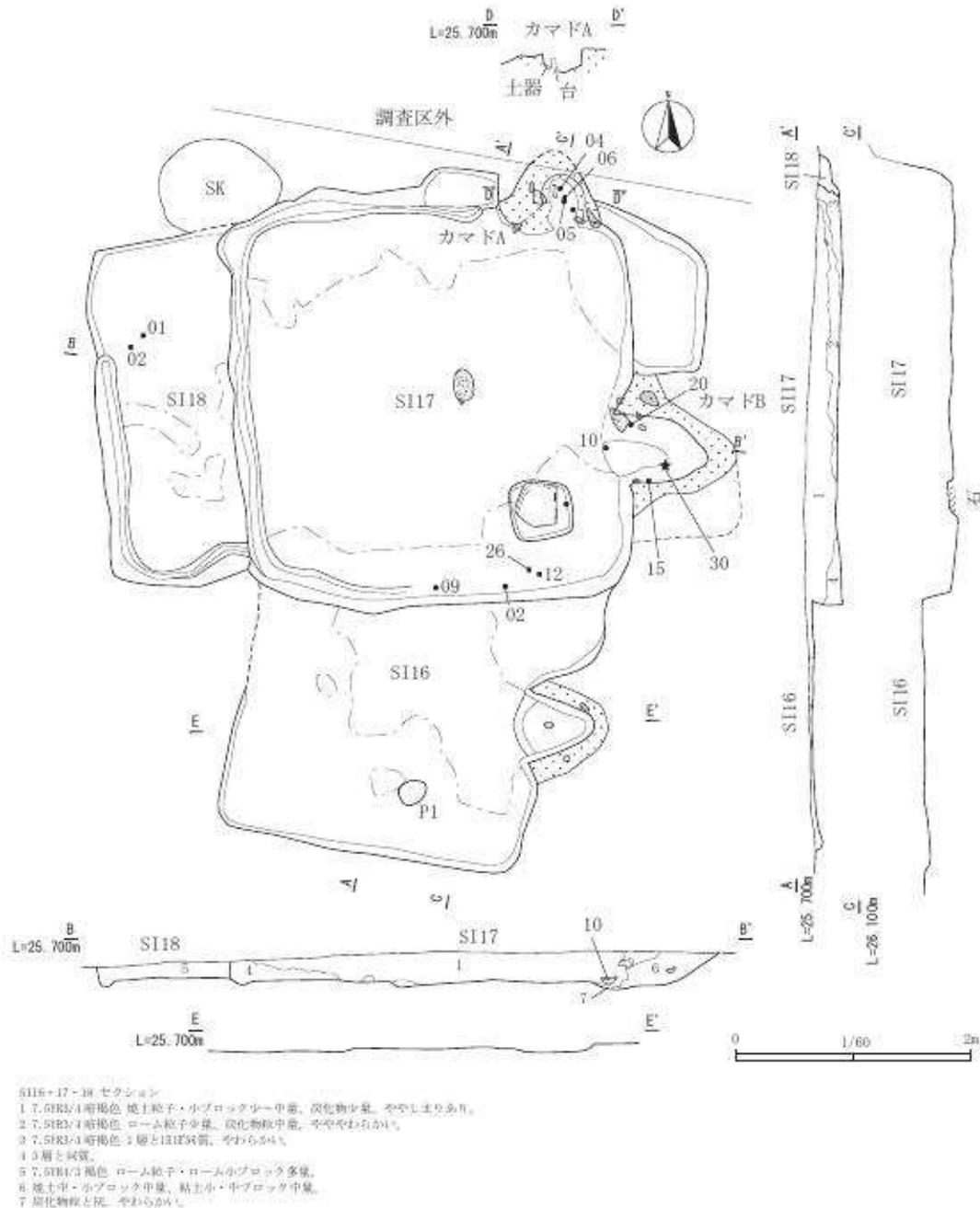
遺構の帰属時期：土師器小型皿の出土、及び灰釉陶器の尾北篠岡4号窯式の長頸瓶の出土から10世紀後半が想定される。



第36図 S116 出土遺物

第20表 S116 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	確認面	土師器	無台埴	(13.9)	4.8	(7.2)	56.5	1/6	ロクロ製形、底部回転ヘラ切り。	炭母・白色粒子微量	良好	内外面 黒	
02	確認面	土師器	無台埴	9.8	2.6	5.7	68.6	1/2	ロクロ製形、底部回転ヘラ切り(左)。	炭母・白色粒子微量	良好	内外面 に白い地	
03	確認面	土師器	有台埴	—	(4.4)	(7.3)	102.3	1/3	ロクロ製形、体部下部緩く回転ヘラカズリ、外面底面及び内面ノコギリ。	炭母・白色粒子少量	やや不良	内面 黒 外面 黄緑	内面黒色処理
04	床面	灰釉陶器	長頸瓶	—	(2.6)	—	6.2	胴部片	器壁は比較的薄くやや外反して立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 硝透緑 (部分的に自然釉)	尾北 篠岡4 【152】 実 98-2-064
05	覆土	土製品	砥石	タテ (7.4)	ヨコ (3.5)	厚 3.5	95.2	一軸のみ	磨り不正楕円形を呈するもので、断面(検地直)は遺物が観察される。	炭母微量、白色粒子や多い	良好	に白い黄緑	



第37図 SI16・17・18

SI17 (第37・38・39図、第21・22表、遺構図版5、遺物図版6・7)

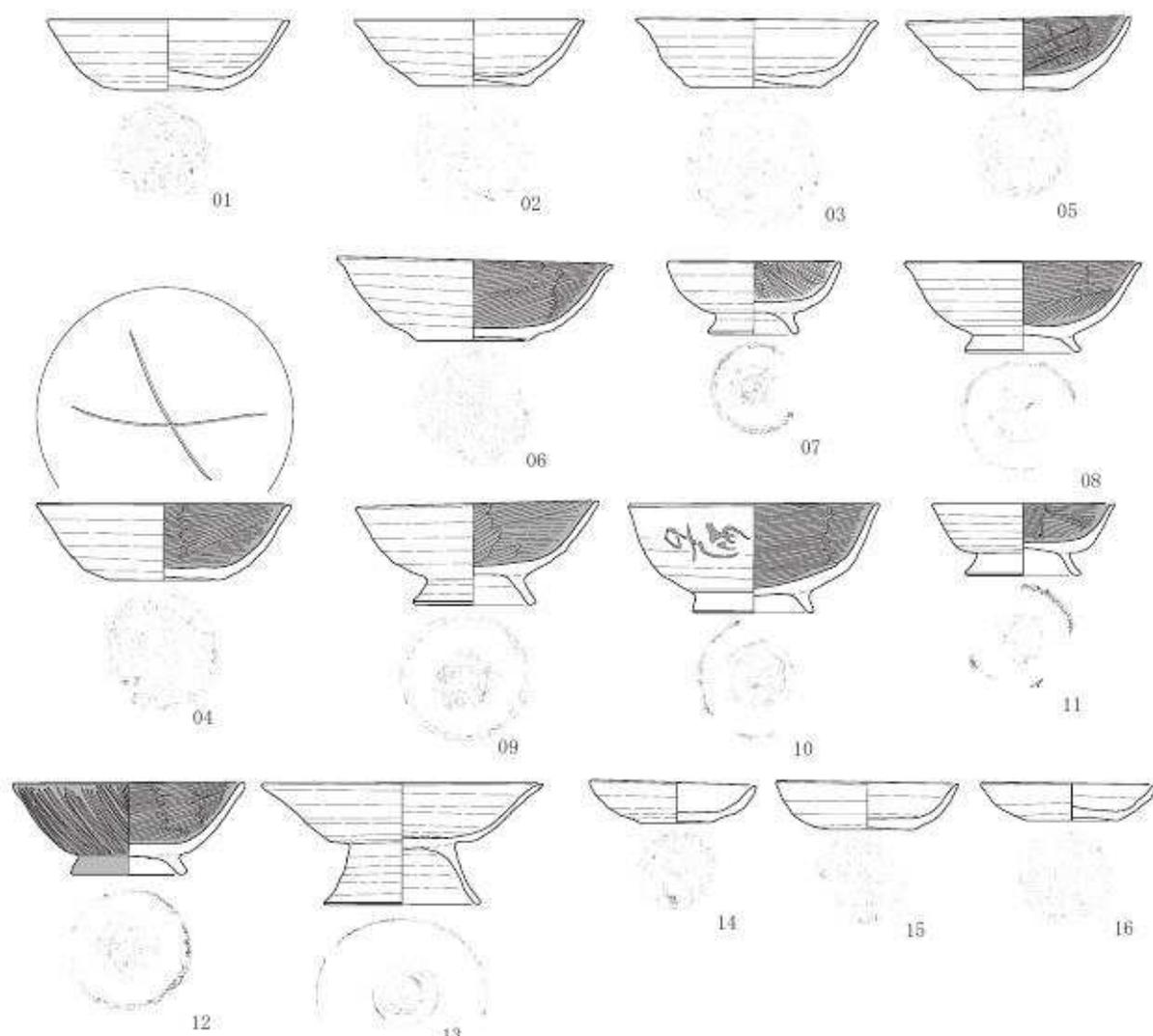
検出位置：調査区北側中央B3・4グリッド。**平面形状：**方形。**主軸方向：**N-1°-E。**規模：**3.26m×3.56m。**確認面下の深さ：**30cm。**覆土：**暗褐色土を基調とする4層。自然堆積。**柱穴：**検出されていない。**壁溝：**カマド部分を除きほぼ全周する。幅15cm、深さ7cm前後。**床面：**平坦。**カマド：**北壁東コーナー寄りにカマドA、東壁南寄りにカマドBが設置される。カマドAは壁際主軸部分の全長は76cmで、西壁から56cmほど掘りだされる。カマドBは壁際主軸部分の全長は76cmで、西壁から56cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により袖が設置される。カマドAの袖は住居跡の内部まで伸びているが、カマドBの袖は住居の壁際で断ち切られており、カマドAの設置される前に設置されていたもの、または重複関係にあるSI18のカマドの可能性もある。**その他付帯施設：**南東コーナー部分に性格不明の穴が検出されている。方形を呈し、内部には板状の石が設置され

る。規模は54×52cm。さらに、カマドAの東側に1段高くなる棚状の施設が設置されている。また、中央部分には焼土が検出されており、鍛冶炉の可能性もある。重複関係：SI16・18と重複し、本遺構が新しいものと判断されている。

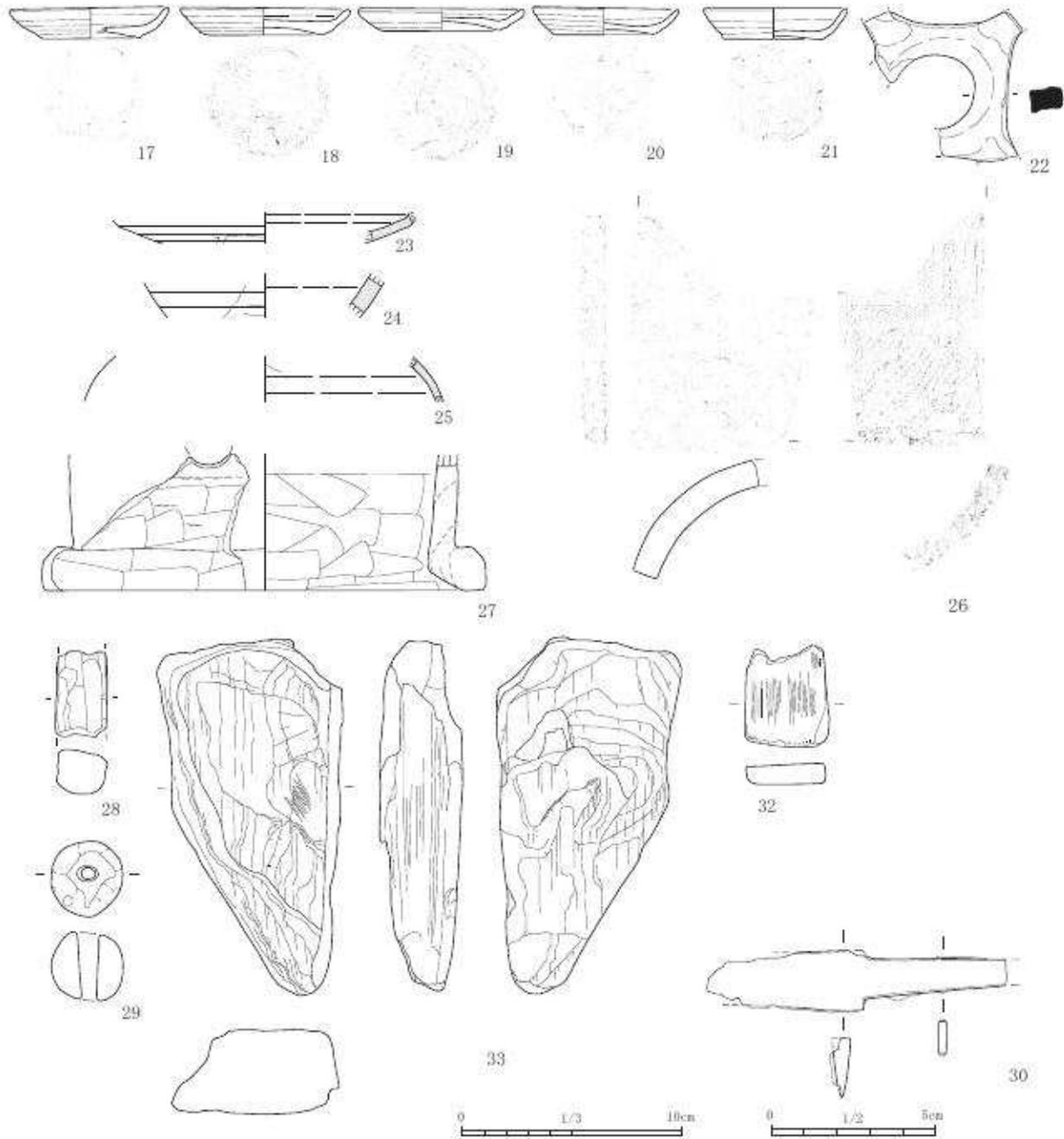
掲載遺物：土師器無台坏6点、有台坏7点（墨書土器1点「利古」）、小皿8点、須恵器甕1点、灰釉陶器段皿1点（猿投K90）、長頸瓶2点（二川カK90～053併行・猿投K90）、土製品土玉1点、置竈1点、脚付鍋脚部1点、丸瓦1点、鉄製品刀子1点、砥石1点。

その他未掲載遺物：土師器11850g、須恵器617.8g、瓦785.4g、礫2165g。**近世以降の遺物**：陶器5.6g。

遺構の帰属時期：内外黒色の有台坏が出土している。黒色土器B類とされるものである。黒色土器B類は11世紀に比定される。小型皿が大量に出土し、須恵器が姿を消してしまう時期である。置竈の出現もこの時期になるものと判断している。一方で灰釉陶器は黒笹90号窯式、及び折戸53号窯式に並行する三河の二川窯の遺物が確認されている。年代的には10世紀中葉から後半に当たる。最も新しいと判断される黒色土器B類の出土をもって11世紀の所産と判断した。一方で、重複するSI18から出土した02は内外面とも磨かれる黒色土器でSI17-12と時期差がない。さらにAカマドとBカマド内の遺物にも時期差が認められない。このことからSI17・18は極めて近い新旧関係ということになる。



第38図 SI17出土遺物(1)



第39図 SI17 出土遺物 (2)

第21表 SI17 出土遺物観察表 (1)

品目番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	破土	土器類	無台杯	(13.2)	4.9	5.1	88.1	口縁1/3 -底面	ロケコ胎料、底部回転糸切り (左)。	白色粒子やや多い。	良好	内外面 黄緑	
02	」	土器類	無台杯	12.0	3.7	5.9	133.5	(口縁) 欠損	ロケコ胎料、底部回転糸切り (左)。	炭母・白色粒子微量、ス コリア質粒	良好	内外面 黄緑	
03	破土	土器類	無台杯	12.0	3.8	5.9	149.1	口縁1/3 欠損	ロケコ胎料、底部回転糸切り (左)。	炭母やや多い、白色粒子・ スコリア少量	良好	内外面 に濃い黄緑	
04	カマドA-1	土器類	無台杯	13.8	4.2	6.3	170.1	口縁1/3 欠損	ロケコ胎料、底部回転糸切り (左)。 内面に方木。	炭母微量、白色粒子少量	良好	内面 黒 外面 に濃い黄緑	内面黒色処理 内面に若干状「十」 字粗文あり
05	カマドA-2	土器類	無台杯	12.2	3.9	5.1	148.4	完整	ロケコ胎料、底部回転糸切り (左)。 内面に方木。	炭母・白色粒子少量、ス コリア質粒	良好	内面 黒色 外面 に濃い黄緑	内面黒色処理
06	カマドA-4	土器類	無台杯	16.0	4.5	6.4	145.4	口縁1/3 欠損	ロケコ胎料、底部回転糸切り (左)。 内面に方木。	炭母少量、白色粒子やや 多い、スコリア質粒	良好	内面 黒 外面 に濃い黄緑	内面黒色処理
07	破土	土器類	有台碗	(9.4)	4.0	4.5	39.9	口縁1/3 -底面	ロケコ胎料、底部回転糸切り。内 面に方木。	炭母・黒色粒子微量	良好	内面 明赤褐色 外面 に濃い黄緑	内面赤褐色
08	カマドA	土器類	有台碗	(12.8)	5.0	5.9	131.4	口縁2/3 欠損	ロケコ胎料、底部回転糸切り。内 面に方木。	炭母やや多い、白色粒子 少量、白色斜紋物質やや 多い。	良好	内面 黒褐色 外面 に濃い黄緑	内面黒色処理

第22表 SI17 出土遺物観察表(2)

品目番号	注記	種類	器種	口径	高さ	底径	重量	保存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
09	5	土師器	有台碗	11.1	5.9	6.2	180.0	完好	ロウ骨胎。底面回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	灰母微量。白色粒子やや多い。	良好	内面 黒 外面 にごい黄緑	内面黒色処理
10	カマドB-3	土師器	有台碗	13.5	5.9	(6.2)	210.5	口縁2/3 -底面1/2	ロウ骨胎。底面回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	灰母やや多い。白色粒子微量。白色針状物質やや多い。	良好	内面 黒緑 外面 にごい黄緑	内面黒色処理 黒土「利古」
11	覆土	土師器	有台碗	(9.9)	4.9	5.9	56.4	口縁1/5 -底面2/5	ロウ骨胎。底面回転糸切り。内面ミガキ。	灰母少量。白色粒子微量。白色針状物質少量。	良好	内面 黒緑 外面 にごい黄緑	
12	5	土師器	有台碗	12.5	5.0	5.8	127.7	2/5	ロウ骨胎。底面回転糸切り僅ナズ。内外裏ミガキ。	灰母・白色粒子やや多い。	良好	内外面 黒	内外面黒色処理
13	覆土	土師器	有台碗	15.2	6.7	6.2	180.6	2/5	ロウ骨胎。膝部(高台部)ロウ骨胎。	灰母・白色粒子・スコリア少量。白色針状物質微量。	良好	内外面 にごい黄緑	
14	カマドB	土師器	小皿	9.0	2.2	5.9	64.3	口縁1/3 欠損	ロウ骨胎。底面回転糸切り(右)。	灰母・白色粒子やや多い。スコリア少量。	良好	内外面 にごい黄緑	
15	カマドB-2	土師器	小皿	9.9	2.6	4.8	66.0	口縁1/3 欠損	ロウ骨胎。底面回転糸切り(右)。	灰母少量。白色粒子やや多い。スコリア微量。	良好	内面 にごい赤褐 外面 褐色	
16	覆土	土師器	小皿	9.4	2.1	5.0	68.1	完好	ロウ骨胎。底面回転糸切り(右)。	灰母少量。白色粒子やや多い。スコリア微量。	良好	内面 にごい黄緑 外面 灰黄濁	
17	覆土	土師器	小皿	9.3	1.9	6.0	49.7	2/5	ロウ骨胎。底面回転糸切り(右)。	灰母微量。スコリア微量。	良好	内外面 にごい黄緑	
18	カマド	土師器	小皿	10.1	1.6	6.9	91.2	完好	ロウ骨胎。底面回転糸切り(左)。	灰母・白色粒子・スコリア少量。白色針状物質微量。	良好	内外面 浅黄緑	
19	覆土	土師器	小皿	9.3	1.35	7.1	63.2	2/5	ロウ骨胎。底面回転糸切り(右)。	灰母・スコリアやや多い。白色粒子少量。	良好	内外面 にごい黄緑	
20	カマドB-4	土師器	小皿	8.3	1.55	6.2	57.4	完好	ロウ骨胎。底面回転糸切り(左)。	灰母・白色粒子少量。スコリア・白色針状物質微量。	良好	内外面 にごい黄緑	
21	覆土	土師器	小皿	8.6	1.9	6.0	43.8	口縁1/2 欠損	ロウ骨胎。底面回転糸切り(左)。	灰母やや多い。白色粒子スコリア少量。	良好	内外面 にごい黄緑	
22	覆土	須恵器	椀	タテ 9.1	ヨコ 9.5	厚 1.3	79.4	底径3/4	多乳式。器底はヘラにより磨削されている。	灰母・白色粒子微量。	良好	内面 明赤褐 外面 にごい黄緑	多乳式
23	覆土	灰緑陶器	長頸瓶	—	(1.92)	—	12.9	胴部片	体部下端回転ヘラケズリ底面回転ナズ。器壁は比較的厚くやや内湾しなからがり層面等やや各反する。	灰分の増出し少量。	良好	胎土 淡灰褐 釉 黄緑緑 (自然釉を色む)	抜長430 【156】実98-2-065
24	SI17	灰緑陶器	長頸瓶	—	(2.40)	—	11.9	胴部片	胴部下端回転ヘラケズリ底面回転ナズ。器壁は厚くやや内湾しなからがり。	灰分の増出し微量。	良好	胎土 淡灰褐 釉 黄緑緑	二川5890～053 併行 【157】実98-2-047
25	SI17	灰緑陶器	長頸瓶	—	(2.7)	—	5.5	胴部片	器壁は比較的厚くやや内湾しなからがり。	灰分の増出し。	良好	胎土 淡灰褐 釉 黄緑緑	抜長430 【158】実98-2-048
26	覆土	瓦	瓦	タテ (14.0)	ヨコ (10.0)	厚 (1.7)	308.0	左側縁残存	凸部コウケズリ。目面糸切り肌。有目瓦割。手縁・側縁ケズリ。端・側面ケズリ。	白色粒子少量。	良好	内面 にごい黄緑 外面 灰白	カマド構築材付着。炭素含有・別化
27	カマドB	土製品	蓋筒	—	(8.4)	25.8	547.0	下部1/4	回転機使用。内外面共にヘラによる磨削が施されている。	小へ中細・雲母やや多い。	良好 二次焼成(7)	内外面 にごい黄緑	
28	覆土	土製品	餅付筒	タテ 5.3	ヨコ 3.2	厚 2.2	54.1	内縁部欠損	内縁部欠損。ヘラにより磨削されている。	白色粒子微量。	良好	内外面 にごい黄緑	鉄製
29	覆土	土製品	土玉	タテ 3.5	ヨコ 3.3	最大径 3.1	17.2	ほぼ完好	断面を呈し。乳は中央を貫通する。	灰母。白色粒子やや多い。	良好	内外面 にごい黄緑	
30	カマドB-1	鉄製品	刀子	長さ (9.7)	幅 (1.30)	厚 0.3	16.3	切れ・老 坑欠損	機頭は不明瞭。刃部はやや後退している。表面の磨削が著しい。				
31	覆土	鉄滓	割治滓	長さ 5.9	幅 5.4	厚 3.7	304.2	—	多くのクサや小塊が付着。含まれている。表面は細かなクランクがある。縦着戻し強い。別に、気孔に覆われた鉄塊あり。縦着戻し強い。				写真のみ
32	覆土	石製品	砥石	タテ 4.7	ヨコ 3.8	厚 0.95	18.4	1部欠損	機頭部・磨け跡。表面左右両面が使用面。表・裏面は使用面として。断面を呈し。両側面は概ね平坦。石材「成石」。				
33	カマドA	磚	カマド 構築材	タテ 10.2	ヨコ 8.0	厚 5.6	640.5	完好	板状の石材。全面に縦筋線あり。別化。カマド構築材付着。石材「新吉原片青」。				

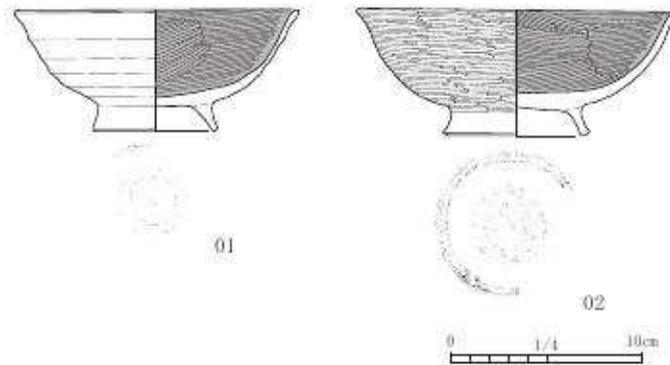
SI18 (第37・40図、第23表、遺構図版5、遺物図版7)

検出位置：調査区北側中央B4グリッド。平面形状：長方形カ。主軸方向：N-91°-E。規模：—×3.0m。確認面下の深さ：14cm。覆土：確認面が浅く褐色土の単層。柱穴：検出されていない。壁溝：南西コーナー部分を除き西及び南壁で確認されている。幅10cm前後。床面：平坦。炭化物が床面に多く検出されており、火災住居と判断される。カマド：SI17カマドBが本遺構のカマドの可能性ある。その他付帯施設：SI17カマドA左側の棚状施設は本住居跡に伴うものと記録される。重複関係：SI17により東側を大きく切られている。

掲載遺物：土師器有台碗2点。

その他未掲載遺物：土師器467.4g、須恵器155.4g。

遺構の帰属時期：内面黒色で外面は黒色処理が施されないものの、内外面が磨かれる黒色土器B類に近い器種が出土している。その他で図示できるものは明瞭ではないが、概ね11世紀の範疇でとらえたい。



第40図 SI18 出土遺物

第23表 SI18 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	形状	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	地味	色調	備考
01	1	土師器	有台碗	14.8	6.3	6.4	286.5	1/3	ロクロ製形、底部細線が加り、内面がガク。	白色粘土・スコリア・白色斜状物質少量	良好	内面黒にぶい地	内面黒色模様
02	主	土師器	有台碗	16.8	6.5	6.7	327.8	ほぼ完形	ロクロ製形、底部細線が加り、内面がガク。	黒母・白色粘土・黒色粘土少量、白色斜状物質微量	良好	内面黒にぶい地	内面黒色模様

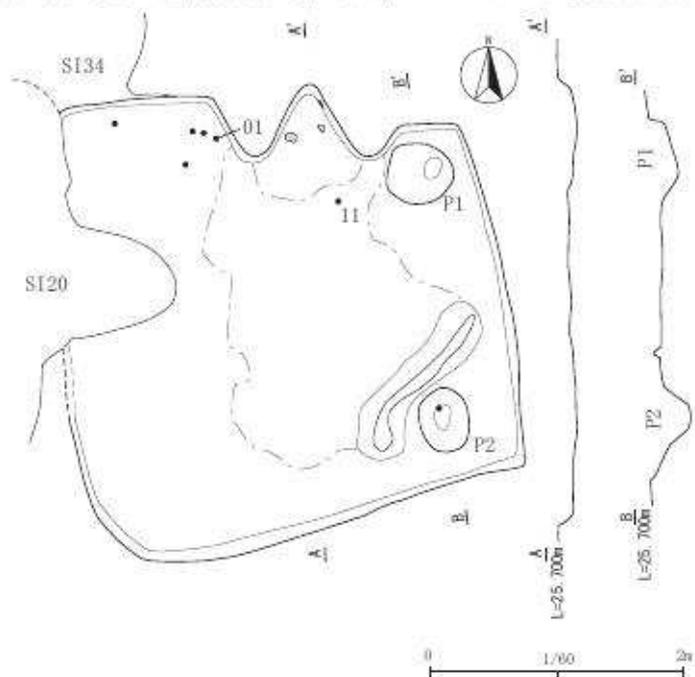
SI19 (第41～43図、第24表、遺構図版5、遺物図版7・8)

検出位置：調査区中央C3グリッド。平面形状：長方形。主軸方向：N-5°-W。規模：3.6×3.67m。確認面下の深さ：10cm。柱穴：カマド東側コーナー部分にP1が検出されている。規模は54×54cm、深さ14cm。貯蔵穴の可能性はある。壁溝：なし。床面：平坦。カマド：北壁中央東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は120cmで、西壁から36cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。その他付帯施設：南東コーナー部分を仕切るように高さ6cmほどの周堤が配され、貯蔵穴P2は楕円形に掘り込まれる。規模は52×40cm、深さは24cm。重複関係：SI20・34と重複関係にある。SI34のカマドはSI19の貼床下より検出されており、本遺構の方が新しくなるものと判断される。また、SI20のカマド覆土には本住居の床が確認できないので、SI20が新しいと判断される。

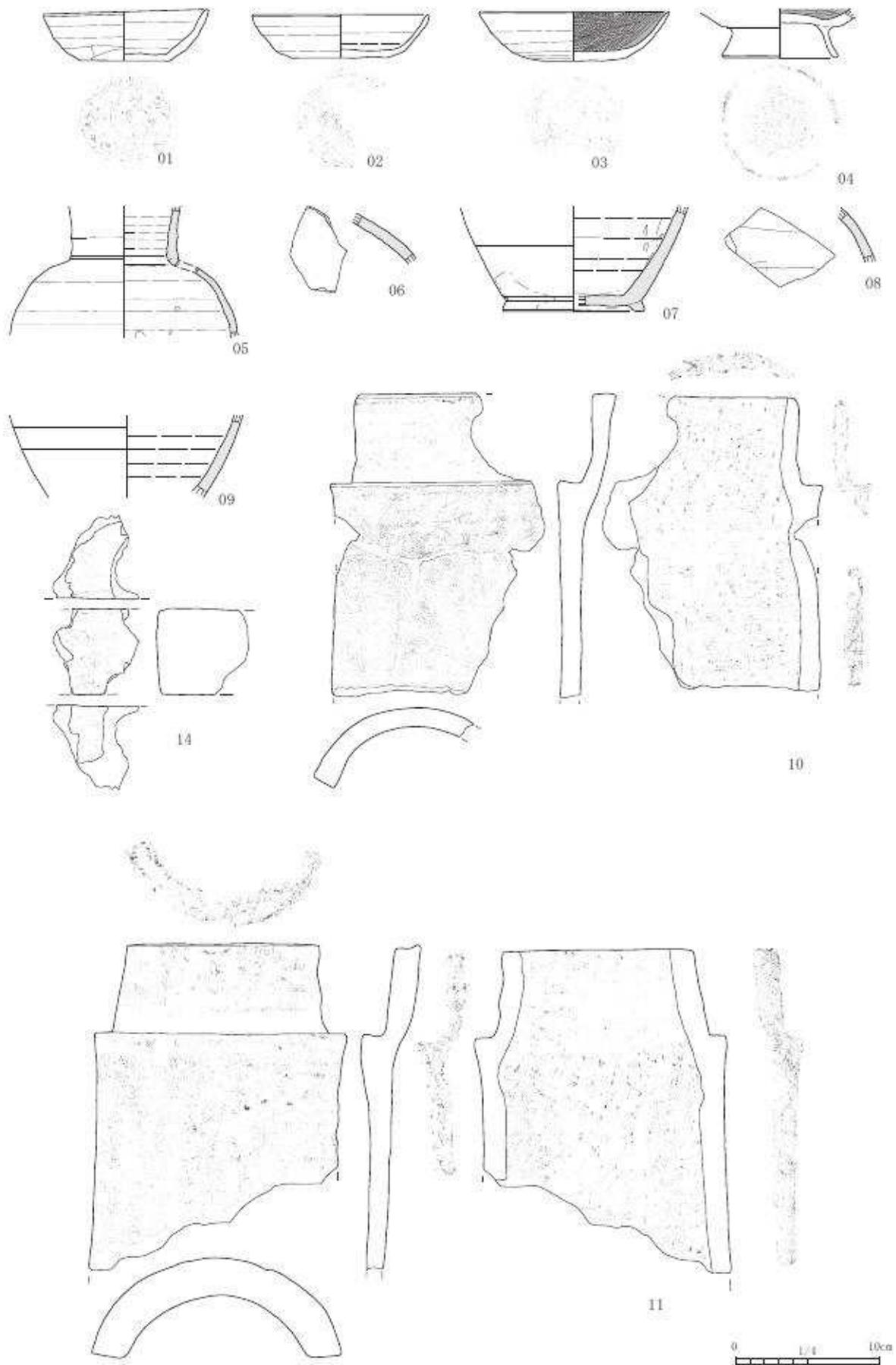
掲載遺物：土師器無台杯3点、有台碗1点、灰釉陶器長頸瓶3点（猿投K90・K14～90）、壺瓶類2点（猿投K90・K14）、丸瓦2点、平瓦2点、埴1点、鉄製品平金具1点。

その他未掲載遺物：土師器3390g、須恵器4395g、瓦978.2g、礫314.1。

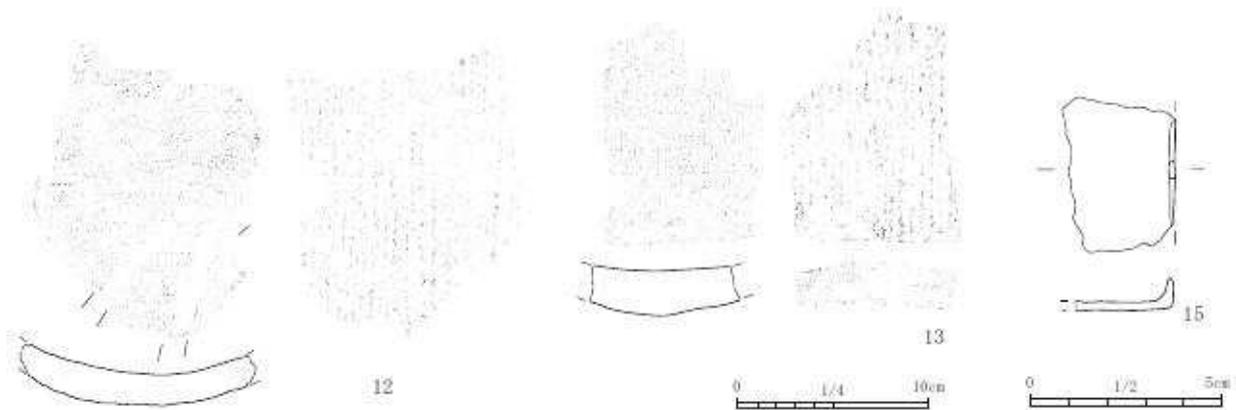
遺構の帰属時期：小振りな土師器杯3点が出土している事より、9世紀後半と判断した。共伴する灰釉陶器は、黒笹14号窯式～90号窯式、やはり9世紀前半から後半の遺物が主体になる。



第41図 SI19



第42図 SI19出土遺物(1)



第43図 SI19出土遺物(2)

第24表 SI19出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	器形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	3	土師器	無台坪	11.4	3.9	6.2	138.1	ほぼ完全	ロタコ整肌、体部下縁手付ラケケズリ、底部は凹底あり。	黄母・白色砂子・黄色砂子・白色針状物質少量、小石やや多い。	良好	内外面 黒赤褐色	
02	カマド	土師器	無台坪	(12.2)	3.9	6.6	94.1	1/2	ロタコ整肌、底部凹底に糸取り(上)。	白色(ごくごく少量)砂やや多い。	良好	内外面 黒赤褐色	
03	カマド	土師器	無台坪	13.1	3.4	4.0	114.6	2/3	ロタコ整肌、体部下縁～底部凹底ラケケズリ、内面は平肌。	黄母やや多い、白色砂子・小石やや多い。	良好	内面 黒赤褐色 外面 黒赤褐色	内面黒色処理
04	覆土	土師器	有台坪	—	(3.3)	7.8	86.6	体部下縁～高台	ロタコ整肌、体部下縁凹底ラケケズリも、底部凹底ラケケズリ、内面は平肌。	黄母・石葉・長石やや多い、白色針状物質少量。	良好	内面 黒赤褐色 外面 黒赤褐色	内面黒色処理
05	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(9.0)	—	34.6	胴部～首冠片	胴部はやや歪る。頸部は僅かに外反気味に立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑	猿投 K14～16 【559】実 16-2-666
06	覆土	灰釉陶器	壺・瓶類	—	(3.4)	—	19.3	胴部片	胴壁は比較的厚くやや丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑	猿投 K14～16 【560】実 16-2-670
07	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(7.2)	(9.6)	136.9	胴部～底縁30%	外面凹底ラケケズリ後凹底ナド、胴壁は比較的厚くやや内湾し立ち上がる。其合は比較的鋭く筒筒形状を呈す。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑	猿投 K14～16 【561】実 16-2-671
08	覆土	灰釉陶器	壺・瓶類	—	(3.9)	—	25.4	胴部片	外面凹底ラケケズリ、胴壁は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑	猿投 K14～16 【562】実 16-2-672
09	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(5.6)	—	23.8	胴部片	外面凹底ラケケズリ、胴壁は比較的厚くやや内湾して立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土 灰白 釉 暗緑緑	猿投 K16 【563】実 16-2-673
10	覆土	瓦	丸瓦	寸法(19.4)	寸法(14.0)	厚 2.9	666.6	玉縁部・左側縁残存	片面丸瓦型タテタテスリのり河原焼ココナダ、玉縁部ココナダ、田面糸切り痕、赤目正産(右縁あり)、側面ケズリ。	黄母・白色砂子やや多い。	良好	内外面 灰白	
11	2	瓦	丸瓦	寸法(22.0)	寸法(17.4)	厚 2.7	1,111.1	玉縁部・両側縁残存	片面丸瓦型タテタテスリのり河原焼ココナダ、玉縁部ココナダ、田面糸切り痕、赤目正産(右縁あり)、側面ケズリ。	白色砂子やや多い。	良好、自然焼成	内外面 灰白	
12	覆土	瓦	平瓦	寸法(16.0)	寸法(12.4)	厚 1.8	382.9	端・側縁残存	田面糸切り痕、赤目正産、片面凹底凹底正産、側面ケズリ。	白色砂子やや多い。	良好	内外面 灰白	田面に除染・鉄文字(成形古縁部後)。
13	覆土	瓦	平瓦	寸法(12.1)	寸法(8.6)	厚 2.8	203.5	玉縁残存	田面糸切り痕(右縁あり)、片面凹底凹底正産、側面ケズリ。	白色砂子やや多い。	良好	内面 黒赤褐色 外面 黄褐色	焼成劣化。
14	覆土	埴	—	長さ(16.5)	巾幅(6.3)	厚 5.8	203.3	片・長さ面残存	表面(平直)磨滅、裏面(平直)ケズリ、面取りケズリ。	石葉・白色砂子少量	良好	灰	猿投、灰付番(破断面も)。
15	覆土	鉄製品	平金目	長さ(4.0)	幅(3.0)	厚(0.1)	8.3	一部残存	鉄板を折り曲げた状態、全部不明。				

SI20 (第44・45図、第25・26表、遺構図版5、遺物図版8)

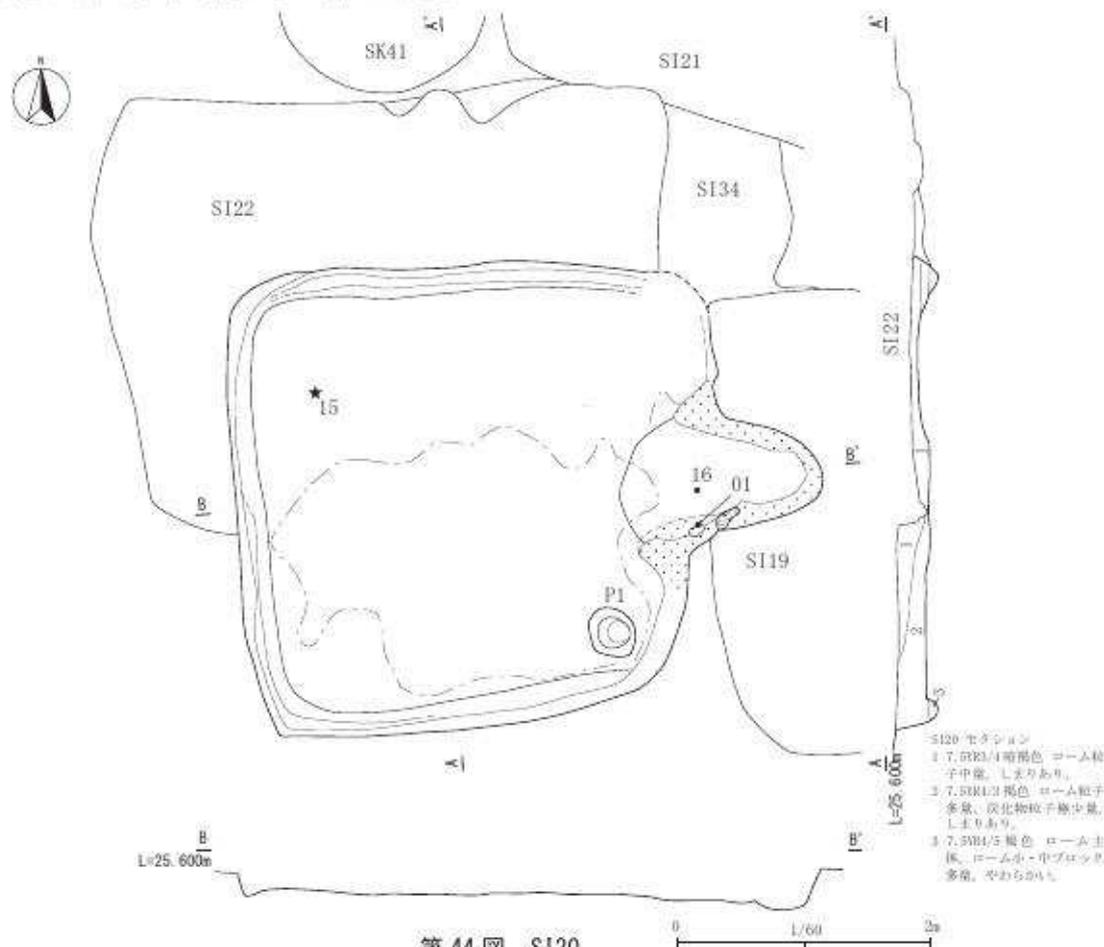
検出位置：調査区中央やや西寄り C2・3 グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N-86°-W。規模：3.8m×3.73m。確認面下の深さ：20cm。覆土：褐色土を基調に3層に分層される。自然堆積。柱穴：カマドの両側のコーナー寄りにP1が検出されている。規模は幅40×36cm、深さ8cm前後。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅40×36cm、深さ8cm前後。床面：断面図から北側は9cm程高くなる。カマド：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は152cmで、西壁から95cmと大きく掘りだされる。また、山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。重複関係：SI19・22・34と重複する。新旧関係はSI22よりも古く、SI19・34よりも新しい。

掲載遺物：土師器無台坪2点、有台坪7点(墨書土器6点「上」「物」ほか)、灰釉陶器壺1点(猿投 K90-2)、皿1点(美濃光ヶ丘1)、長頸瓶1点(宮口カ不明)、丸瓦1点、平鍋脚1点、鉄製品刀子1点、カマド袖

石1点。

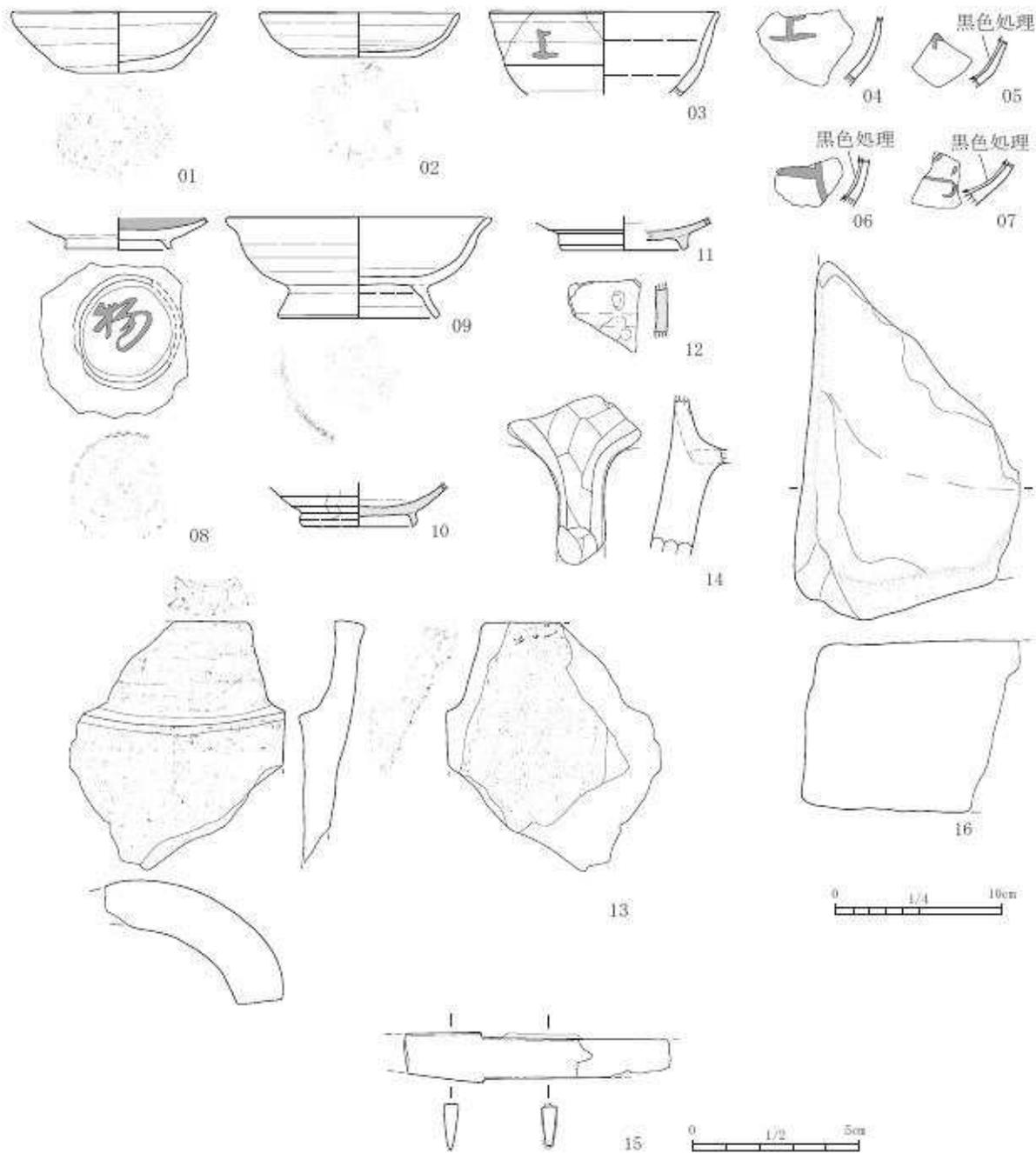
その他未掲載遺物：土師器 2595g、須恵器 1315g。

遺構の帰属時期：出土遺物から10世紀前半が想定される。灰釉陶器では9世紀後半の黒笹90号窯式2型式の遺物が出土しており、半世紀ほどのずれがある。



第25表 SI20 出土遺物観察表(1)

発掘番号	注記	種類	図種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	出土	構成	色調	備考
01	カマド1	土師器	無台座	12.3	3.7	7.0	133.1	口縁1/3欠損	ロクロ製形、底面回転へラ切り。	灰母微量、白色粘土・スコリア少量	良好 二次使用?	内外面 橙	
02	覆土	土師器	無台座	11.9	2.7	7.0	70.0	口縁1/3～底面2/3	ロクロ製形、底面半持ちへラケズリ。	灰母やや多い、白色粘土・スコリア少量、白色針状物質微量	良好	内外面 濃い橙	
03	覆土	土師器	有台座A	13.8	6.1	—	75.4	1/3	ロクロ製形、体部下平より回転へラケズリ。	灰母やや多い、白色粘土多い	良好	内外面 濃い橙	器蓋「上」
04	覆土	土師器	有台座B	—	—	—	13.7	体部破片	ロクロ製形、残存する体部下平より回転へラケズリ。	灰母・黒色粘土少量、白色粘土やや多い	良好	内外面 橙	器蓋「上」
05	覆土	土師器	有台座B	—	—	—	6.9	体部破片	ロクロ製形、残存する体部下平より半持ちへラケズリ。	灰母やや多い、白色粘土少量、白色針状物質微量	良好	内面 黒 外面 濃い黄橙	内面黒色処理 器蓋「口」
06	覆土	土師器	有台座B	—	—	—	10.7	体部破片	ロクロ製形、残存する体部下平より回転へラケズリ。	灰母少量、白色粘土やや多い	良好	内面 黒 外面 濃い黄橙	内面黒色処理 器蓋「口」
07	覆土	土師器	有台座B	—	—	—	8.2	体部破片	ロクロ製形。	灰母少量	良好	内面 黒 外面 濃い黄橙	内面黒色処理 器蓋「口」
08	覆土	土師器	有台座	—	11.9	6.4	86.5	体部下平～底面	ロクロ製形、底面回転へラ切り。	灰母・白色粘土やや多い、白色針状物質多い、スコリア微量	良好	内面 黒 外面 濃い黄橙	内面黒色処理 器蓋「物」
09	覆土	土師器	有台座	15.8	16.1	19.3	128.1	1/4	ロクロ製形、体部下平～底面回転へラケズリ。	灰母やや多い、黒色粘土少量、白色粘土多い	良好	内外面 橙	
10	覆土	灰釉陶器	無	—	12.8	16.6	72.0	体～底面45%	体部中～下部回転へラケズリ後未調整。器壁は比較的薄くやや中流して立ち上がる。高台は比較的高く側面が定形した三日月形を呈する。又、器底面の一部が種室に上り残存する。	灰分の噴出し強かく微量	良好	体部 灰白 内面暗緑 外面暗緑(046)	灰層09-2 底面に黒い焼き痕 【362】 灰 98-2-074
11	覆土	灰釉陶器	無	—	12.8	17.5	11.9	体～底面10%	器壁は比較的薄く横方向に内湾して立ち上がる。高台は比較的高く側面が三日月形を呈するが、外側下方の壁がやや弱い。	灰分の噴出し微量	良好	体部 灰白 内面暗緑	灰層09-1 【365】 灰 98-2-075



第45図 S120出土遺物

第26表 S120出土遺物観察表(2)

品目番号	表記	種類	部種	口径	径高	底径	重量	残存	形状の特徴	取上	状況	色調	備考
12	S120-8155	灰被陶器	長頸瓶	—	(3.4)	—	16.9	胴残片	胴体は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。茶内面のロウカ目角度が一致しない。為器壁の厚度が不明瞭。外面2ヶ所に動痕あり。	破片の噴出し集めて多い	普通	灰土、灰灰地 他 粉状結自然物	目下不明 【36】実98-2-076
13	破土	瓦	光瓦	タテ 14.2	ヨコ 12.6	厚 3.2	432.7	玉縁部・ 石俵縁残 存	玉縁部瓦割タテタテのち 同縁部ヨコナテ、玉縁部ヨコ ナテ、田面未切り根、布目注 根、顔面ケズリ。	白色粉子懸濁	良好	内外面 濃い黄 褐色	破片、破片者(破 削面も)
14	破土	土師器	平碗?	タテ 9.4	ヨコ 8.1	厚 3.7	142.1	底面一割 部	扁圓矢形。ヘラによる整形が 施されている。	灰母土が多い。白色灰土 多い	良好	内外面 橙	賦野
15	1	灰被品	刀子	長 28.9	幅 1.2	厚 0.4	20.6	口・先端 欠損	両側、身部・基部とも厚手のつくり。S134-6と同型品。				
16	カマナテ	磚	カマナテ 集材	タテ 21.4	ヨコ 15.6	厚 10.1	3,840.0	完整	東方作風の石材。全周に筋彫取縁あり。劣化・異化。				

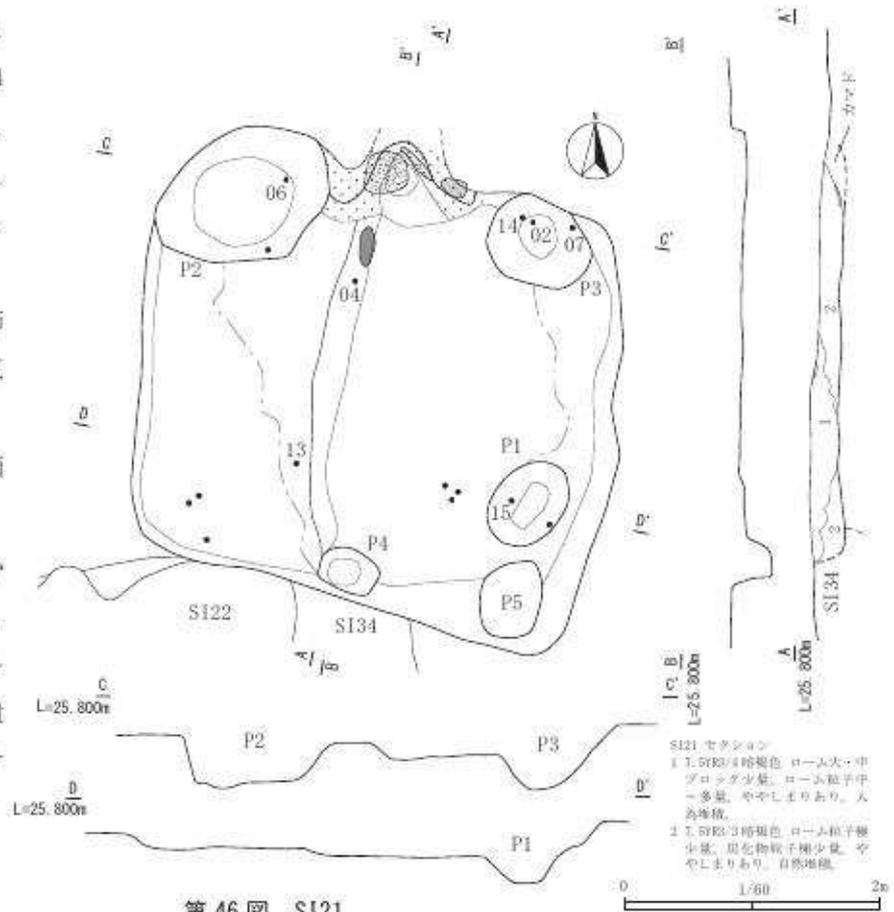
SI21 (第46～48図、第27・28表、遺構図版5、遺物図版9)

検出位置：調査区中央やや北寄り C3 グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N-9°-E。規模：3.44m × 3.82m。確認面下の深さ：20 cm。覆土：暗褐色土を基調とする2層に分層され、自然堆積。柱穴：南西隅を除く3隅にP1～3が配される。P4は入口ピットと判断されカマドの対面南壁寄りに設置される。また、南東コーナー部分にもP5が検出されているが貯蔵穴の可能性もある。壁溝：なし。床面：カマドの西側袖の延長部分3分の1程度が最大で10 cmほど高くなる段を有す。カマド：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は68 cmで、西壁から40 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築される。中央部分には火床面が東西方向の不整形に広がる。その他付帯施設：なし。重複関係：SI22 および SI34 と重複し、本住居跡が新しい。掲載遺物：土師器無台坏4点、有台坏4点、灰釉陶器長頸瓶2点（猿投 K14～90・二川カ K90～053 併行）、短頸壺1点（猿投 K14～90）、平瓦1点、丸瓦1点、埴1点、砥石1点。

その他未掲載遺物：土師器 6649g、須恵器 2850g、瓦 2220g、礫 189.7g。

中世以降の遺物：陶器（古瀬戸）2.5g。

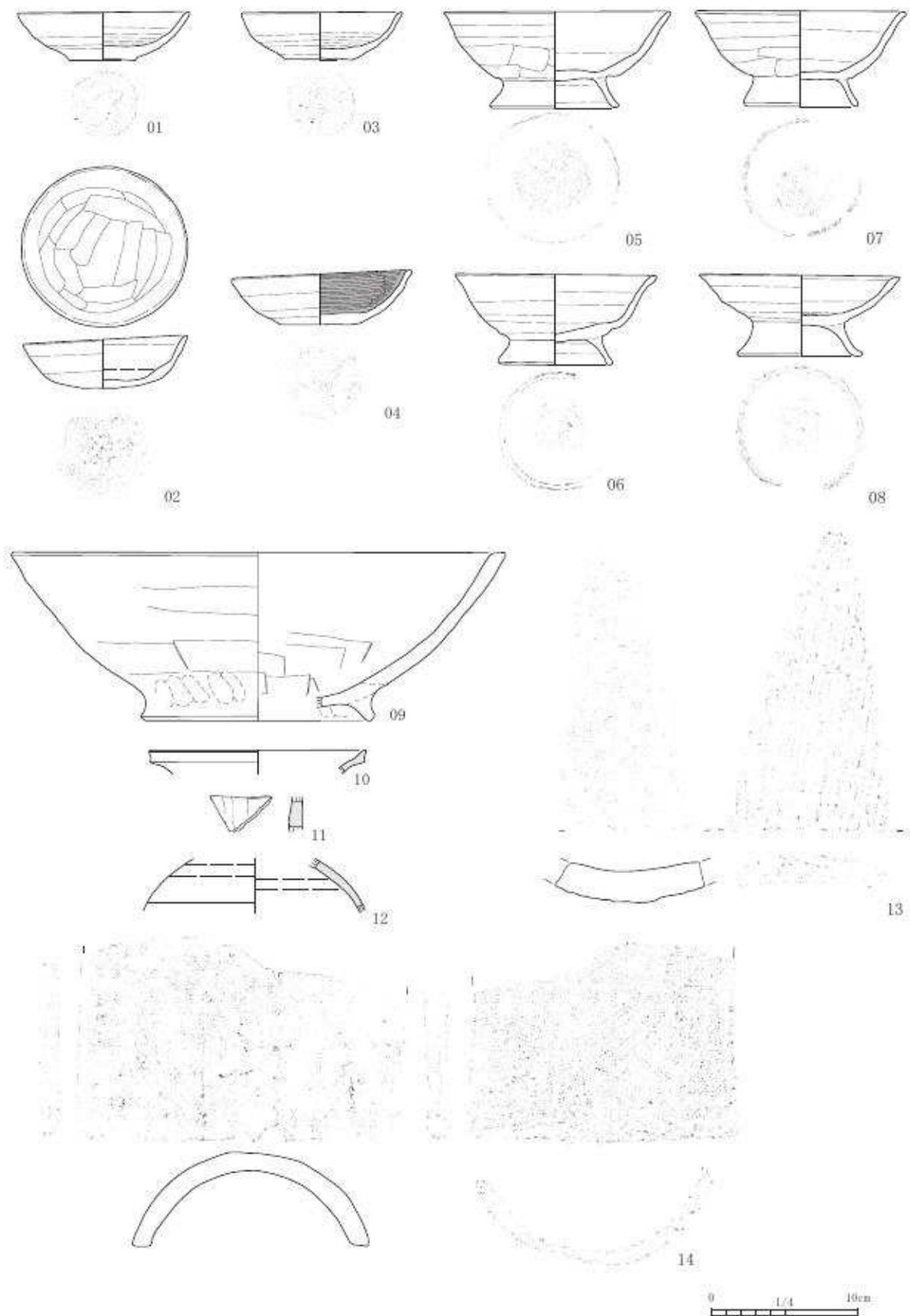
遺構の帰属時期：出土遺物から10世紀前半が想定される。灰釉陶器では黒笹90号窯式～折戸53号窯式と判断される遺物が出土しており、概ね一致する。



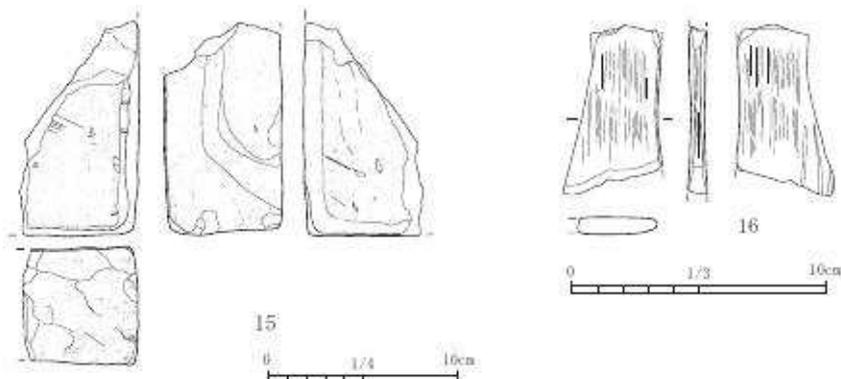
第46図 SI21

第27表 SI21 出土遺物観察表(1)

図版番号	品名	種類	器種	口径	高さ	底径	重量	保存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	11.8	3.3	4.6	111.8	完形	ロタロ型胎、底面回転糸切り状。	黄緑やや多い、白色粘土多い。	良好	内外面	にぶい黄緑
02	P3-2	土師器	無台坏	11.3	3.4	4.6	105.7	完形	ロタロ型胎、底面回転糸切り状。	黄緑少量、白色粘土多い。	良好	内外面	黄
03	覆土	土師器	無台坏	11.2	3.3	4.8	79.0	2/5	ロタロ型胎、底面回転糸切り状。	黄緑・黒色粘土やや多い、白色粘土多い。	良好	内面	黄
04	4	土師器	無台坏	12.4	3.6	5.6	118.9	完形	ロタロ型胎、底面回転糸切り状、底面回転糸切り状。	黄緑やや多い、白色粘土多い。	良好	内面	黄
05	P3	土師器	有台坏	15.6	6.6	8.3	353.8	口縁1/4欠損	ロタロ型胎、体部下平を広く平持ちヘラケズリ、底面回転糸切り状。	黄緑少量、白色粘土多い、黒色粘土少量。	良好	内外面	黄
06	P2-2	土師器	有台坏	13.9	6.2	7.4	197.5	口縁1/4欠損	ロタロ型胎、底面回転糸切り状。	黄緑多い、白色粘土やや多い、黒色粘土少量。	良好	内外面	黄
07	P3-3	土師器	有台坏	(14.3)	6.4	7.3	175.4	口縁1/2～体部1/3欠損	ロタロ型胎、体部下平を広く平持ちヘラケズリ、底面回転糸切り状。	黄緑やや多い、白色粘土・黒色粘土多い。	良好	内外面	黄
08	覆土	土師器	有台坏	(13.7)	6.7	8.0	163.3	口縁1/4欠損	ロタロ型胎、底面回転糸切り状、高台は高さがある。	黄緑少量、黒色粘土少量、白色粘土多い。	良好	内外面	にぶい黄
09	P-3	土師器	鉢	(33.0)	(11.3)	(15.4)	225.3	口縁一部欠損	回転台使用、外面ヘラケズリ、手輪～高台(内外面)にかけて顔面傾斜あり、内面ヘラケズリ。	黄緑やや多い、白色粘土・黒色粘土少量、白色粘土物質微量。	良好	内外面	黄
10	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	(14.8)	(1.8)	—	4.8	口縁割片	胎性は比較的薄く強く外反して立ち上がり傾斜に平る。口縁部分のよりヘリは比較的小さい。	鉄分の増出し少量	良好	胎土	灰白、釉



第47図 SI21出土遺物(1)



第48図 SI21出土遺物(2)

第28表 SI21出土遺物観察表(2)

図録番号	法定	種類	器種	口径	縁高	底径	重量	保存	形状の特徴	粘土	焼成	色調	備考
11	覆土	灰釉陶器	短頸壺	—	(2.4)	—	9.4	破断片	断面は比較的厚くほぼ直線的に立ち上げる傾向。内面の被膜が著しく露地の色変等は不現。	鉄分の噴出し極多い	良好	粘土 灰灰陶器 釉茶緑	猿投 K14 ~ 90 【368】 実 98-2-078
12	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(11.7)	—	19.8	破断片	回転ヘラケズリ旋回軸ナブ。縁は比較的薄くやや丸みをもっており立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	粘土 灰灰陶器 釉茶緑	二川 9 K90 ~ 052 (保存) 【369】 実 98-2-079
13	SK41	瓦	平瓦	ナブ (21.0)	ココ (10.5)	厚 2.2	525.3	下縁残存	前面右目圧痕。ナブケズリ。凸面側目形跡不現。裏面ケズリ。	灰土少量、白色粘土やや多量	良好	内外面 浅黄	
14	PI-2	瓦	瓦	ナブ (14.5)	ココ (15.5)	厚 1.5	684.4	下縁・内側縁残存	薄手。凸面タケケズリのちココナブ。内側右目圧痕(右縁あり)。幅・額面ケズリ。	灰土少量、白色粘土やや多量	良好	内面 白・黄 外面 灰白	
15	P-1803	埴	—	長半長 (11.1)	小口幅 6.5	厚 6.6	580.8	平・長手・小口面残存	表面(平面)ケズリ。裏面(平面)長半長・小口面ナブ。裏面縁切ケズリ。	白色粘土中量	良好	自然焼付色	
16	覆土	石製品	硯石	ナブ 6.7	ココ 4.0	厚 0.7	29.2	上下左欠損	横割生・磨げ跡。板状。裏面右3面が使用面。表・裏面は凸面。右側面は凹面を示す。石材：凝灰岩。				

SI22 (第49・50図、第29表、遺構図版6、遺物図版9)

検出位置: 調査区中央 C2・3 グリッド。平面形状: 長方形。主軸方向: N。規模: 3.44 × 4.5m。確認面下の深さ: 3cm。覆土: 住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。柱穴: 検出されていない。壁溝: 西壁に確認。床面: 平坦。東に向かい緩やかに下降する。また、粘土および焼土が散乱している。カマド: 北壁東寄りに設置され、煙道部分はSK41に切られて不明。袖は山砂及び粘土により構築される。その他付帯施設: なし。重複関係:



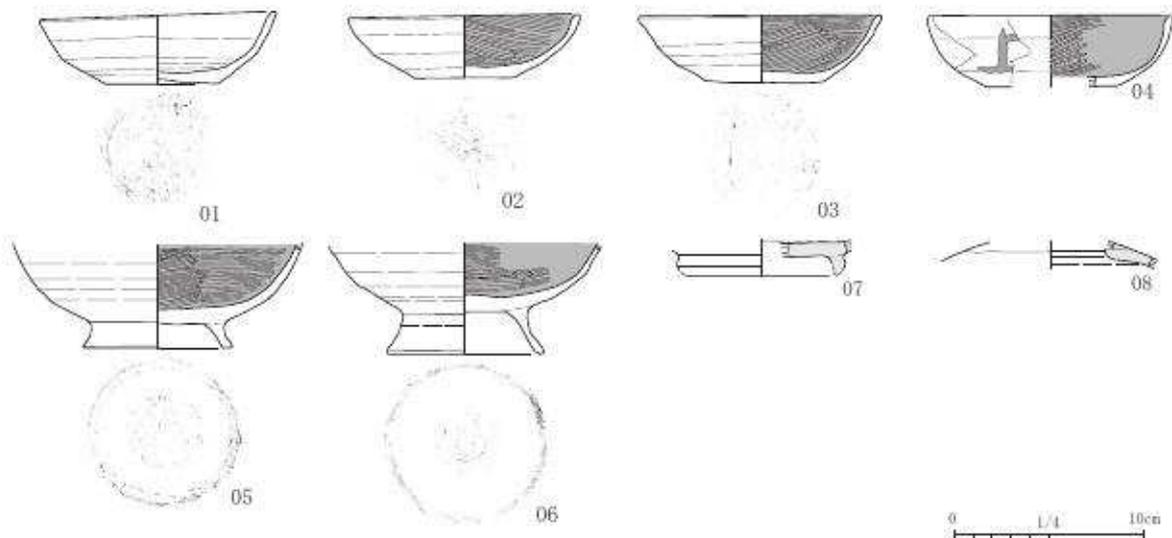
第49図 SI22

SI20・21・34、SK43と重複関係にあり、SI21・SK43に切れ、SI20・34を切る。

掲載遺物: 土師器無台坏4点(墨書土器1点「上」、有台坏2点、灰釉陶器皿1点(猿投 K90)、長頸瓶1点(猿投 K14)。

その他未掲載遺物: 土師器 2800g、須恵器 525.3g、瓦 273.2g、鉄製品 15g、礫 48.6g。

遺構の帰属時期: 出土遺物から判断して、10世紀前半の遺構と判断した。灰釉陶器では黒笹 14号窯式・90号窯式が出土しているが、土師器・須恵器と時期がずれる。



第50図 S122出土遺物

第29表 S122出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	群種	口径	口径	口径	重量	残存	素材の特徴	胎土	焼域	色調	備考
01	2	土師器	無台杯	12.4	3.6	6.0	136.6	完形	ロクロ製器。底面回転を切り(石)。	黒目多い、白色和子・スロリア少量、白色針状物質微量	良好	内外面 橙	
02	3	土師器	無台杯	12.5	3.2	5.6	125.7	完形	ロクロ製器。底面回転を切り長周縁子持ちヘラケズリ。内面ミガキ。外面に火ダマキあり。	黒目多い、白色和子少量、スロリア微量	良好	内面 黒褐色 外面 におい黄褐色	内面黒色処理
03	カマド2	土師器	無台杯	12.6	3.45	6.2	91.7	ほぼ完形	ロクロ製器。底面子持ちヘラケズリ。内面ミガキ。	黒目多い、小礫目、白色針状物質微量	良好	内面 黒褐色 外面 におい黄褐色	内面黒色処理
04	4	土師器	無台杯	(12.3)	(3.7)	(6.8)	15.5	欠片	ロクロ製器。底面の調整不明。内面ミガキ。	黒目・白色和子少量、スロリア微量	良好	内面 黒褐色 外面 におい黄褐色	内面黒色処理 黒書「上」
05	カマド	土師器	有台盤	—	(5.4)	7.9	166.8	体部下端一辺割	ロクロ製器。体部下端削落。底面ミガキ。	黒目多い、白色和子・黒色和子少量	良好	内面 黄褐色 外面 橙	内面黒色処理
06	1	土師器	有台碗	—	(6.7)	8.2	133.4	体部下端一辺割	ロクロ製器。底面回転を切り。	黒目や和子多い、白色和子少量、白色針状物質微量	良好	内面 黒褐色 外面 におい黄褐色	内面黒色処理
07	覆土	民権陶器	溝	—	11.6	—	23.4	体へ底面20%	器壁は比較的薄く縦やかに内湾し立ち上がる。溝物は縁部を欠損しているが、残存部分から、比較的深く断面三角形を呈していたと考えられる。摩滅部に黒層。又着しい摩耗がみられることから転用説と考えられる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土 灰白 釉 暗赤緑	施設396 【176】 実98-2-286
08	覆土	民権陶器	長割板	—	11.6	—	16.2	縁部片	胎土と制部との接合は二段と見られる。器壁は比較的薄くやや立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 暗赤緑	施設414 【171】 実98-2-283

S124 (第51・52図、第30表、遺構図版6、遺物図版9)

検出位置: 調査区北東端部 D2 グリッド。 **平面形状:** 方形カ。 **主軸方向:** N。 **規模:** 一×2.9m。 **確認面下の深さ:** 38 cm。 **覆土:** 住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。 **柱穴:** 検出されていない。 **壁溝:** カマド西側の北壁と西壁に確認。幅 10 cm、深さ 4 cm前後。 **床面:** カマド西側軸の延長部分に段差あり、西側 3分の1程度が 7.5 cm程高くなる。 **カマド:** 北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 96 cmで、西壁から 62 cmほど掘り出される。中央部分には火床面が隅丸三角形に広がる。 **その他付帯施設:** なし。 **重複関係:** S125 と重複関係にあり、本住居が古い。

掲載遺物: 須恵器大甕 1点、無台杯 1点、有台杯 2点 (転用硯 1点)、有台盤 1点、白玉石鈴 (丸槌) 1点。

その他未掲載遺物: 土師器 164.9g、須恵器 525.3g、礫 67.3。

遺構の帰属時期: 出土遺物は須恵器が主体を占め、掲載できる土師器は出土していない。組成より 8世紀末から 9世紀初頭と判断される。白玉石帯の出土時期とも齟齬はない。灰釉陶器の出土は見られない。

S125 (第51・53図、第31表、遺構図版6、遺物図版9)

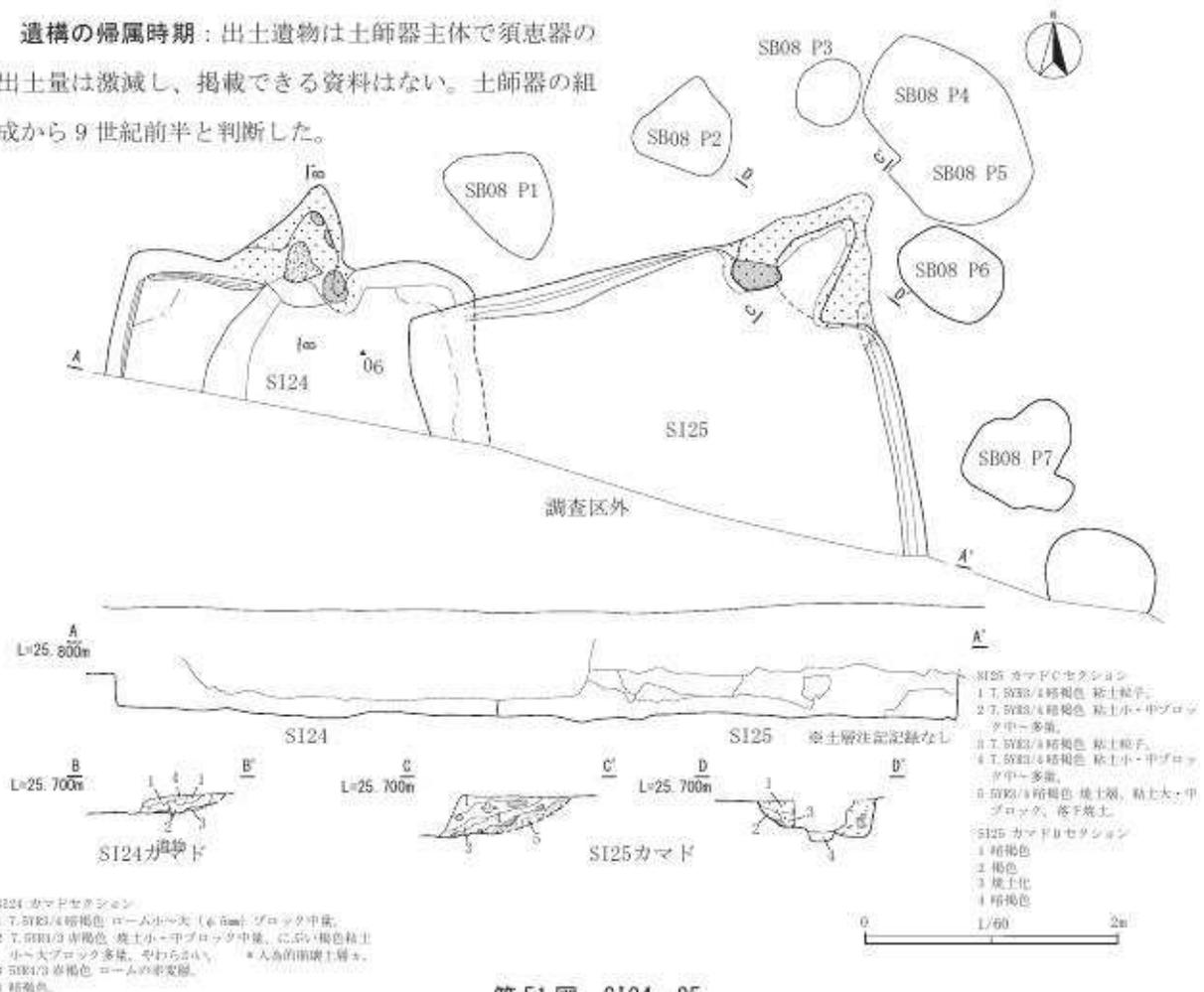
検出位置: 調査区南西寄り D2 グリッド。 **平面形状:** 方形カ。 **主軸方向:** N-33°-E。 **規模:** 一×3.8m。 **確認**

面下の深さ：38 cm。覆土：暗褐色土を基調として4層程に分類されるが、土層注記記録なし。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅15 cm、深さ7 cm前後。なお、カマドの袖の下にも溝が巡り、本カマドの設置は溝を埋め戻した後に付いている。床面：平坦。カマド：北東コーナー部分に設置され、壁際主軸部分の全長は106 cmで、煙道は推定コーナー部分より43 cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。その他付帯施設：なし。重複関係：SI24を切る。

掲載遺物：土師器無台坏3点、甕1点。

その他未掲載遺物：土師器1318.3g、須恵器109g。

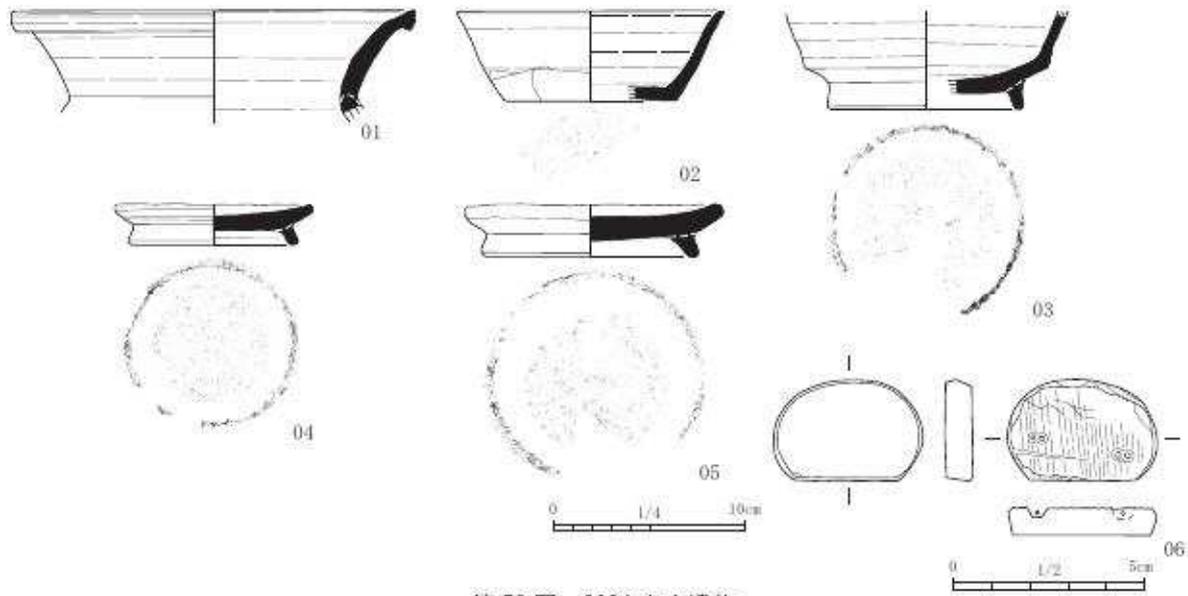
遺構の帰属時期：出土遺物は土師器主体で須恵器の出土量は激減し、掲載できる資料はない。土師器の組成から9世紀前半と判断した。



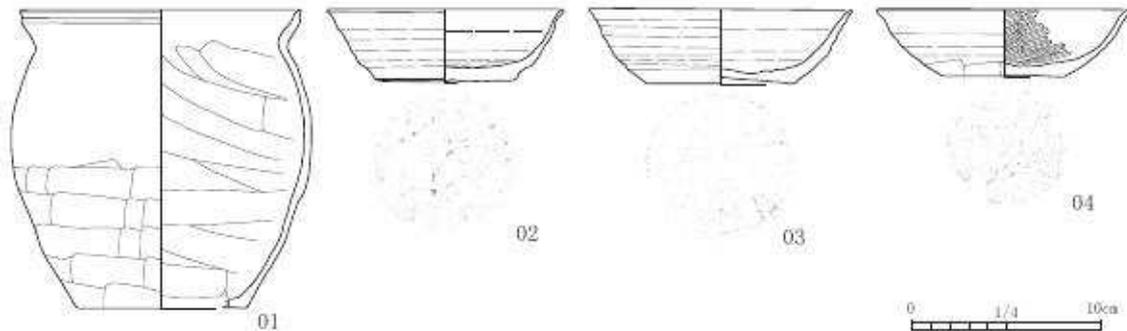
第51図 SI24・25

第30表 SI24 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	高さ	底径	重量	共存	資料の特徴	粘土	焼成	色調	備考
01	床下1	須恵器	大甕	(21.1)	(16.9)	—	109.5	日録1/6	内外面回転子。口縁部 部折り返し。外面上端に 洗練跡。	炭灰やや多い・白色結子 多い	良好	内外面 灰白	新出産
02	覆土	須恵器	無台坏	(13.9)	(14.6)	9.9	66.1	1/4	ワクロ管形。体部下端手 持ちヘラケズリ。底面一 方向の手持ちヘラケズリ。	炭灰・白色結子やや多い	良好	内外面 灰白	新出産
03	カマド	須恵器	有台坏	—	(6.1)	9.9	130.8	体部下端 —底径 3/4	ワクロ管形。底面凹陥ヘ ラケズリ。	炭灰陶質。白色結子・赤 色結子やや多い。スコリア 少量	良好	内外面 浅灰橙	新出産
04	床下1	須恵器	有台坏	—	(2.1)	5.3	136.2	体部下端 —底径	ワクロ管形。底面凹陥ヘ ラケズリ。体部底面に 磨滅の痕跡が観察される 高台として転用。	炭灰多い。白色結子・赤 色結子少量	良好	内外面 灰白	新出産 転用痕跡
05	カマド	須恵器	有台坏	(3.4)	2.7	10.6	252.0	3/4	ワクロ管形。底面凹陥ヘ ラケズリ。体部底面に 磨滅の痕跡が観察される 高台として転用。	炭灰。白色結子やや多い。 スコリア少量	やや不良	内外面 灰白	新出産
06	801	石製品	石鈿 (丸銅)	タテ 2.4	ヨコ 2.95	厚 0.7	(15.3)	定形	黄銅に2孔一列の磨り穴(孔径1〜1.2mm)。3×2.5cmあり。裏面の縁辺には溝 筋が巡り、裏面は長板状の加工痕がある。表面・側面は良く研磨され、特に表面は 鏡面性に光沢を持つ。石材：石英。白玉。半透明。白灰色を呈し、白色の縦状模様 (脈理)を有する。				



第52図 SI24 出土遺物



第53図 SI25 出土遺物

第31表 SI25 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	部種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の物産	敷土	焼成	色調	備考
01	破土	土師器	甕	(14.8)	(18.6)	(8.9)	182.0	1/3	最大径を中位に有し、口唇は縁上げられる。口縁は内外面に傾かず、胴部外面下半は横方向のハツケズリ、内面は十字。	炭灰少量、白色粒子多い、スコリアやや多い	真紅	内外面 に深い橙	
02	カマド	土師器	無台杯	(12.4)	3.8	7.4	93.2	2/3	ロクロ製、底面3割へつ切り、口縁の唇は薄く、	炭灰、赤色粒子多い、スコリア少量、小破り	真紅	内外面 に深い橙	
03	カマド	土師器	無台杯	(13.8)	3.9	7.8	136.0	2/3	ロクロ製、体部下端一筋回転ハツケズリ。	炭灰、白色粒子多い	真紅	内面 に深い橙、外面 に深い黄橙	
04	破土	土師器	無台杯	(13.2)	(3.4)	6.4	97.9	1/2	ロクロ製、体部下端回転ハツケズリ。底面一方の半周ハツケズリ、内面ニガ水。	炭灰多い、スコリアやや多い、小破り	真紅	内面 明赤帯、外面 橙	

SI26 (第54・56図、第32表、遺構図版6・7、遺物図版10)

検出位置：調査区南西端部D1グリッド。平面形状：方形カ。主軸方向：N-78°-W。規模：3.5m×一。確認面下の深さ：7cm。覆土：住居跡の覆土は3層に分層される。自然堆積。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周するものと想定される。幅18cm前後。床面：平坦。カマド：東壁中央南寄り及び南東コーナー付近の2基設置される。カマドAは中央部を長楕円形のカクランにより破壊されている。壁際主軸部分の全長は141cmで、西壁から71cmほど掘りだされる。袖は山砂及び粘土により構築される。カマドBはコの字状に配された粘土で作られている。西側に中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。その他付帯施設：調査区壁際に床面が焼けている部分が確認されている。南北長は26.5cm。重複関係：SI27と重複するもので、本遺構が新しい。

掲載遺物：土師器有台坵2点、小皿3点。

その他未掲載遺物：土師器1004.4g、瓦・埴557.7g。

遺構の帰属時期：出土遺物は土師器が主体となるもので、小皿の出土から10世紀後半段階と判断した。

S127 (第54・55・57図、第33表、遺構図版7、遺物図版10)

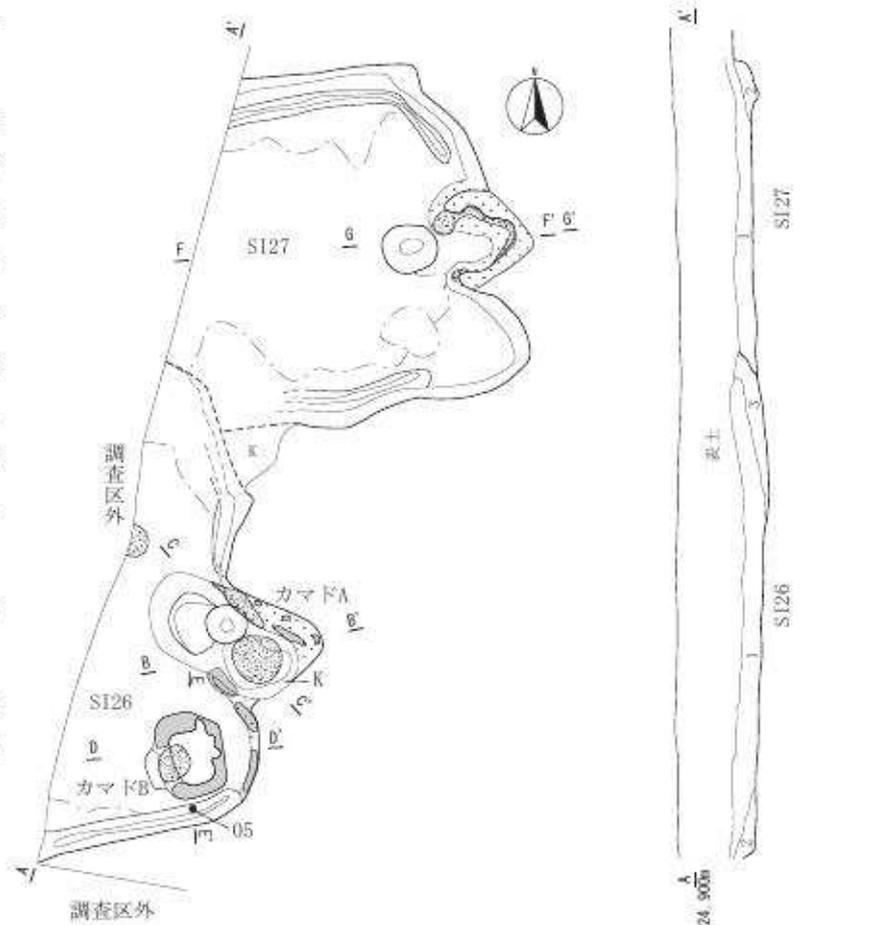
検出位置：調査区南西端部D1グリッド。平面形状：長方形カ。主軸方向：N-78°-W。規模：2.8m×一。確認面下の深さ：17cm。覆土：住居跡の覆土は2層に分層され自然堆積。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅15cm、深さ7cm前後。床面：平坦。カマド：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は76cm

で、西壁から31cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が緩やかに湾曲して設置される。火床部分は攪乱により破壊されている。その他付帯施設：なし。重複関係：S126と重複するもので本遺構が古い。

掲載遺物：土師器無台坵1点、有台坵1点、小皿1点、磁石1点。

その他未掲載遺物：土師器935.4g、須恵器87.5g。

遺構の帰属時期：須恵器の消滅と小皿の出土から10世紀後半と判断した。



S126 セクション

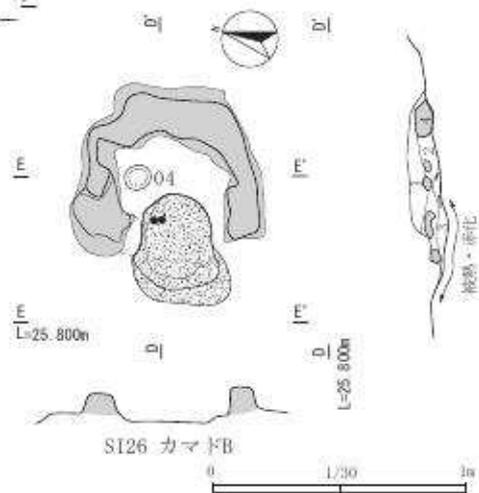
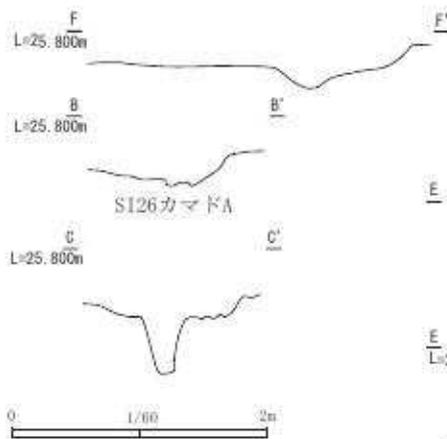
- 表土 7.5B3/4暗褐色 ローム粒子極少量。
- 1 7.5B3/4暗褐色 ローム大-小ブロック中量、ローム粒子少量、やわらかい、人為堆積。
- 2 7.5B3/4暗褐色 ローム粒子極少量、やわらかい、礫層自然堆積。
- 3 7.5B2/4黄褐色 炭化物粒の純層。(カマド灰層) やわらかい。

S127 セクション

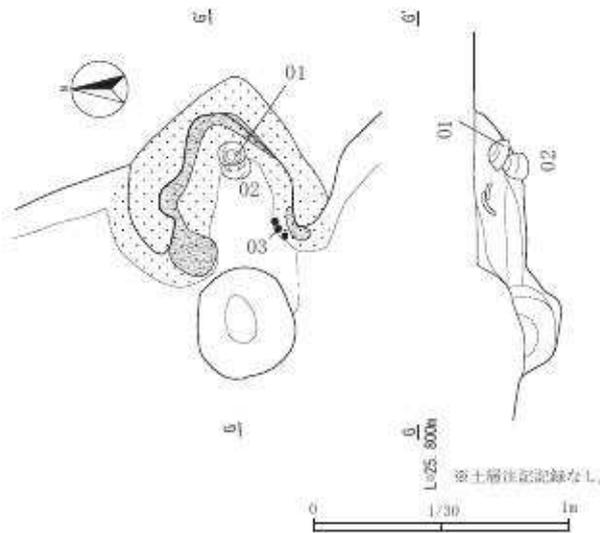
- 1 7.5B3/4暗褐色 ローム粒子少量、やわらかい、自然堆積。
- 2 7.5B3/4暗褐色 ローム粒子少-中量、やわらかい、自然堆積。

S126 カマドBセクション

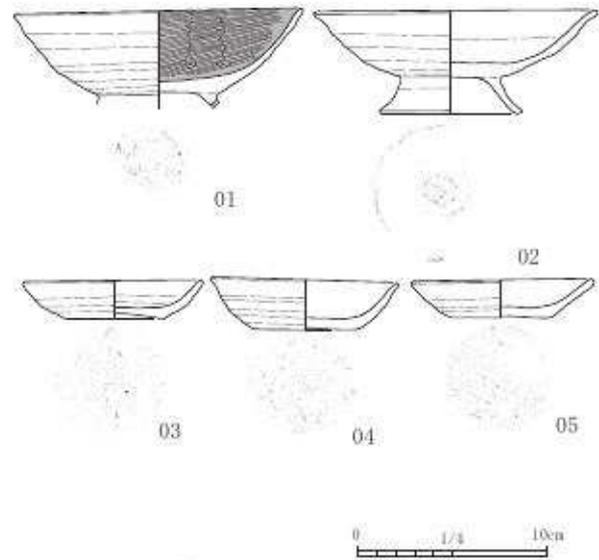
- 1 7.5E3/4暗褐色 粘土粒子・粘土少量、ややしまりあり。
- 2 7.5B3/4暗褐色 粘土中-小ブロック多量、やわらかい。
- 3 7.5B3/4暗褐色 灰・炭化物粒子・黄土粒子、小ブロック、やわらかい。
- 4 7.5A1/4褐色 粘土純層、床着。(地山と掘字)



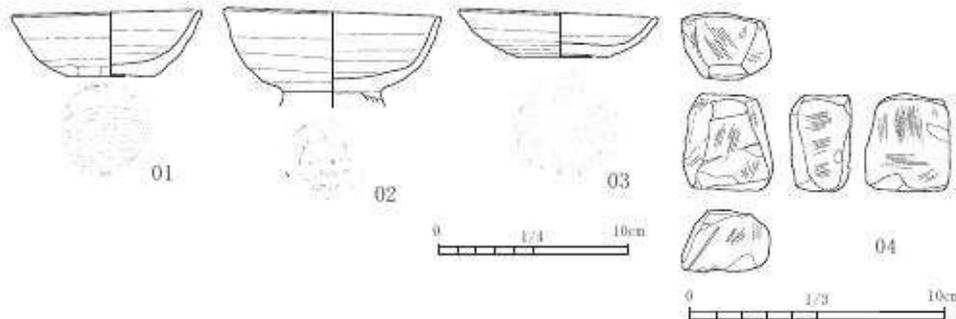
第54図 S126・27



第55図 S127 カマド



第56図 S126 出土遺物



第57図 S127 出土遺物

第32表 S126 出土遺物観察表

発掘番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
01	2カマド	土師器	有台碗	15.1	15.2	—	155.3	高台欠損	ロクロ製、底部回転ヘラケズリ。内面ミガセ。	炭色やや多い、白色粒子多い、スコリア少量	良好 二次地成	内面 黒 外面 にぶい黄褐色	内面黒色処理 裏みずり カマド基
02	2カマド	土師器	有台碗	14.8	5.4	7.2	165.3	口縁1/5欠損	ロクロ製、底部回転ヘラケズリ。	炭色少量、白色粒子多い	良好 二次地成	内外面 にぶい黄褐色	カマド基
03	1カマド	土師器	小皿	9.3	2.6	5.2	66.8	口縁1/4欠損	ロクロ製、底部回転糸切り。	炭色・白色粒子・黒色粒子少量、スコリアやや多い、白色斜状物質微量	良好	内外面 にぶい黄褐色	カマド基
04	カマドM4	土師器	小皿	9.8	2.6	5.2	71.8	ほぼ完形	ロクロ製、底部回転糸切り(左)。	炭色やや多い、白色粒子多い、スコリア少量	良好 二次地成	内面 黒 外面 にぶい黄褐色	カマド基
05	カマドM5	土師器	小皿	9.5	2.9	5.2	63.2	完形	ロクロ製、底部回転糸切り(右)。	炭色微量、白色粒子多い	良好	内外面 にぶい黄褐色	カマド基

第33表 S127 出土遺物観察表

発掘番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
01	カマドM3	土師器	有台碗	15.0	3.4	4.6	109.3	完形	ロクロ製、底部下偏平ヘラケズリ。底部跡未だ残り。	白色粒子・黒色粒子・炭色多い、小・中礫・白色斜状物質少量	良好	内外面 黒	
02	カマドM2	土師器	有台碗	11.3	(4.95)	—	140.1	高台欠損	ロクロ製、底部下偏平ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。	炭色・黒色粒子・スコリア多量	良好	内外面 明灰色	
03	M3	土師器	小皿	10.3	2.3	4.8	79.6	ほぼ完形	ロクロ製、底部回転糸切り(左)。	炭色やや多い、白色粒子・スコリア多量	良好	内外面 黒	
04	燧土	石製品	燧石	タテ 5.7	ヨコ 2.4	厚 2.4	65.9	完形	撈取型・裂け目、ナイロロ。表面左右4面が使用面。4面とも使用により凸凹を認める。石材：凝灰岩。				燧石

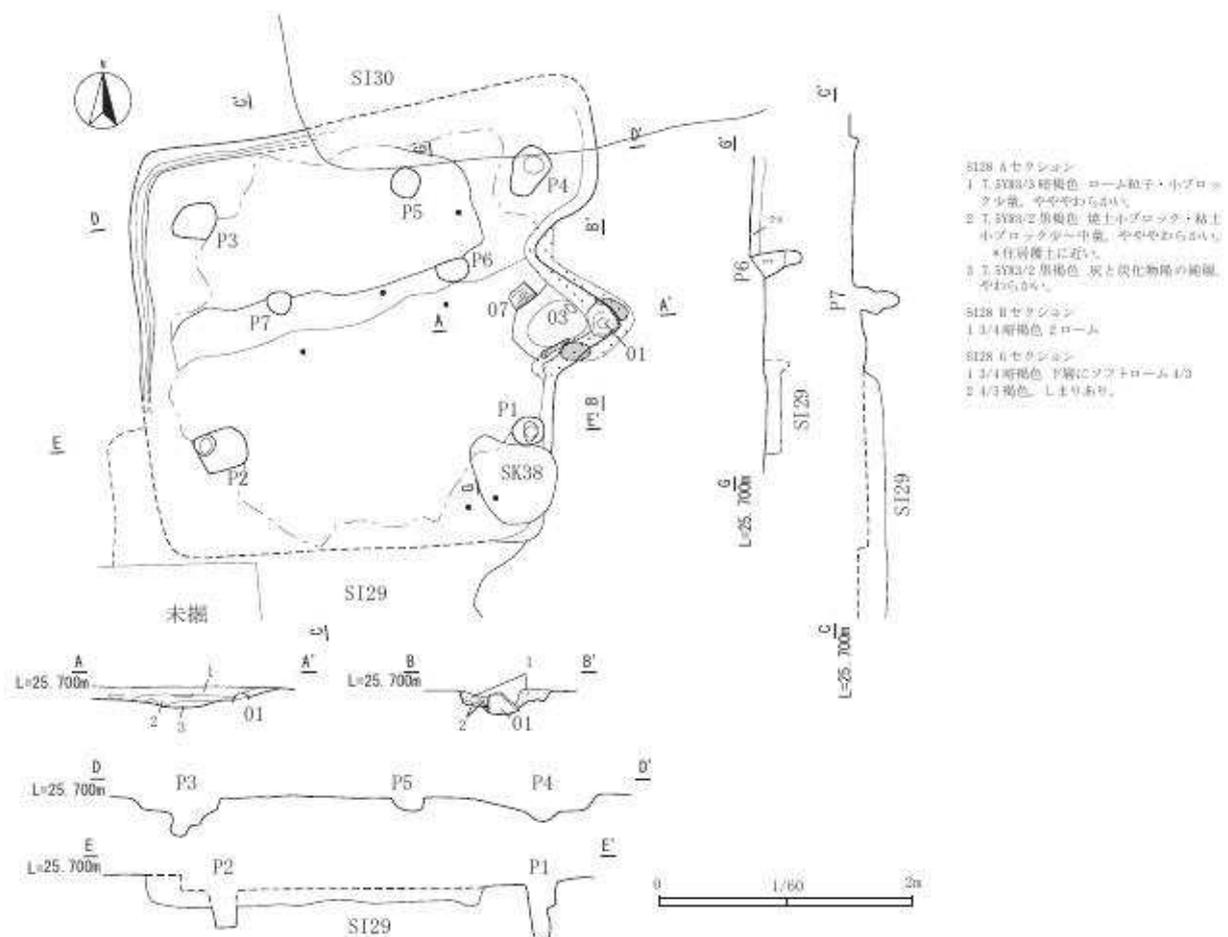
SI28 (第58・59図、第34表、遺構図版7、遺物図版10)

検出位置：調査区南西寄り D1・2グリッド。**平面形状**：方形。主軸方向：N-88°-W。規模：3.73m×3.34m。**確認面下の深さ**：24cm。**覆土**：不明。**柱穴**：7基検出されている。P1～P4は四隅に配置され、支柱穴と判断される。壁溝：北・西壁の把握部分で確認。**床面**：カマド北側袖の延長から西壁にかけて住居跡の北側5分の2に段を有す。**カマド**：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は96cmで、東壁から61cmほど掘り出される。山砂及び粘土により設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI29・30と重複関係にあり、SI29を切り、SI30に切られる。また、SK38に切られる。

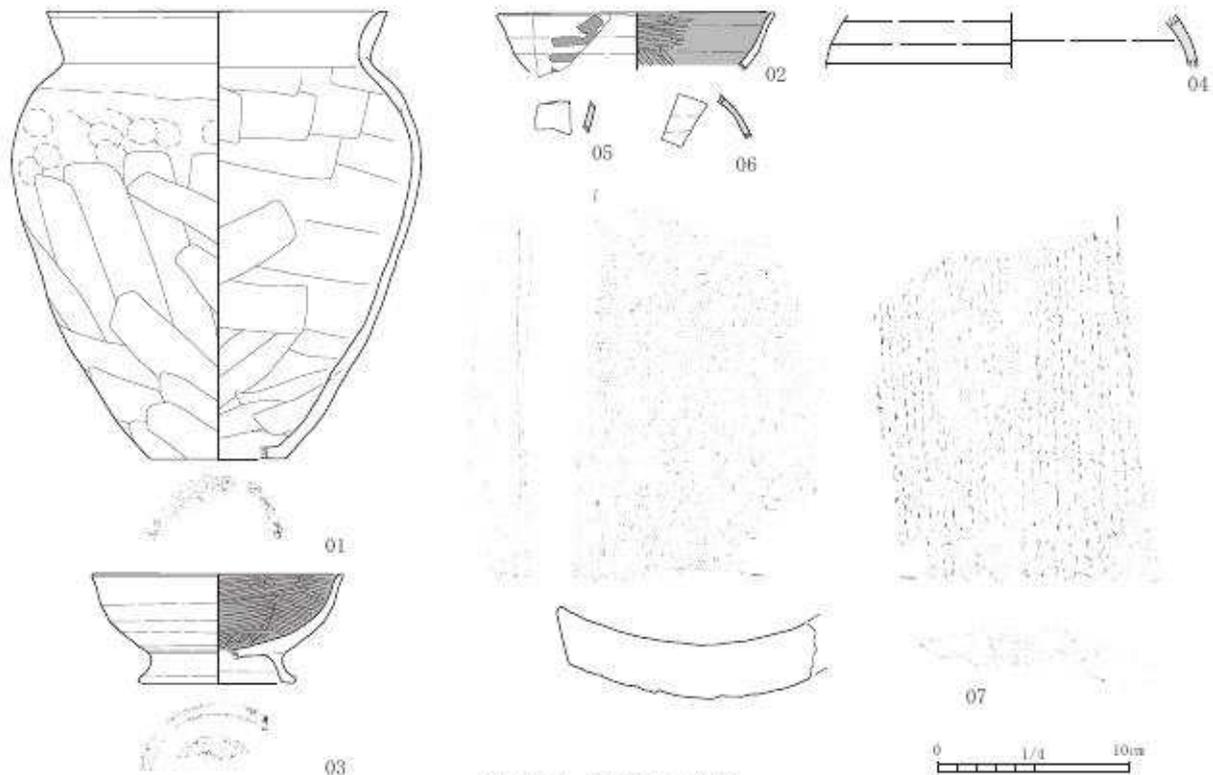
掲載遺物：土師器無台坏1点（墨書土器1点「手」カ）、有台碗1点、甕1点、灰釉陶器長頸瓶1点（猿投K90）、瓶類2点（猿投K90）、平瓦1点。

その他未掲載遺物：土師器2165.5g、須恵器998.8g、瓦788.8g、鉄製品18.1g、礫230.7g。

遺構の帰属時期：土師器甕・内黒碗の出土から10世紀前半と判断した。灰釉陶器では黒笹90号窯式の遺物が出土しており、やや齷齪がある。



第58図 SI28



第59図 SI28 出土遺物

第34表 SI28 出土遺物観察表

品目番号	形状	種類	群種	口径	口径	底径	重量	残存	素材の特徴	敷土	状況	色調	備考
01	カマナ3	土師器	甕	(17.5)	(25.3)	(7.4)	705.7	口	最大径を土色に有す。口縁は内外面に横十字、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、肩部に横に指印並に刺突される。直は十字。	炭母・白色粒子多い	良好 二次焼成	内外面 明黄褐色	
02	内	土師器	黒古杯	(14.4)	(2.1)	—	4.9	口縁部片	ロクロ製。内面ミガキ。	炭母・白色粒子少量	良好	内面 黒 外面 にぶい黄褐色	内面黒色基底 黒漆「赤」
03	カマナ2	土師器	有台埴	(13.0)	5.7	(5.0)	88.0	1/2	ロクロ製。体部下部に転ヘラケズリ、底部の転ヘラケ切り。内面ミガキ。	炭母・スベリア少量	良好	内面 黒 外面 にぶい黄褐色	内面黒色基底
04	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(2.4)	—	7.9	胴部片	外蓋下部を指印ヘラケズリ、胴部は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 暗黄緑	宿務390 【172】 京98-2-082
05	覆土	灰釉陶器	瓶類	—	(1.7)	—	1.8	胴部片	胴部は比較的薄くやや内湾して立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白 釉 透明な自然釉	宿務390 【173】 京98-2-082
06	覆土	灰釉陶器	瓶類	—	(2.3)	—	1.8	胴部片	胴部は非常に薄くやや内湾みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土 灰白 釉 暗黄緑	宿務390 【174】 京98-2-084
07	カマナ1	瓦	平瓦	タテ (19.6)	ヨコ (12.6)	厚 2.9	1,222.6	下縁・左側縁残存	四角形四角、赤白土質、凸面縁自由軸四角、縁・側面ケズリ。	炭母・白色粒子少量	良好	内外面 灰白	カマナ遺構付着 (観察者七)、黄鉄 屑化

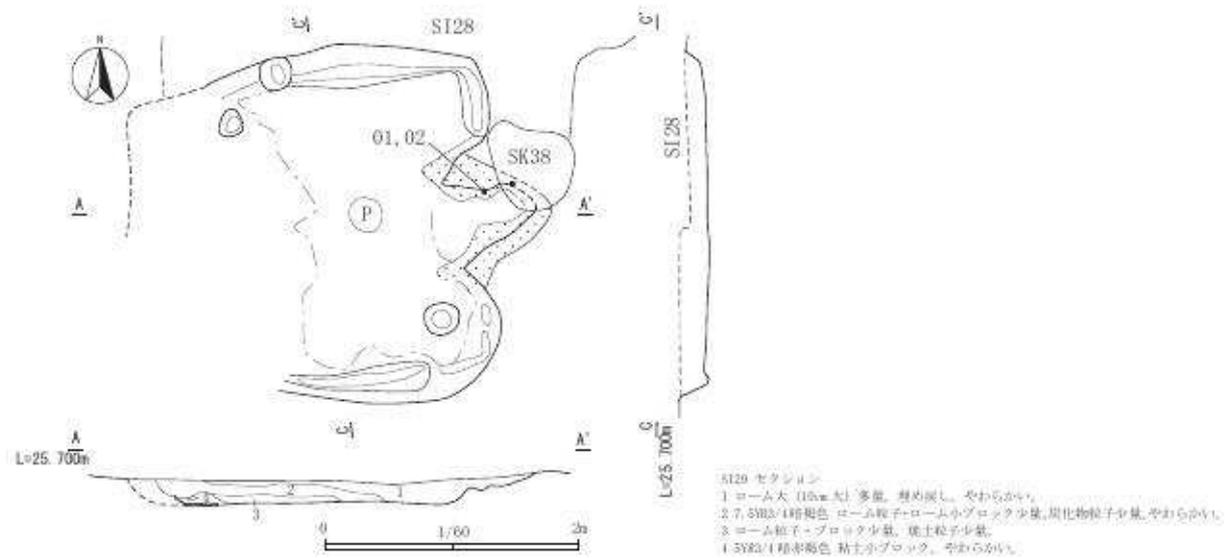
SI29 (第60・61図、第35表、遺構図版8、遺物図版10)

検出位置：調査区南西寄り D1・2 グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N-88°-W。規模：2.25m × 一。確認面下の深さ：18 cm。覆土：暗褐色土を基調に4層に分層される自然堆積。柱穴：3基検出されているが、本住居跡に伴うものか不明。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周カ。床面：平坦。カマド：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は95 cmで、西壁から55 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が設置される。その他付帯施設：なし。重複関係：SI28 と重複し、本遺構の方が古い。また、SK38 によりカマド部分が切られる。

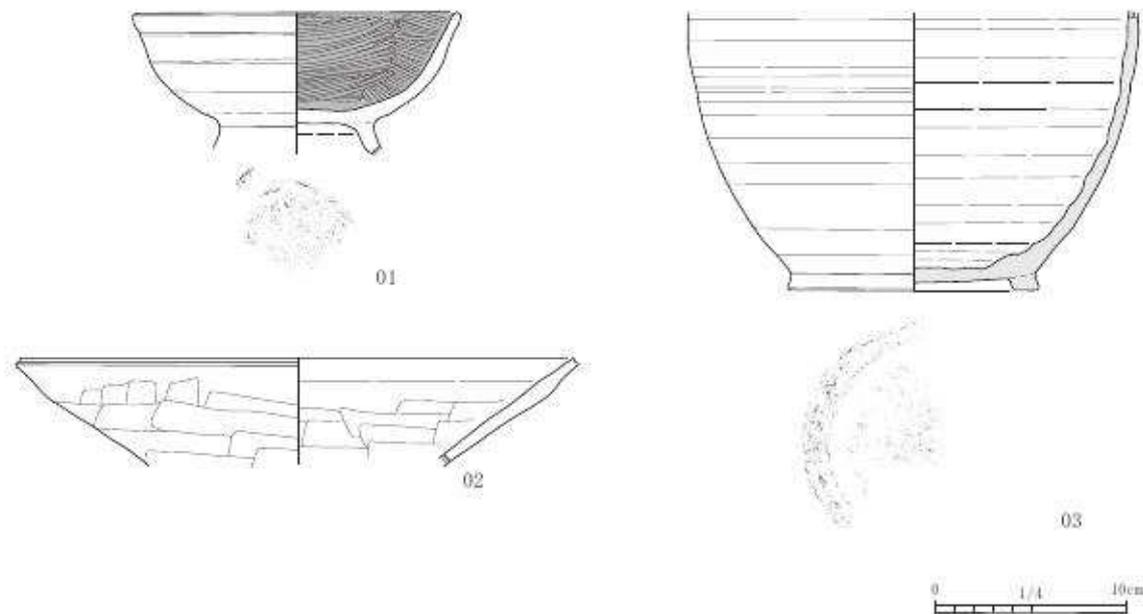
掲載遺物：土師器有台埴1点、大鉢1点、灰釉陶器瓶1点。

その他未掲載遺物：土師器 1213.6g、須恵器 441.4g、瓦 260.4g、礫 84.5g。

遺構の帰属時期：出土遺物では内黒塚の出土、大形の鉢の出土から10世紀前半と判断した。灰釉陶器瓶類が1点出土している。折戸53号窯式と見られる。



第60図 SI29



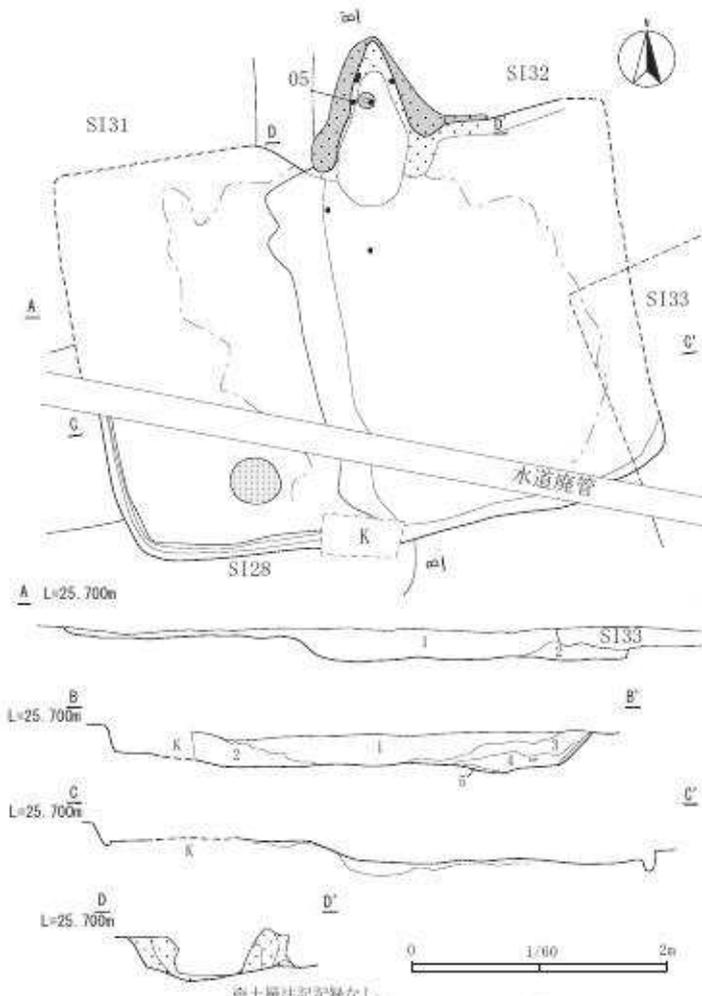
第61図 SI29出土遺物

第35表 SI29出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	素材の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド501	土師鉢	有台脚	16.9	(7.0)	—	268.9	2/3	ロクロ製。体部下半は口縁へラケズリ。底脚は口縁縁取りが浅く観察されるが整齊する為か本口縁の圧痕が確認される。内面はガキ。	炭灰・長石・石英・角閃石やや多い。白色針状物質微量。	良好 二次焼成 71	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	
02	カマド51	土師鉢	大鉢	(28.3)	(6.7)	—	299.4	口縁1/2	ロクロ製。体部は直線的に開き口縁は揃み上げられる。外面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	炭灰・長石等小一中位やや多い。	良好	内外面 浅黄褐色	
03	黒土・カマド501	灰釉陶器	瓶類	—	(14.3)	(10.1)	354.7	胴部下半一破片 1/3	ロクロ製。外面胴部は口縁へラケズリ。中段に横溝がロクロナデが確認される。底面は口縁へラケズリ。外面の一部・内面底部は自然釉が施される。	炭酸、小一中・鉄分の噴き出しやや多い。炭灰微量。	整齊	内面 灰白色 外面 黄褐色	前後CG1

SI30 (第62～64図、第36表、遺構図版8、遺物図版10・11)

検出位置：調査区西寄りC2グリッド。平面形状：長方形。主軸方向：N-9°-W。規模：4.3m×3.1m。確認面下の深さ：23cm。覆土：4層に分層される自然堆積。柱穴：検出されていない。壁溝：南西コーナー部分で僅かに確認される。床面：カマド西袖の延長上に北側壁に至る部分に段を有し、西側5分の2が高くなる。カマド：北壁中央やや東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は138cmで、煙道は北壁から53cmほど掘りださ



れる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。その他付帯施設：なし。重複関係：SI28・31・32・33と重複関係にあり、SI28・31・32よりも新しい。SI33はセクション図では本住居跡を切る形で示されているが、出土遺物は本住居が新しい。

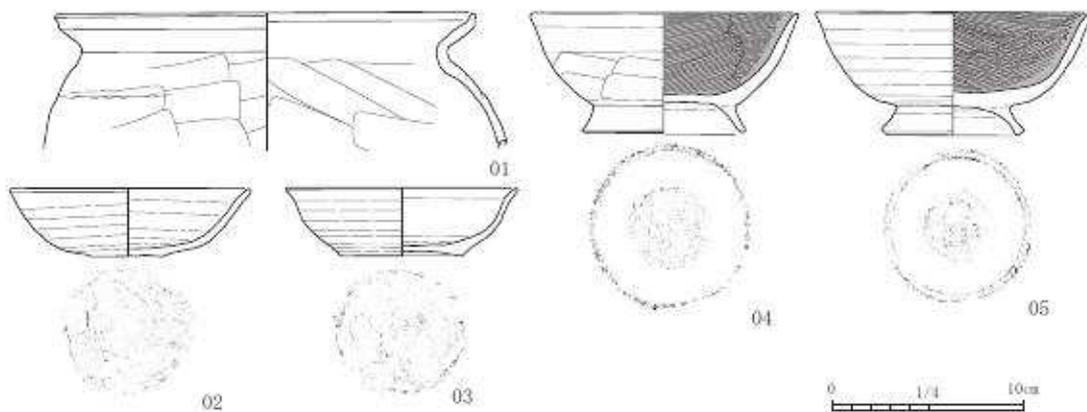
掲載遺物：土師器無台坏2点、甕1点、有台坏2点、須恵器有台坏1点、埴1点。

その他未掲載遺物：土師器3960.2g、須恵器2155.5g、瓦177.5g、礫63.3g。

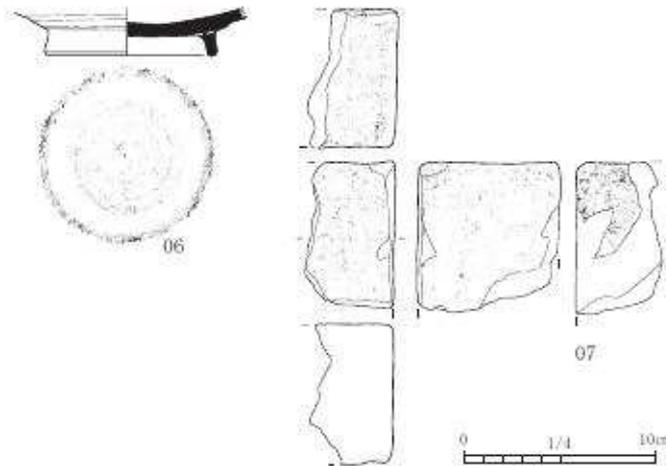
遺構の帰属時期：土師器の組み合わせから10世紀後半と判断される。06の須恵器は古い時期の遺物の混入と判断した(SI32由来カ)。灰釉陶器の出土はない。

- SI30 3セクション
1. SI30/4暗褐色 ローム粒子少量、炭化物粒子少量、しまりあり、自然堆積
 2. SI30/4暗褐色 ロームブロック中量、ローム粒子少量、やややわらか、自然堆積
- SI30 4セクション
1. SI30/4暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子極少量、炭化物粒子極少量、ややしまりあり
 2. SI30/4暗褐色 ローム小・中ブロック中量多量、ややしまりあり
 3. SI30/4暗褐色 粘土中・大ブロック中量多量、炭化材片少量、ややしまりあり
 4. SI30/4暗褐色 粘土小・中ブロック中量、焼土小・中ブロック中量、ややしまりあり、(測定天板掘り落下後)
 5. SI30/2黒褐色 黒色炭粒の純層、やややわらか、(カマド炭と灰層)

第62図 SI30



第63図 SI30 出土遺物 (1)



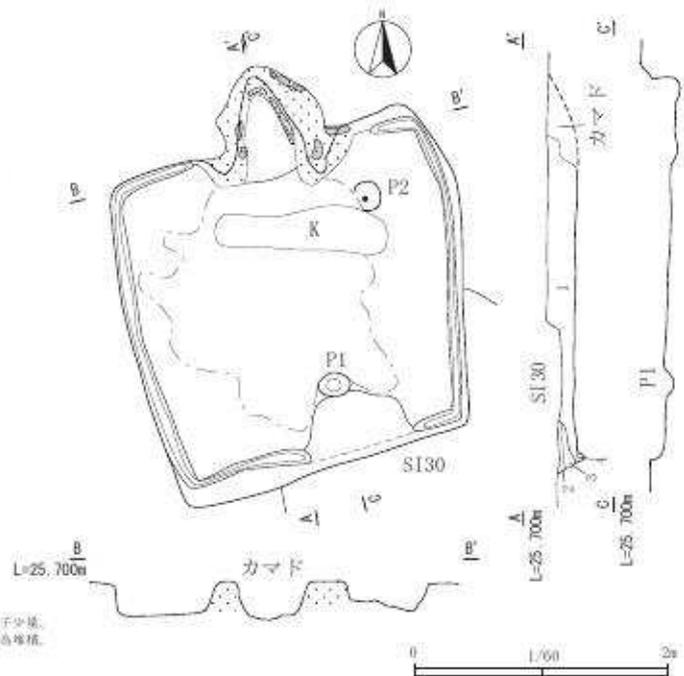
第64図 S130 出土遺物(2)

第36表 S130 出土遺物観察表

図版番号	注記	種類	形種	口径	縁高	底径	重量	保存	形状の特徴	胎土	焼域	色調	備考
01	カマド	土師器	甕	23.0	4.3	—	399.7	口縁部	胴部は損る。口縁は縁を上げられる。口縁は内外両面に横ナグ。胴部も内外両面にナグ。	炭母・白色粒子多い。スベリア少量	良好 二次焼成 Y1	内外面 灰白	香焼型別々
02	カマド	土師器	黒台杯	12.0	3.5	3.9	98.0	口縁完形	ボクロ型杯。底面一方の半輪へラケズリ。	炭母・白色粒子・スベリアや多い	良好 二次焼成 Y1	内外面 灰黄緑	
03	カマド	土師器	黒台杯	12.11	3.5	6.5	67.7	口縁下部 →底面	ボクロ型杯。底面回転部切り(左)。	炭母・白色粒子微量。黒色粒子やや多い	良好 二次焼成 Y1	内外面 灰白	
04	カマド	土師器	有台燗	14.0	6.5	5.2	216.7	口縁完形	ボクロ型杯。体部下半部は回転部へラケズリ。経路は本口状の圧痕が確認される。内面ミガタ。	炭母・白色粒子微量。黒色粒子多い	良好 二次焼成 Y1	内面 灰黄 外面 明灰焼	内面黒色処理
05	カマド	土師器	有台燗	14.43	6.5	6.7	267.6	口縁1/4 →底面	ボクロ型杯。体部下半部は回転部へラケズリ。底面回転部へラケズリ。内面ミガタ。	炭母多い。白色粒子・スベリア少量	良好	内面 黒黄 外面 灰黄緑	内面黒色処理
06	カマド	土師器	有台燗	—	4.55	8.8	157.2	体部下端 →底面	ボクロ型杯。底面回転部へラケズリ。内面身元の磨滅状況から転用物の可能性あり。	炭母多い	良好	内外面 灰黄緑	新出部
07	覆土	埴	—	タテ (7.7)	ヨコ (4.0)	厚 (2.4)	314.7	口縁保存	炭・土・石面ケズリ。裏面ケズリのみナグ。	石質・白色粒子中量。スベリア少量	良好	灰白	香焼型別々

S131 (第65・66図、第37表、遺構図版8、遺物図版11)

検出位置：調査区西寄り C1・2グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N-13°-W。規模：2.72m × 2.76m。確認面下の深さ：19 cm。覆土：確認面が浅く暗褐色土の単層。柱穴：2基検出されている。P1は入口ピットと想定される。壁溝：カマド部分及び南壁中央部分を除きほぼ全周する。床面：平坦。カマド：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は97 cmで、西壁から60 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。



- S131 セクション
 1 7.5% 暗褐色 ローム小・中ブロック中量、ローム粒子少量。
 カマド内砂粘土・小ブロック少量、ややしりりあり、人形堆積。
 2 ローム中・大ブロック状。
 3 ローム主体、上の年初の層方覆土。
 4 暗褐色の粘層、やわらかい。

第65図 S131

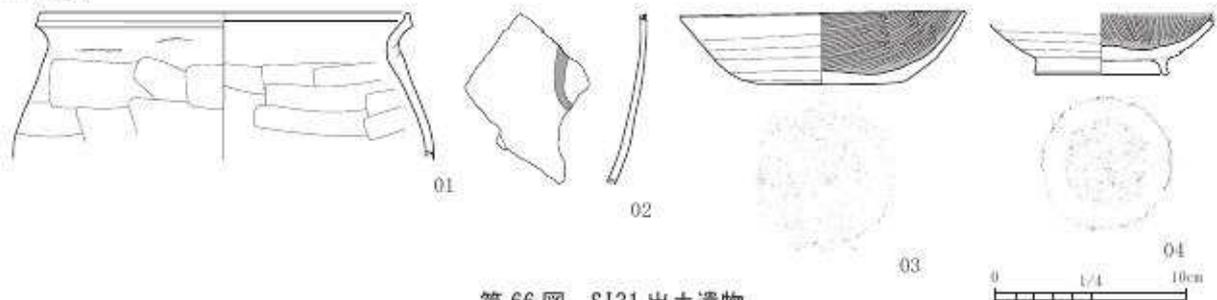
その他付帯施設：入口ピットの南側に床面が緩やかに高まりを見せる。入口施設に関わるものと判断される。

重複関係：SI30と重複関係にあり、本住居跡が古い。

掲載遺物：土師器無台坪1点、有台坪1点（刻書「ア」カ）、甕2点（墨書土器1点、人面絵画カ）。

その他未掲載遺物：土師器 1295.8g、須恵器 1097.5g、碟 41.5g。

遺構の帰属時期：出土遺物は土師器のみで、形態の組み合わせから9世紀後半と判断した。灰軸陶器の出土はない。



第66図 SI31出土遺物

第37表 SI31出土遺物観察表

図録番号	注記	種類	群種	口径	器高	底径	重量	残存	彫刻の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド	土師器	甕	19.8	17.8	—	208.8	口縁1/2	胴部は傾りは強い。口唇は脚み上げられる。口縁は内外面に傾わず、胴部も内外面にナゲ。	炭母・白色粘土やや多い	良好 二次焼成	内面 灰黄褐 外面 にぶい焼	前期型甕カ
02	カマド	土師器	甕	高さ 18.9	口 径 16.6	底 径 10.5	37.2	胴部破片	内外面にナゲ整形。	炭母多い。白色粘土やや多い	良好	内面 にぶい面焼 外面 焼	墨書 人面絵画カ
03	カマド	土師器	無台坪	15.0	2.7	7.0	190.8	口縁1/2 欠損	コクロ型形。底部下部に底辺回転へツケズリ。内面ツケズリ。	炭母多い。白色粘土やや多い	良好	内面 滑 外面 にぶい焼	内面黄色処理
04	カマド	土師器	有台坪	—	18.2	6.4	34.2	底部下部 一破片	コクロ型形。底辺回転へツケズリ。内面にツケ。	炭母やや多い。白色粘土少量白色粒状物質やや多い	良好 二次焼成	内面 滑焼 外面 にぶい焼	内面黄色処理 刻書「ア」カ

SI32（第67・68図、第38・39表、遺構図版8、遺物図版11）

検出位置：調査区西寄りC2グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N-5°-W。規模：4.1m×3.61m。確認面下の深さ：56cm。覆土：不明。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周する。幅21cm前後。床面：平坦。カマド：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は173cmで、西壁から99cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。その他付帯施設：なし。重複関係：SI30・33、SK42と重複する。いずれの遺構よりも古い。掘り込みが深くほぼ全容を把握できている。SK42によって南壁中央部分を切られる。

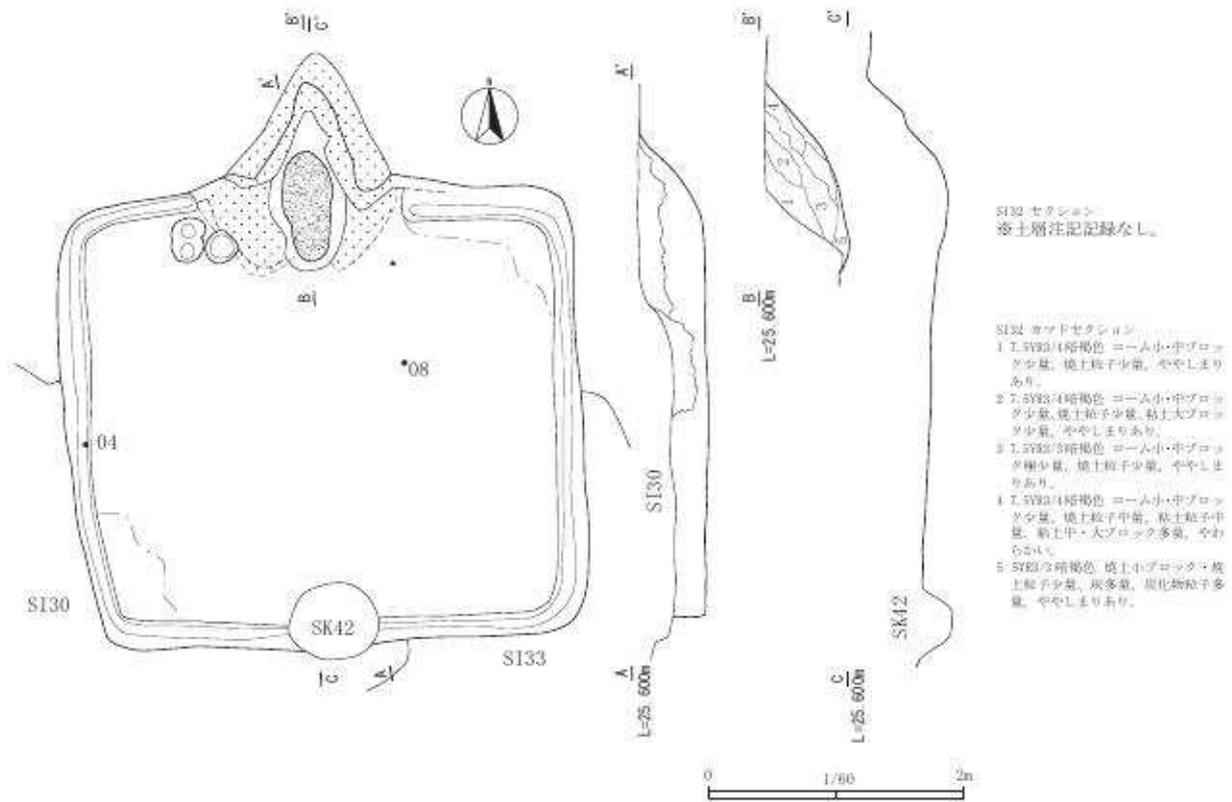
掲載遺物：土師器無台坪2点（墨書土器「口」）、須恵器蓋1点（朱墨書「ア」カ）、無台坪4点（刻書1点「口」、漆付着2点）、有台盤1点、丸瓦1点、埴1点。

その他未掲載遺物：土師器 3472.5g、須恵器 4902g、瓦 95.6g、鉄製品 6.4g。近世以降の遺物：陶器 6.4g。

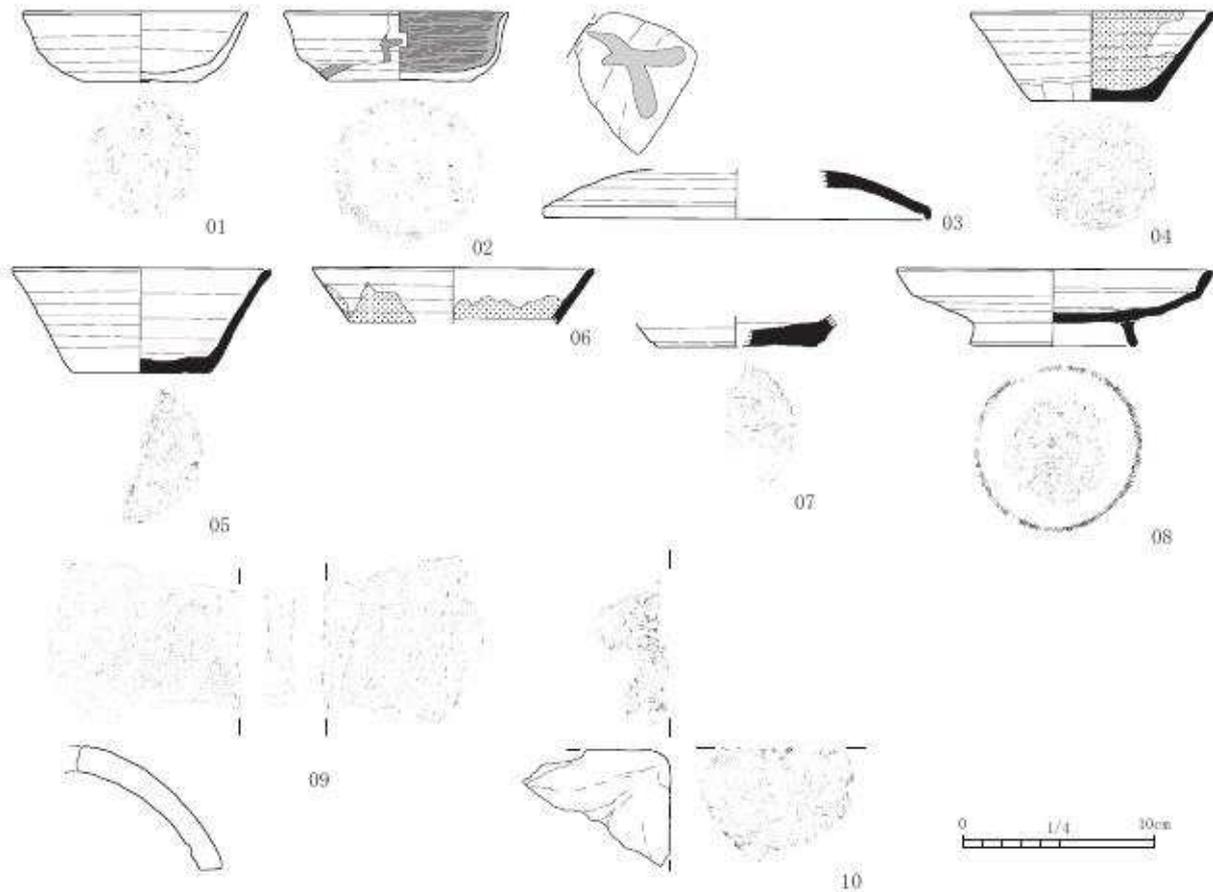
遺構の帰属時期：出土遺物では、須恵器の底部が狭くなり、器高が高くなる形状から8世紀終末から9世紀初頭と判断した。灰軸陶器の出土はない。

第38表 SI32出土遺物観察表（1）

図録番号	注記	種類	群種	口径	器高	底径	重量	残存	彫刻の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坪	11.8	2.6	6.0	109.3	3/4	コクロ型形。底辺回転高切り。	炭母多い	良好	内外面 にぶい焼	
02	覆土	土師器	無台坪	11.8	2.5	7.6	85.7	口縁1/2 欠損	コクロ型形。底辺回転高切り後ナゲ。内外面にツケ。箱形。	炭母多い	良好	内面 滑焼 外面 にぶい焼	内面黄色処理 墨書「口」
03	覆土	須恵器	蓋	20.2	12.5	—	40.6	胴部破片	コクロ型形。残存部の回転へツケズリは1/5。底しは無い。底に粘土あり。	炭母やや多い	良好	内外面 灰黄褐	朱墨書「ア」カ 新山庄



第67図 S132



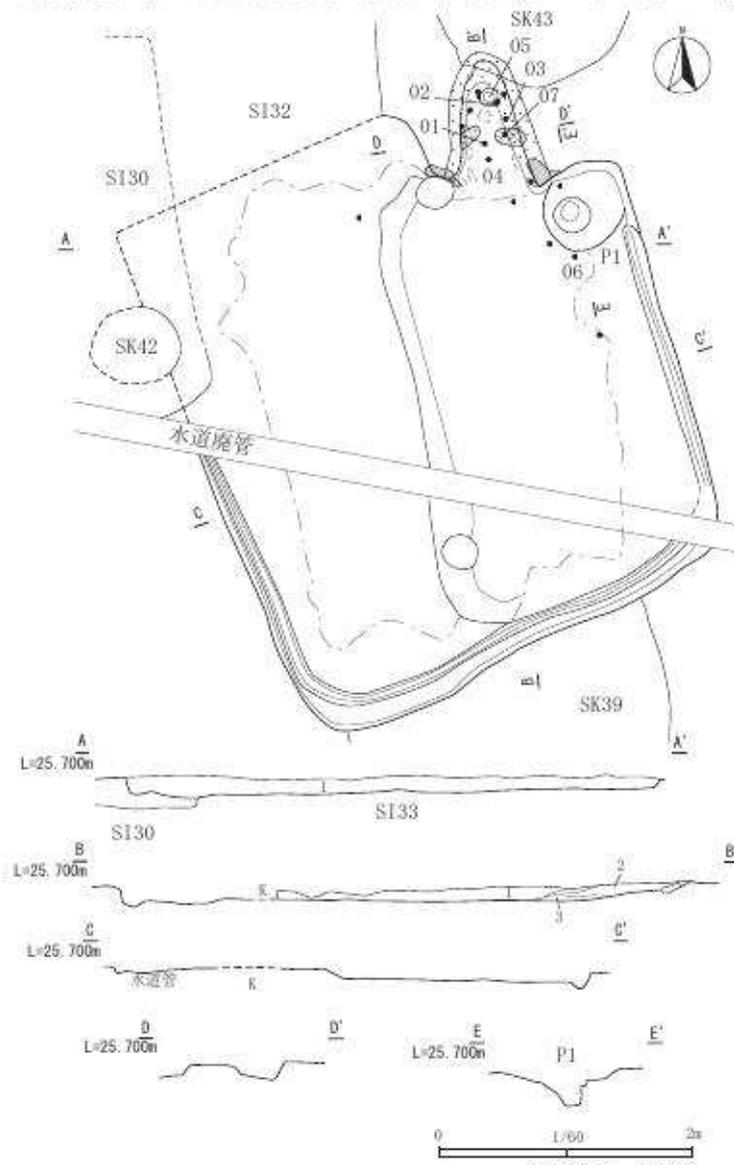
第68図 S132 出土遺物

第39表 S132 出土遺物観察表(2)

発掘番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	整形の特徴	敷土	地味	色調	備考	
94	3	須恵器	無台杯	12.8	8.6	6.4	125.4	ほぼ完好	コラロ體形、体部下端子持らへラケズリ、底面一方の半持ちへラケズリ、内面滑順。	灰母少量・白色粒子少量、小礫アラ	良好	内外面 暗灰黄	体沿め新出産	
95		覆土	須恵器	無台杯	13.4	5.4	7.2	104.0	1/2	コラロ體形、体部下端同輪へラケズリ、底面四方の半持ちへラケズリ。	灰母多い、白色粒子や多い	良好	内外面 灰黄褐	新出産
96		覆土	須恵器	無台杯	(14.8)	(3.0)	—	11.3	口縁破片	コラロ體形。	良好	内外面 灰黄	体沿め内面黄色処理	
97		覆土	須恵器	無台杯	—	(1.6)	(8.4)	46.9	底面1/3	コラロ體形、底面同輪へラケズリ、火ぶくおあり、底面の割壊は多い。	良好	内外面 暗灰	別書「口」(須恵器)	
98	NO1	須恵器	有台壺	16.6	3.9	8.4	319.5	ほぼ完好	コラロ體形、底面同輪へラケズリ。	白色粒子多い	良好	内外面 黄灰	新出産	
99		覆土	瓦	平瓦 (8.8)	コ (9.6)	厚 1.35	159.2	右側縁残存	種子、山面クマツナ、須恵余焼り痕、赤目注成(青緑あり)、細孔ケズリ。	灰母やや多い、白色粒子多い	良好	内外面 灰白		
10		覆土	埴	—	タマ (6.2)	コ (7.6)	厚 (8.2)	2面残存	筒子、山面クマツナ、須恵余焼り痕、赤目注成(青緑あり)、細孔ケズリ、筒で持ち直るようになり、ヒュー右面ケズリ。	石黄・白色粒子中量	良好	灰白		

S133 (第69・70図、第40表、遺構図版8、遺物図版11)

検出位置：調査区西寄りC・D2グリッド。平面形状：長方形。主軸方向：N-16°-W。規模：4.25m×3.76m。確認面下の深さ：10cm。覆土：住居跡の覆土は浅く暗褐色土の単層。柱穴：検出されていない。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周するものと思われる。幅16cm、深さ7cm前後。床面：カマド西袖の延長より床の2分の1程度の西側が9cm程高くなる。カマド：北壁東コーナー寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は120cmで、北壁から89cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築される。その他付帯施設：なし。重複関係：S130・32と重複する。S132を切る。前述のとおり、出土遺物はS130より古相を示す。また、SK39を切り、SK42、43に切られる。



の1程度の西側が9cm程高くなる。カマド：北壁東コーナー寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は120cmで、北壁から89cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築される。その他付帯施設：なし。重複関係：S130・32と重複する。S132を切る。前述のとおり、出土遺物はS130より古相を示す。また、SK39を切り、SK42、43に切られる。

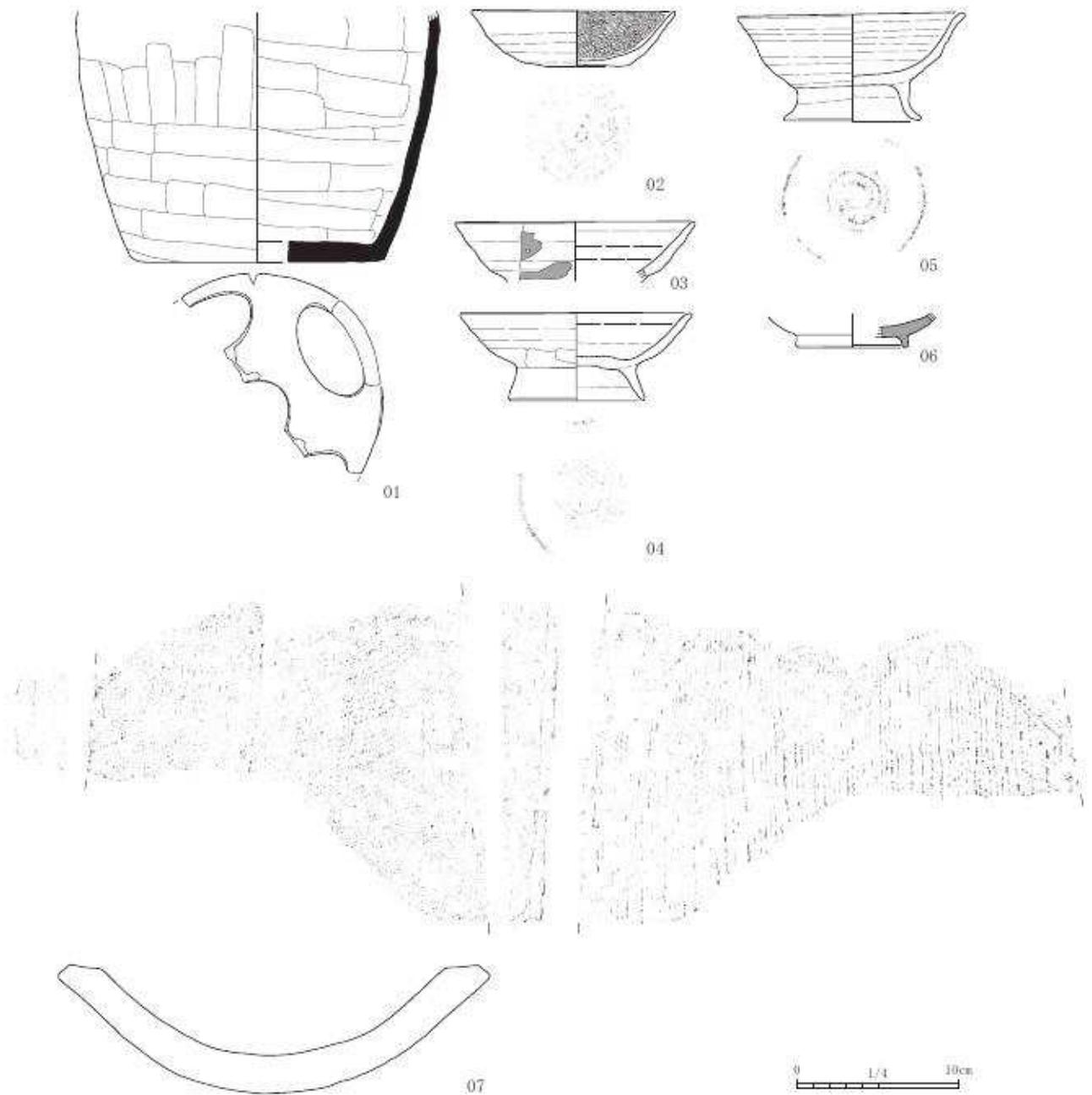
掲載遺物：土師器無台杯1点、有台壺3点(墨書土器1点「口」)、須恵器甎1点、緑釉陶器碗1点(猿投K90併行)、平瓦1点。

その他未掲載遺物：土師器3230g、須恵器893.4g、瓦1947.8g、礫553.4g。

遺構の帰属時期：出土遺物02の土師器無台杯は回転へラ切を行うもので、高足高台の壺の同伴が見られるものの、9世紀末から10世紀前葉と判断される。

- S133 Aセクション
1 7.5xR1/4暗褐色 コーン粒子少量、炭化物粒子少量、しまりあり、白砂埋積。
- S133 Bセクション
1 7.5xR1/4暗褐色 炭化物少-中量、やわらかい。
2 5xR1/4暗赤褐色 粘土土-皮土大ブロック多量、やわらかい。
3 異褐色 炭化物較まじりの灰層、やわらかい。

第69図 S133



第70図 SI33出土遺物

第40表 SI33出土遺物観察表

発掘番号	出所	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カ1	瀬志器	甕	—	(18.6)	(16.0)	473.7	胴部下端1/4	06結合用カ。多乳式。胴部外面ヘラケズリ、内面ナツ。口はヘラにより直線りが施されている。	炭質微量、白色粘土多い	還元不直	内面 にぶい赤褐色 外面 緑	内面黒色処理
02	様土	土師器	茶台鉢	12.5	3.5	3.2	123.5	完形	ロクロ製形、底部切取ヘラケズリ。内面ニガシ。	炭母やや多い、白色粘土・スコリアコリア少量	良好	内面 赤褐色 外面 にぶい緑	内面黒色処理
03	カ7	土師器	有台碗	(14.8)	(2.85)	—	36.2	口縁1/8	ロクロ製形、体部下端切取ヘラケズリ。	炭母微量、白色粘土多い、黒色粘土少量	良好	内外面 明赤褐色	器蓋「口」
04	カ11	土師器	有台碗	(14.2)	(5.2)	6.3	113.1	1/3	ロクロ製形、体部下端手持ヘラケズリ、底部切取ヘラケズリ。	炭母微量、白色粘土やや多い、黒色粘土少量	良好	内外面 明赤褐色	
05	カ4	土師器	有台碗	13.8	6.5	8.4	231.8	ほぼ完形	ロクロ製形、底部切取ヘラケズリ。	炭母多い、白色粘土少量、スコリアやや多い	良好	内外面 にぶい黄褐色	
06	カ1	瀬志陶器	甕	—	(2.1)	(6.7)	18.9	体下部～底部1/4	器物は比較的薄く丸みを帯びて立ち上がる、高台は比較的高く筒状形を呈す。	炭分の噴出し微量	良好	胎土 白灰 釉 緑	器蓋390番付 【29】 京98-2-004
07	カ8	瓦	平瓦	タテ (21.8)	ヨコ (27.4)	厚 2.3	1,440.0	内側縁部 存	田圃水取り用、布目状肌、細線ケズリ。外面赤切り肌、縦目切肌状、細線ケズリ。	白色粘土少量	良好	内面 にぶい黄褐色 外面 黄灰	瀬志黒瓦

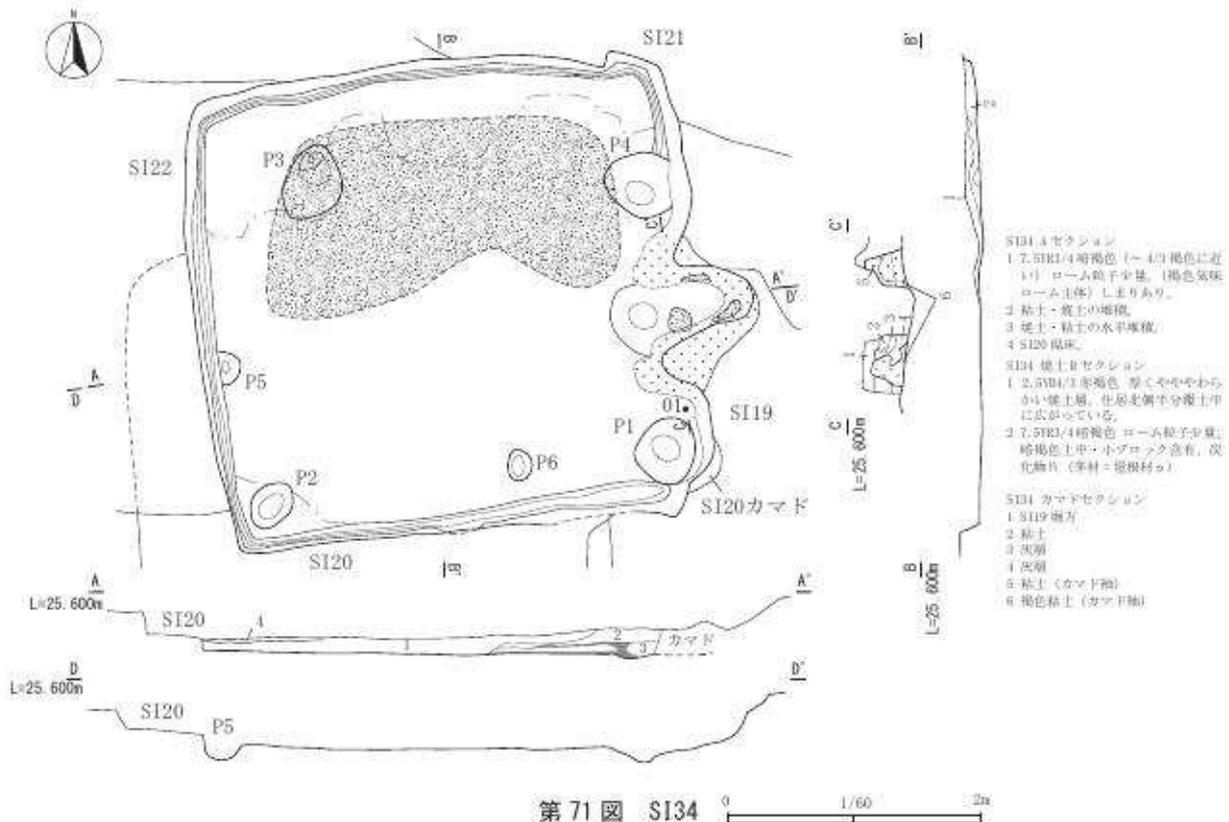
SI34 (第71・72図、第41表、遺構図版8・9、遺物図版12)

検出位置: 調査区中央やや西寄り C2・3グリッド。**平面形状:** 方形。**主軸方向:** N-90°-W。**規模:** 3.68m × 4.0m。**確認面下の深さ:** 20 cm。**覆土:** 住居跡の覆土は3層に分層され、自然堆積。北半部床面上に炭化物(材)と焼土が堆積し、火災住居と判断される。**柱穴:** コーナー部分に4基、西壁中央付近に1基、南壁寄りに1基検出されている。**壁溝:** カマド部分を除きほぼ全周する。幅12 cm前後。**床面:** 平坦。**カマド:** 東壁中央南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は121 cmで、西壁から50 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設:** なし。**重複関係:** SI19・20・21・22と重複する。本住居が最も古い。

掲載遺物: 須恵器無台坏1点、有台坏1点、灰釉陶器碗1点(猿投K90)、平瓦1点、鉄製品刀子1点。

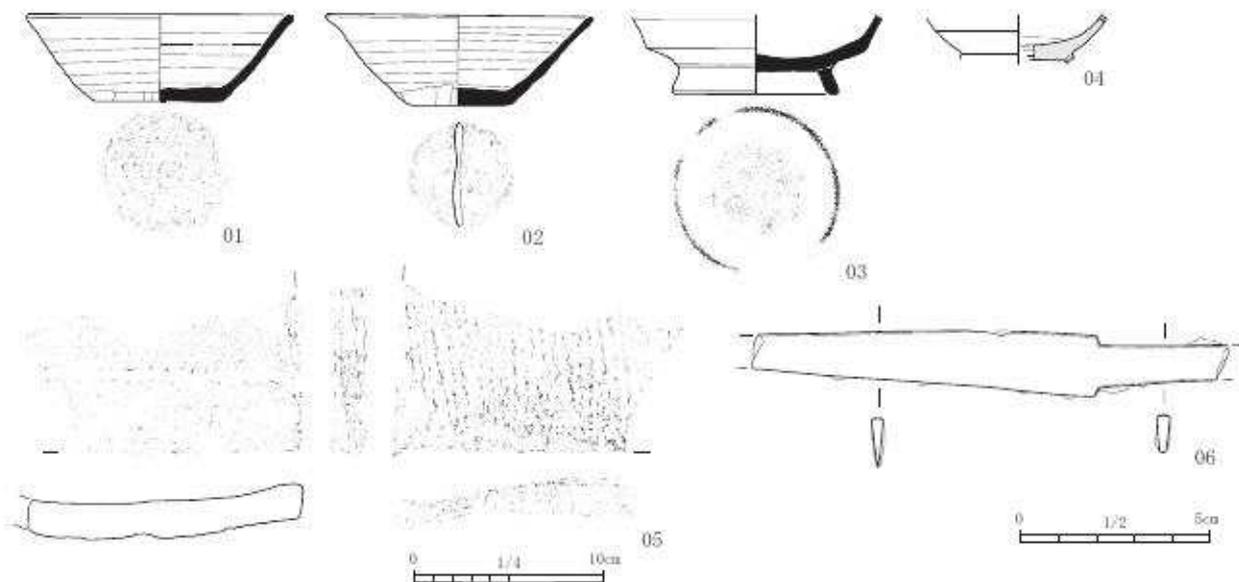
その他未掲載遺物: 土師器2205g、須恵器1962.9g、瓦377.7g、鉄製品9.8g、礫121.5g。

遺構の帰属時期: 須恵器の底部が狭くなり、器高が高くなる形状から9世紀初頭と判断した。



第41表 SI34 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	粘土	焼成	色調	備考
01	1	須恵器	無台坏	13.7	4.6	4.7	132.3	2/3	セラロ型形。体部下端一底部を持ちヘラケズリ。	炭粒多い。白色粘土やや	還元半良	内外面 濃い黄褐色	へら型身(天)
02		覆土	須恵器	無台坏	13.8	4.7	117.7	2/3	セラロ型形。体部下端を持ちヘラケズリ。底面多方向の半持ちヘラケズリ。	炭粒多い。白色粘土やや多い。	良好 二次焼成	内外面 黄褐色	ミダ生状ヘラ型身(天) 新治産
03		覆土	有台坏	有台付坏	—	4.1	4.3	109.0	セラロ型形。体部下端一底部を持ちヘラケズリ。	カーン様やや多い。赤白・白色針状物質微量	良好	内外面 黄褐色	新治産
04		覆土	灰釉陶器	碗	—	2.6	—	12.9	外面体部中位を30度ヘラケズリ後回転ナブ。器壁は比較的薄く肉厚して立ち上がる。高台は下段を欠損しているが断面が三日身形を呈していたと考えられる。	鉄分の増出し少量	良好	内外面 灰白釉 暗褐色	器長590 厚さにほぼ等しい 【175】 実36-2-085
05		覆土	瓦	平瓦	タテ(8.4)	ヨコ(14.5)	厚(2.9)	117.6	左側縁に残存	厚面赤目土質。凸面縁に暗褐色。断面ケズリ。	良好。自然焼付	内外面 灰	
06		覆土	鉄製品	刀子	長(12.5)	幅(1.7)	厚(0.3)	26.1	切先・突尻欠損	両面。身部・突部とも厚手のつくり。SI20-15と同製品。			

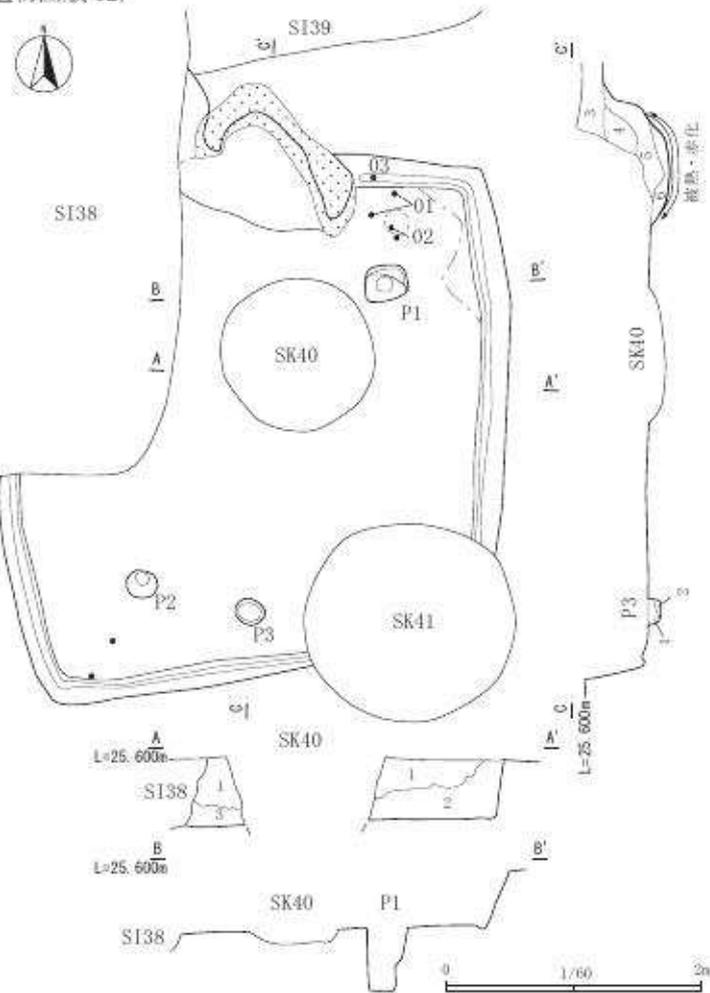


第72図 SI34 出土遺物

SI35 (第73・74図、第42表、遺構図版9、遺物図版12)

検出位置: 調査区北西端部 B2・3、C2・3
グリッド: 平面形状: 方形。主軸方向: N。
規模: 4.92m × 4.0m。確認面下の深さ: 35
 cm。覆土: 暗褐色土を基調とした3層に分層。
 第2層は埋め戻し土とされる。柱穴: 北東
 及び南西コーナー付近に各1基と南壁中央
 寄りに1基の3基が検出されている。壁溝:
 カマド部分を除きほぼ全周するものと思わ
 れる。幅12cm、深さ7cm前後。床面: 平坦。
 カマド: 北壁中央付近に設置され、壁際主
 軸部分の全長は121cmで、西壁から55cmほ
 ど掘りだされる。山砂及び粘土により構築
 された袖が大きく開いて設置される。その
 他付帯施設: なし。重複関係: SI38・39、
 SK40・41と重複する。いずれの遺構よりも
 本住居が古い。SI39は出土遺物から本住居
 より古いと思われる。

掲載遺物: 土師器甕2点、須恵器蓋1点
 (墨書土器1点「石上□□」)、緑釉陶器蓋類
 1点(猿投 K90 併行)、灰釉陶器皿1点(美
 濃光1〜大2)。



SI35 のセクション

- 1 暗褐色、やや粗い。
- 2 ロームブロック
- 3 暗褐色
- 4 ローム小・中ブロック多量、カマドを築いた後作新層上。
- 5 暗褐色、ローム小ブロック少量
- 6 灰とローム粒子、粘土粒子。

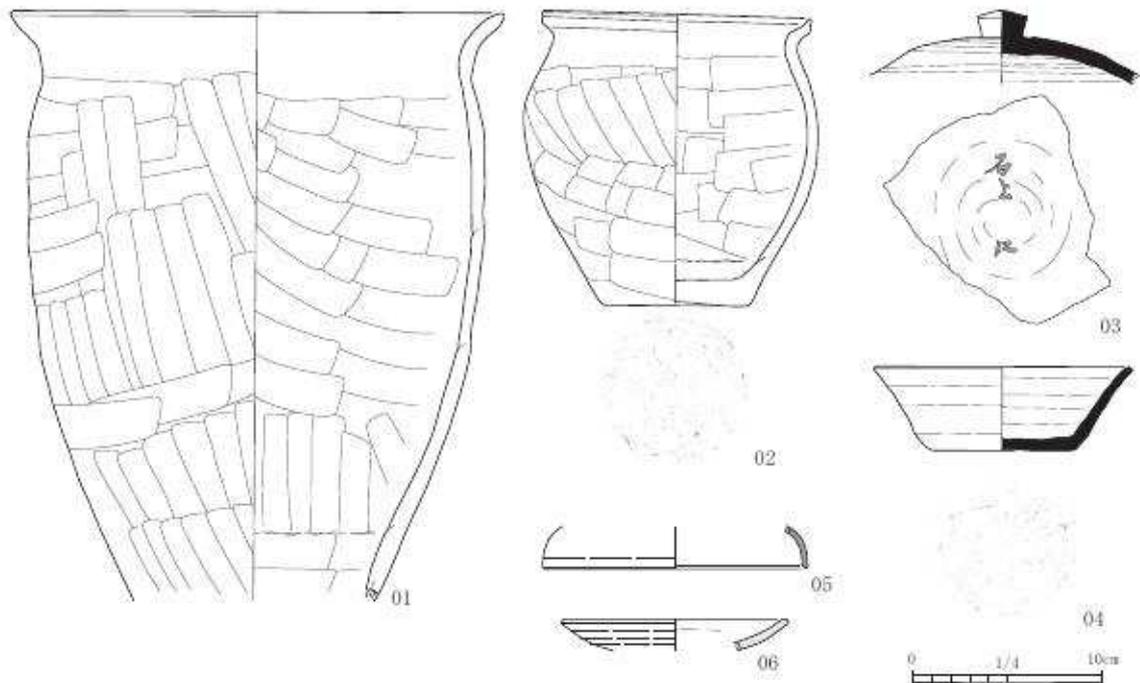
SI35 のセクション

- 1 7.5%ローム多量、やや粗い、自然堆積。
- 2 1.5%ローム多量、ローム小・中ブロック多量、人為的埋め戻し。
- 3 7.5%ローム少量、やや粗い、自然堆積。

第73図 SI35

その他未掲載遺物：土師器 3218.5g、須恵器 1722.2g、瓦 204.7g、礫 186.1。近世以降の遺物：陶器 2.3g。

遺構の帰属時期：須恵器および土師器の甕が出土している。その形状から9世紀初頭と判断されるが、灰釉陶器では光ヶ丘1号～大原2号窯式が出土しており、9世紀後半～10世紀前葉になる。また、緑釉陶器05の蓋は黒笹90号窯式で、9世紀後半が想定される。明らかに齟齬がある。



第74図 SI35出土遺物

第42表 SI35出土遺物観察表

品目番号	部位	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
01	4-3	土師器	甕	(25.8)	(39.5)	—	697.3	口縁へ胴部下端1/4	長卵型の甕で、口縁は内外直ちに横ナゲ、胴部外直はヘラケズリ、内直はヘラナゲ。	灰粒やや多い、白色粒子多い	良好 二次地成 T1	内面 にごい黄橙 外面 灰黄地	カマド跡付着
02	2	土師器	小型甕	14.0	15.3	7.0	598.9	3/4	最大径を上位に有す小形の甕である。口縁は内外直ちに横ナゲ、口縁は横み上げられる。胴部外直ナゲ、下直は斜方向のヘラケズリ、内面はナゲ。	灰粒少量、白色粒子多い	良好 二次地成 T1	内面 にごい黄橙 外面 黄赤地	
03	5	須恵器	蓋	—	(12.75)	ツマミ径 2.6	141.1	胴部欠損	ワタロ型蓋、ツマミは固定突起を有す。又片側存続の回転ヘラケズリは1/3。	少～中硬・鉄分の増出しやや多い、白色斜状物質微量	良好	内外面 灰	書書「石土口中」
04	覆土	須恵器	蓋欠損	(13.3)	4.3	7.0	113.3	口縁1/8～直削	ワタロ型蓋、底面印痕へラケ切り後多方向の手持ちヘラケズリ。	白色粒子やや多い	良好	内外面 灰	ヘラ記号「3」
05	SI35 覆土・SI38	緑釉陶器	蓋類	(13.9)	(12.2)	—	3.7	口縁10%	器壁は比較的薄く内面に丸みを持って立ち上がる。	鉄分の増出し微量	良好	胎土 灰白 釉 緑(鉛釉)	偵査X90 併行【297】 京98-2-005
06	覆土	灰釉陶器	蓋	(11.0)	(1.7)	—	6.3	口縁計8%	器壁は比較的厚く縁やかに内湾して立ち上がり縁部で僅かに外反。	鉄分の増出し細かく少量	良好	胎土 灰白 釉 黄緑 内面口縁部黄色がかかった赤緑(含白粉緑)・外面口縁部透明自然釉	表裏光1～大2【175】 京98-2-088

SI36 (第78図、遺構図版9)

SI38の南北セクション上層に僅かながら床面らしき硬化部分を確認したため、SI36としたが全容は不明。SI37との重複関係も確認できない。

掲載遺物：なし。

その他未掲載遺物：土師器 2175.5g、須恵器 1260.5g、瓦 44.5g、礫 32.7。近世以降の遺物：陶器 2.3g。

遺構の帰属時期：不明

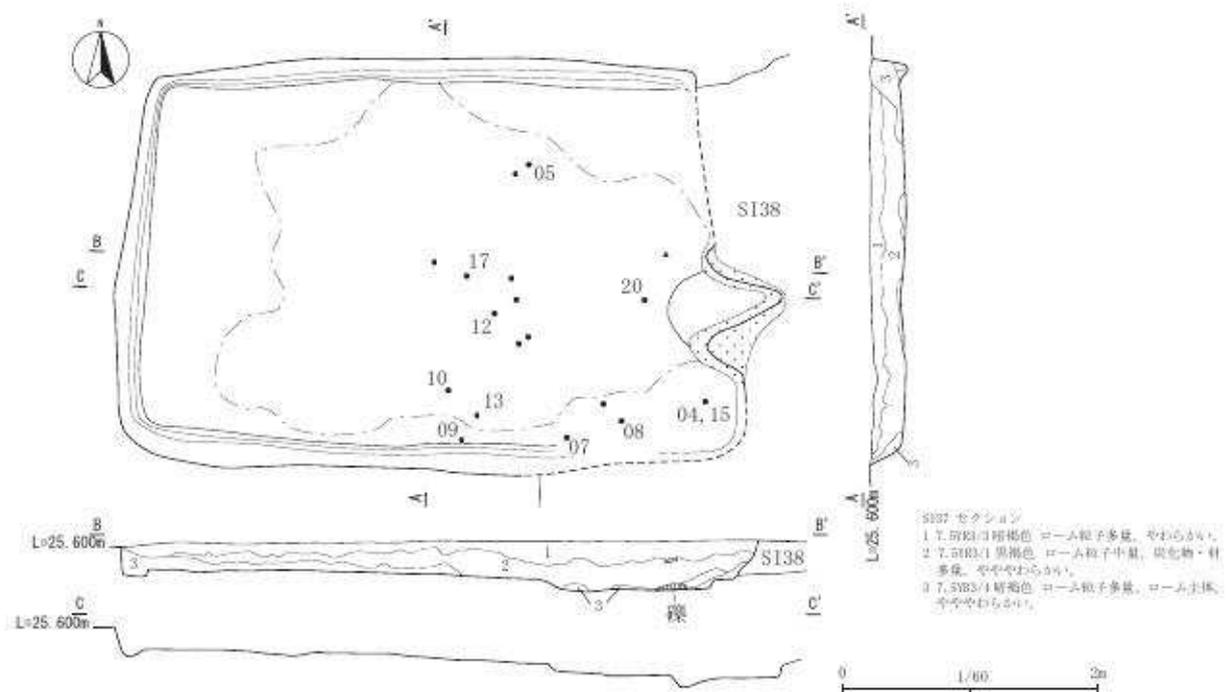
SI37 (第75～77図、第43・44表、遺構図版9、遺物図版12・13)

検出位置：調査区北西端部 B2 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N-92°-E。**規模**：3.28m × 4.94m。**確認面下の深さ**：21 cm。**覆土**：暗褐色土を基調とする3層に分層される。自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周するものであろう。幅 12 cm、深さ 9 cm 前後。**床面**：東側に向かい緩やかに下降する。**カマド**：東壁中央やや南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 93 cm で、東壁から 49 cm ほど張り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI38 と重複するもので本住居跡が新しい。

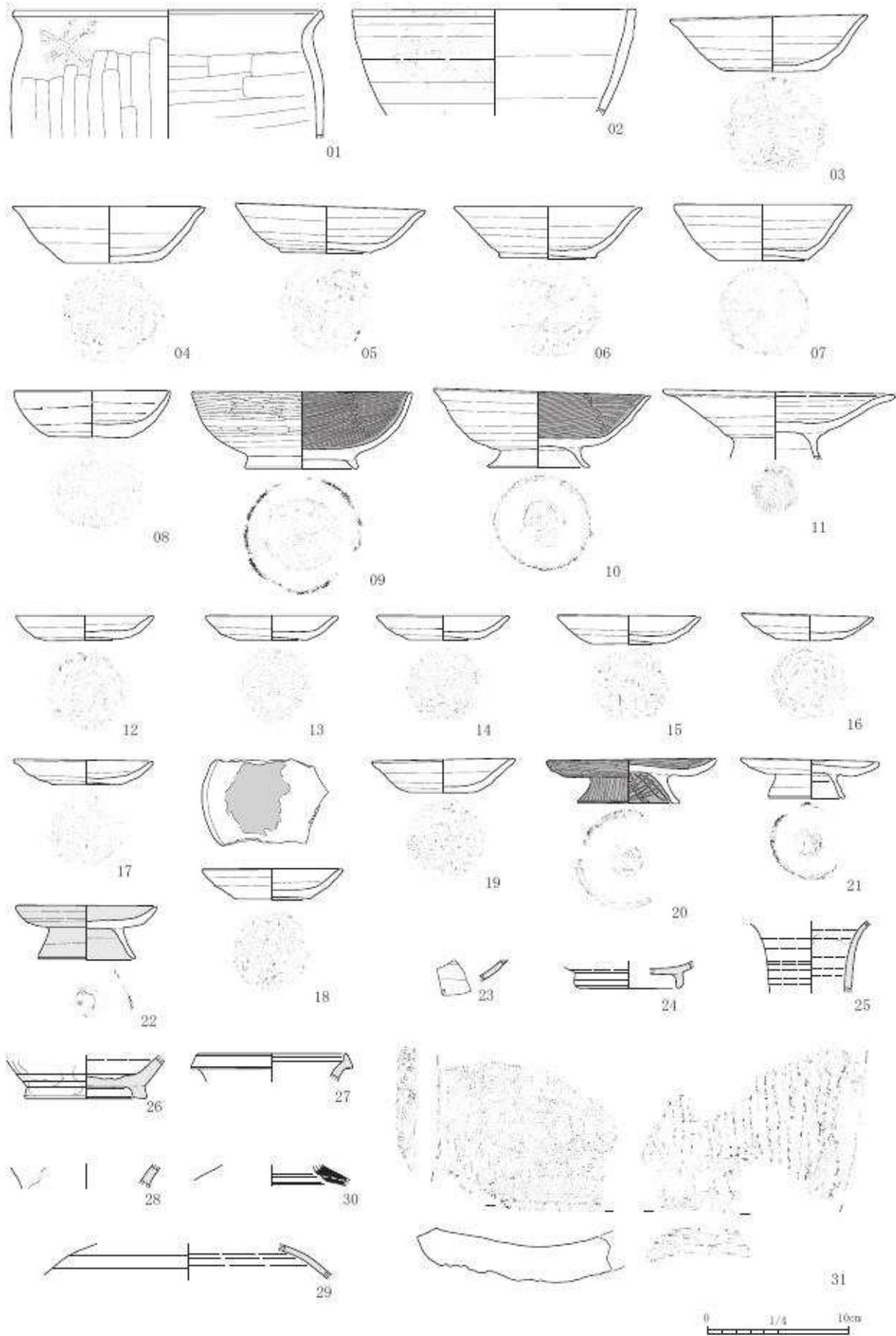
掲載遺物：土師器無台坏 6 点、有台碗 2 点、有台皿 1 点、小皿 8 点、有台小皿 3 点、鉢 1 点（刻書絵画）、甕 1 点（窯印）、灰釉陶器碗 1 点（猿投 K14～K90）、碗・皿類 1 点（猿投 K90）、長頸瓶 5 点（猿投 K90・K14・美濃光ヶ丘 1・猿投 K14～K90）、須恵器長頸瓶（東海系 8 世紀代）、平瓦 1 点、丸瓦 1 点、土製品獣脚 1 点、金属製品鉄製金具 1 点、銅碗 1 点、砥石 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 23818g、須恵器 4125g、瓦 4098.5g、鉄製品 120.2g、礫 446.3g。**近世以降の遺物**：陶器 18.1g。

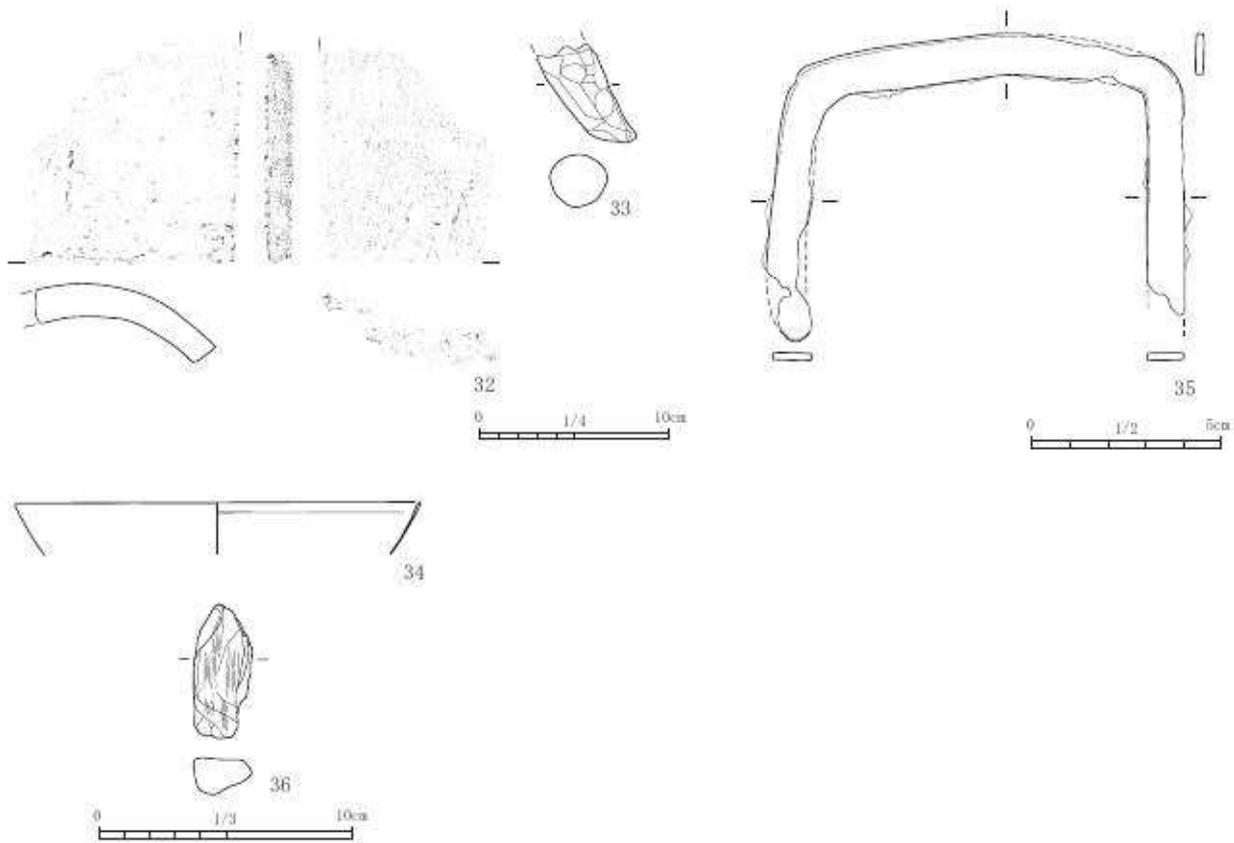
遺構の帰属時期：土師器坏、有台碗に加え皿が大量に出土する。坏・皿類の底部は糸切のまま無調整になる。さらに内外面ミガキの内面黒色処理された碗、内外面ミガキの後黒色処理される有台皿などの出現から 11 世紀と判断した。また、灰釉陶器も比較的多く出土しているが、黒笹 14 号窯式～90 号窯式、光ヶ丘 1 号窯式など 9 世紀後半の資料が主体となっており、齟齬がある。本住居が重複関係にある SI38 に伴う遺物の可能性が高い。



第75図 SI37



第76図 SI37出土遺物(1)



第77図 S137出土遺物(2)

第43表 S137出土遺物観察表(1)

発掘番号	注記	種類	形状	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	破土	土師器	甕	21.6	(9.0)	—	128.4	口縁1/4	胴部の重りは強い。口縁は前後反りが行われている。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナゲ整形。	黄緑・白色粒子多い	良好	内面 濃い黄緑 外面 濃い黄緑	口縁直下へラ整形
02	破土	土師器	甕	19.4	(7.2)	—	52.7	口縁1/8	コテロ整形、口縁は直線りが行われている。残存部の外面胴部下端回転ヘラケズリ。	黄緑・白色粒子やや多い	良好	内面 濃い黄緑 外面 黄緑	別荘
03	破土	土師器	黒台坪	11.8	3.8	6.7	174.6	口縁1/4 大皿	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑黄緑、白色粒子やや多い	良好	内外面 濃い黄緑	へラ整形
04	2	土師器	黒台坪	11.8	3.9	6.6	170.3	完形	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	白色粒子多い	良好	内面 黄緑 外面 黄緑	内面黒色処理付着 へラ整形
05	11	土師器	黒台坪	13.1	3.3	6.4	143.3	ほぼ完形	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑・スコリアやや多い、白色粒子多い、白色針状物質少量	良好	内外面 濃い黄緑	
06	破土	土師器	黒台坪	11.1	3.6	6.7	125.3	ほぼ完形	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑・白色粒子やや多い、スコリア少量	良好	内外面 濃い黄緑	
07	4	土師器	黒台坪	12.3	3.9	6.4	140.1	完形	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑やや多い、白色粒子、白色針状物質少量、スコリア少量	良好 二次焼成	内面 濃い黄緑 外面 濃い黄緑	
08	1	土師器	黒台坪	10.5	3.2	6.0	119.9	口縁1/2 大皿	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑・白色粒子多い、スコリア少量	良好	内面 濃い黄緑 外面 濃い黄緑	
09	5	土師器	有台壇	15.2	5.35	7.7	203.4	口縁2/3 大皿	コテロ整形、体部下半回転ヘラケズリ、底面回転ヘラケズリ、内外面共にミガキが確認されるが、外面のミガキは粗い。	黄緑多い、白色粒子・白色針状物質少量、スコリア少量	良好	内面 黒 外面 濃い黄緑	内面黒色処理
10	7	土師器	有台壇	15.9	5.3	6.5	183.2	口縁1/3 大皿	コテロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底面回転糸切り、内面ミガキ。	黄緑やや多い、白色粒子少量、白色針状物質やや多い	良好	内面 黒 外面 濃い黄緑	内面黒色処理 外面部分付着
11	破土	土師器	有台壇	16.1	(4.7)	—	166.2	体部2/3 大皿	コテロ整形、底面回転糸切り。	黄緑黄緑、白色粒子多い	良好 二次焼成	内外面 濃い黄緑	
12	14	土師器	小皿	9.9	1.7	4.6	71.5	ほぼ完形	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑やや多い、白色粒子多い、スコリア少量	良好	内外面 濃い黄緑	
13	6	土師器	小皿	9.4	1.7	3.9	58.5	完形	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑やや多い、白色粒子多い	良好	内外面 濃い黄緑	
14	破土	土師器	小皿	9.5	1.8	4.5	62.8	完形	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑やや多い、白色粒子少量、白色粒子多い	良好	内外面 濃い黄緑	
15	2	土師器	小皿	9.9	2.0	3.9	69.1	口縁1/3 大皿	コテロ整形、底面回転糸切り(左)。	黄緑少量、白色粒子多い	良好	内外面 濃い黄緑	
16	破土	土師器	小皿	9.1	1.8	4.7	54.6	口縁1/3 大皿	コテロ整形、底面回転ヘラ整形。	黄緑黄緑、白色粒子多い	良好	内外面 濃い黄緑	

第44表 SI37 出土遺物観察表(2)

図録番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
17	15	土師器	小瓶	9.6	1.65	4.8	68.7	ほぼ完整	コテロ型形、底部回転糸切り(左)。	白色粒子多い	良好	内外面 にごい黄緑	
18	16	土師器	小瓶	(9.8)	2.2	3.4	46.8	口縁1/4～底部	コテロ型形、底部回転糸切り(左)。	白色粒子多い	良好	内外面 にごい黄緑	内外面黄緑
19	17	土師器	小瓶	9.8	2.3	4.8	67.3	ほぼ完整	コテロ型形、底部回転糸切り(左)。	灰身微量、白色粒子多い	良好	内外面 にごい黄緑	
20	12	土師器	有台鉢	11.8	3.0	6.4	192.8	口縁1/3欠損	コテロ型形、底部回転糸切り、直口・体部内に内外面を有す。	灰身やや多い、白色粒子微量、白色針状物質少量	良好	内外面 黄緑	内外面黒色地味
21	13	土師器	有台鉢	9.5	2.0	3.2	82.6	ほぼ完整	コテロ型形、底部回転糸切り後十字。	灰身やや多い、白色粒子少量、スコーリア微量、白色針状物質微量	良好	内外面 灰黄緑	
22	14	土師器	有台鉢	(9.6)	(3.7)	6.6	84.7	体部2/3欠損	コテロ型形、底部回転糸切り。	灰身・白色粒子・白色針状物質微量	良好	内外面 にごい黄緑	内外面少量
23	18	灰釉陶器	甗	—	(1.6)	—	3.0	体部片	胎壁は薄く緩やか内湾し立ち上がる、外面回転ヘラケズリ痕回転ナラ。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土 灰白釉 緑青緑色自然釉	図録K14～16【17】実98-2-088
24	19	灰釉陶器	甗・甗類	—	(1.9)	(5.9)	8.9	底部分	胎壁は比較的厚く断面はほぼ円形を呈する2/3内湾し立ち上がる、内湾が深い。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土 灰白釉 緑青緑色自然釉	図録499【17】実98-2-089・98-2-090
25	20	灰釉陶器	長頸瓶	—	(6.0)	—	18.1	胎部分	胎壁は比較的厚く緩やかに外反し立ち上がる、外面に微く密なコロロ目。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土 灰白(赤褐色) 緑青緑色自然釉	図録K14【18】実98-2-091
26	21	灰釉陶器	長頸瓶	—	(3.0)	(3.4)	54.7	体下部～底部1/4	胎壁は比較的厚くほぼ直線的に立ち上がる、直口は比較的厚く胎面部分で内湾面を有す。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土 灰白釉 緑青緑色自然釉(内面釉垂れ)	図録499【18】実98-02-092
27	22	灰釉陶器	長頸瓶	(19.6)	(2.0)	—	6.6	口縁1/5	胎壁は比較的厚く緩やかに外反し立ち上がり胎面に準ずる、胎部のメタハラは大きい。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 灰白釉 緑青緑色自然釉	実測片ヶ立1【18】実98-2-093
28	23	灰釉陶器	長頸瓶	—	(1.7)	—	9.7	胎部分	胎壁は比較的厚く緩やかに外反し立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	普通	胎土 灰白釉 緑青緑色自然釉	図録499【18】実98-2-094
29	24	灰釉陶器	長頸瓶	—	(2.5)	—	10.3	胎部分	胎壁は比較的厚く緩やかに外反し立ち上がり胎面に準ずる、胎部のメタハラは不明、胎壁は薄く丸みを帯びて立ち上がる。	鉄分の噴出し緩やかに少量	良好	胎土 灰白釉 緑青緑色自然釉	図録K14～16【18】実98-2-095
30	25	須恵器	長頸瓶	—	(1.3)	—	8.1	胎部分	胎壁は比較的厚く、胎底と胎部の接合は良好。	鉄分の噴出し緩やかに多い	良好	胎土 灰白釉 緑青緑色自然釉	実測片ヶ立1【18】実98-2-096
31	26	瓦	平瓦	タテ(12.6)	ヨコ(13.8)	厚3.4	488.4	干線・左側縁残存	胎面直上圧痕、側・下縁ケズリ、凸面縁目回転痕、端・側縁ケズリ。	白色粒子少量	良好	内外面 黄緑	
32	27	瓦	丸瓦	タテ(12.2)	ヨコ(19.8)	厚1.8	286.4	干線・右側縁残存	胎面直上圧痕、胎面直上切目痕、市田圧痕、端・側面ケズリ。	灰身・白色粒子少量	良好	内外面 灰	
33	28	土製品	砥石	タテ(4.7)	ヨコ(3.2)	厚1.4	43.3	上面欠損	表面不正形状を呈するもので、胎面(胎地)は磨けが観察される。	灰身・白色粒子少量	良好	内外面 にごい黄緑	
34	29	金属製品	銅線	(16.0)	(2.0)	厚0.02～0.15	6.0	口縁～体部1/4	いびつな形状、胎部の丸味は少なく、やや大きく開く、口縁縁は五線状に厚くなる、内面には片断状のわずかな穴が見られる、緑青色を呈し、中核層が見られるもの、状態は良い。				
35	30	鉄製品	金具	タテ(8.2)	ヨコ(11.6)	厚0.2	36.6	上面先端部欠損	コテロ型形の製法、幅約1cmの薄いつば状を付けた状態、取り付けの溝や成形は確認できない、判別、付着物もない。				
36	31	石製品	砥石	タテ(5.4)	ヨコ(12.2)	厚(1.7)	21.7	上下右欠損	携帯型・短尺、欠損により裏・左面の使用痕が残る、表面は凹面、左面は平ら面を呈する、石材・凝灰岩。				

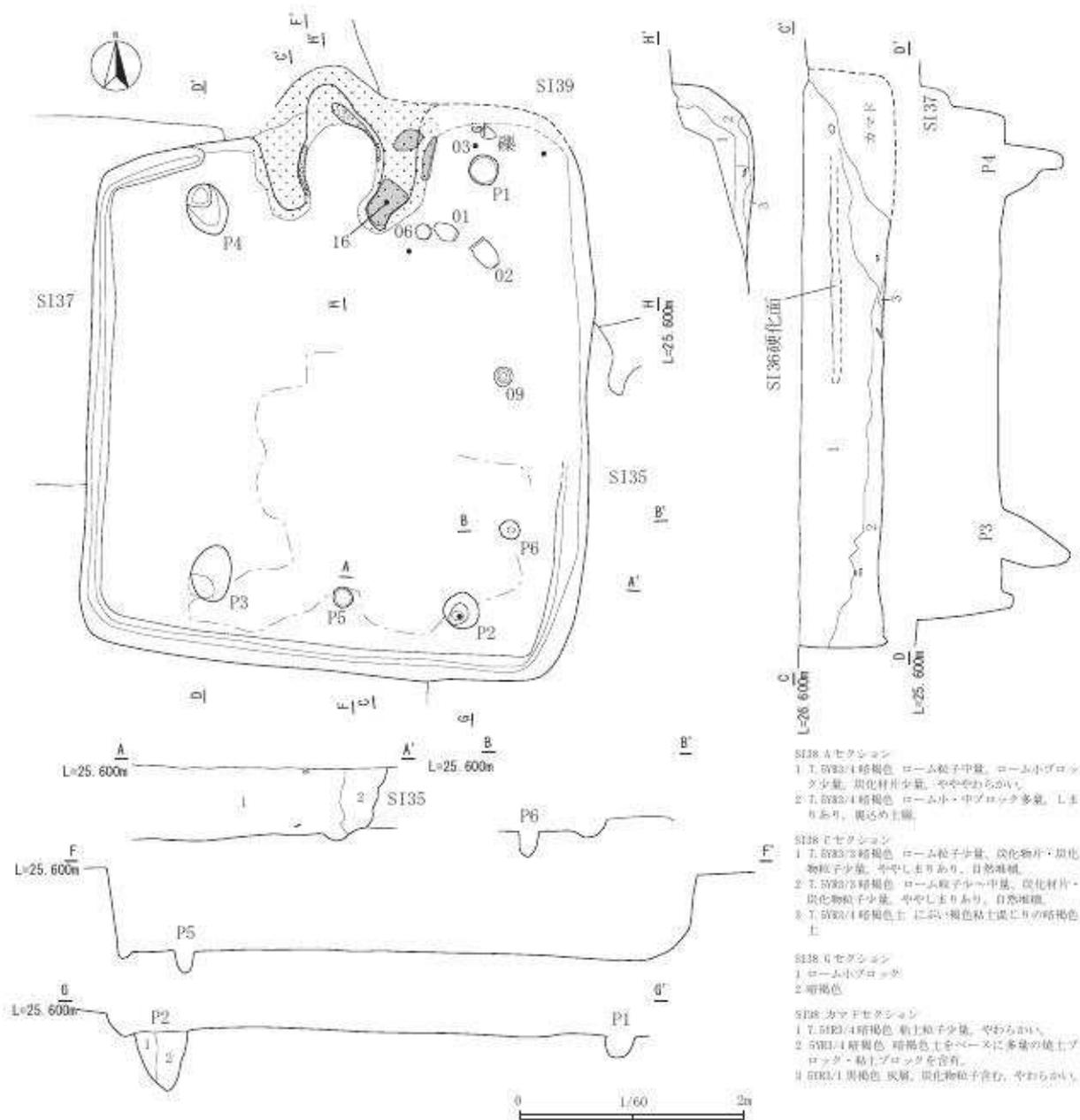
SI38 (第78～80図、第45・46表、遺構図版9・10、遺物図版13・14)

検出位置：調査区北西端部B・C2グリッド。平面形状：方形。主軸方向：N。規模：5.2m × 4.47m。確認面下の深さ：63cm。覆土：3層に分層され、自然堆積。柱穴：コーナー部分に各1基、南壁際中央部分に1基、東壁際南寄りに1基の5基が検出されている。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周するものであろうか、北東コーナー側は明瞭ではない。幅26cm、深さ18cm前後。床面：平坦。カマド：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は156cmで、西壁から40cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく湾曲して設置される。その他付帯施設：なし。重複関係：SI35・36・37・39と重複関係にある。SI35よりも新しく、SI37よりも古い。SI36は本住居よりも新しいが、床面の一部を検出したのみで他の遺構との新旧関係は不明。SI39は本住居跡により切られ、これらの新旧関係では最も古くなる。

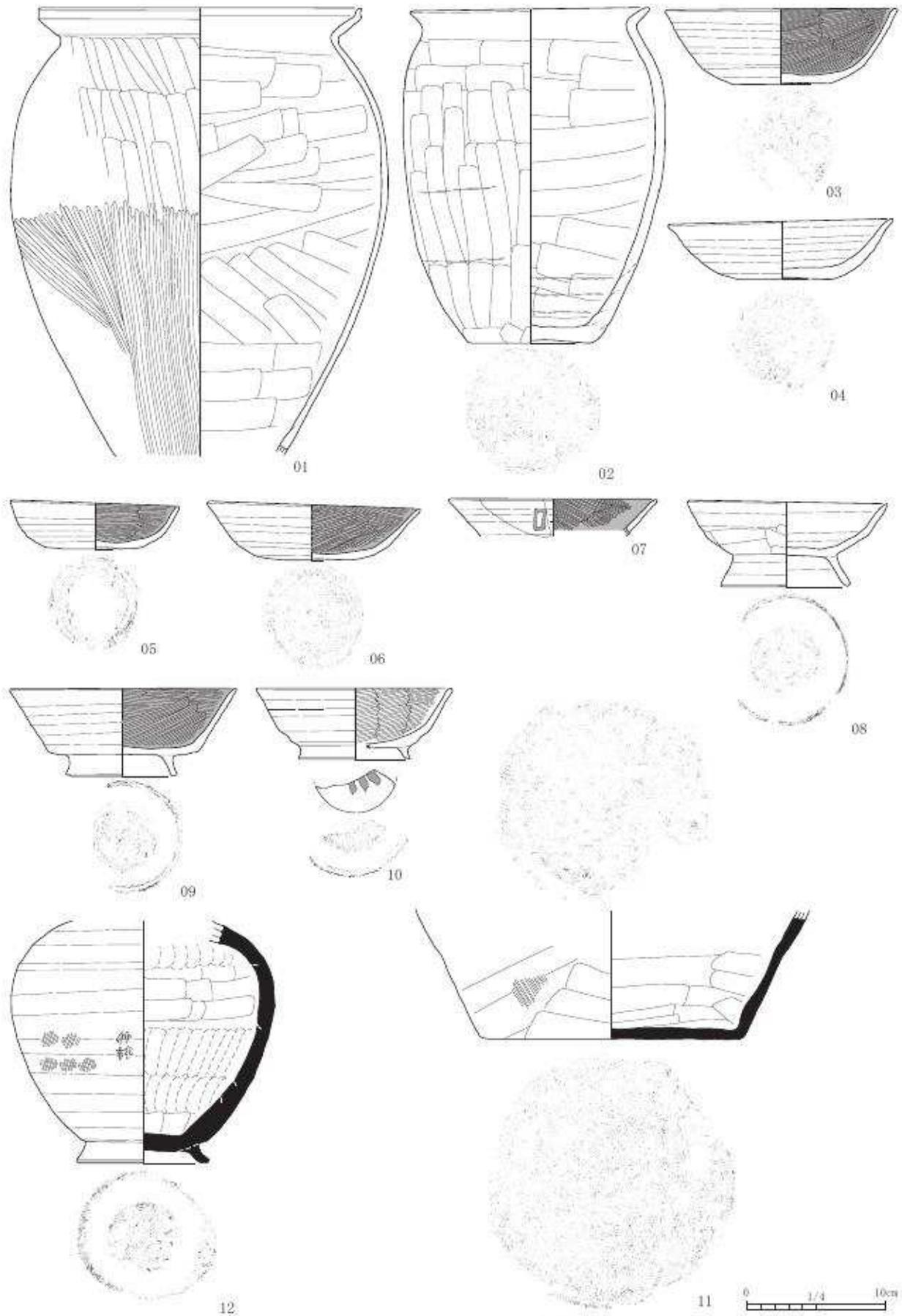
掲載遺物：土師器無台杯5点(墨書土器1点「□」、有台杯3点(墨書土器1点「□」、甕2点、須恵器無台杯5点(漆付着1点)、有台杯3点(刻書1点「□」、大甕1点、瓶1点(刻書土器「仲林」)、緑釉陶器皿1点(猿投K90)、灰釉陶器長頸瓶1点(猿投K14～K90)、平瓦1点、丸瓦1点、砥石2点。

その他未掲載遺物：土師器 25055.6g、須恵器 10203g、瓦 172.9g、鉄製品 144.5g、石製品 586.9、磔 1161.6g。

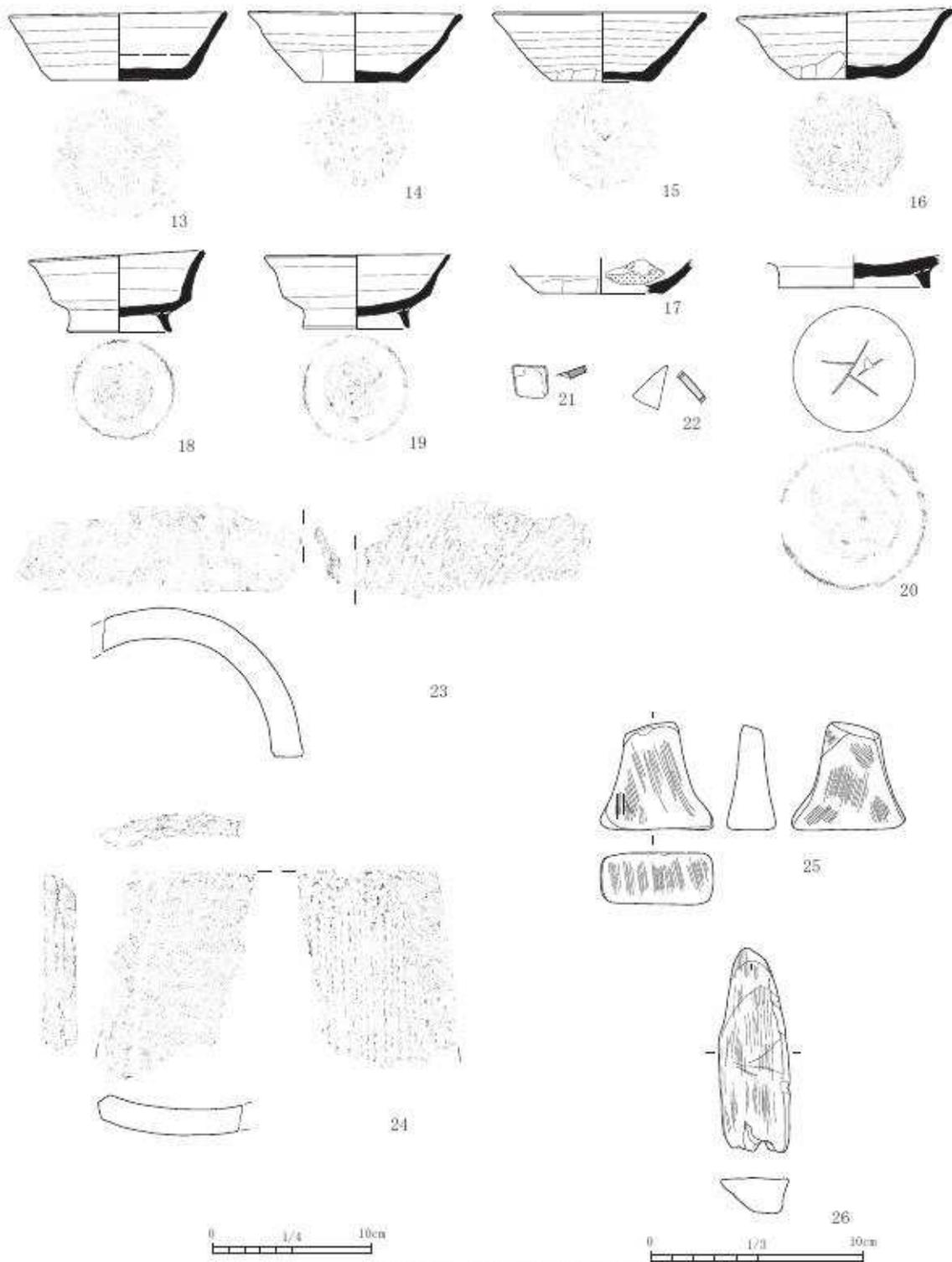
遺構の帰属時期：土師器の甕・無台坏、有台坏等から9世紀後半の遺構と判断される。一方で、12～20の須恵器は9世紀前半の遺物であり S135 の遺物、21・22 の灰釉陶器は9世紀後半の遺物とすれば本遺構の遺物であろう。同時に、S137 出土の灰釉陶器も本遺構に伴うものの可能性が高い。



第78図 S138



第79図 SI38 出土遺物(1)



第80図 SI38 出土遺物(2)

第45表 SI38 出土遺物観察表(1)

発掘番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	形状の特徴	胎土	装束	色調	備考
01	3	土師器	甕	(23.0)	(31.7)	—	558.9	口縁1/2～6割削 L.0	最大径を上方に有し口縁は削み上げられる。口縁は内外両方に横ナデ、胴部外面下半はミナギ、内面はナデ。	炭目少量、白色粘土多し。	真砂	内面 に深い溝 外面 横	高瀬型甕
02	4	土師器	甕	16.8	23.4	3.8	1,609.2	口縁完形	胴部の張り多し細い寸胴形のも。口縁は内外両共に横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナゲ装束、輪縁部装束が浅く。	白色粘土少量	真砂	内外面 に深い溝 横	此器本朝儀

第46表 S138 出土遺物観察表(2)

品目番号	注記	種類	形状	直径	高さ	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
93	1	土師器	無台坪	16.4	5.4E	7.0	257.2	ほぼ完形	ロクロ製形。体部下端-底面回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	炭母・白色粘土や多い、白色針状物質多い	良好	内面 黒 外面 にごい黄緑	内面黒色処理
94		土師器	無台坪	16.0	4.1	6.4	197.3	口縁1/2欠損	ロクロ製形。底面回転ヘラケズリ(左)。	炭母・白色粘土・赤色粘土・黒色粘土・スコリア少量	良好	内面 にごい黄緑 外面 にごい黄緑	
95		土師器	無台坪	11.9	3.2	7.0	99.9	ほぼ完形	ロクロ製形。底面回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	炭母多い、白色粘土少量、スコリアやや多い	良好	内面 黒 外面 にごい黄緑	内面黒色処理
96	2	土師器	無台坪	15.1	3.8	4.6	215.2	ほぼ完形	ロクロ製形。体部下端回転ヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ後ナツ。	炭母・白色粘土やや多い	良好	内面 黒 外面 にごい黄緑	内面黒色処理
97		土師器	無台坪	(14.7)	(2.6)	—	7.1	口縁破片	ロクロ製形。	炭母少量、白色粘土やや多い	良好	内面 黒 外面 にごい黄緑	内面黒色処理 黒書「口」
98		土師器	有台坪	14.1	6.1	9.0	209.0	口縁1/4欠損	ロクロ製形。体部下端広く手持ちヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ。底面は高さがある。	炭母・白色粘土少量、黒色粘土やや多い、スコリア微量	良好 二次地蔵 付	内外面 にごい黄	
99	5	土師器	有台坪	16.1	6.2	7.2	297.8	ほぼ完形	ロクロ製形。底面回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	炭母・白色粘土少量	良好	内面 黒 外面 にごい黄緑	内面黒色処理 内外面共に漆喰塗 有物付着
10		土師器	有台坪	(13.6)	(5.0)	(5.0)	65.6	1/4	ロクロ製形。体部下端-底面回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	炭母・白色針状物質多い、白色粘土少量、黒色粘土やや多い	良好	内面 黒 外面 にごい黄緑	内面黒色処理 黒書「口」
11		須恵器	大甕	—	(8.2)	18.5	482.9	胴部下端-底面	パケツ型。胴部はヘラケズリが行われているが、部分的に平行明きが確認される。内面はナツ。底面は平行明きが施されている。	炭母・白色粘土多い、スコリアやや多い	還元不良	内面 にごい黄 外面 焼灰	赤目
12	16	須恵器	甕	—	(17.0)	8.7	1,752.7	胴部-底面	ロクロ製形。外面胴部平行明き僅かに残存される。下端-底面回転ヘラケズリ。内面胴部回転-ナツ製形が行われている。胎壁は厚い。	白色粘土・炭分の増出しやや多い	良好	内面 黄灰 外面 灰	黒書「物申」
13		土師器	無台坪	13.4	4.1	6.5	135.7	口縁-体部1/2欠損	ロクロ製形。底面の調整不明。	炭母多い、白色粘土少量	良好	内面 灰黄 外面 黄灰	新治産
14	コマド	須恵器	無台坪	13.1	4.2	6.5	150.9	ほぼ完形	ロクロ製形。体部下端広く手持ちヘラケズリ。底面一方の手持ちヘラケズリ。	炭母少量、白色粘土多い、スコリア微量	良好	内外面 黄灰	新治産
15		土師器	無台坪	13.0	4.2	6.2	120.3	口縁1/4欠損	ロクロ製形。体部下端手持ちヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ後一方向の手持ちヘラケズリ。	炭母・白色粘土多い	やや還元 不良	内面 黄灰 外面 にごい黄緑	新治産
16	カケツ1	須恵器	無台坪	13.2	4.1	6.1	162.7	口縁1/4欠損	ロクロ製形。体部下端手持ちヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ後ナツ。	白色粘土多い	良好	内外面 焼灰	ヘラ記号: 新治産
17		土師器	無台坪	—	(2.2)	(7.8)	16.2	体部-底面の破片	ロクロ製形。体部下端手持ちヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ。	白色粘土多い	良好	内外面 黄灰	漆付着
18		土師器	有台坪	10.8	4.7	6.2	116.5	ほぼ完形	ロクロ製形。体部下端-底面回転ヘラケズリ。	白色粘土多い	やや還元 不良	内面 焼灰 外面 黒黄	新治産 内面自然釉
19	コマド	須恵器	有台坪	(11.4)	4.3	6.4	88.7	口縁-体部1/2欠損	ロクロ製形。体部下端-底面回転ヘラケズリ。	炭分の増出し多い、やや平緩やや多い	良好	内面 灰黄 外面 黄灰	管筒底 内面自然釉
20		土師器	有台坪	—	(2.0)	9.4	143.9	底面のみ	ロクロ製形。身辺で緩やかに内湾する。高さは「H」の字に付される。内面の凹底及び凹底の代償から転用産の可能性あり。	白色粘土・炭分の増出し少量、小礫微量	良好	内外面 黄灰	転用産 黒書
21	コマド	埴輪陶器	甕	—	(6.8)	—	2.4	体部片	胎壁は比較的薄く僅かに内湾し立ち上がる。表面全体を輪転産にヘラミガキ。	炭分の増出し微量	良好	胎土 白 釉 漆緑	横長X90 縦長 【298】実98-2-008
22		埴輪陶器	長頸甕	—	(2.10)	—	2.4	胴部片	胎壁は比較的薄くやや内湾し立ち上がる。	炭分の増出し少量	良好	胎土 灰白 釉 漆緑 全体に黄色がかった 漆緑。自然釉 の可能性あり	横長X14 縦長 【305】実98-2-007
23		土師器	瓦	瓦	タテ (5.7)	ヨコ (10.9)	厚 1.9	右側縁残存	凸面ヨコナツ。前面右側内湾、側面ケズリ。側面ケズリ。	白色粘土少量	良好	内外面 黄灰	
24		土師器	瓦	平瓦	タテ (11.0)	ヨコ (5.0)	厚 1.9	上縁・左側縁残存	前面右側内湾(右縁あり)、側面ケズリ。凸面側面回転内湾。底・側面ケズリ。	炭母微量、白色粘土やや多い	良好	内外面 黄灰	
25		土師器	石製品	礫石	タテ 5.1	ヨコ 5.38	厚 2.5	上縁欠損	磨削型・焼け紙。上縁縁断面も使用。他の面とも使用面。表面は凸面を呈する。右側面の下部には溝状の凹を有する。石材：凝灰岩。				
26		土師器	石製品	礫石	タテ 9.5	ヨコ 9.3	厚 2.1	不詳	磨削型・焼け紙。棒状の打削磨の上面を使用したものか。表面以外に欠損面であるのか不明。使用面は凸面を呈する。石材：凝灰岩。				

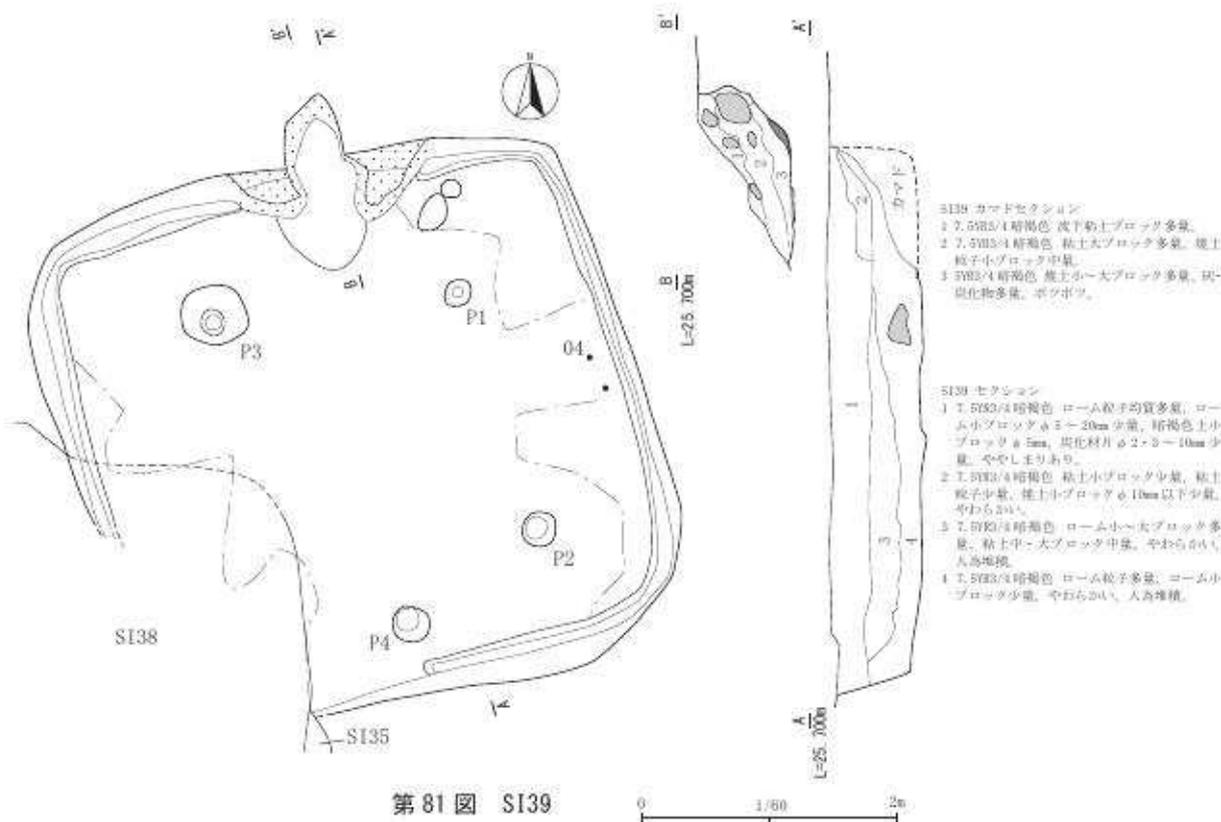
SI39 (第81・82図、第47・48表、遺構図版10、遺物図版14)

検出位置：調査区北西端部 B2・3 グリッド。平面形状：ほぼ正方形。主軸方向：N-12°-W。規模：4.37m × 4.5m。確認面下の深さ：65cm。覆土：暗褐色土の4層に分層され、自然堆積。柱穴：南西を除く3方の壁際に支柱穴、南壁際の中央付近に入口ピット1基が検出されている。壁溝：カマド部分を除きほぼ全周するものである。幅17cm前後。床面：平坦。カマド：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は141cmで、西壁から51cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築される。重複関係：SI38によって南西コーナー部分を切られている。SI35との切り合い関係は不明瞭。

掲載遺物：土師器無台坏2点（墨書土器1点「十万」、小皿1点、須恵器無台坏1点、蓋1点、羽釜1点、灰釉陶器碗1点（猿投 K14 ~ K90-1）。

その他未掲載遺物：土師器 5500.5g、須恵器 3165.5g、瓦 340.8g、陶器 7.5g、礫 380.9。

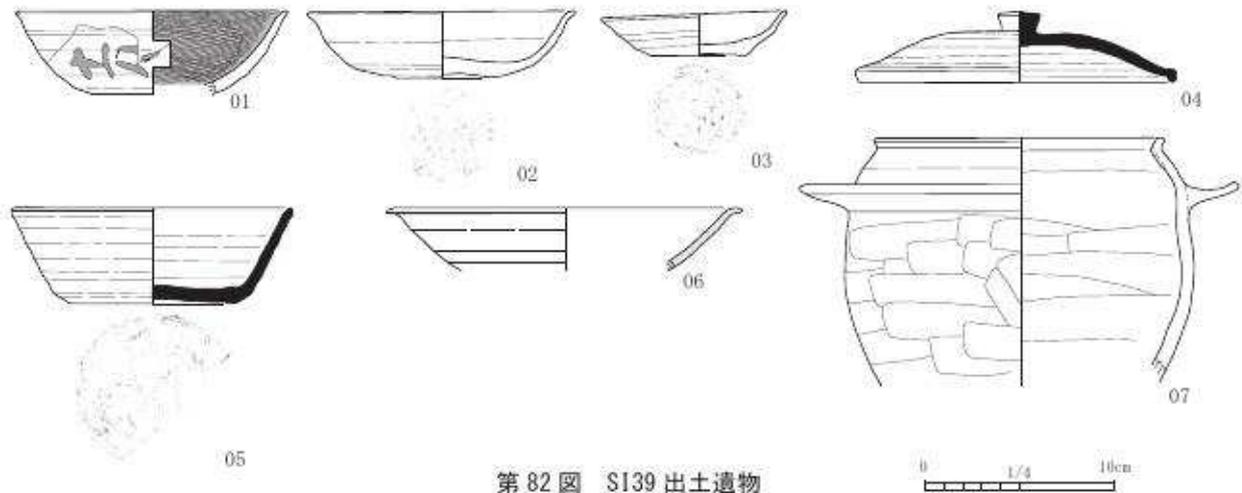
遺構の帰属時期：須恵器の坏・蓋と灰釉陶器碗は8世紀後半から末の遺物、その他の土師器は羽釜の出現も含め10世紀後半の時期が想定できる。遺構の形状及び遺物の出土状況から判断して8世紀末の遺構と判断されるが、10世紀後半代の遺物をSI37由来とするのは直接重複関係がないことから齟齬がある。何らかの土坑または調査時における遺物の取り上げミスの可能性もある。



第81図 SI39

第47表 SI39 出土遺物観察表(1)

掲載番号	注記	種類	形状	口径	器高	底径	重量	存在	形状の特徴	胎土	地味	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	(12.0)	(4.5)	—	51.1	口縁へ脚部1/4	口縁部膨らみ、内面ミガキ。	灰味多い、白色粘土や多い。	良好	内面 黒 外面 にぶい肌	内面黒色処理 墨書「十万」
02	覆土	土師器	無台坏	13.8	3.5	1.9	136.0	口縁4/1欠損	口縁部膨らみ、口縁部切り欠損。(左)。	黒色・白色粘土・黒色粘土多い、スコーリア少量。	良好	内外面 橙	
03	覆土	土師器	小皿	9.5	2.1	1.9	58.2	口縁4/1欠損	口縁部膨らみ、口縁部切り欠損。(右)。	灰味多い、白色粘土・黒色粘土少量。	良好	内外面 にぶい肌	
04	カマド-1	須恵器	竈	(16.0)	(3.6)	7/8径 2.2	165.9	口縁7/8欠損	口縁部膨らみ、フタは割片状を呈す。中央の回転軸への穴径は12/5、造りは無い。	小〜中粒多い、白色針状物質微量。	良好	内外面 灰	内面朱色灰釉 転用遺物



第 82 図 S139 出土遺物

第 48 表 S139 出土遺物観察表 (2)

品目番号	出所	種類	器種	口径	器高	口径	重量	検出	器形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
05	覆土	須恵器	第六作	(14.5)	4.9	5.7	114.3	2/3	口縁部を、体部下端部へフラクスリ、底面0度へフラクスリせず。	小一中層少量、雲母・白色斜状物質微量	良好	内外面 灰白	北壁へフラクス
06	覆土	須恵器	椀	(18.0)	(12.5)	—	7.6	口縁へ体部片	体部下位を回転へフラクスリして回転ナゲ、器壁は薄く扁平に内湾して立ち上がり口縁部で狭く赤区。	鉄分の検出し微量	良好	胎土 灰白 釉 灰赤緑	後段K11-90-1【38】 実28-2-088
07	覆土	土師器	貯蔵	(14.7)	(12.7)	—	209.6	口縁へ体部片 1/3	口縁部を、口縁で折戻した後に斜状に直線フラクスリが行われている。器は横ナゲ、胴部前方のへフラクスリ、内面ナゲ。	雲母少量、白色斜状物質微量	良好	内面 灰白 外面 黄緑	

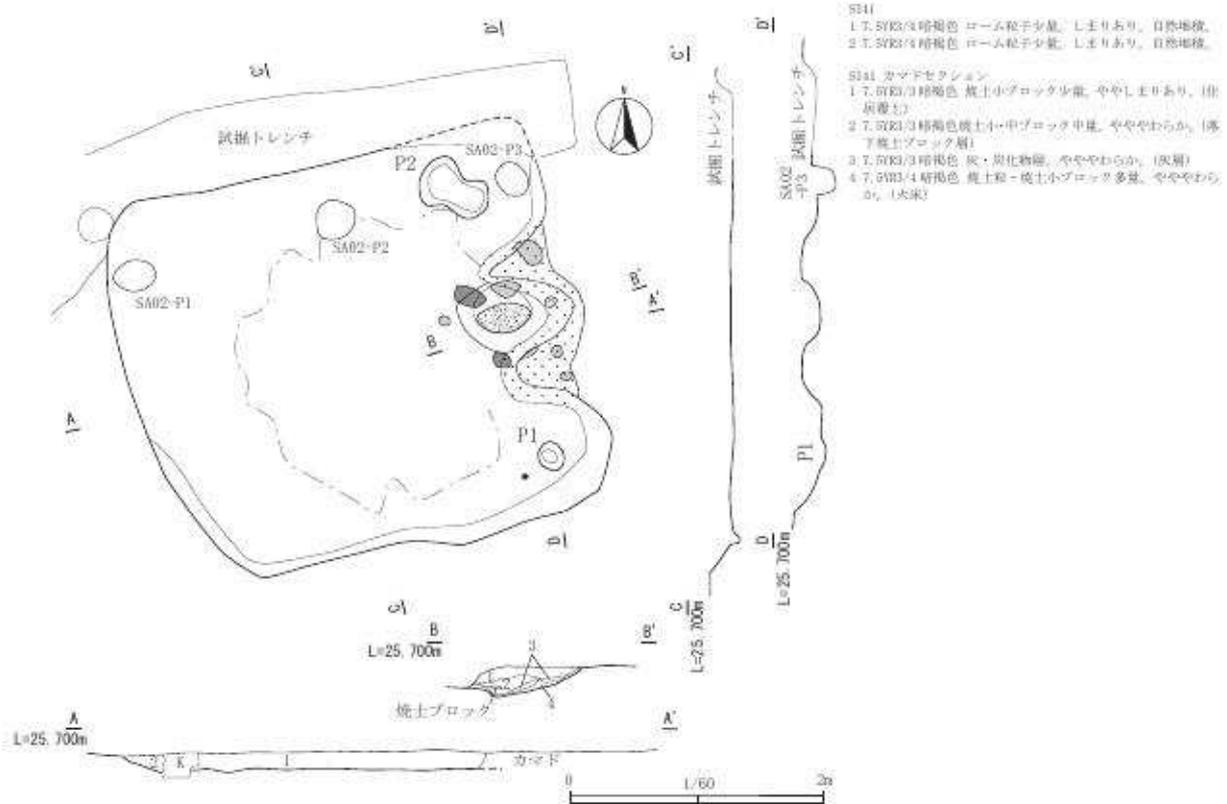
S141 (第 83・84 図、第 49 表、遺構図版 10、遺物図版 14)

検出位置: 調査区北西端部 B2 グリッド。**平面形状:** 正方形。**主軸方向:** N-69°-E。**規模:** 3.15m × 3.57m。**確認面下の深さ:** 14 cm。**覆土:** 暗褐色土を基調に 3 層に分層される。自然堆積。**柱穴:** 南東コーナー部分に 1 基、北側壁寄りに 4 基が検出されている。後者の内 3 基はほぼ等間隔に配列されるもので、北側に近接する SA01 同様の配置関係にあることから、柵跡 (SA02) の可能性を考えた。したがって本住居に伴う可能性があるピットは P1・2 の 2 基と判断される。**壁溝:** エレベーション (C) では南壁に確認できる。**床面:** 平坦。**カマド:** 北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 82 cm で、西壁から 60 cm ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設:** なし。**重複関係:** SA02 と重複関係にあり、本住居跡より新しいものと判断される。

掲載遺物: 土師器無台坏 1 点、有台坏 2 点 (刻書 1 点「×」)、須恵器無台坏 1 点 (刻書 1 点「×」)、丸瓦 1 点。

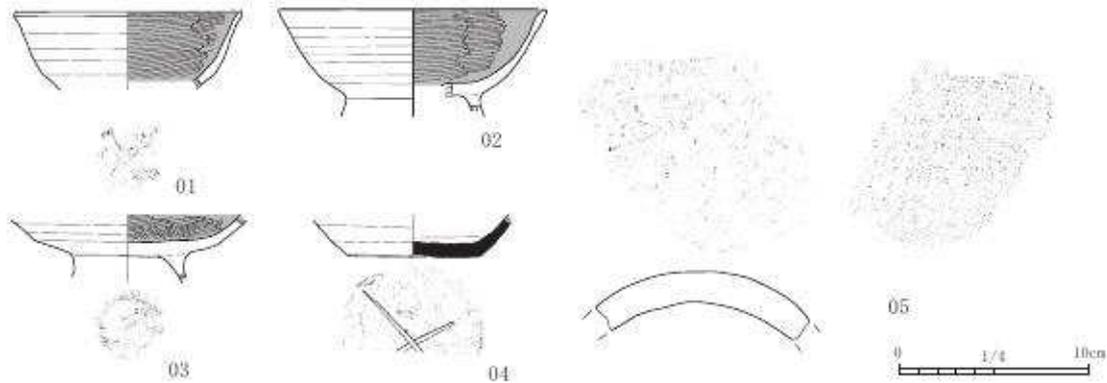
その他未掲載遺物: 土師器 1609.4g、須恵器 1117.7g、瓦 109.3g、鉄塊 114.7g、礫 158.9。近世以降の遺物: 陶器 28.2g。

遺構の帰属時期: 土師器内黒有台坏 2 点が出土しており、10 世紀前半の遺構と判断される。一方、須恵器 04 はやや古い遺物で混入した可能性がある。



SI41
 1. 5YR5/4 暗褐色 コーム粒子少量、しりりあり、自然堆積。
 2. 5YR5/4 暗褐色 コーム粒子少量、しりりあり、自然堆積。
 SI41 マヤドセクション
 1. 7.0YR3/3 暗褐色 焼土小ブロック少量、ややしりりあり。(1層 灰層上)
 2. 7.0YR3/3 暗褐色 焼土+中ブロック中量、やややわらか。(焼土小ブロック層)
 3. 7.0YR3/3 暗褐色 灰・炭化物層、やややわらか。(灰層)
 4. 7.0YR3/4 暗褐色 焼土+焼土小ブロック多量、やややわらか。(灰層)

第83図 SI41



第84図 SI41 出土遺物

第49表 SI41 出土遺物観察表

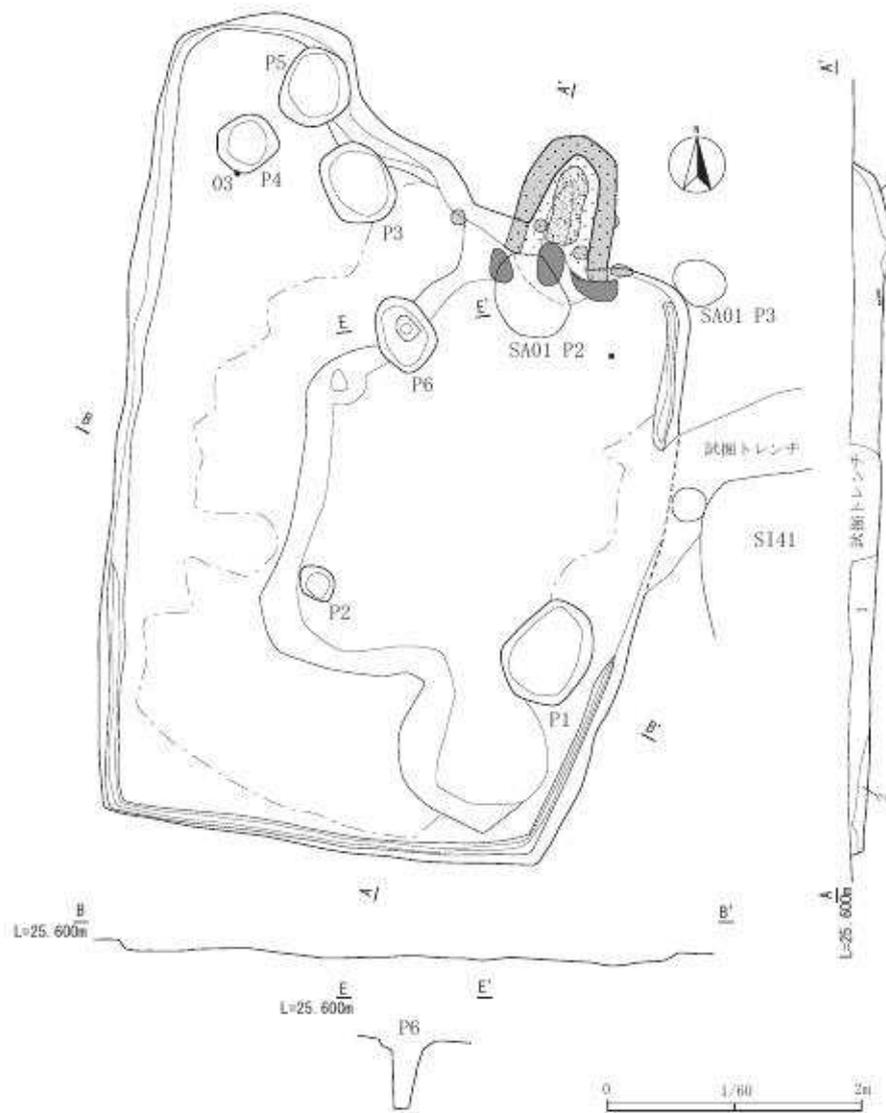
品目番号	品記	種類	群種	口径	口径	底径	高さ	底厚	重量	残存	形状の特徴	焼土	焼成	色調	備考
01	カマド	土師器	黒台杯	(12.0)	(4.6)	—	31.5	0.6	31.5	口縁~胴部 1/3	ロクロ製。底へラケズ。内面にカキ。	炭母多い。	良好	内面 暗灰 外面 灰黄	
02	焼土	土師器	有台碗	(13.9)	(5.6)	—	39.1	0.6	39.1	口縁~底 1/3	ロクロ製。体部下端に底へラケズ。内面にカキ。底部回転し切り残す。	炭母・白色粒子少量。	良好	内面 灰黄 外面 灰黄	
03	焼土	土師器	有台碗	—	(3.5)	—	101.2	—	101.2	体部下端~底部上縁	ロクロ製。体部下端に底へラケズ。底部回転し切り残す。	炭母・白色粒子少量。	良好	内面 暗灰 外面 灰黄	内面黄色処理 内面底部にカキ状 刻痕「×」 内面に黒色物付着
04	カマド	土師器	黒台杯	—	(2.2)	7.1	51.9	—	51.9	体部下端~底部上縁	ロクロ製。底部回転し切り残す。	白色粒子・白色粉状物質 やや多い。	良好	内外面 灰	刻痕「×」 新灰層
05	焼土	瓦	丸瓦	タテ (10.7)	ヨコ (11.3)	厚 1.8	232.9	—	232.9	縁~胴縁 残りす	内面平。内面布目状。	炭母少量。白色粒子少量。	良好	内面 灰黄 外面 灰黄	

SI42 (第85・86図、第50表、遺構図版10、遺物図版14)

検出位置：調査区北西端部 A・B1、A・B2 グリッド。**平面形状：**長方形。**主軸方向：**N-11°-E。**規模：**6.5m × 4.42m。**確認面下の深さ：**23 cm。**覆土：**確認面が浅く暗褐色土の3層。**柱穴：**東壁中央部分に1基、床面段差部分にて1基、棚状に突出する北西部分に3基、合計6基が検出されている。**壁溝：**カマド部分を除きほぼ全周する。幅14 cm前後。**床面：**カマドの西側袖延長から南側壁に向かい蛇行する、西側がおよそ10 cmの段差を有する。**カマド：**北壁東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は82 cmで、西壁から60 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が南北方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設：**北西コーナー部分が方形に突出しており棚状の施設が想定される。**重複関係：**SA01と重複し、本住居跡の方が古い。

掲載遺物：土師器坏無台坏1点(墨書「口」)、有台埴1点、小皿3点、有台皿1点、有台小皿1点、灰釉陶器碗1点(美濃カ)、長頸瓶1点(猿投K90)、壺・瓶類1点(美濃不明)、平瓦1点、鉄製品金具1点。

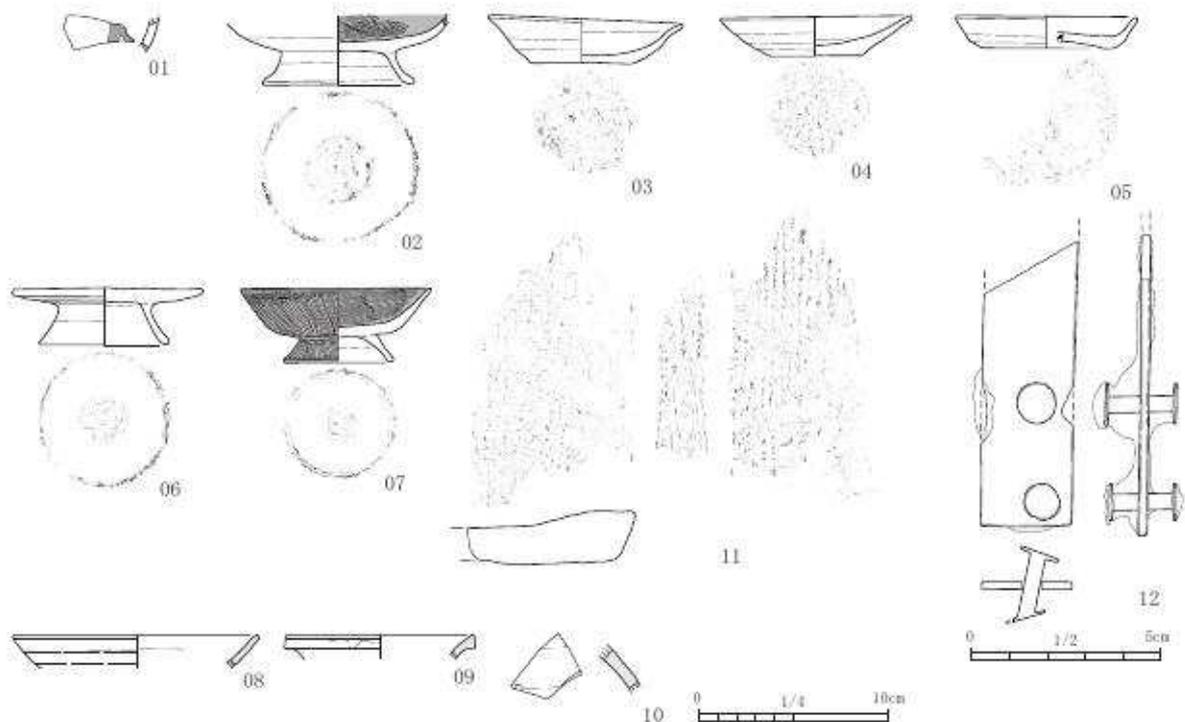
その他未掲載遺物：土師器 4202.2g、須恵器 1037.6g、瓦 25.6g、鉄塊 96.1g、礫 234.1。近世以降の遺物：陶器 52.1g。



遺構の帰属時期：土師器小皿、黒色土器B類埴の出土があり11世紀と判断した。灰釉陶器片が出土しているが9世紀後半代の黒笹90号窯式で、時期差がある。

- SI42 セクション
 1. 7.5M3/4 暗褐色 コーシ粒子少量、炭化物粒子極少量、ややしまりあり、自然堆積。
 2. 7.5M3/4 暗褐色 コーシ粒子少量、ローソクコック少量、ややしまりあり、自然堆積。
 3. 7.5M3/4 暗褐色、ローソクコック少量、粘土小・平ゾロット中量、ややしまりあり、自然堆積。

第85図 SI42



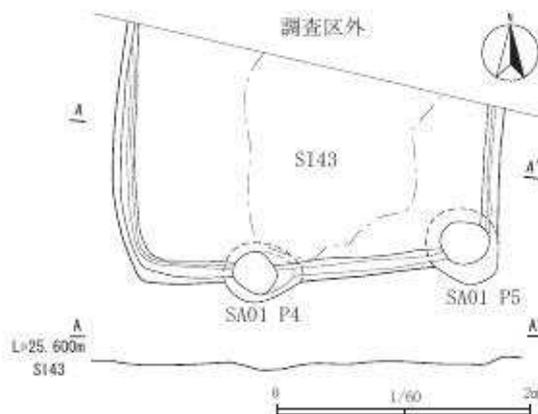
第86図 SI42出土遺物

第50表 SI42出土遺物観察表

品目番号	片記	種類	形種	口径	縁高	底径	直径	残存	素材の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	装土	土師器	無台外	—	高さ (1.2)	—	3.9	体部破片	ロクロ製。底面回転ヘラケベリ跡ナシ。内面ツガキ。	炭母少量。	良好	内外面 黒	黒漆「口」
02	覆土	土師器	有台内	—	(2.7)	7.9	83.9	体部下端一底径	ロクロ製。底面回転ヘラケベリ跡ナシ。内面ツガキ。	白色粘土やや多い	良好	内面 黒褐色 外面 にぶい黄褐色	内面黒色処理
03	—	土師器	小皿	10.3	2.3	5.4	76.8	ほぼ完整	ロクロ製。底面回転ヘラケベリ跡(左)。	炭母・黒色粘土少量。ネコリア少量、白色粘土多い	良好	内外面 にぶい黒	
04	覆土	土師器	小皿	10.0	2.0	5.0	61.0	3/4	ロクロ製。底面回転ヘラケベリ跡(左)。	白色粘土・黒色粘土多い。ネコリア少量	良好	内外面 にぶい黒	
05	覆土	土師器	小皿	(9.7)	1.5	7.0	67.6	1/2	ロクロ製。底面回転ヘラケベリ跡(左)。	炭母・白色粘土・ネコリア少量。白色斜紋物質少量	良好	内外面 にぶい黄褐色	
06	覆土	土師器	有台小皿	10.1	5.0	6.8	105.2	ほぼ完整	ロクロ製。底面回転ヘラケベリ跡ナシ。	炭母・白色粘土・ネコリア少量。白色斜紋物質少量	良好	内外面 黒	
07	覆土	土師器	有台内	10.0	3.8	6.5	81.9	2/3	ロクロ製。外面体部へ高ヒツガキ。内面ツガキ。底面回転ヘラケベリ跡ナシ。	炭母やや多い。白色粘土少量。白色斜紋物質少量	良好	内外面 黒褐色	内外面黒色処理
08	覆土	民権陶器	甗	(12.7)	(1.7)	—	4.0	口縁部10%	胎壁は比較的薄く器の外に内巻して立ち上がる立ち上がり縁部がある。口縁部はメリハリは小さい。	炭母の噴出し部が少量	良好	胎土 灰白 釉 白(黄け掛)	黒漆不明 【188】高98-2-200
09	覆土	民権陶器	長頸瓶	(9.9)	(1.5)	—	4.0	口縁部10%	胎壁は比較的薄く外立して立ち上がる立ち上がり縁部がある。口縁部はメリハリは小さい。	炭母の噴出し部が少量	良好	胎土 灰白 釉 暗赤緑	黒漆不明 【189】高98-2-100
10	覆土	民権陶器	甗・甗脚	—	(2.5)	—	6.5	胴部片	胎壁は比較的厚く丸みを帯びて立ち上がる。	炭母の噴出し部少量	良好	胎土 灰白 釉 暗赤緑	黒漆不明 【190】高98-2-102
11	覆土	瓦	平瓦	タテ (16.2)	ヨコ (8.7)	厚 2.0	155.0	右側縁部	断面半切り状。布目目肌。内面縦目切面。側面ツガキ。	炭母少量。白色粘土少量	良好	内面 にぶい黄褐色 外面 灰白	上面に平滑面あり。再利用率。
12	覆土	鉄製品	金具	長 (7.5)	幅 2.4	厚 0.2	88.7	上部欠損	用途不明の金具。長方形の縁部の一側に長さ2cm程、太さ4mmの筋が2本所れる。筋の長さから、測定材料は厚さ7~8mmと考えられるが、材質を確定できる痕跡はない。				

SI43 (第87・88図、第51表、遺構図版10、遺物図版14)

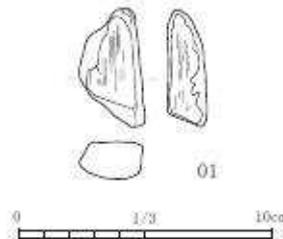
検出位置: 調査区北西端部 A2 グリッド。北側が調査区域外となる。平面形状: 不明。主軸方向: 不明。規模: 1 × 3.07m。確認面下の深さ: 6 cm。覆土: 住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。柱穴: 検出されていない。壁溝: 検出部分はほぼ全周する。幅 14 cm 前後。床面: 平坦。カマド: 調査区外に設置。その他付帯施設: なし。重複関係: SA02 と重複するが明確な新旧関係はつかめていない。



第 87 図 SI43

掲載遺物：砥石 1 点。その他未掲載遺物：土師器 271.7g、須恵器 93.3g。

遺構の帰属時期：出土遺物として掲載できたのは砥石 1 点で、時期が判断できる資料はない。



第 88 図 SI43 出土遺物

第 51 表 SI43 出土遺物観察表

品目番号	注記	種類	品名	口径	口径	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	石製品	砥石	タテ (4.7)	ヨコ 2.6	厚 1.6	20.5	下部欠損	磨製型・受け砥。表面・右側面が使用面。裏面は礫表皮を被す。使用面は両面とも平砥。右材：凝灰岩。				

第2節 土坑 (第 89～93 図、第 52～55 表、遺構図版 9・11・12、遺物図版 14～16)

本調査で検出された土坑は 1 号から 44 号まで番号を付しているが、土坑と判断したものは 35 基である。SK32 は遺構測量図・遺物ともなく欠番とした。また、遺構原図に土坑 (SK) 表記があるものの、無番のものについては個別に扱うことは避けた。遺構の詳細については一覧表 (第 52 表) にまとめた。ここでは、全体の概略を記載する。

土坑の平面形状は直径 2m 前後の円形を基調とし、断面形状は概ね鍋底状で、確認面から 1m 前後の深いものもある。大形の土坑は C2・3 グリッド中心の一群と、C5 グリッドを中心とする一群の 2 か所に分かれている。これらの土坑はおおむね住居跡よりも新しく、住居跡を切る形で検出されている。覆土中からは大量の遺物が出土している。SK42・43 では灰軸陶器の新しい段階 (虎溪山 1 号窯式) の遺物が出土しており、住居跡出土遺物との時期差には齟齬はない。

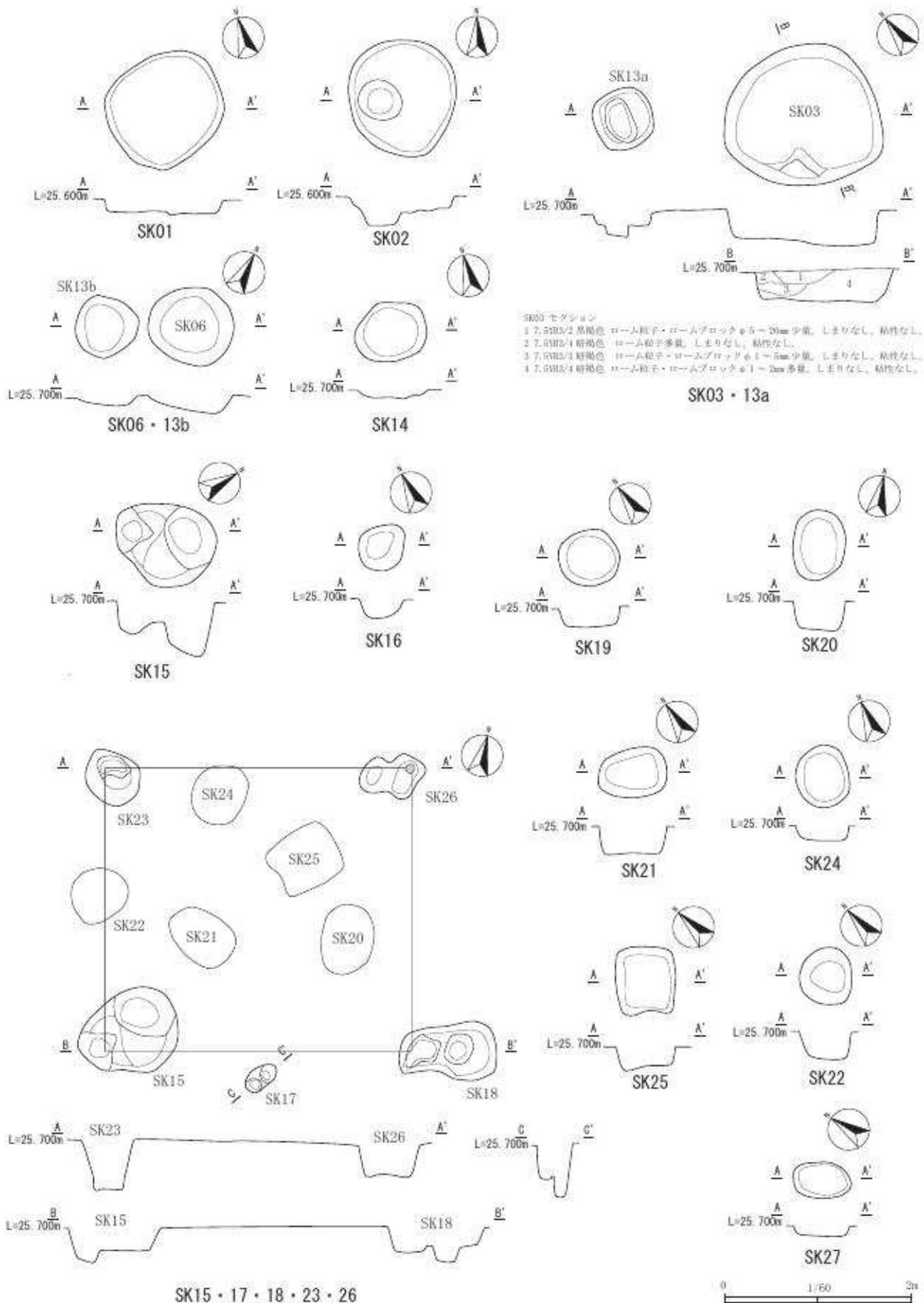
中形の土坑は不整形を呈するものが多く、C5 グリッドにおいて検出されている。前述の円形土坑群の集中する区域からはやや南側に偏在する。方形・楕円形・不整形等、形状に統一性はない。遺物の出土量もきわめて少なく、明確な時期判断はできていない。

小形で柱穴状を呈する土坑は、建物または柵・堀と区別されるもの以外についてはすべて土坑 (SK) と呼称した。分布は調査区の東から南側にやや偏在傾向がある。これは、掘立柱建物の分布と近接する。柱穴状の土坑でも、SK15・18・23・26 はいずれも 2 基のピットの重複となっており、方形に配置されることから住居跡が削平され、柱穴のみが残された可能性がある。柱穴状の土坑からの遺物は、やはり僅かで時期を特定できるものではない。

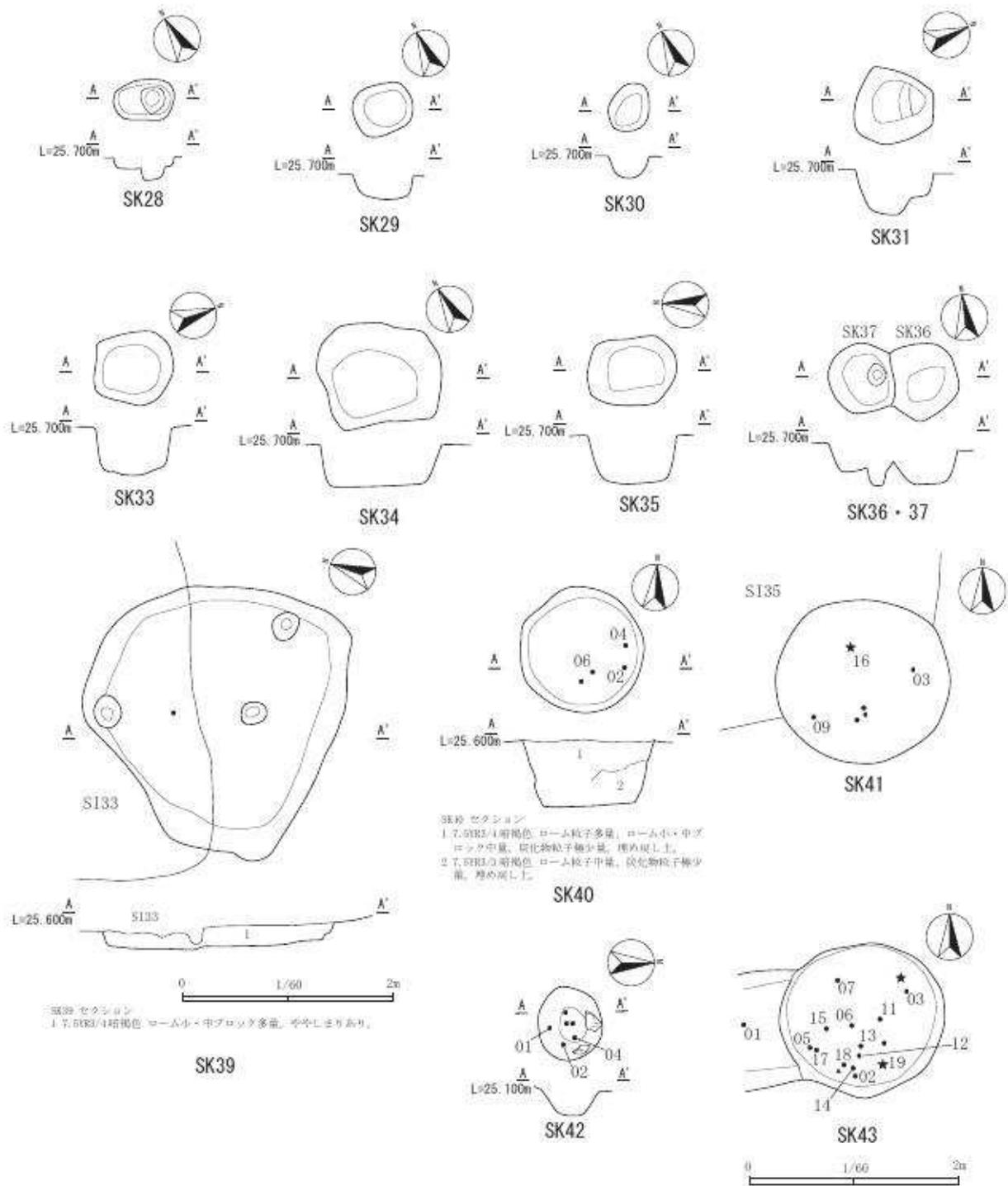
なお、SK05 からは緑釉陶器の出土があったが、同土坑は SK04 とともに SI07 に伴う P1・P2 と判断し、土坑番号は欠番とした。その他、欠番となった土坑は掘立柱建物跡 (SB) の柱穴に変更されたものである。

第52表 土坑一覽表

丁次番号	種別 グリッド	平面形	長軸方向	断面形	南北長 (cm)	東西長 (cm)	深さ (cm)	掲載遺物	未掲載遺物	備考	
01	B-C5	楕円	N-41°-E	浅い楕底	128.4	132.1	37.6	土師器有台埴1点	土師器157.1g 須恵器144.9g		
02	C5	円	N-37°-E	ピット土葺	127.8	112.6	35.6	—	土師器81.5g 須恵器13.8g		
03	C5	円	N-60°-E	楕底	131.7	161.1	37	土師器有台埴1点、 アイコ型口1点	土師器301.9g 須恵器225.5g 鉄器40.1g 縄12.5g		
04	S107 P1										
05	S107 P2										
06	C5	楕円	N-57°-E	浅いE字	86.8	91.6	22.7	土師器埴1点	土師器437.1g 須恵器18.6g 瓦38.7g		
07	S209 P4										
08	S209 P2										
09	S207 P1										
10	S207 P6										
11	S205 P2										
12	B1	なし	—	—	—	—	—	土師器有台埴2点、 有台埴口点(黒書 1点「口」、小皿4 点、灰釉陶器長頸 瓶2点	土師器4785.5g 須恵器841.9g 灰釉陶器63.8g 瓦38.4g 鉄製品刀子・矢筈6.2g		
13a	C5	楕円	—	西側にピット	64.7	64.8	24.3	—	土師器68.6g 須恵器8.3g	遺構番号 重複	
13b	C5	楕円	—	浅い溝	65.6	65.6	10.9	—	—		
14	C5	楕円	N-38°-E	浅い溝	64.4	78	10.6	—	土師器54.6g		
15	B1	銅丸三葉	N-28°-E	2本のピット	105.3	89.7	26.5	—	須恵器76.7g		
16	B1	小笠円	N-20°-E	E字	48.8	55.7	22	土師器有台埴1点	土師器617.2g 須恵器74.9g		
17	B1	楕形	N-42°-E	2本の小ピット	39.1	32.8	39.7	—	土師器19.6g		
18	B1	不整	N-71.5°-E	2本の小ピット	63	204.1	26.4	土師器有台埴1点 (黒書「生口」)	土師器43.5g 須恵器16.5g		
19	B1	円	N-36°-E	E字	66	62	20.4	—	なし		
20	B1	楕円	N-42°-E	E字	76.7	66	21.1	—	なし		
21	B1	楕円	N-50°-E	E字	51.3	73.5	21.7	—	なし		
22	B1	小笠円	N-38°-E	E字	62.7	60	32	—	なし		
23	B1	小笠円	N-45°-E	北側にピット	68.8	57.8	24.6	—	土師器52.2g 須恵器7.8g		
24	B1	楕円	N-21°-E	E字	68.1	57.4	17	—	なし		
25	B1	方形	N-45°-E	E字	86.6	74.9	20.9	—	なし		
26	B1	楕形	N-46°-E	2本の小ピット	48.7	73.2	23.8	須恵器有台埴1点	土師器92.1g 須恵器94.9g		
27	B1	楕円	N-32°-E	E字	39.5	39.7	11.6	—	なし		
28	B1	楕円	N-59°-E	南側にピット	39.4	26.4	17.8	—	なし		
29	B1	銅丸方形	N-60°-E	E字	48.5	57.6	25.2	—	なし		
30	E1	楕円	N-52°-E	E字	49.7	39.8	22.6	—	なし		
31	C5	楕円	N-3°-E	楕底	75.3	75.9	43.9	—	なし		
32	穴番										
33	C-D5	楕円	N-16°-E	E字	78.3	71.4	47.1	—	須恵器5.3g 五代陶器7.4g 鉄製品不整116.9g		
34	B5	楕円	N-24°-E	E字	105.2	116.9	41.1	—	なし		
35	B5	楕円	N-20°-E	E字	85.1	66.9	26.4	土師器有台埴1点 (黒書「田」1点)	土師器113.7g 須恵器48.5g		
36	B5	円	N-20°-E	東側にピット	75.1	61.2	32.6	—	なし		
37	B5	円	N-42°-E	楕底	67.8	61.7	41.3	—	なし		
38	S209 P1										
39	C-D2	小笠円	N-56°-E	浅い溝	238.5	258.1	21.6	須恵器有台埴1点	なし	風割木取等	
40	C2-3	円	—	浅い溝	122.6	148.6	35.9	土師器有台埴3点、 小皿5点、有台小 皿2点	土師器1614.2g 須恵器316.4g		
41	C2-3	円	—	—	138	267.2	101.3	土師器有台埴2点 (黒書1点「口」)、 埴1点、有台埴3点、 皿1点、灰釉陶器 埴1点、長頸瓶4点、 鉄製品釘1点、縄 1点	土師器4302.5g 須恵器236.8g 瓦192.7g 鉄製品28.1g 縄150.1g		
42	C2	円	—	—	80.6	71.6	26	土師器有台埴3点、 有台埴1点、小皿 1点、灰釉陶器埴 1点、長頸瓶2点	土師器745.1g 須恵器476.1g 瓦47.5g 鉄製品57.5g 縄227.7g		
43	C2	円	—	—	148.2	142.1	—	土師器有台埴2点、 有台埴7点、小皿 7点、有台埴2点、 灰釉陶器埴2点、 鉄製品釘1点	土師器1103.6g 須恵器250.1g 鉄製品10.9g 縄137.8g		
44	S208 P4・P5										

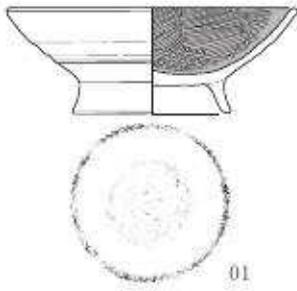


第89図 SK01～03・06・13～16・19～22・24・25・27・28

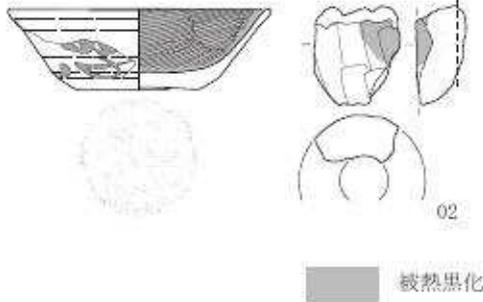


第90図 SK29～31・33～37・39～43

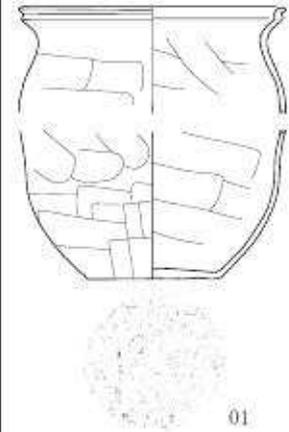
SK01 出土遺物



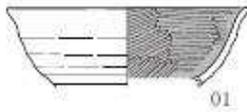
SK03 出土遺物



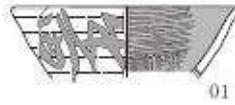
SK06 出土遺物



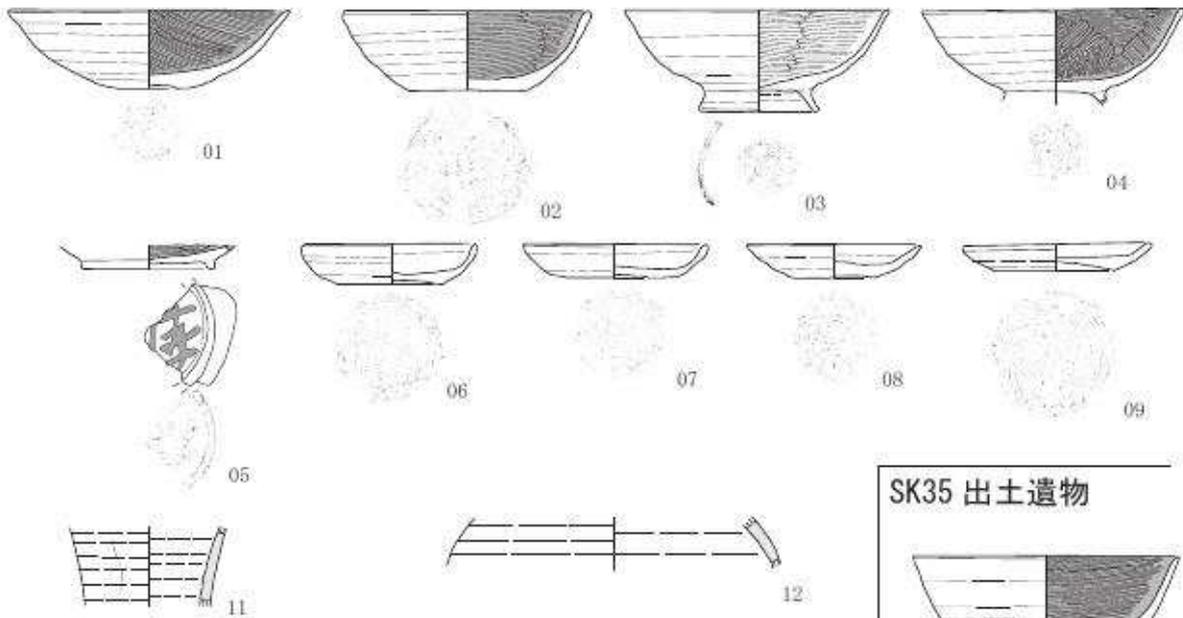
SK16 出土遺物



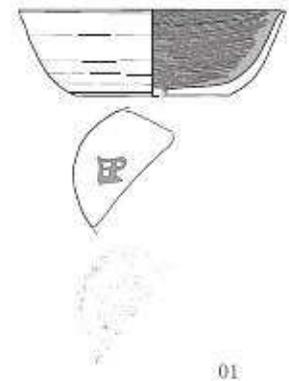
SK18 出土遺物



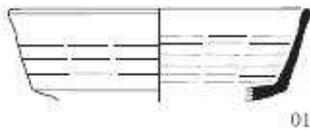
SK12 出土遺物



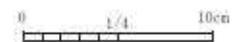
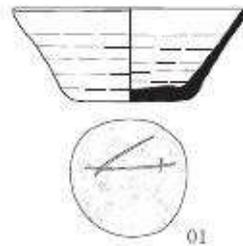
SK35 出土遺物



SK26 出土遺物

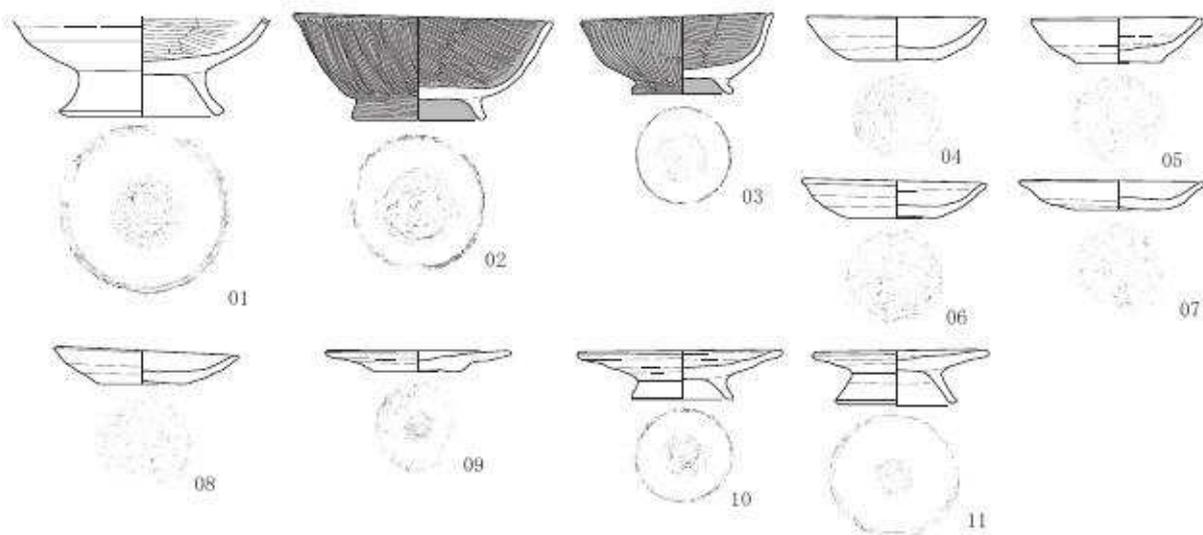


SK39 出土遺物

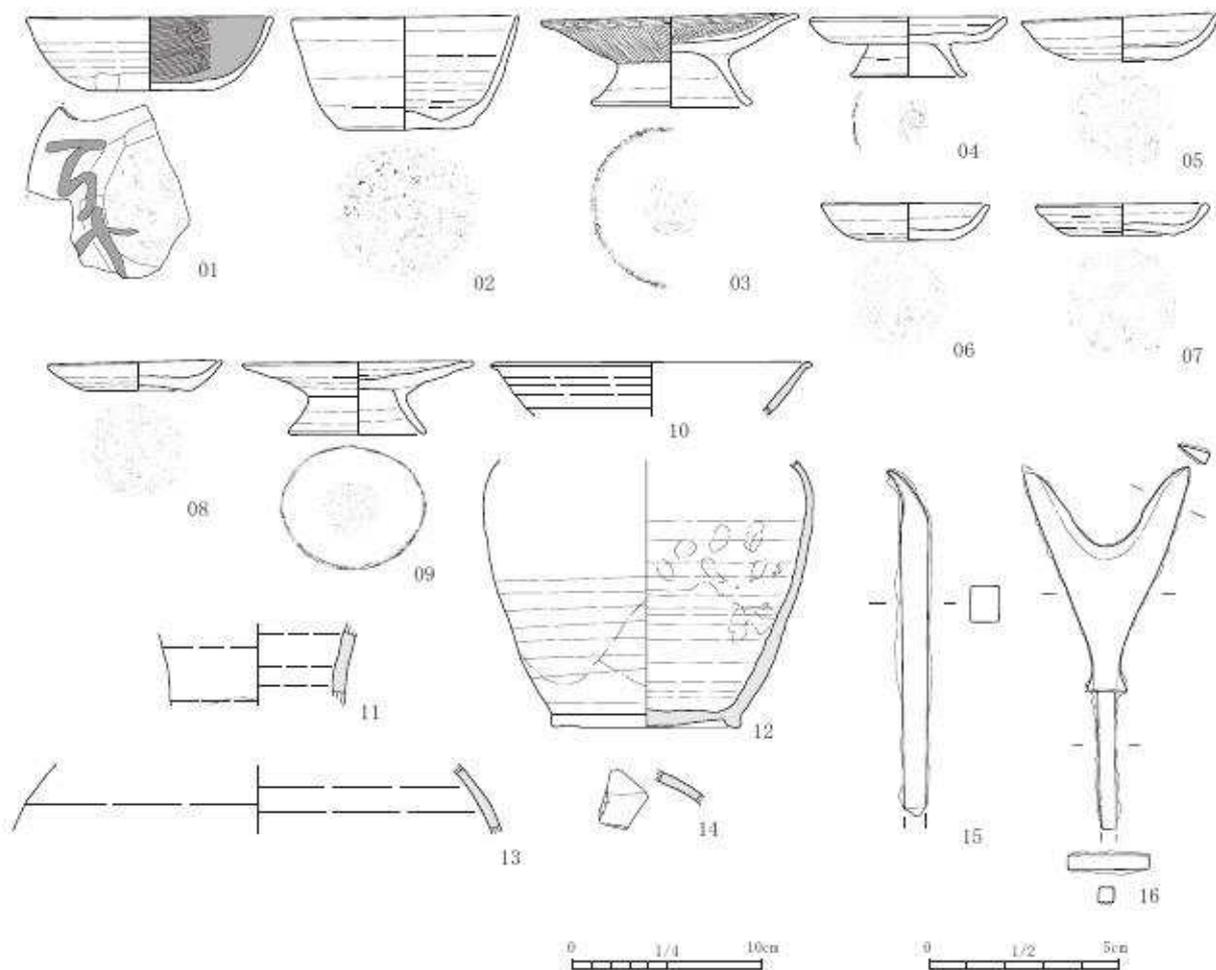


第91図 土坑出土遺物(1)

SK40 出土遺物

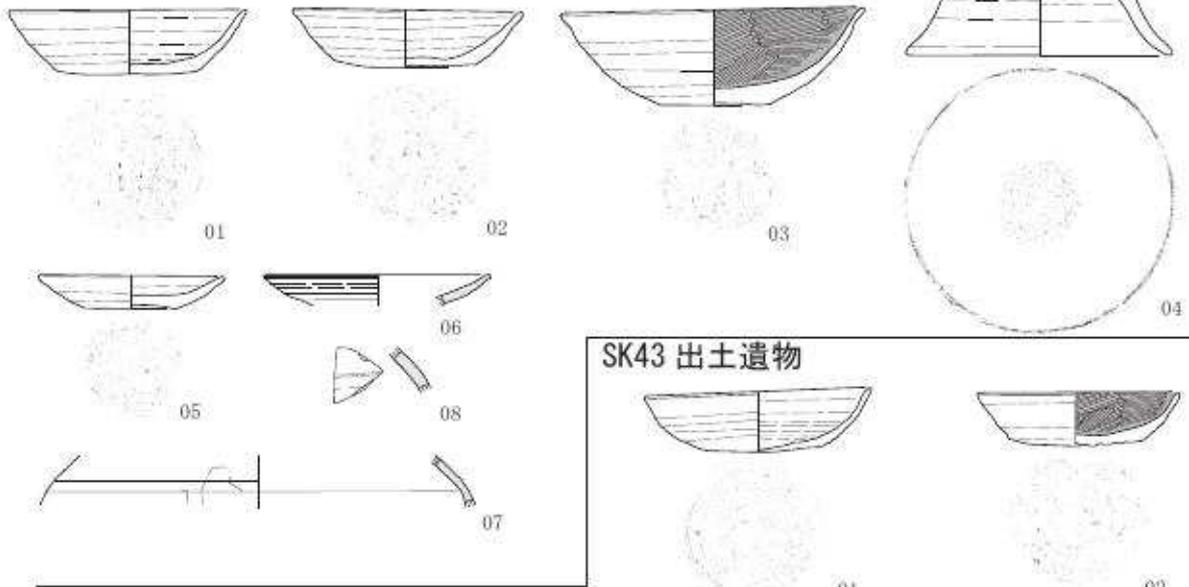


SK41 出土遺物

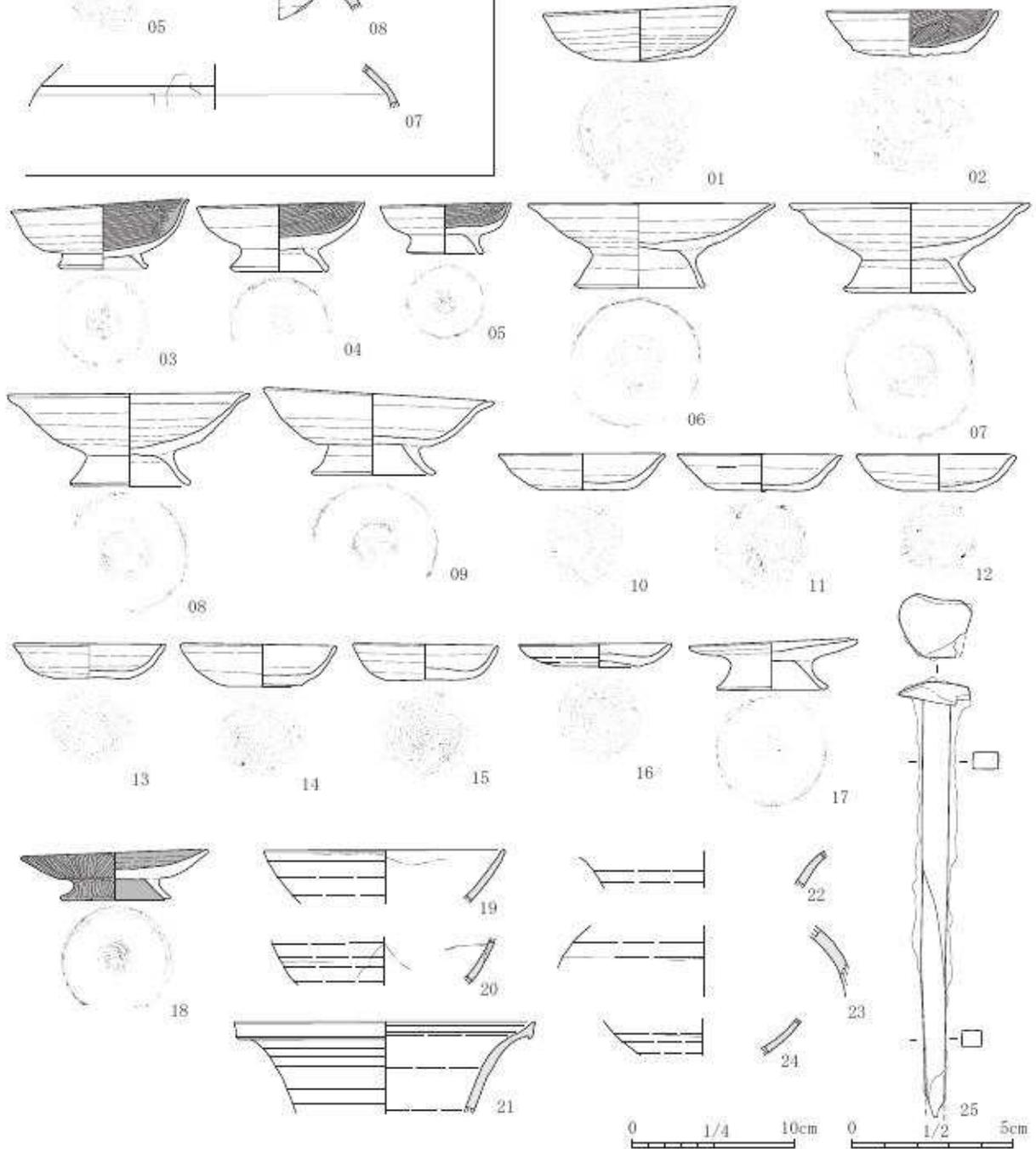


第92図 土坑出土遺物(2)

SK42 出土遺物



SK43 出土遺物



第93図 土坑出土遺物(3)

第53表 土坑出土遺物観察表(1)

遺物番号	掲載番号	位置	種類	素材	口径	深径	底径	重量	残存	形状の特徴	粘土	焼成	色調	備考
SS01	1	覆土	土師器	有台埴	(14.8)	5.4	8.0	125.9	口縁1/3～底面	ロクロ製形、体部下端回転ヘラケズリ、底面回転糸切り後ナゲ、内面ミガキ。	白色粘土少量、白色斜状物質やや多い	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	内面黒色処理
SS02	1	覆土	土師器	無台埴	(13.4)	4.2	6.5	154.4	口縁2/3次面	ロクロ製形、体部下端～底面回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	炭母・白色粘土・スコリア少量、白色斜状物質やや多い	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	内面黒色処理 黒基「B」
SS03	2	覆土	土師器	アゴ子科口	外径(8.6)	(5.1)	内径(2.6)	49.6	少片	内筒形を呈するもの。	白色粘土やや多い、炭母・スコリア少量	良好 二次焼成済	内面 黒 外面 濃い黄褐色	
SS06	01	覆土	土師器	小埴	13.6	(19.1)	7.0	204.2	胴縁欠損	胴縁の裏りは削り、口縁は削み上げられる。口縁は内外面共に削り、外面胴縁ミガキナゲ、外面胴縁ミガキナゲナゲ、内面ミガキ。底面木炭痕。	炭母やや多い、白色粘土多い	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	底面木炭痕
SS12	01	覆土	土師器	無台埴	(14.8)	(4.1)	—	140.4	肩台欠損 口縁1/4次面	ロクロ製形、内面・底面ミガキ。	炭母・白色粘土多い、スコリア少量、白色斜状物質やや多い	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	内面黒色処理
SS12	02	覆土	土師器	無台埴	(13.8)	4.1	6.2	136.7	2/3	ロクロ製形、内面ミガキ。	炭母・長石・石英多い、スコリア少量	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	内面黒色処理
SS12	03	覆土	土師器	有台埴	13.8	(5.2)	(6.0)	171.4	3/4	ロクロ製形、体部下端回転ヘラケズリ、底面回転糸切り、内面ミガキ。	炭母・白色粘土多い	良好	内外面 濃い黄褐色	
SS12	04	覆土	土師器	有台埴	13.8	(4.0)	—	151.2	口縁2/3次面	ロクロ製形、体部下端回転糸切り、内面ミガキ。	炭母・白色粘土多い、スコリア少量	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	内面黒色処理
SS12	05	覆土	土師器	有台埴	—	(1.25)	(3.0)	17.1	底縁破片	ロクロ製形、体部下端回転ヘラケズリ、底面回転糸切り、内面ミガキ。	白炭灰子・黒色粘土やや多い、白炭斜状物質少量	良好	内面 黒褐色 外面 黒	内面黒色処理 黒基「C」
SS12	06	覆土	土師器	小埴	8.6	2.1	5.9	49.8	ほぼ完成形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母・白色粘土少量、スコリア少量	良好	内外面 濃い黄褐色	
SS12	07	覆土	土師器	小埴	9.5	1.8	4.8	84.3	完成形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母・黒色粘土少量、白色粘土多い	良好	内外面 黒	
SS12	08	覆土	土師器	小埴	9.1	1.75	4.4	57.7	完成形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母少量、白色粘土・スコリアやや多い	良好	内外面 濃い黄褐色	
SS12	09	覆土	土師器	小埴	9.8	1.4	6.2	59.7	ほぼ完成形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母多い、白色粘土少量、スコリア少量	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	
SS12	10	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(3.2)	—	12.0	破片	内外面共に密な強いロクロ、修整は比較的薄くやや外反し立ち上がる。	鉄分の抽出し少量	良好	粘土 淡灰褐色 釉 黄緑色自然釉	破片約100【92】実98-2-103
SS12	11	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(2.7)	—	15.8	破片	胴縁は比較的厚く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の抽出し極多い	良好	粘土 淡灰褐色 釉 黄緑色	首口不明【92】実98-2-014
SS16	01	覆土	土師器	無台埴	(12.4)	(4.1)	—	27.5	口縁～体部1/4	ロクロ製形、体部下端回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	炭母多い、白色粘土やや多い、スコリア少量	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	内面黒色処理
SS18	01	覆土	土師器	無台埴	(11.7)	(3.7)	—	16.0	口縁1/3	ロクロ製形、内面ミガキ。	炭母・白色粘土・白色斜状物質少量	良好	内面 灰オリブ系 外面 黒褐色	内面黒色処理 黒基「生口」
SS26	01	覆土	須恵器	有台埴	(13.5)	(3.2)	—	47.8	口縁～体部1/4 高台欠損	ロクロ製形、体部下端回転ヘラケズリ。	白色粘土・炭分の抽出しやや多い、白色斜状物質微量	良好	内外面 黄褐色	
SS33	01	覆土	鉄製品	板状鉄製品	—	—	—	142.7	破片	全部・用途不明の製品。厚さ0.3mmの鉄板を素材とする。右側の鉄板の一端を幅1.3cm折り曲げ、その部分に別の同様の鉄板を引っ掛けてつなげている。破片の大きさは、最大で長さ2.5cm、幅2.5cmが確認できる。鉄板をつなげたのちに、底状や縁状の加工がなされたものもある。また、2枚に折り曲げた3.0×4.1cm次の破片もある。穿孔や細かな加工は確認できない。形状の付着物はあるが、調査ならぬは認められない。				写真のみ
SS35	01	覆土	土師器	無台埴	(13.7)	(4.5)	(8.8)	70.6	1/4	ロクロ製形、体部下端回転ヘラケズリ、底面回転ヘラケズリ後ナゲ、内面ミガキ。	炭母・白色斜状物質微量、白色粘土・スコリア少量	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	内面黒色処理 黒基「B」
SS39	01	覆土	須恵器	無台埴	(12.0)	4.8	6.0	126.2	口縁1/4～底面	ロクロ製形、底縁多方向の手持ちヘラケズリ後ナゲ。	白色粘土多い、白色斜状物質微量	良好	内面 灰オリブ系 外面 灰	底面ヘラケズリ
SS40	01	覆土	土師器	有台埴	—	(5.2)	7.8	148.5	体部下部～底面	ロクロ製形、体部下端回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	炭母多い、白色粘土・黒色粘土やや多い	良好	内面 黒褐色 外面 濃い黄褐色	
SS40	02	2	土師器	有台埴	13.4	5.4	6.6	161.8	口縁～体部1/4欠損	ロクロ製形、底縁回転ヘラケズリ、内外面共に黒色処理・ミガキの跡色している。	炭母多い、白色粘土やや多い	良好	内外面 黒	内外面黒色処理
SS40	03	覆土	土師器	有台埴	9.8	4.0	5.0	86.0	口縁～体部1/4欠損	ロクロ製形、底縁回転ヘラケズリ後ナゲ、内外面共に黒色処理・ミガキの跡色している。	白色粘土・白色斜状物質少量	良好	内外面 黒	内外面黒色処理
SS40	04	1	土師器	小埴	9.2	2.2	4.5	67.3	ほぼ完成形	ロクロ製形、回転糸切り(右)。	炭母少量、白色粘土少ない	良好	内外面 濃い黄褐色	
SS40	05	覆土	土師器	小埴	8.2	2.25	4.6	66.9	ほぼ完成形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母やや多い、白色粘土・スコリア・白色斜状物質少量	良好	内外面 濃い黄褐色	
SS40	06	3	土師器	小埴	8.5	1.95	4.8	77.3	完成形	ロクロ製形、回転糸切り(左)。	炭母・スコリアやや多い、白色粘土少量	良好	内外面 濃い黄褐色	

第54表 土坑出土遺物観察表(2)

遺物番号	掲載番号	状況	種類	器種	口径	高さ	底径	重量	残存	形状の特徴	軟土	焼成	色調	備考
SS40	07	覆土	土師器	小皿	9.4	1.9	5.0	72.8	口縁1/4欠損	ロタロ型形同軸糸切リ(左)。	灰母・スコリア微量、白色粒子やや多い。白色針状物質微量	良好	内外面 にぶい黄緑	
SS40	08	覆土	土師器	小皿	9.4	1.75	4.7	57.7	口縁1/4欠損	ロタロ型形同軸糸切リ(左)。	灰母・白色粒子・白色針状物質少量	良好	内外面 にぶい黄緑	
SS40	09	覆土	土師器	小皿	9.5	1.1	4.6	56.7	口縁1/3欠損	ロタロ型形、底縁同軸ヘラ切リ。高台が割かれたもの。	灰母・白色粒子・スコリア少量	良好	内外面 にぶい黄緑	
SS40	10	覆土	土師器	有台皿	10.8	2.6	6.0	76.4	ほぼ完整	ロタロ型形、底縁同軸糸切リ後ナシ。	灰母・白色粒子・スコリア少量	良好	内外面 にぶい黄緑	
SS40	11	覆土	土師器	有台皿	9.6	2.8	5.6	79.8	口縁1/3欠損	ロタロ型形、底縁同軸糸切リ後ナシ。	灰母・白色粒子少量、スコリア・黒色粒子微量	良好	内外面 にぶい黄緑	
SS41	01	覆土	土師器	舞台座	112.77	3.8	(6.1)	41.0	1/4	ロタロ型形、体部下縁糸切リヘラ切リ。底部多方向の半片のヘラ切リ。内面はガタ。	灰母多い。白色粒子・スコリアやや多い	良好	内面 黒 外面 にぶい黄	内面黒色処理 書「口口」
SS41	02	覆土	土師器	鉢	11.8	6.9	7.2	138.7	3/4	ロタロ型形、底縁同軸ヘラ切リ。	灰母・白色粒子多い。スコリア微量	良好	内外面 にぶい黄	
SS41	03	2	土師器	有台皿	13.1	4.65	8.0	176.2	口縁1/4、底縁1/2欠損	ロタロ型形、体縁は内外共にガタ。高台は高さがある。	灰母微量、白色粒子少量	良好	内外面 にぶい黄	
SS41	04	覆土	土師器	有台皿	116.11	(3.15)	(5.6)	64.3	口縁1/3～底部1/4	ロタロ型形、底縁同軸ヘラ切リ。	灰母多い。スコリア・白色針状物質少量、黒色粒子微量	良好	内外面 にぶい黄	写影
SS41	05	覆土	土師器	小皿	10.3	2.3	5.0	78.0	口縁1/3欠損	ロタロ型形、同軸糸切リ(左)。	灰母・白色粒子・白色針状物質少量、スコリア微量	良好	内外面 にぶい黄	
SS41	06	覆土	土師器	小皿	8.5	1.95	4.5	64.5	ほぼ完整	ロタロ型形、同軸糸切リ(左)。	灰母少量、白色粒子やや多い。白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面 にぶい黄	
SS41	07	覆土	土師器	小皿	8.8	1.65	5.5	54.8	ほぼ完整	ロタロ型形、同軸糸切リ(左)。	灰母・白色粒子少量	良好	内外面 にぶい黄	
SS41	08	覆土	土師器	小皿	9.0	1.9	6.5	91.0	1/4欠損	ロタロ型形、同軸糸切リ(左)。	白色粒子多い。スコリア微量	良好	内面 黄 外面 にぶい黄	
SS41	09	3	土師器	有台皿	11.8	3.8	7.0	102.2	完整	ロタロ型形、底縁同軸糸切リ後ナシ。	灰母・白色粒子少量、スコリア・白色針状物質微量	良好	内外面 にぶい黄	
SS41	10	覆土	灰被陶器	甕	116.0	(2.8)	—	6.4	口縁～体部片	体部下縁を同軸ヘラ切リ後同軸ナシ。器壁は薄く僅かに内湾して立ち上がり口縁縁部で外反。	鉄分の堆出し少量	良好	粘土 灰白 釉 暗赤緑	施設K06 新 【394】実98-2-105
SS41	11	覆土	灰被陶器	長頸瓶	—	(4.3)	—	31.0	胴部10%	器壁は比較的薄くやや外反し外に附いて立ち上がる。	鉄分の堆出しやや多い	良好	粘土 灰白 釉 暗赤緑	施設K00 (～H53) 【395】実98-2-106
SS41	12	覆土	灰被陶器	長頸瓶	—	(14.25)	9.6	436.6	胴部10%～底部	器壁は薄く、胴部は直線的。高台は断面三角形知味。底縁外面に右同軸糸切リ痕残る。外面胴部と内面胴部下縁～底部に灰被陶毛塗り。	鉄分の堆出し少量	良好	粘土 灰白 釉 暗赤緑	施設K03 【377】実98-2-087
SS41	13	覆土	灰被陶器	長頸瓶	—	(3.6)	—	20.7	胴部片	器壁は比較的薄く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の堆出し細かく少量	良好	粘土 灰白 釉 暗赤緑	施設K00 (～H53) 【396】実98-2-017
SS41	14	覆土	灰被陶器	長頸瓶	—	(1.8)	—	4.7	胴部片	器壁は比較的薄くやや丸みを持って立ち上がる。	鉄分の堆出し細かく少量	良好	粘土 灰白 釉 暗赤緑	施設K00 新 【397】実98-2-108
SS41	15	覆土	鉄製品	鉄釘	タテ長 19.2	ヨコ長 1.1	厚 1.0	24.1	下部欠損	頭部は折り返げずに直過ぎた状態。釘の痕の可能性あり。				
SS41	16	覆土	鉄製品	鉄鏝	長 19.5	幅 4.2	厚 0.6	29.4	身高・底部端欠損	細粒鏝。身元先端はふくらみあり。右側面、身元厚0.4cm。矢柄の本質は看取されない。				
SS42	01	1	土師器	舞台座	12.2	1.4	7.6	154.6	完整	ロタロ型形、底縁同軸ヘラ切リ。	灰母・白色針状物質少量、白色粒子多い。スコリアやや多い	良好	内外面 にぶい黄	
SS42	02	4	土師器	舞台座	11.9	3.0	7.5	111.1	口縁1/4欠損	ロタロ型形、底縁同軸ヘラ切リ。	白色粒子多い	良好	内外面 にぶい黄	
SS42	03	覆土	土師器	舞台座	115.8	4.9	5.9	161.4	口縁1/4欠損	ロタロ型形、底縁同軸糸切リ(右)。内面はガタ。	灰母多い。白色粒子やや多い。白色針状物質少量、スコリア微量	良好	内面 黒 外面 にぶい黄	内面黒色処理
SS42	04	3	土師器	有台皿	—	(5.4)	13.8	328.2	高台割のみ	ロタロ型形、高きがある。	灰母やや多い。白色粒子多い	良好	内外面 黄	
SS42	05	覆土・SK10 覆土	土師器	小皿	9.7	1.65	4.9	75.8	完整	ロタロ型形、同軸糸切リ(左)。	灰母微量、白色粒子・スコリア少量	良好	内外面 にぶい黄	
SS42	06	覆土	灰被陶器	甕	111.5	(1.6)	—	8.7	口縁～体部片	体部下縁同軸ヘラ切リ後同軸ナシ。器壁は比較的薄く僅かに内湾して立ち上がり口縁縁部でやや外反。器部下縁に灰被陶毛塗り。	鉄分の堆出し少量	良好	粘土 灰白 釉 暗赤緑自然緑	実検大2-1虎1 【398】実98-2-109
SS42	07	覆土	灰被陶器	長頸瓶	—	(2.7)	—	6.9	胴部片	同軸同軸ヘラ切リ。器壁は薄く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の堆出し少量	良好	粘土 灰白 釉 暗赤緑(釉剥れ)	施設K14 【399】実98-2-110

第55表 土坑出土遺物観察表(3)

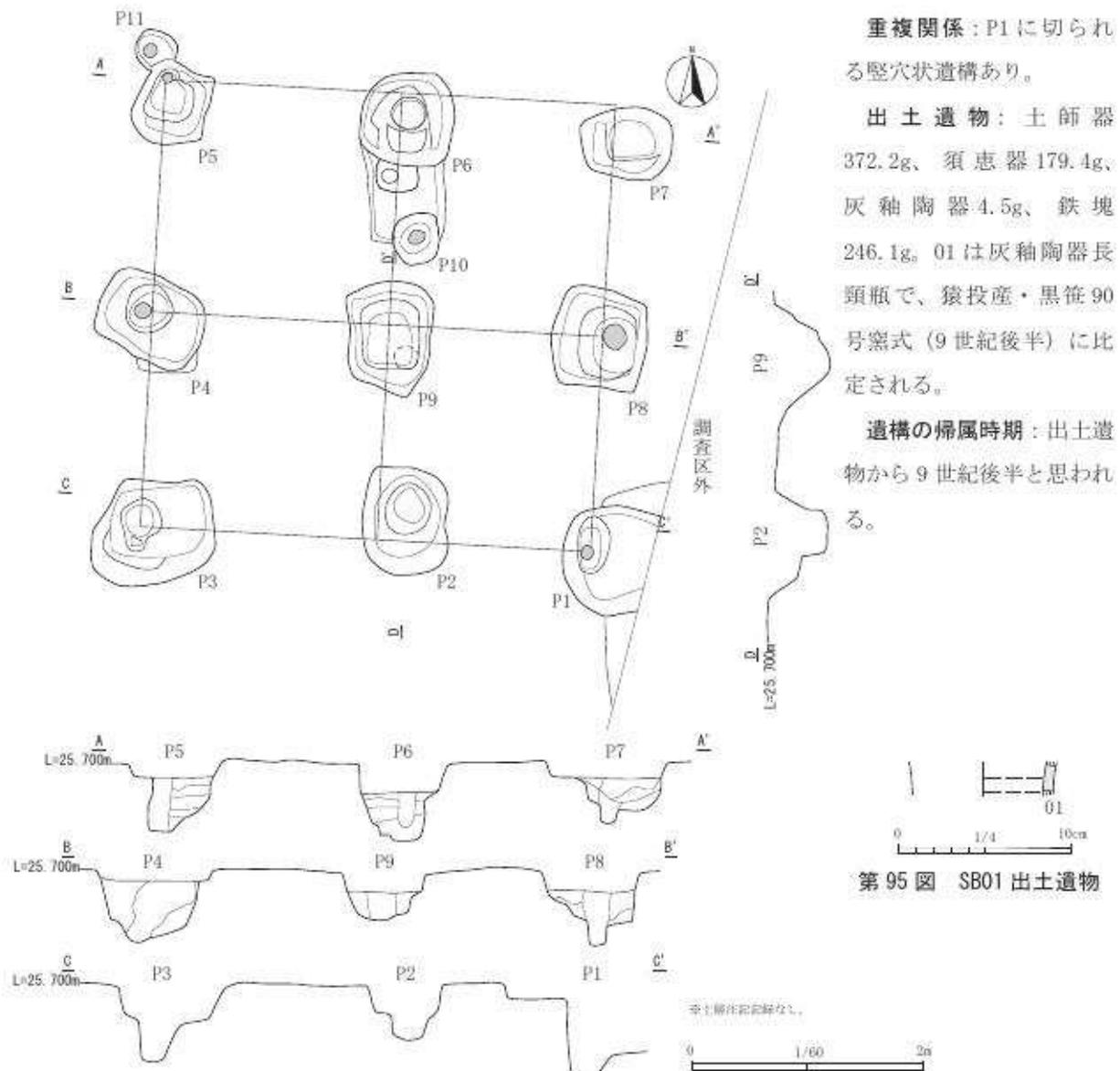
遺物番号	掲載番号	状況	種類	素材	口径	高さ	底径	重量	残存	形状の特徴	軟土	状態	色調	備考
SS-02	08	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(2.3)	—	3.4	胴部片	原境は比較的早く積み重ねられて立ち上がる。外周胴部に厚土層の附属。	鉄分の噴出しや多い	良好	粘土・灰白 緑・暗赤緑 (群青色に乳白色)	長さ514～90 【40】実98-2-111
SS-02	09	覆土	鉄製品	平刃製法	長 4.5	幅 (2.6)	厚 0.5	54.0	部分欠損	用途不明の製品。二又状の形状と種々の取付とからなる。両者は取り離けられて埋まっている。複製、付着物などは無い。				写真のみ
SS-03	01	14	土師器	有台皿	11.9	3.2	6.0	90.3	口縁上/欠損	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母・白色微子や多い	良好	内外面 橙	
SS-03	02	4	土師器	有台皿	10.5	2.7	7.2	105.6	完整	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母少量。白色微子・スコリア・白色針状物質や多い	良好	内面 黒 外面 濃い黄緑	内面黒色処理
SS-03	03	11	土師器	有台皿	11.4	3.95	6.2	104.4	ほぼ完整	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母・白色微子少量。白色針状物質微量	良好	内面 黒 外面 濃い黄緑	内面黒色処理
SS-03	04	覆土	土師器	有台皿	10.3	4.3	6.6	87.8	1/2	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母や多い。白色微子・白色針状物質少量	良好	内面 黒 外面 濃い黄緑	内面黒色処理
SS-03	05	7	土師器	有台皿	8.2	3.0	4.2	60.5	ほぼ完整	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母や多い。白色針状物質・スコリア微量	良好	内面 黒 外面 濃い黄緑	内面黒色処理
SS-03	06	15	土師器	有台皿	15.4	6.1	7.6	109.9	口縁上/欠損	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母・白色微子・白色針状物質少量。スコリア微量	良好	内外面 橙	
SS-03	07	1	土師器	有台皿	14.9	6.3	7.7	218.7	ほぼ完整	ロクロ製。底面回転成形(右)。	白色微子・黒色微子少量。スコリア・白色針状物質微量	良好	内外面 橙	
SS-03	08	覆土	土師器	有台皿	11.8	6.6	7.2	187.9	口縁・胴部一部欠損	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母・白色微子・白色針状物質微量	良好	内外面 橙	
SS-03	09	覆土	土師器	有台皿	14.4	4.8	7.4	190.7	ほぼ完整	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母・白色微子・白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面 濃い橙	
SS-03	10	覆土	土師器	小皿	10.4	2.2	6.4	87.9	ほぼ完整	ロクロ製。回転成形(左)。	炭母・白色微子・白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面 橙	
SS-03	11	12	土師器	小皿	10.1	2.2	6.6	70.0	ほぼ完整	ロクロ製。回転成形(左)。	炭母や多い。スコリア微量。小一中は多い	良好	内外面 濃い橙	
SS-03	12	10	土師器	小皿	9.8	2.3	4.6	68.3	完整	ロクロ製。回転成形(左)。	炭母・白色微子少量。白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面 橙	
SS-03	13	3	土師器	小皿	9.4	2.1	4.8	81.7	ほぼ完整	ロクロ製。回転成形(左)。	炭母や多い。白色針状物質微量。小一中は多い	良好	内外面 明橙	
SS-03	14	17	土師器	小皿	9.6	2.0	4.8	65.3	完整	ロクロ製。回転成形(左)。	炭母・白色微子・白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面 濃い黄緑	
SS-03	15	13	土師器	小皿	9.0	2.2	6.0	46.7	完整	ロクロ製。回転成形(左)。	炭母や多い。白色針状物質微量。小一中は多い	良好	内外面 濃い橙	
SS-03	16	覆土	土師器	小皿	9.4	1.4	6.2	58.0	完整	ロクロ製。回転成形(左)。	炭母少量。白色微子・黒色微子や多い。スコリア微量	良好	内外面 橙	
SS-03	17	6	土師器	有台皿	10.2	2.9	6.6	103.3	胴部部分欠損	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母・白色微子・黒色微子や多い。スコリア・白色針状物質少量	良好	内外面 橙	
SS-03	18	5	土師器	有台皿	11.4	2.9	6.2	102.1	1/2	ロクロ製。底面回転成形(右)。	炭母や多い。白色針状物質・中の微量	良好	内外面 黒	内外面黒色処理
SS-03	19	覆土	灰釉陶器	瓶	—	(2.10)	—	6.5	胴部片	原境は比較的早く積み重ねられて立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好	粘土・灰白 緑・暗赤緑	長さ420 【40】実98-2-112
SS-03	20	覆土	灰釉陶器	瓶	11.89	(2.2)	—	10.6	口縁10% 胴部30%	原境は比較的早く積み重ねられて立ち上がり口縁部で僅かに外反する。外周口縁直下に明瞭な線を有す。	鉄分の噴出し少量	良好	粘土・灰白 緑・暗赤緑 (群青色)	長さ404 【40】実98-2-113
SS-03	21	覆土	灰釉陶器	深筒	—	(2.9)	—	6.6	胴部片	原境は早く多量に内湾して立ち上がる。中に粘土層がみられる。	鉄分の噴出し多い	良好	粘土・灰白 緑・暗赤緑	長さ402 【40】実98-2-114
SS-03	22	覆土・灰釉 No.2507	灰釉陶器	広口瓶	11.83	(5.6)	—	87.9	口縁15% 胴部10%	原境は比較的早く日曜線的に立ち上がり日曜線的で外反し扁圓化する。胴部のノッチは比較的大きい。	鉄分の噴出し多い	良好	粘土・灰白 緑・暗赤緑	長さ450 【40】実98-2-115
SS-03	23	覆土	灰釉陶器	広口瓶	—	(2.3)	—	12.6	胴部片	原境は比較的早く積み重ねられて立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好	粘土・灰白 緑・暗赤緑	長さ400 【40】実98-2-116
SS-03	24	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	(4.4)	—	15.0	胴部片	原境は比較的早く積み重ねられて立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	普通	粘土・灰白 緑・暗赤緑	三連系1850～650 (併行) 【40】実98-2-117
SS-03	25	覆土	鉄製品	針釘	長 (11.6)	幅 (2.2)	厚 0.5	43.0	下部欠損	身部は回転成形の跡がみられる。				

第3節 掘立柱建物跡

遺構は調査区域の南側に偏在する傾向がある。住居跡と重複するものは、いずれも住居跡に切られている。SB01は総柱建物であるが、側柱建物を中心とする。基本的に発掘調査時及び概要報告書の所見に基づいたが、一部組み替えたものがある。なお、遺物は柱穴覆土のうち、掘方埋め土・柱痕跡・柱抜き取り痕跡のいずれから検出されたものであるか、記録がなく不明である。

SB01 (第94・95図、第56・57表、遺構図版10、遺物図版16)

北東隅のP7と南側柱列中央のP2がずれるものの、梁行・桁行とも3.90m、13尺、一間=6.5尺と見てよいだろう。2間×2間と捉えたが、東側調査区外に延びる可能性もある。P5・6で版築状埋土が確認されており、P4・7では柱抜き取り痕跡が認められる。P10・11は平面円形の小型の掘方。P10は床束柱穴か、P11は刷え柱的であるが、性格不明。P3・4ではやや南側にずれる形で掘方が確認されており、P9の破線表示の柱痕跡(か)とともに、建て替えもしくは柱の差し替えが行われた可能性がある。

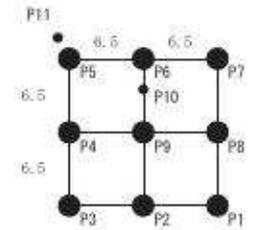


第94図 SB01

第95図 SB01出土遺物

第56表 SB01 属性表

グリッド	D・E5	平面形状	総柱	主軸方向	N-3°-E	
規模	梁行	2間	桁行	2間		
柱間距離 (芯々間)	P3-P4	1.81m	P1-P2	1.59m		
	P4-P5	2.02m	P2-P3	2.31m		
	P7-P8	1.75m	P5-P6	2.12m		
	P8-P1	1.90m	P6-P7	1.96m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形	97cm	78cm	95cm	24.798m	有
P2	隅丸方形	93cm	73cm	-	25.092m	無
P3	隅丸方形	107cm	93cm	-	24.905m	無
P4	隅丸方形	95cm	93cm	61cm	24.961m	有
P5	不整形	72cm	64cm	62cm	24.993m	有
P6	隅丸方形	81cm	81cm	69cm	24.911m	無
P7	隅丸方形	80cm	79cm	61cm	25.064m	無
P8	方形	86cm	83cm	66cm	24.937m	有
P9	長方形	102cm	69cm	42cm	25.153m	無



※図中の明朝体数字は柱間寸法＝尺

第57表 SB01 出土遺物観察表

遺物番号	掲載番号	図記	種類	原種	口径	高さ	底径	重量	保存	形状の特徴	出土	出土	色調	備考
SB01-P1	III	SI-01-P1	瓦製陶器	瓦筒蓋	-	(2.0)	-	4.5	断面片	コシロ彫刻、割裂は比較的深くやや外反して立ち上がる。	掘分の増出し多い	瓦葺	黄土 灰白 粘 45%程度	接収 490 【305】 其 98-2-008

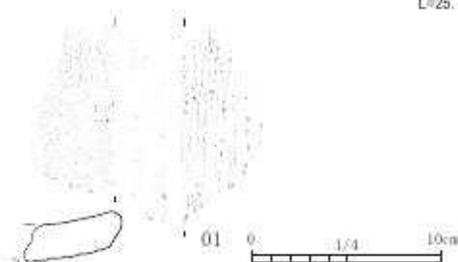
SB02 (第96・97図、第58・59表、遺物図版16)

全体として柱筋の通りが悪い。梁行・桁行とも3.60m、12尺、一間=6尺とした。P8は別の建物の柱掘方か、東側柱列中央の柱穴は確認されていない。しかし、掘方平面形は南側柱列が円形基調、北側柱列が方形基調とそろわない。住居跡SI09・10との重複状況から、各柱穴は1棟の組み合わせではないかも知れない。P7は柱痕跡(と抜取穴)のみを掘り下げた状態か。

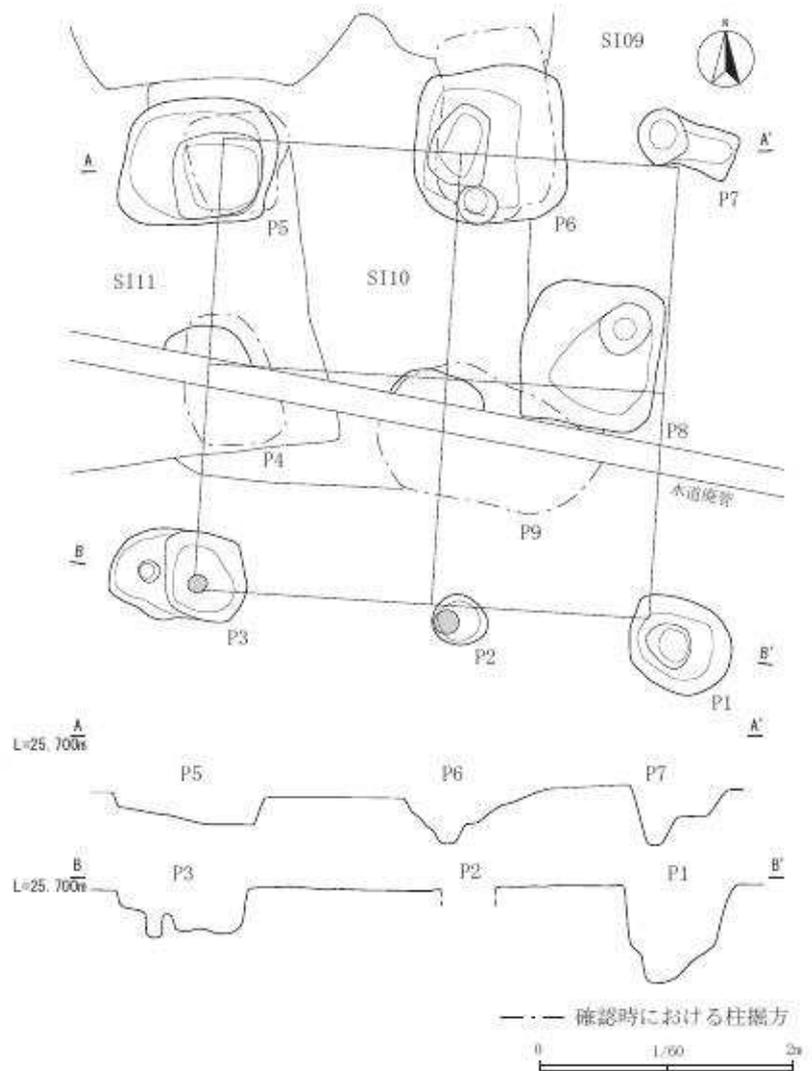
重複関係: P6はSI10の床面を切る形で確認、P5は同床下で確認、P4・9とSI10との新旧関係は不明である。P6は上部に新しい土坑が重複している可能性もある。

出土遺物: 土師器 44.1g、須恵器 36.3g、瓦 121.4g、礫 43.6g。

遺構の帰属時期: 不明。



第97図 SB02 出土遺物



第96図 SB02

第58表 SB02 属性表

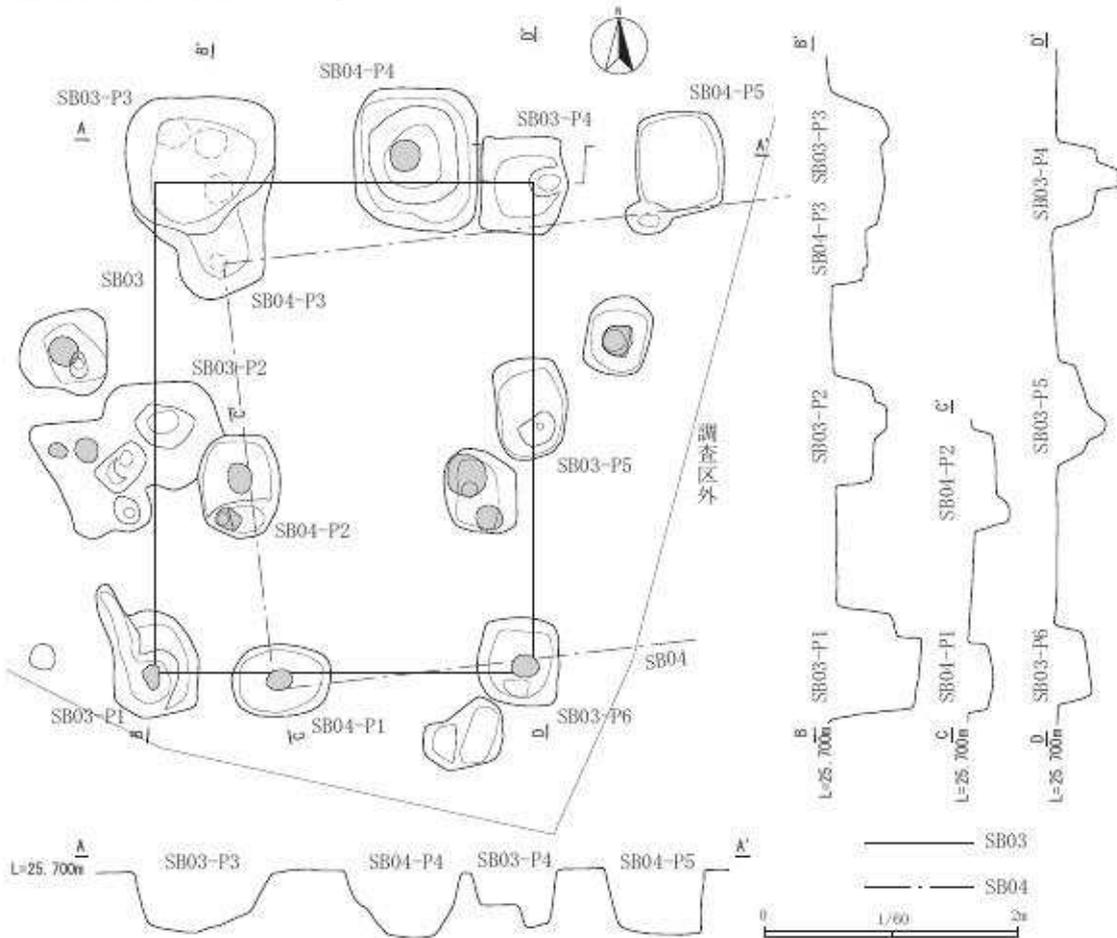
グリッド	D5	平面形状	2間	総柱	桁行	主軸方向	N-4°-E
規模	梁行	2間	桁行	2間			
柱間距離 (芯々間)	P3-P4	1.62m	P1-P2	1.80m			
	P4-P5	1.59m	P2-P3	1.96m			
	P7-P1	4.05m	P5-P6	1.87m			
			P6-P7	1.57m			
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当	
P1	円形	82cm	77cm	78cm	24.857m	無	
P2	円形	45cm	37cm	-	-	有	
P3	不整形円形	68cm	65cm	33cm	25.215m	有	
P4	不明	60cm	(28cm)	-	-	無	
P5	隅丸方形	121cm	109cm	21cm	24.995m	無	
P6	隅丸方形	127cm	121cm	44cm	24.846m	無	
P7	不明	80cm	45cm	48cm	24.829m	無	
P8	隅丸方形	114cm	109cm	-	-	無	
P9	不明	75cm	(25cm)	-	-	無	

第59表 SB02 出土遺物観察表

遺物番号	発見番号	図記	種類	器種	口径	器高	底径	底量	残存	形状の特徴	土質	焼成	色調	備考
SB02-P7	01	SB-02-P7	瓦	平瓦	タテ (11.0)	ヨコ (5.3)	厚 1.9	121.4	石物緑褐色	内面右打圧痕、菊瓣状文あり。凸縁縁目同軸圧痕、細線ケズリ。	灰母・白色粒子や多い	良好	内面 黄褐色 外面 灰に近い黄	焼物類他

SB03・04 (第98・99図、第60～62表、遺構図版10、遺物図版16)

14基以上のピット群。東（・南）側調査区外に延びるものと思われる。組み合わせが明確ではないが、造営方位が南北の建物（SB03：N-0°-E）とやや西に偏する建物（SB04：N-8°-W）を想定した。前者には中央付近の柱穴6基（SB04-P2含む）が伴う可能性があるが、柱間構造が判然としないため、概要報告の所見を尊重して2棟の組み合わせを示しておく。



第98図 SB03・04

SB03 梁行 3.00m・10 尺、桁行 3.90m・13 尺・一間=6.5 尺。P1 は平面形状から北北東方向に延びる掘方は柱抜取穴と見られる。P4・5 の最深部は柱痕跡と見てよい。

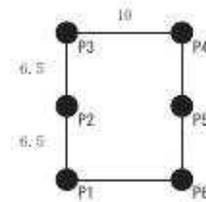
SB04 梁行 3.30m・11 尺・一間=5.5 尺、桁行も一間=5.5 尺か。側柱列はやや不明瞭、南側柱列中間柱は遺物(01)の出土・接合状況からすると、SB03-P6 と重複か。P4 は掘方規模と位置から伴わない可能性あり。P5 は南西角が柱痕跡か。

出土遺物：土師器 754.9g、須恵器 382.0g、灰釉陶器 43.5g、礫 379.1g。01 は SB03-P6・SB04-P2 出土、02 は P4 出土の土師器有台皿(黒色土器 B 類)。03 は灰釉陶器小碗で、美濃産・虎渓山 1 号窯式(10 世紀後半)に比定される。04 は同壺・瓶類。猿投産・黒笹 90 号窯式か。

遺構の帰属時期：土師器から 9 世紀後半と考えるのが穏当か。

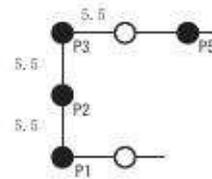
第 60 表 SB03 属性表

グリッド	E5	平面形状	側柱	主軸方向	N-0° -E	
規模	梁行	1 間	桁行	2 間		
柱間距離(芯々間)	P3-P4	2.75m	P1-P2	2.04m		
	P6-P1	2.94m	P2-P3	2.06m		
			P3-P4	1.92m		
			P5-P6	1.91m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形	85cm	70cm	67cm	24.844m	有
P2	不整形	87cm	86cm	41cm	25.115m	無
P3	隅丸方形	118cm	109cm	47cm	25.094m	無
P4	長方形	76cm	68cm	45cm	25.121m	無
P5	隅丸長方形	80cm	57cm	38cm	25.227m	無
P6	隅丸方形	70cm	65cm	27cm	25.343m	有

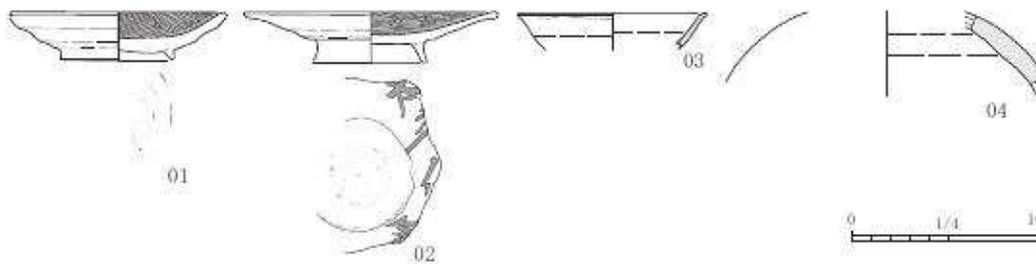


第 61 表 SB04 属性表

グリッド	E5	平面形状	側柱	主軸方向	N-8° -W	
規模	梁行	2 間	桁行	3 間以上カ		
柱間距離(芯々間)	P1-P2	1.62m	P3-P4	1.87m		
	P2-P3	1.72m	P4-P5	1.76m		
			P1-SB03P6	1.94m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形	79cm	58cm	67cm	25.376m	有
P2	不整形	82cm	65cm	41cm	25.251m	有
P3	隅丸方形	(80cm)	74cm	47cm	25.102m	無
P4	長方形	114cm	97cm	45cm	25.056m	無
P5	隅丸長方形	84cm	79cm	38cm	25.090m	無



※図中の明朝体数字は柱間寸法・尺



第 99 図 SB03・04 出土遺物

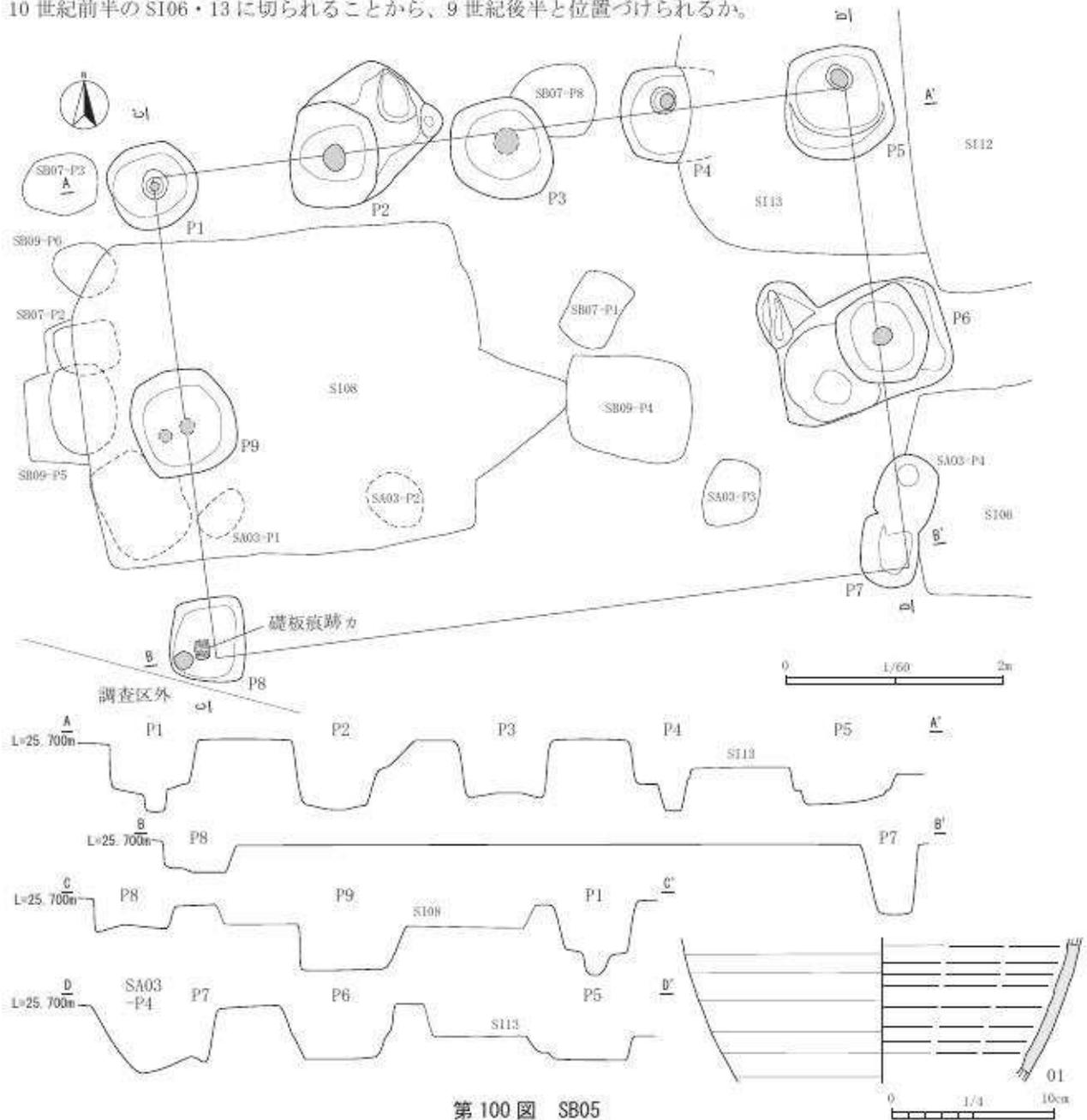
第 62 表 SB03・04 出土遺物観察表

遺物番号	図録番号	記号	種類	容積	口径	高さ	底径	重量	保存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB03-P6 SB04-P2	01	SB-04-P1・ SB-04-P5	土師器	有台皿	(11.1)	(2.5)	(5.7)	47.0	1/4	コケシ型製、底面回転成形後ナゲ型製。	灰母・白色砂子・白色針状物質・スベリア少量	良好	内面 黒 外面 灰褐色	内面黒色底面
SB04-P4	02	SB-04-P4	土師器	有台皿	(13.1)	(2.7)	(5.7)	81.0	1/8	コケシ型製、底面回転成形後ナゲ型製。	灰母・白色砂子多い	良好	内面 黒 外面 灰褐色	内面黒色底面 墨書「太口□□」
SB04-P3	03	SB-04-P3	灰釉陶器	小碗	(9.8)	(1.9)	-	4.0	口縁 1/8	原物は深く内湾して立ち上がり口縁縁部でやや平反。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土 灰白 釉 暗赤緑	美濃産虎山 1 【301】 実 98-2-009
SB04-P5	04	SB-04-P5	灰釉陶器	瓶類	-	(3.4)	-	38.5	肩径 1/8	原物は深く内湾へ丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土 灰白 釉 暗赤緑	猿投 390 号 【302】 実 98-2-010

SB05 (第100・101図、第63・64表、遺構図版10・11、遺物図版16)

梁行6.30m・21尺・一間=端間5.5尺、中央間=5尺、桁行4.50m・15尺・一間=南間7尺、北間8尺。南側柱列の中間柱穴は確認されていない。P2・6の掘方は柱抜き取り穴か。P8は礎板痕跡の他に柱のあたりが、P9には柱のあたりが2か所把握されているが、各柱穴に対応する状況は認められず、部分的な柱の差し替えによるものであろうか。写真からP3では柱痕跡と版築状の掘方埋土が確認される。

重複関係：S106・08・13に切られる。SB07を切る。SA03を切るか。出土遺物：土師器220.7g、須恵器59.2g、礫10.7g。01は灰釉陶器長頸瓶で、猿投産・黒笹90号窯式(9世紀後半)。遺構の帰属時期：出土遺物と、10世紀前半のS106・13に切られることから、9世紀後半と位置づけられるか。



第100図 SB05

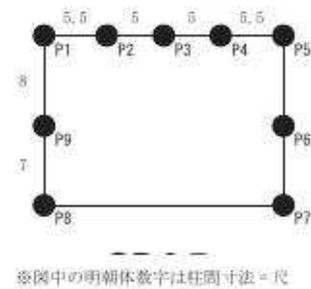
第101図 SB05出土遺物

第63表 SB05出土遺物観察表

遺構番号	図版番号	図記	種類	形状	口径	原産	底径	重量	保存	形状の特徴	出土	検出	色調	備考
SB05-P1	01	S113	灰釉陶器	長頸瓶	—	(S.8)	—	74.9	製陶所	外面印にヘラクズリ、 内面は比較的縁く弱平 かに内湾しながら立ち 上がる。内面は滑らかな イロワラシ。	表分の出土し無多 い。	良好	胎土 灰白 釉 緑黄色白鉄 釉	表版400 【30】3598-2-102

第64表 SB05 属性表

グリッド	D2・3、E3	平面形状	側柱	主軸方向	N-8° -W	
規模	梁行	2間	桁行	4間		
柱間距離 (芯々間)	P5-P6	2.44m	P1-P2	1.69m		
	P6-P7	2.01m	P2-P3	1.58m		
	P8-P9	2.01m	P3-P4	1.52m		
	P9-P1	2.31m	P4-P5	1.61m		
				P7-P8	6.46m	
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	円形	80cm	80cm	67cm	24.948m	有
P2	隅丸方形	99cm	81cm	64cm	24.976m	有
P3	不整形	98cm	92cm	49cm	25.129m	有
P4	隅丸方形カ	90cm	(66cm)	65cm	24.974m	有
P5	隅丸方形	105cm	100cm	38cm	24.991m	有
P6	不整形	88cm	82cm	51cm	25.093m	有
P7	不整形	70cm	53cm	69cm	24.916m	無
P8	方形	80cm	70cm	30cm	25.337m	有
P9	隅丸方形	99cm	94cm	47cm	24.940m	有



※図中の明朝体数字は柱間寸法 = 尺

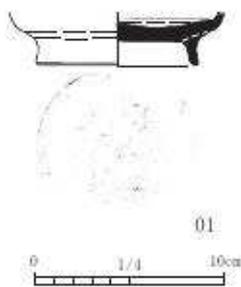
SB06 (第102・103図、第65・66表、遺構図版11、遺物図版16)

梁行一間=5.5尺、桁行4.65m・15.5尺・一間=端間5尺、中央間5.5尺。西側は調査区外に延びるが、梁行2間、桁行3間であろうか。

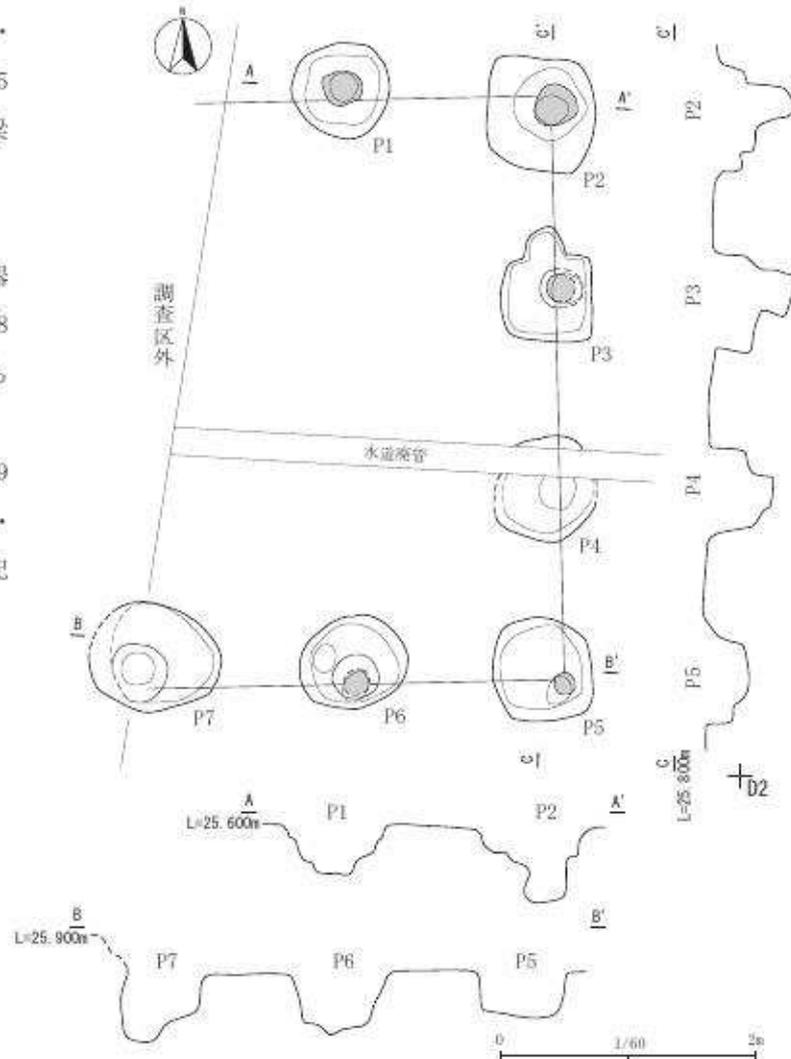
重複関係：なし。

出土遺物：土師器12.6g、須恵器230.9g。01は須恵器高台付坏で、8世紀後葉～9世紀前半に位置づけられる。

遺構の帰属時期：出土遺物と、9世紀後半～10世紀後半のSI27・28・31に近在することから、9世紀前半以前と考えるのが穏当か。



第103図 SB06 出土遺物



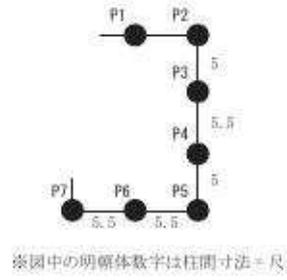
第102図 SB06

第65表 SB06 出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	図記	種類	器種	口径	器高	底径	底厚	残存	器形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB06-01	III	SI-07 P-6	須恵器	高台付	—	(2.7)	6.1	137.6	体底半端一破部	コテコテ型、表裏同様にヘラツクリ。	小一中粒多い、白色針状物富・炭粒微量。	良好	内外面 灰	外面に赤褐色土

第66表 SB06 属性表

グリッド	C1	平面形状	側柱	主軸方向	N-1° -W	
規模	梁行	2間以上	桁行	3間		
柱間距離 (芯々間)	P1-P2	1.67m	P2-P3	1.45m		
	P5-P6	1.64m	P3-P4	1.61m		
	P6-P8	1.72m	P4-P5	1.55m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形	77cm	76cm	39cm	25.110m	有
P2	隅丸方形	86cm	86cm	59cm	24.890m	有
P3	隅丸方形	72cm	70cm	62cm	24.880m	有
P4	不整形	84cm	81cm	50cm	25.030m	無
P5	隅丸長方形	83cm	79cm	35cm	25.220m	有
P6	不整形	86cm	72cm	49cm	25.070m	有
P7	不整形	105cm	86cm	52cm	25.010m	無



SB07 (第105図、第67表、遺構図版10)

梁行 3.60m・12尺・一間=6尺、桁行 4.80m・16尺・一間=端間5.5尺、中央間5尺。南側柱列の中間柱穴はSI08によって消失か。梁行2間、桁行3間と見てよいだろう。ややはっきりしないが、写真記録ではP6はSB09-P2を切るようである。P5とSB09-P1の切り合いは不明。

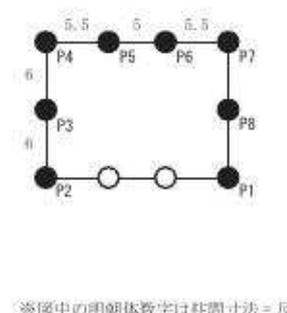
重複関係：SI08とSB05に切られる。SB09を切るか。

出土遺物：土師器 63.4g、須恵器 279.4g。

遺構の帰属時期：9世紀後半のSB09との重複関係と、SB05に切られることから、9世紀後半と位置づけられる。

第67表 SB07 属性表

グリッド	D2・3	平面形状	側柱	主軸方向	N-10° -W	
規模	梁行	2間	桁行	3間		
柱間距離 (芯々間)	P2-P3	1.57m	P1-P2	4.74m		
	P3-P4	1.70m	P4-P5	1.69m		
	P7-P8	1.88m	P5-P6	1.45m		
	P8-P1	1.86m	P6-P7	1.61m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	長方形	72cm	48cm	-	-	無
P2	長方形	(67cm)	(52cm)	23cm	25.320m	無
P3	不整形	71cm	57cm	47cm	25.160m	有
P4	不整形	113cm	109cm	28cm	25.289m	有
P5	不整形	109cm	90cm	23cm	25.360m	有
P6	不整形	102cm	99cm	50cm	25.110m	有
P7	隅丸長方形	103cm	73cm	46cm	25.166m	有
P8	不整形	(77cm)	73cm	32cm	25.300m	無



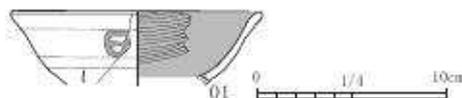
SB09 (第104・105図、第68・69表、遺構図版10、遺物図版16)

梁行 4.05m・13.5尺、桁行 5.10m・17尺・一間=端間6尺、中央間5尺。南側柱列の中間柱穴はSI08によって消失の可能性があります、梁行2間、桁行3間と見てよいだろう。

重複関係：SI08に切られる。SB07にも切られるか。

出土遺物：土師器 66.4g、須恵器 41.8g。01は土師器無台杯（黒色土器A類）で、体部外面に墨書「田」あり。

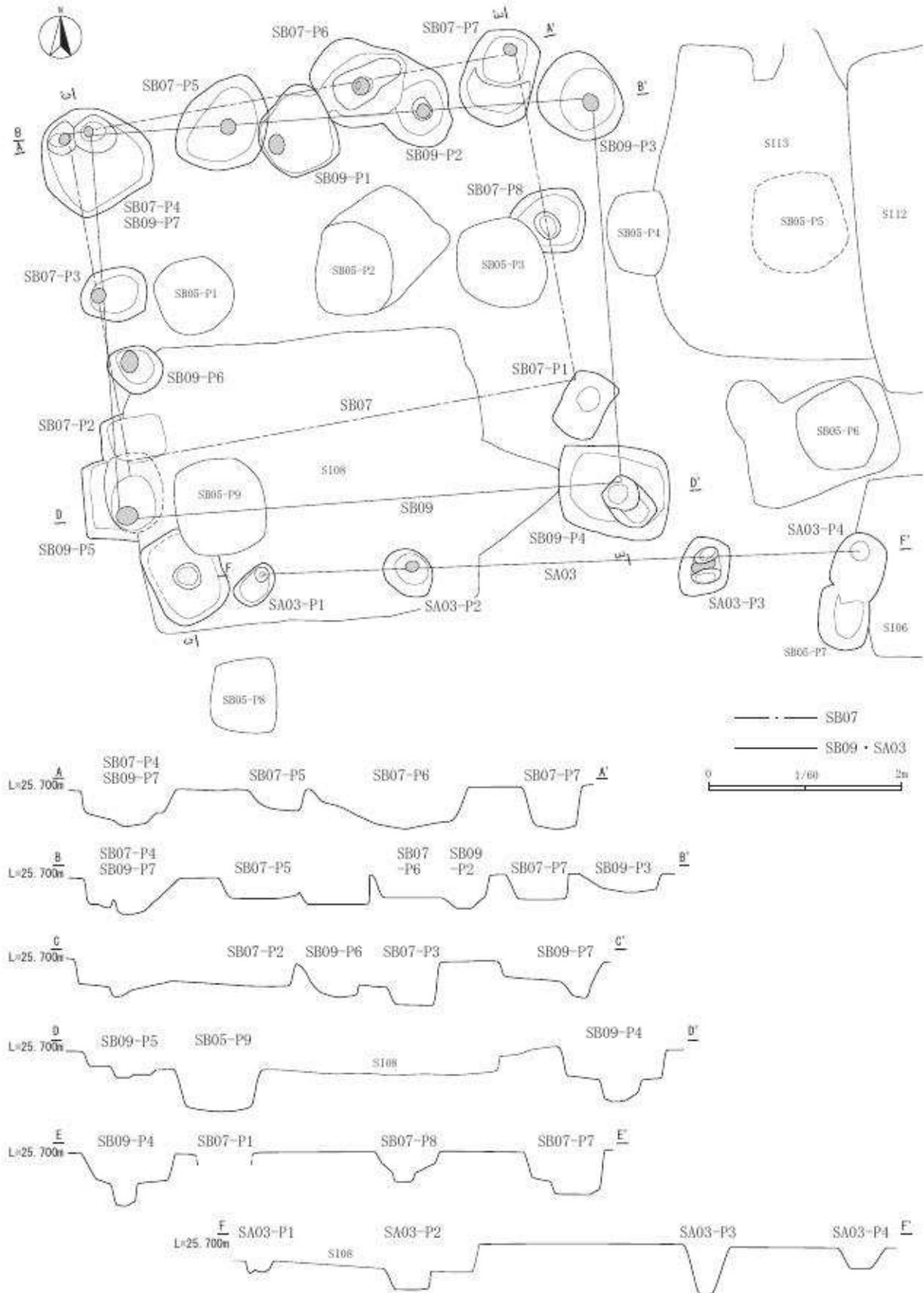
遺構の帰属時期：9世紀後半のSB05に切られ、SB07との重複関係から、9世紀後半と位置づけられる。SB07とは、ほぼ同規模、同一場所における建て替えの関係が推定される。



第104図 SB09 出土遺物

第68表 SB09 出土遺物観察表

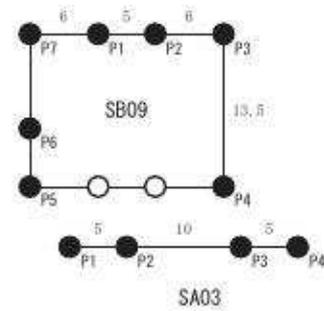
遺物番号	掲載番号	記号	種類	器種	口径	器高	底径	重量	保存	形状の特徴	産土	検出	色調	備考
SB09-P1	01	SB-09-P1	土師器	無台杯	(12.6)	(4.5)	-	18.4	口縁1/4	ロタロ型製。内面にグナ。	灰母・白色針状物質やや多い、白色靨子少量	良好	内面 黒 外面 にぶい黄褐	内面黒色処理 墨書「田」



第105圖 SB07・09・SA03

第 69 表 SB09 属性表

グリッド	D2・3	平面形状	側柱	主軸方向	N-4° -W	
規模	梁行	2間	桁行	3間		
柱間距離 (芯々間)	P3-P4	4.12m	P4-P5	5.13m		
	P5-P6	1.59m	P7-P1	1.96m		
	P6-P7	2.43m	P1-P2	1.55m		
			P2-P3	1.73m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整形	88cm	78cm	35cm	25.285m	有
P2	不整形	(87cm)	73cm	36cm	25.248m	有
P3	不整形	94cm	82cm	20cm	25.420m	有
P4	隅丸長方形	117cm	96cm	55cm	25.045m	無
P5	長方形	(84cm)	84cm	27cm	25.299m	有
P6	不整形	58cm	49cm	36cm	25.192m	有
P7	不整形	113cm	109cm	39cm	25.185m	有



※図中の明細体数字は柱間寸法＝尺

SB08 (第 106 図、第 70 表、遺構図版 11)

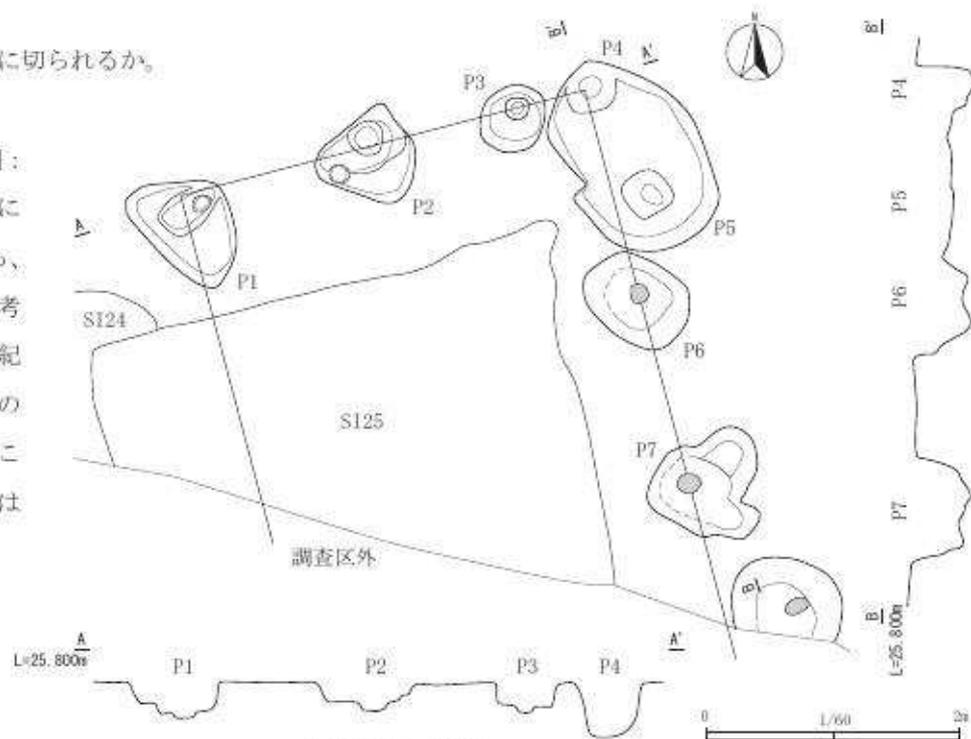
梁行 3.30m、11 尺、一間=5.5 尺、桁行も一間=5.5 尺。南側調査区外に延びる。西側柱列の中間柱穴は SI25 によって消失か。梁行 2 間、桁行 3 間と見られる。P3 は副え柱か。P4・5 の新旧関係は不明。あるいは P5 は P4 の柱抜取穴か。柱掘方平面形は概ね隅丸長方形で、北西-南東方向に長軸を向ける傾向があるようだ。P7 の突出部分、及び P1・2 の変形は柱抜き取りによるものと見られる。P7 南東の柱穴は SB09-P5 南東の柱穴と同一建物の可能性があるだろうか。

重複関係：SI25 に切られるか。

出土遺物：なし。

遺構の帰属時期：

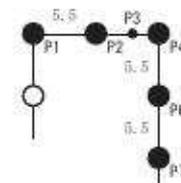
9 世紀前半の SI25 に切られる可能性から、9 世紀前半以前と考えられるが、8 世紀末～9 世紀初頭の SI24 とは近接することから、同時存在は考え難い。



第 106 図 SB08

第 70 表 SB08 属性表

グリッド	D2	平面形状	側柱	主軸方向	N-15° -W	
規模	梁行	2間	桁行	2間以上		
柱間距離 (芯々間)	P1-P2	1.61m	P4-P6	1.68m		
	P2-P4	1.82m	P6-P7	1.56m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整形	100cm	70cm	35cm	25.230m	無
P2	不整形	76cm	76cm	24cm	25.290m	無
P3	円形	58cm	49cm	24cm	25.280m	無
P4	不整形	89cm	55cm	46cm	25.070m	無
P5	不整形	103cm	96cm	29cm	25.240m	無
P6	隅丸長方形	87cm	65cm	44cm	25.100m	有
P7	隅丸長方形	69cm	60cm	56cm	25.073m	有



※図中の明細体数字は柱間寸法＝尺

第4節 柵・掘立柱塀跡

発掘調査時に認識されていたものはSA01・02の2基で、SA03は整理作業において想定したものである。

SA01 (第107図、第71表)

全長4.72mの柱穴列。柱掘方は径4、50cmの平面円形と小さく、大きな上部構造は想定しがたい。

重複関係：SI42を切る。SI43に切られるか。

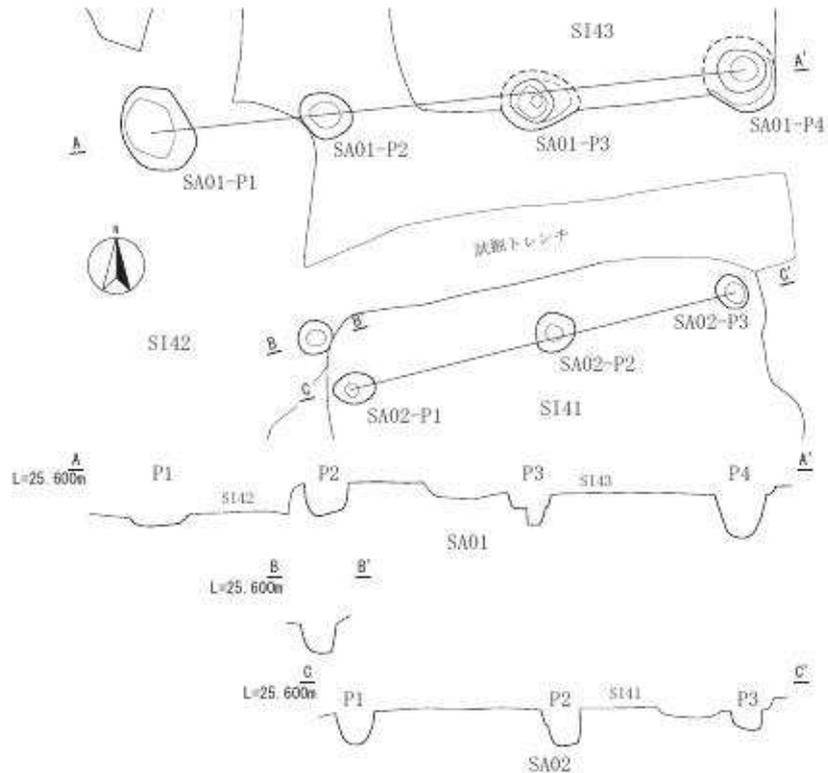
出土遺物：なし。

SA02 (第107図、第72表)

全長3.14mの柱穴列。P1北西のピットの関連は不明。SA01と同様、柱掘方は径4、50cmの平面円形と小さく、大きな上部構造は想定しがたい。

重複関係：SI41を切る。

出土遺物：なし。



第107図 SA01・02

第71表 SA01 属性表

グリッド	A・B2		主軸方向		N-84°-E	
規模	3間					
柱間距離 (芯々間)	P1-P2	1.37m				
	P2-P3	1.69m				
	P3-P4	1.66m				
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整形円形	72cm	52cm	9cm	25.146m	無
P2	不整形円形	43cm	36cm	27cm	25.227m	無
P3	不整形円形	(61cm)	41cm	26cm	25.159m	無
P4	不整形円形	(53cm)	57cm	35cm	25.053m	無

第72表 SA02 属性表

グリッド	B2		主軸方向		N-76°-E	
規模	2間					
柱間距離 (芯々間)	P1-P2	1.66m				
	P2-P3	1.46m				
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整形円形	34cm	25cm	26cm	25.299m	無
P2	不整形円形	33cm	31cm	30cm	25.087m	無
P3	不整形円形	29cm	23cm	16cm	25.213m	無

SA03 (第105図、第73表)

全長6.21mの柱穴列。端間5尺、中央間10尺と規則性が見られ、中間柱穴(P2・3)には柱のあたりが認められる。

重複関係：SI06に切られる。P4とSB05-P7の切り合いは不明瞭であるが、記録過程からすると、P4→SB05-P7である。

出土遺物：なし。

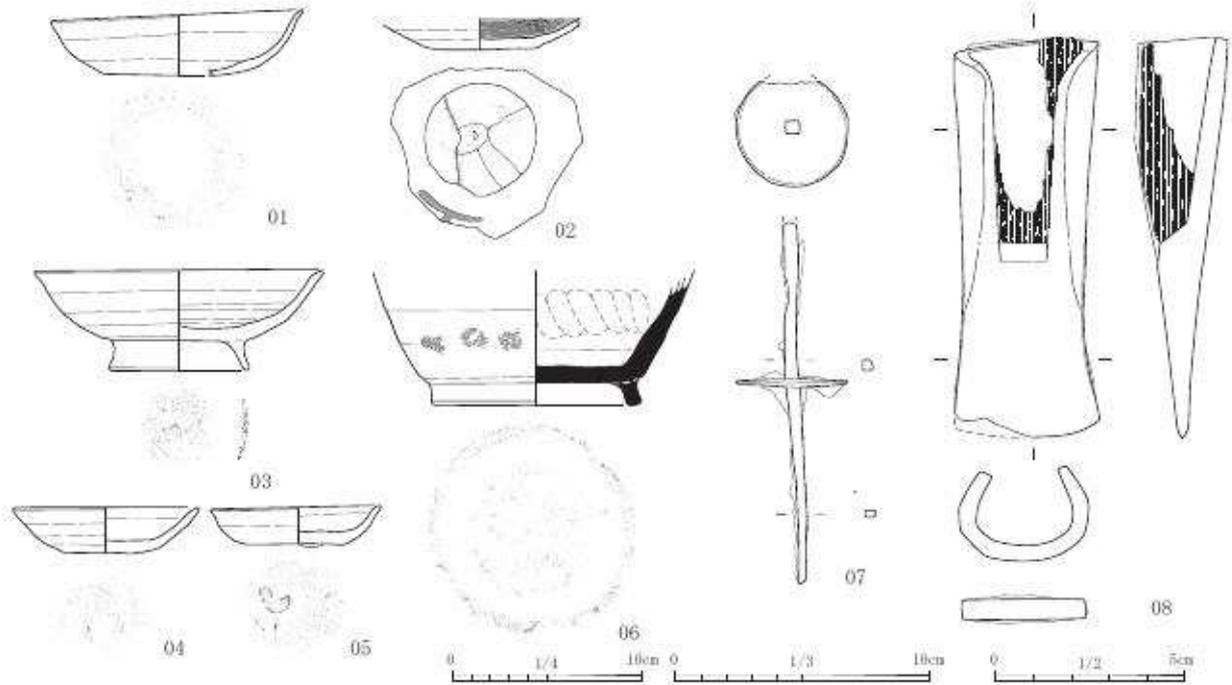
第73表 SA03 属性表

グリッド	D3		主軸方向		N-88°-E	
規模	3間					
柱間距離 (芯々間)	P1-P2	1.56m				
	P2-P3	3.05m				
	P3-P4	1.60m				
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整形円形	49cm	32cm	12cm	25.299m	無
P2	不整形円形	57cm	45cm	22cm	25.113m	有
P3	不整形円形	63cm	51cm	46cm	25.131m	有
P4	不整形円形	(62cm)	54cm	49cm	25.065m	無

第5節 遺構外出土遺物 (第108図、第74表、遺物図版17)

遺構外出土遺物としては、残存度が高いものだけに限り掲載を行った。内訳は土師器無台坏2点、有台坏1点、小皿2点、須恵器瓶1点、鉄製品では紡錘車1点、斧1点の計7点である。

詳細は観察表にまとめた。なお「SI45No1」と注記された遺物(02)があるものの、該当する遺構はない。



第108図 遺構外出土遺物

第74表 遺構外出土遺物観察表

発掘番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	—	土師器	無台坏	13.1	3.1	7.8	102.0	口縁・底面一部欠損	ロクロ製形、底面回転ヘラ切りあり。	炭母多い、長・石等少く多い。	良好	内面 にぶい黄褐色 外面 灰黄褐色	
02	SI45No.1	土師器	無台坏	—	11.6	5.9	98.3	体部下縁一部欠損	ロクロ製形、底面回転系切り周縁を広く下持ちヘラで削り、内面を方角。	炭母多い、白色粘土・白色砂子少量、少炭母。	良好	内面 赤 外面 にぶい黄褐色	内面黄色底面黒帯「口」
03	SI19-25 37-01	土師器	有台坏	15.0	5.3	(7.0)	205.8	ほぼ完形	ロクロ製形、体部下縁広く回転ヘラで削り、底面回転ヘラ切り。	炭母・スベリア少量、長石多い。	良好 二次焼成あり	内外面 にぶい黄褐色	
04	表採D-3	土師器	小皿	9.6	2.4	4.3	69.5	ほぼ完形	ロクロ製形、底面回転系切り(左)。	炭母・白色粘土少量、白色針状物質微量。	良好	内外面 にぶい黄褐色	
05	表採D-4	土師器	小皿	8.7	1.9	5.2	63.1	口縁1/3欠損	ロクロ製形、底面回転系切り(左)。	白色粘土少量。	良好	内外面 にぶい黄褐色	
06	表採D-3	須恵器	瓶	—	17.0	10.2	143.9	体部下縁一部欠損	ロクロ製形、外面回転系削り近年行用金が確認される。内面指痕あり、底面回転ヘラ削り痕あり。	炭母少量、白色粘土や多い。	良好	内面 にぶい黄褐色 外面 灰黄褐色	
07	表採D-4	鉄製品	紡錘車	紡錘直径4.4、紡錘長さ0.4、口長さ0.4	—	—	31.6	紡錘一部・紡錘上部欠損	紡錘は円盤状(鉄製)、紡錘は断面方形を呈するよりである。紡錘上面には緑青色の付着物が着取される。				
08	表採	鉄製品	須恵器斧	長10.5	刃部幅5.8	厚1.1	160.7	刃部一部欠損	鉄製タイプ。基部幅と刃部幅がほぼ同じ。裏面の割傷が著しいが、刃部は両方と見てよい。柄部には柄の木目が残り、着柄状態であったことがわかる。				

第5章 まとめ

第1節 緑釉・灰釉陶器の出土状況

本遺跡から出土した緑釉陶器は7点、灰釉陶器は112点である。出土した各遺構別に掲載した。

これらの遺物については、川井正一氏指導のもと小松崎博一・山本吉一氏の両名により資料紹介がなされている（小松崎・山本2007）。本報告に掲載した遺物図は、同書に掲載された実測原図をデジタルにより再トレースしたものである。また、遺物の産地同定については未報告ながら両氏がまとめられた一覧表を提供いただき、所見はそのまま転載した。

その中では、黒笹14号窯、同90号窯、折戸53号窯、東山72号窯の猿投型式、及び光ヶ丘1号窯、大原2号窯、虎溪山1号窯の美濃型式、更に三河の二川窯、遠江の宮口窯の資料が出土していたと記載される。猿投・百代寺窯式の出土は報告されていない。齊藤孝正氏の編年（齊藤2000）に当てはめれば、9世紀前半から10世紀末ころにかけての遺物が出土していることになる。なお、国分遺跡においては11世紀代とされる百代寺窯式遺物の出土が報告されている（川井2002）。

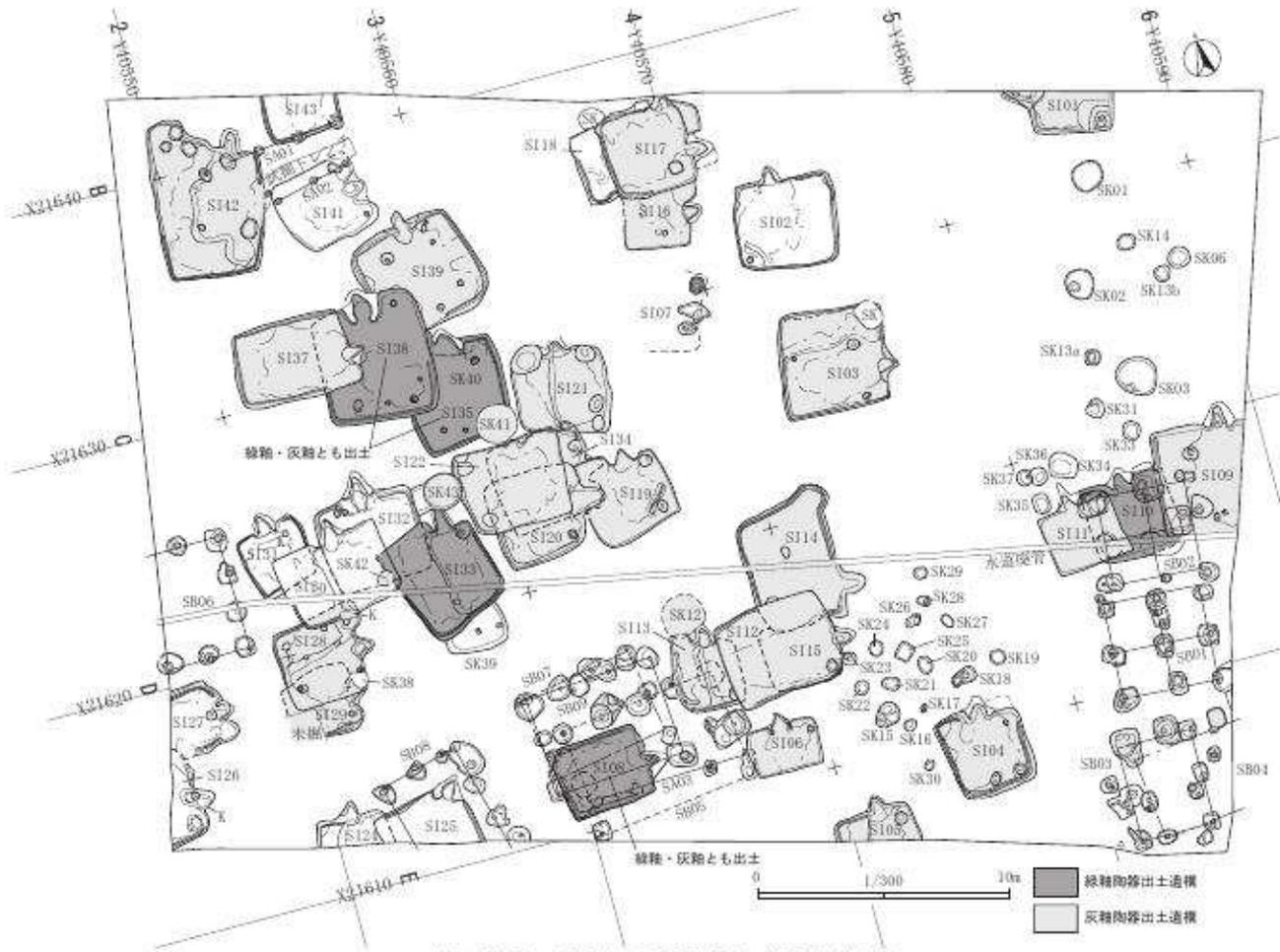
これらの遺物が出土した遺構を全体図に色分けしたものが第109図である。遺構の重複関係ではSI22・SI33がSK43によって切られており、調査の結果からSK43が新しくなることが判明している。SK43では東山72号窯産の灰釉深碗、虎溪山1号窯の灰釉碗が出土する。一方、SI33では黒笹90号窯式に並行する緑釉碗が出土しており齧齧はない。また、SI19～22・34では重複関係からSI21・22が最も新しくSI20→SI19→SI34の順に古くなることが確認されている。いずれの遺構も黒笹90号窯式を主体とするもので、明確な判定はできないが、SI19では黒笹14号窯式～黒笹90号窯式の9世紀前半が主体となる遺物が多く灰釉陶器からはやや古い様相を示す。これは新旧関係に若干の疑問を残している。一方で、SI35・37・38・39では重複関係からSI35・39が最も古く、SI38→SI37の順に新しくなる。SI37では黒笹14号窯式～黒笹90号窯式と9世紀前半の遺物が主体で、SI38では黒笹14号窯式～黒笹90号窯式でほぼ同様の組成、しかしながらSI35では9世紀後半の光ヶ丘1号窯・折戸53号窯の遺物が主体となり、明らかに齧齧を生じている。土坑ではSK40で黒笹90号窯式の新段階、SK41で黒笹90号窯式～折戸53号窯式、SK42では虎溪山1号窯式段階、SK43では虎溪山1号窯式・東山72号窯式が出土しており、住居跡出土の緑釉・灰釉陶器に対して全体的に新しい段階の遺物が出土している。これは、土坑と住居跡の新旧関係からも齧齧はない。

さらに掘立柱建物跡では、SB01・03・05から黒笹90号窯式、SB03から虎溪山1号窯式の遺物が出土している。住居跡群の遺物と並行関係にある。したがって、住居跡と掘立柱建物跡の新旧関係は異なった時期に存在したものでなく、住居跡と並行して存在したものと判断される。

第2節 文字資料

出土した文字資料（記号を含む）としては、土器に書かれた墨書38点、朱墨書1点、刻書（焼成前）20点である。破片資料が多いため判読不明のものがあるが、第110・111図にその一覧を示した。なお、文字の読み下しは国立歴史民俗博物館館長平川 南先生にお願いした。

墨書土器はほとんどが土師器杯・埴類で、本遺跡では9世紀中葉から10世紀後半の内黒土器の体部外面に書かれたものが一般的である。SI01から出土した6点のうち、06「曹司」は、官庁に付帯する施設及び官位の一つと考えられ、茨城町奥谷遺跡や千葉県香取市古屋敷・印西市油作第2遺跡などに類例がある。05「万」・



第109図 緑釉・灰釉陶器出土遺構分布図

第75表 緑釉・灰釉陶器分類表

実年代	緑釉系			花土系		灰釉系		三河(三川系)			通江(宮口系)		
	型式(略号)	型式	出土遺構	型式	出土遺構	型式	時期	出土遺構	群	層	出土遺構	群	出土遺構
800	非→草29号型式(1678)		S109										
	黒坂14号型式(OK14)	1型式											
		2型式	S113・S137・SK14										
	K14→890	S109・S116・S119・S121・S122・S137・S138・S139・SK42											
850	黒坂90号型式(OK90)	1型式(OK90-1)	S115・S137・S139・SK11・SK12・SK42										
		2型式(OK90-2)	S104・S109・S114・S120・S122・S133緑・S135緑・S138緑	S104・S105緑・S109・S110緑・S113・S114・S115・S117・S119・S122・S128・S133緑・S134・S135緑・S137・S138・S142・SK04緑・SK11・SK32・SK41・SK01・SK02・SK02	黒坂4号型式 S118								
		3型式(OK90-3・90黄)	S109・S111・SK41										
	E90→052	S117・SK41											
900	戸川50号型式(163)	1型式	S114・S153										
		2型式		SK43	黒坂4号型式								
950	163→1672												
	黒山72号型式(1672)		SK43										
1000	百代半型式	1型式											
		2型式											
1060													

07「福」は吉祥文字で、前者は桜川市西小塩・阿見町頭田遺跡、後者はつくばみらい市鎌田・石岡市鹿の子C遺跡、両者とも出土しているのはつくば市中原遺跡である。おなじ吉祥句でもSI17-10「利古」は11世紀に降る事例で、他に例を見ない。SI39-01「十万」は合わせ文字の一種と思われる。

ここで注目されるのはSI20-08「物」・SK18-01「生口」で、とくに「生」については奥谷遺跡や千葉県習志野市谷津貝塚遺跡から多量に発見されており、他にも鹿の子C・中原遺跡に例がある。ともに古代東国の氏族として、物部や壬生系統の姓と考えることも可能である。なお、SI35-04は8世紀代に遡る須恵器蓋で、一部擦れてしまったが「石上□□」と読める。さらに、SB03-01「太□□□」も9世紀後半の多文字資料として興味深い。また、SI32-02は土師器甕の胴部破片で、人面絵画の一部（頬の辺り）と思われる。

その他の文字について県内での分布をみると、SI14-08「子」が牛久市ヤツノ上・稲敷市幸田台、SI22-03等「上」が中原、SK35-01「田」が竜ヶ崎市南三島・石岡市国分・奥谷遺跡にある。

刻書したものの中には9世紀代の須恵器にみられるいわゆる窯印があり、これが10世紀以降の土師器にも引き継がれているのが珍しい。またSI09-04「丁井」が内黒土師器に、SI38-12「仲林」が須恵器瓶の胴部に刻まれているが、ともに生産地名を表したものである可能性がある。

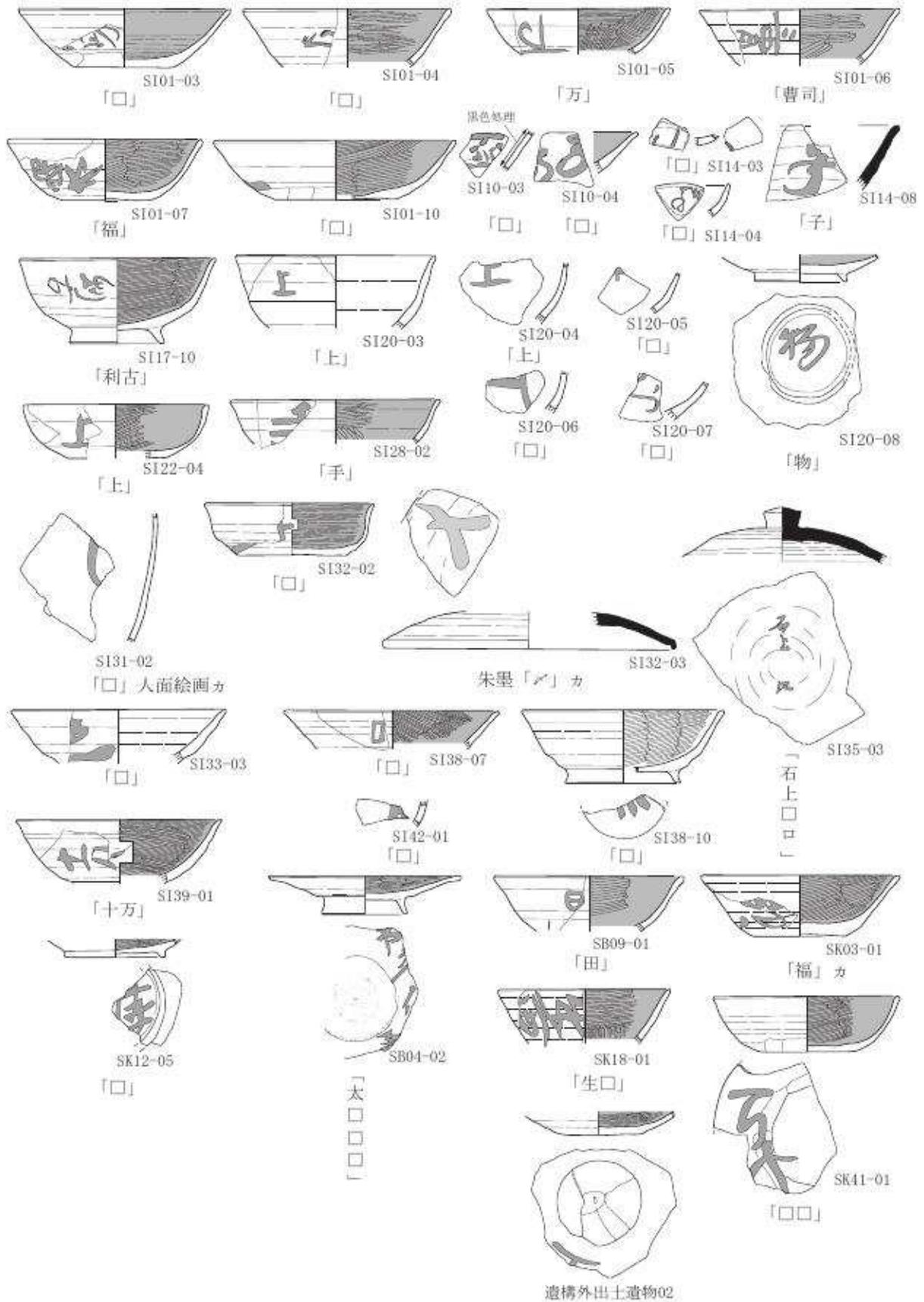
第3節 出土遺物の年代観

本遺跡から検出された遺構は住居跡41軒、掘立柱建物跡9棟、柵・掘立柱塀跡3条、土坑35基であった。これらの遺構の帰属する時期について、特に住居跡については、当初、調査担当者の土生朗治氏によって概要報告書第5図「竪穴住居跡の構造と新旧関係」にその新旧関係が形状を考慮して示されていた。整理作業に当たって、筆者らも同図の見解を基に、遺物の組み合わせから年代観を示すことに努力した。しかし、現場（原図）で切り合いが不明瞭であった住居跡については、出土遺物の帰属の検討、型式学的検討を踏まえると、新旧関係が逆転するものが認められた。そのため、改めて1.住居跡の重複関係、2.遺物のセット関係、3.緑釉・灰釉土器の3項目の関連から検討を加えることになった。3については、小松崎氏らによる緑釉・灰釉陶器の分類結果から齊藤編年に基づいて、在地産の土師器・須恵器との整合性についてクロスチェックを行った。

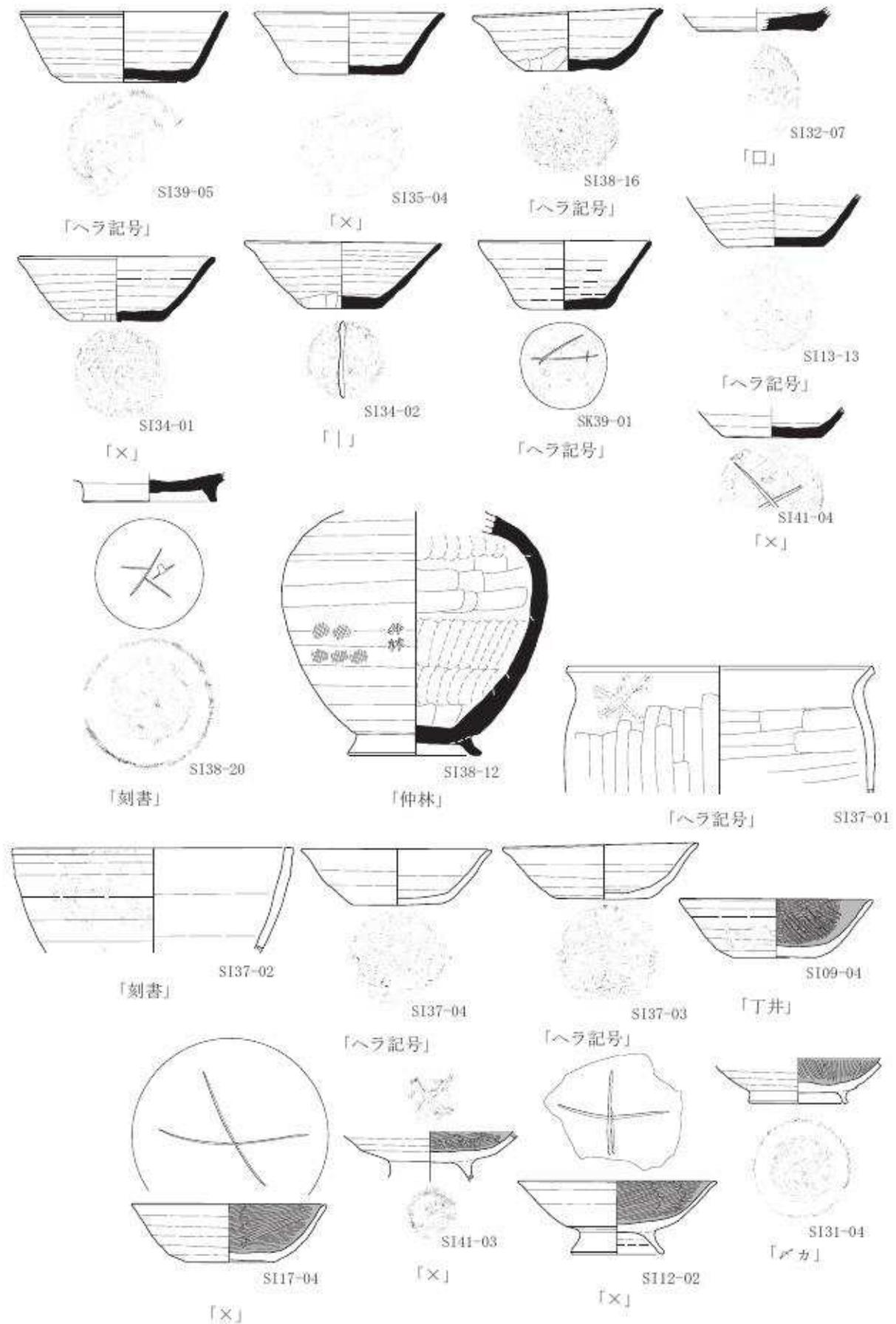
まず、本節では出土遺物について整理をしておく。土師器・須恵器について、それぞれ継続する器種、消滅する器種、新たに出現する器種をもって各時期の画期とした。その結果、8世紀後葉～9世紀初頭（I期）、9世紀前半（II期）、9世紀後半（III期）、10世紀前半（IV期）、10世紀後半（V期）、11世紀（VI期）の6期に分類された。

I期 8世紀後葉～9世紀初頭の遺物の特徴としては、須恵器無台坏では底部が平坦で口径に対し底径が広く、器高は比較的浅いものを主体とし、須恵器蓋では返しを持たないものが出土する。さらに、有台の坏・盤がある。なお、須恵器の出土量の比率が土師器に対して多い。これらをもって8世紀後葉～9世紀初頭段階と判断した。東海産須恵器・灰釉陶器の編年では井ヶ谷78号窯式、黒笹14号窯式1・2型式がこれに並行する。

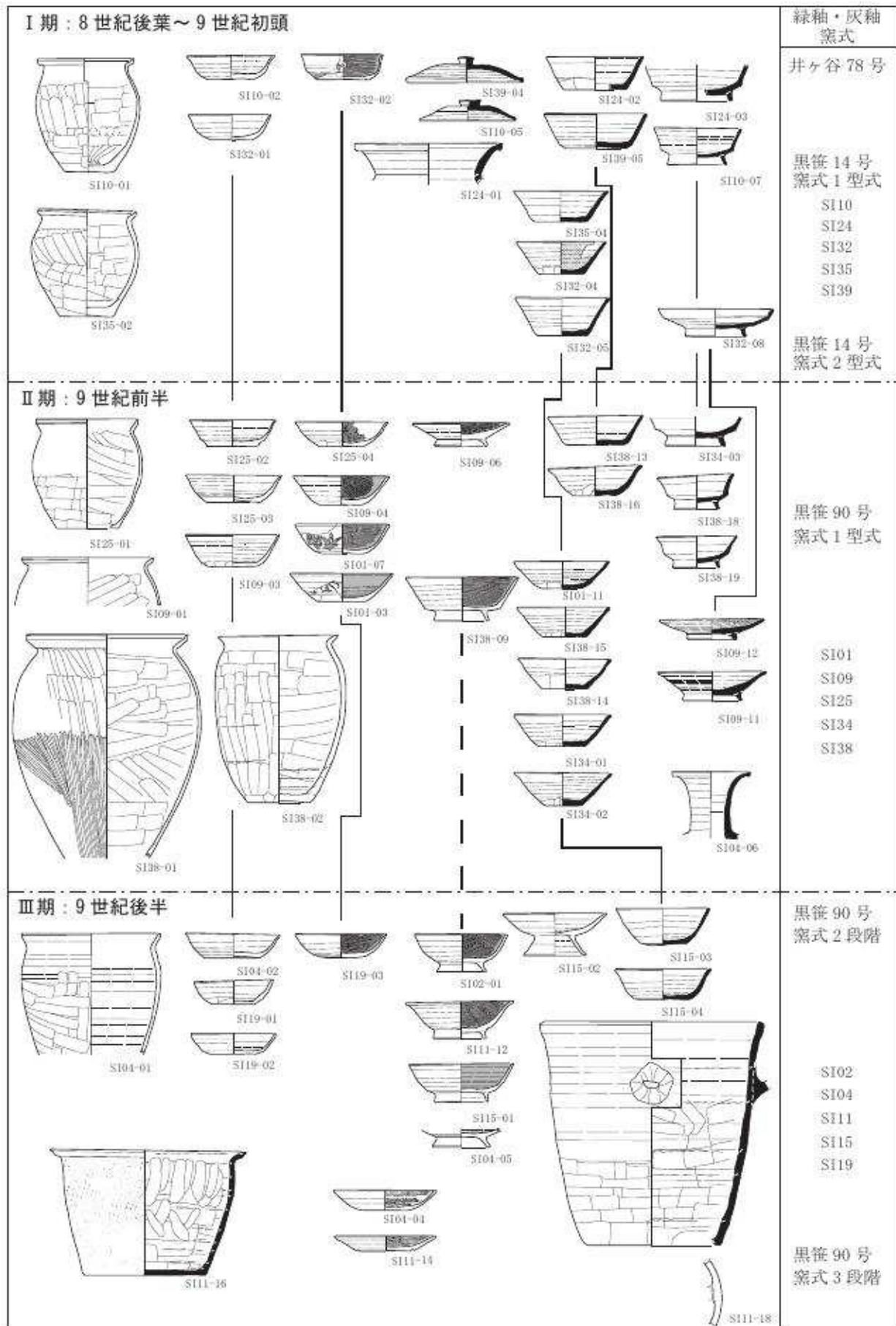
II期 9世紀前半は須恵器の無台坏が口径に対し底径が小さくなり、器高が高くなるものに変化する。盤（有台皿）の口縁部も直線的に開くようになり、体部に屈曲は見られない。また、有台坏は前期に比較して小型化する傾向がある。須恵器の蓋は姿を消している。これらの特徴をもって9世紀前半と判断した。また、土師器無台坏は体部が緩やかに内湾し、内面ミガキ調整・黒色処理を施す黒色土器A類、特に墨書を有する資料の増加が顕著である。灰釉陶器では黒笹90号窯式1型式の遺物が共伴関係になる。



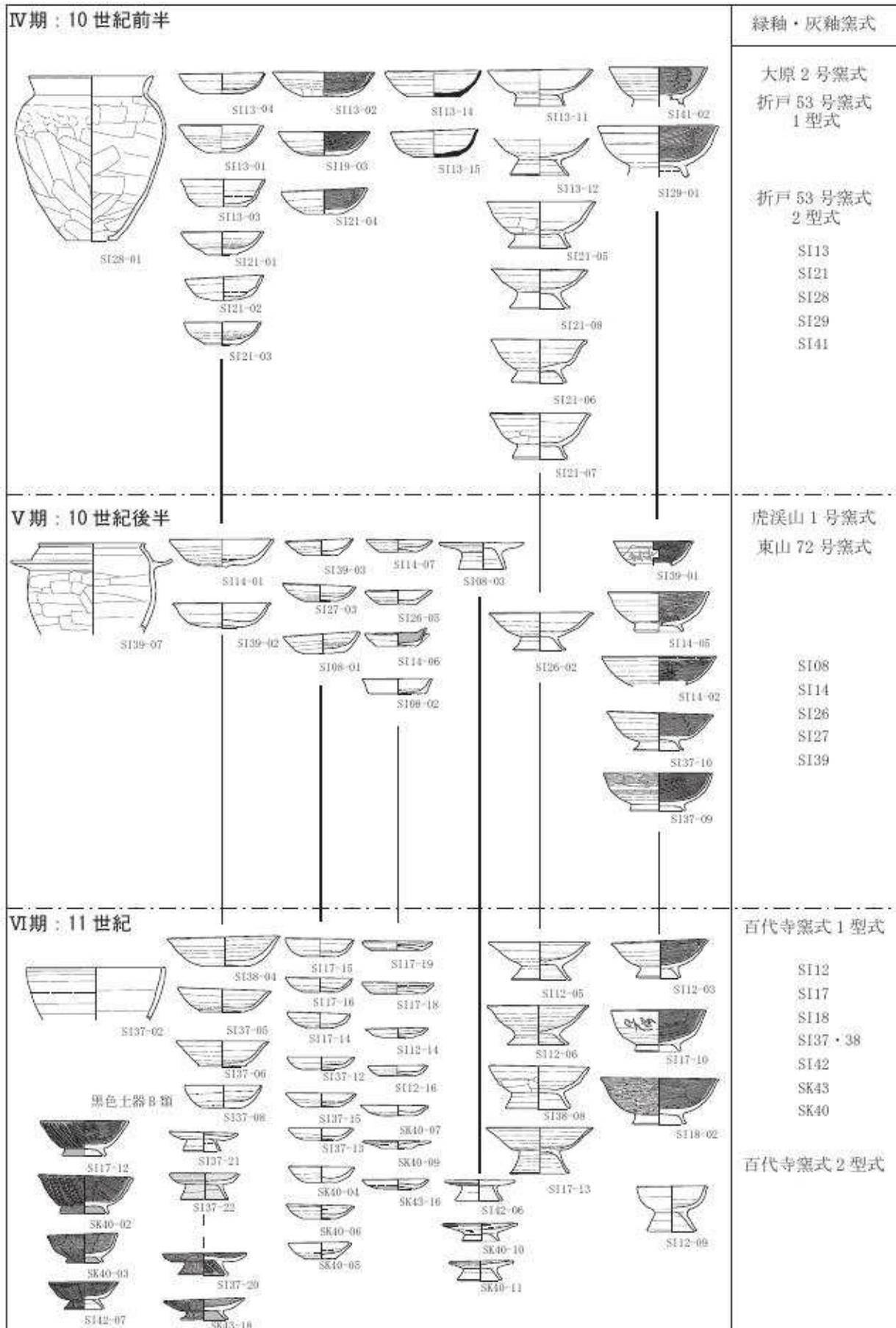
第110図 墨書土器集成図



第111図 刻書土器集成図



第112図 土器編年1 (8～9世紀)



第113図 土器編年2 (10～11世紀)

Ⅲ期 9世紀後半になると土師器甕から常総型が姿を消し、並行して須恵器の供膳形態の量が減少する一方で、甕・甔などに特徴的な須恵器が出現している。須恵器有台坏は姿を消し、足高高台の有台碗（坏）が出現する。また、土師器では少量ながら黒色土器A類の有台碗や、皿が出現する。全体の須恵器が占める量は極端に減少してくる。土師器の無台坏も本遺跡では出土量は少ない。これらの特徴をもって9世紀後半と判断した。灰釉陶器では猿投黒笹90号窯式2型式及び3型式が共伴する。微量ながら緑釉陶器が出土するが、やはり黒笹90号窯式またはそれに並行する資料と判断される。

Ⅳ期 10世紀前半では土師器無台の小型坏が出現する。約半数が黒色土器A類である。さらに有台碗が量を増す。中には比較的高台が高い、足高高台碗が急激な増加を示している。一方で墨書土器の数は激減している。また、土師器無台小型坏は皿状にやや浅くなるものも出現している。須恵器無台坏が少量ながら検出されているが、焼成が極めて粗悪で、還元不良の軽量のものが主体となり、土師質の須恵器とも表現できるものである。技術的にはロクロ整形で回転ヘラ切りを行うもので、須恵器の技法に法っている。これらの特徴をもって10世紀前半と判断した。灰釉陶器では大原2号窯式、折戸53号窯式1型式・2型式が共伴関係にある。

Ⅴ期 10世紀後半では羽釜の出土が挙げられる。また、土師器無台坏が増加し、それまで小振りであったものに加え大振りのものも見られる。この時期になると無台坏の内面に黒色処理を施すものは見られなくなる。また特徴的な事象として、須恵器の消滅、土師器小皿の急増、高足の有台皿の出現が挙げられる。土師器有台碗は依然として一定量の出土が見られる。一方、有台碗で内面黒色処理の黒色土器A類が多量に出土する。この時期になると墨書土器は減少するようである。灰釉陶器では虎溪山1号窯式、東山72号窯式が見られる時期で、灰釉陶器の全体量は減少する。

Ⅵ期 11世紀代では10世紀後半の組成とほぼ同様の遺物組成が見られるが、大振りの土師器無台坏は姿を消す。そして、内外面にミガキ・黒色処理を施す黒色土器B類の出現が挙げられる。内外面に炭素の吸着が見られ、断面は瓦器に酷似する。瓦器の系統へとつながるものであろう。畿内の黒色土器B類の外面のミガキ方向は横方向であるが、本遺跡出土例では縦方向のミガキとなっており、この点、畿内のものとは異なる。指標となる遺物として黒色土器B類を掲げたが、一方、灰釉陶器は百代寺窯式がこの段階に並行するものの、本遺跡では確認されていない。先日、茨城大学人文学部・水戸市教育委員会主催のシンポジウムにおいて台渡里官衙遺跡群の発掘調査成果が発表された（茨城大学編2011）。この中で、第41次調査における茨城大学の調査によって正倉跡が検出され、この基壇部分から高足の有台坏が検出されている。この遺物をもって台渡里官衙の機能の最終末期とし、12世紀を想定しているが、本遺跡における足高高台碗（坏）の出土上限は9世紀後半段階にまでさかのぼり、2世紀以上の齟齬が生じている。高足の有台碗（坏）の分類及び灰釉陶器との共伴関係についてはさらなる検証が必要と考える。

第4節 住居跡の形態と年代、及びその性格

前述のとおり、本遺跡の調査においては、41軒の住居跡が検出され、重複するものが多く確認されている。前節までの検討を踏まえて、各住居跡の属性・出土遺物・年代・重複関係についてまとめたものが第77表である。さらに、重複関係について図に表したものが第114図である。以下、各期の住居形態の特徴を列挙しておく。

I期（8世紀後半～9世紀初頭） 平面形状は方形で北側にカマドを有し、4本の支柱穴が明瞭で入口ピットを有するもの、9世紀初頭）のでやや規模が大きいものと、支柱穴を有さず規模がやや小さいものの二者がある。

II期（9世紀前半） 状況は前期とほぼ同様。東カマドが見られる。

Ⅲ期（9世後半）	方形で北側にカマドを有するもの。規模は小振りのものが多い。
Ⅳ期（10世紀前半）	方形もしくは長方形を呈し、東カマドを有するものが約半数を占める。
Ⅴ期（10世紀後半）	長方形で東カマドを有するもの。長軸が東西方向のものや、カマドがコーナー付近に偏在するものが見られる。
Ⅵ期（11世紀）	長方形で長軸が東西方向のものが目立ち、カマドはコーナー付近に設置される。

概ね以上のような変化が見られる。

特徴的な形状として、土生氏も指摘する、床面の主軸方向に段を有するものがある。8世紀末～11世紀（Ⅰ・Ⅳ～Ⅵ期）にわたって存在するが、SI24以外は10世紀前半～11世紀（Ⅳ～Ⅵ期）のものであることが判明した。これらの住居跡の中で10世紀前半（Ⅳ期）と判断したSI03に鍛冶炉が確認され、鍛造剥片、粒状滓が出土しており、鍛冶工房跡と判断される。しかしながら、この段差を有する住居跡の中で鍛冶炉を備えるものは他に確認されておらず、住居内段差と鍛冶工房の関連は明瞭ではない。現時点では遺物からこれらの段を有する住居跡の性格を特定するには至っていない。

また、漆が付着した土器を出土した住居跡はSI32・38の2軒である。前者は8世紀末～9世紀初頭（Ⅰ期）、後者は9世紀後半（Ⅲ期）である。北カマドで方形を呈する点では共通するものの、同様の形状を示す住居すべてから漆付着の遺物が出土した訳ではない。本遺跡では8世紀末～9世紀前半の須恵器（無台坏）に付着が確認された。

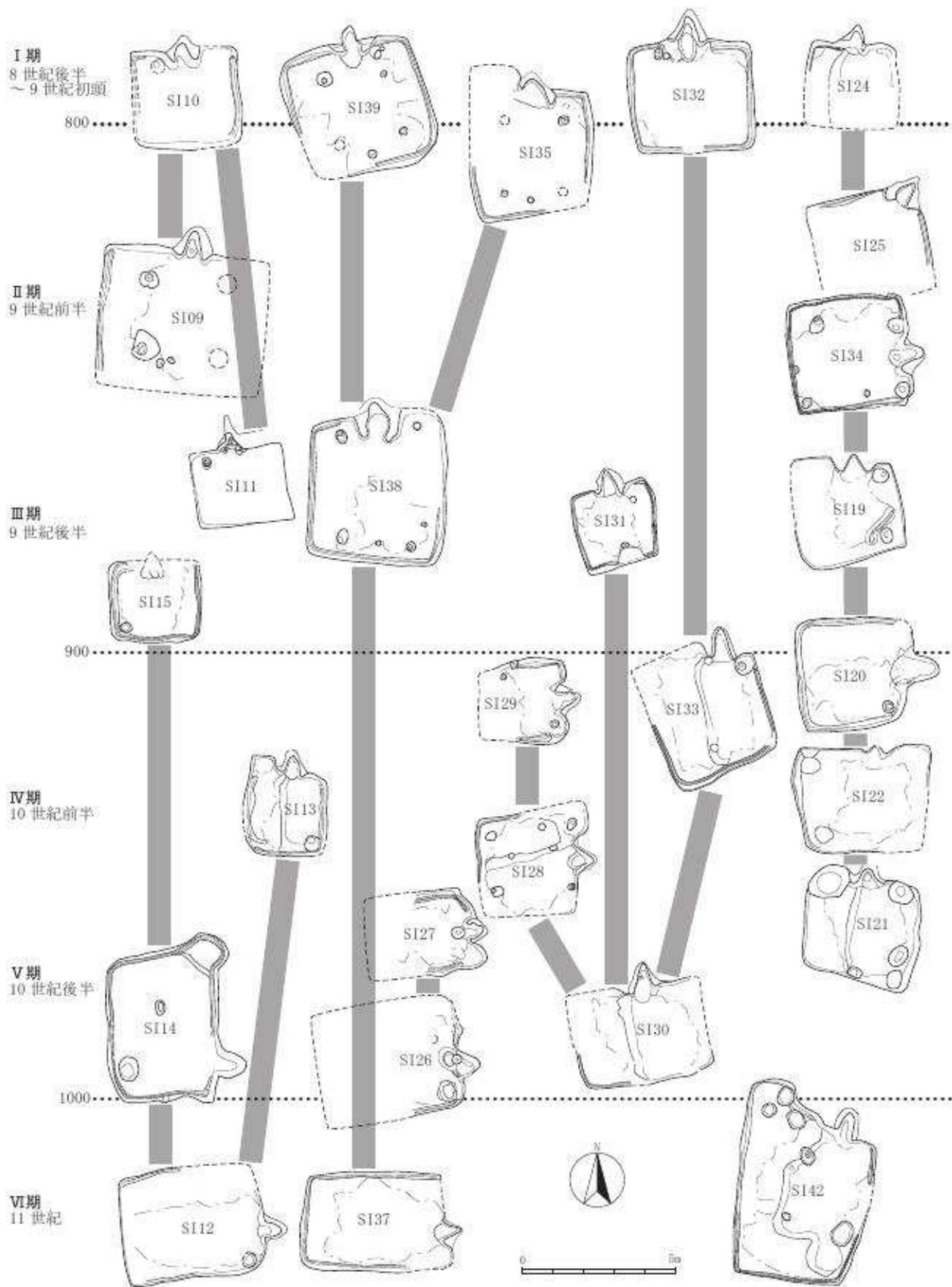
さらに、カマドの左側が大きく張り出すものがある。SI04・13・14・16・19・28・33・35・41・42の10軒であり、構造が明確ではないSI17・18がある。8世紀末～9世紀初頭（Ⅰ期）のSI35から11世紀代（Ⅵ期）のSI42まで全時期にわたって確認されている。出土遺物に特別な共通性を見出すことはできない。同様に、住居のコーナー部分に貯蔵穴状のピットを有するものも、9世紀前半（Ⅱ期）から11世紀（Ⅵ期）にかけて存在し、やや古い段階の住居では確認できない内部施設である。

以上、時期ごとの住居跡の形態、それに伴う内部施設について分析を試みた結果としては、特別な遺構または工房との関連性を認めることはできなかった。このことは、本集落の性格を鹿の子C遺跡のように工人の居住区とするには積極性に欠けている。

第5節 まとめ

繰り返しになるが、鍛冶炉・鉄滓（塊形鍛冶滓・粒状滓・鍛造剥片）・金床石・砥石の共伴から、鍛冶を行った痕跡を示している「鍛冶工房」と判断できる遺構は、SI03の僅かに1基であった。その他に、調査記録に鍛冶炉の所見が示された炉を有する住居跡（SI01・14・17）はあるものの、鍛冶の操業を示す遺構・遺物の組み合わせは明確にはできていない。このことから、鹿の子C遺跡に見られるような鍛冶・鉄製品の製作が行われた生産遺跡とは想定しがたい。さらに、僅かながら須恵器に漆が付着する資料が検出されているものの、漆生産に関わる明確な資料を確認するには至っていない。こうした状況から、いわゆる国府域内における生産遺跡として本遺跡を想定することは困難と判断せざるを得ない。

一方で、カマド左袖の延長上左側部分に一段高い床面を有する住居跡が検出されている。これらの住居跡の形態が何を意味するものかも、時期的あるいは特殊な遺構の可能性があるのかは、出土遺物からその差異を確認するには至っていない。住居中央を横断する段を有する住居跡、張り出しを有する住居跡には、時期的な変遷が認められることから、何らかの目的（生業）の異なる住居の可能性も想定される。



第114図 住居跡重複関係

第76表 住居跡属性一覧表

番号	名称	住居施設				出土遺物				住居層	住居時代	時期	相模原期	備考、 その他の出土遺物
		土間・土間壁	土間壁	土間	土間	土間	土間	土間	土間					
S101	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀前半	II	—	—
S102	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀前半	III	—	—
S103	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10世紀前半	IV	—	—
S104	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	III	—	—
S105	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S106	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S107	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S108	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	V	—	—
S109	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	II	—	—
S110	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	II	—	—
S111	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	III	—	—
S112	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	I	—	—
S113	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	VI	—	—
S114	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S115	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	V	—	—
S116	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	III	—	—
S117	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	V	—	—
S118	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	VI	—	—
S119	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	III	—	—
S120	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S121	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S122	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S123	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S124	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	I	—	—
S125	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	II	—	—
S126	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	V	—	—
S127	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	V	—	—
S128	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	V	—	—
S129	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S130	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	V	—	—
S131	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	III	—	—
S132	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	I	—	—
S133	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S134	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	II	—	—
S135	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	I	—	—
S136	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	III	—	—
S137	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	VI	—	—
S138	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	III	—	—
S139	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	I	—	—
S140	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	IV	—	—
S141	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	VI	—	—
S142	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	VI	—	—
S143	方井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9世紀後半	—	—	—

* [住居施設]：出土遺物 ● 存在、▲ 存在の可能性を示す。[住居施設]：説明は「日一跡」を示す。

ところで、9棟の掘立柱建物跡については、SB02とSB03・04に構造的に不分明な部分を残す結果となったが、それら以外の6棟については、総柱建物1棟、側柱建物5棟を確認できた。柱間寸法は5.5～6.5尺と、国庁・曹司の官舎（箕輪2009、石山ほか編2011）とは明確な格差が存在する。帰属時期は遺物の出土状況が明確ではないものの、重複・近在の住居跡との関連も含め、SB06・08をⅠ～Ⅱ期（8世紀末葉～9世紀前半）、SB01・05・07・09とSB03・04をⅢ期（9世紀後半）に位置づけた。後者の一部は、あるいはⅡ期に置くのがよいかもしれない。したがって、本遺跡存続期間の前半に建設されたことになり、概要報告で示された理解とは異なる結果となった。8世紀末～9世紀代には掘立柱建物2、3棟と竪穴住居が共存する集落形態を採っていたものと見られる。

最後に、瓦は多量に出土しているものの、軒先瓦の出土がなく、型式分類は行えないが、1枚造りで長縄叩き（燃糸状の圧痕）が施される。桶巻き造りは確認されていない。このことから、9世紀代の瓦と思われる。二次的な焼成により質量が軽いものが多く、カマドなどの構築材として持ち込まれた遺物と想定される。屋瓦葺きの建物が近隣に存在したことは考えられるものの、調査区内で礎石建物は確認されていない。

黒澤彰哉・川井正一両氏による分析（黒澤2002、川井2002）で、国分遺跡の集落は国分寺衰退期の9世紀後半から10世紀前半、国府域の拡大期に存続したことが想定されている。出土遺物から判断して、本遺跡の時期も9世紀後半から10世紀代にほぼ限定される遺構・遺物の組み合わせを見ることができる。このことは、8世紀代中葉以前の遺構・遺物が全く見られず、大半の遺構から灰釉陶器・緑釉陶器の出土が見られる点、これに伴う土器群も明らかに9世紀から11世紀代にかけての組成を示している点より、市域を分断する山王川枝谷の東側にも国府域が拡大する時期の遺跡が本遺跡と想定できる。国分遺跡同様に国分寺衰退後の国府域拡大期の遺跡と判断される。

【参考文献】

- 浅井哲也 1992・93「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ・Ⅱ）」『研究ノート』創刊号・2号 平成3・4年度（財）茨城県教育財団
 石岡市・石岡市教育委員会 2009『国府・国衙・みらち常陸国府の現状と今後―歴史の里文化のまちづくりシンポジウム
 石山 啓ほか編 2011『府中城跡―私道建設に伴う発掘調査―』石岡市埋蔵文化財調査報告書 石岡市教育委員会・有限会社陶玉工房Wogit
 (財)茨城県教育財団奈良・平安時代研究班 1996「茨城県域における発掘陶器の検討(2)」『研究ノート』5号（財）茨城県教育財団
 (財)茨城県教育財団 2001～04「茨城県域における文字資料集成1～4」『研究ノート』9～12号
 茨城大学人文学部考古学研究室編 2011『古代常陸の原備―那賀郡の成立と台渡里官衙遺跡群―』古渡里官衙遺跡群国史跡追加記念・第7回茨城大学人文学
 部地域史シンポジウム発表要旨集 茨城大学 人文学部・木戸市教育委員会
 川井正一 1998「各国報告―常陸国」『シンポジウム 東国の国府 in WAYO―考古学からみた東国国府の成立と変遷―』資料集 シンポジウム東国の国府 in
 WAYO 実行委員会
 川井正一 1999「国府を支えた生産 常陸国」寺村光晴・早川 泉・駒見和夫編『幻の国府を撮る―東国の歩みから―』雄山閣
 川井正一 2002「国分遺跡出土発掘陶器の検討」『国分遺跡―確認調査報告書―』石岡市教育委員会
 川井正一・佐藤正好 1983『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5―鹿の子C遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第20集（財）茨城県教育財団
 木下 良編 1996『古代を考える 古代道路』吉川弘文館
 黒澤彰哉 1987「常陸における国分寺瓦の研究Ⅱ」『茨城考古』第9号 茨城県考古学研究会
 黒澤彰哉 2002「造寺計画の変更」『国分遺跡―確認調査報告書―』石岡市教育委員会
 小杉山大輔・曾根俊雄 2008『市内遺跡調査報告書』第3集 石岡市教育委員会
 古代生産史研究会 1997「東国の須恵器―関東地方における歴史時代須恵器の系譜―」97シンポジウム発表要旨・資料
 小松崎博一・山本吉一 2007「常陸国府城出土発掘陶器集成―1―」図版編一『茨城県考古学協会誌』第19号 茨城県考古学協会
 斎藤孝正 2000『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』日本の美術第409号 至文堂
 斎藤孝正・後藤建一編 1995『須恵器製成図録』第3巻 東日本編1 雄山閣出版
 轟谷昌彦 2007「藤枝市助宗古窯跡群の灰釉陶器生産と遠江・駿河の編年」『静岡県考古学研究会』第39号 静岡県考古学協会
 東国土器研究会 1990『東国土器研究』第3号 特集 黒色土器―展開と終焉
 豊崎 卓 1973『常陸国府址発掘調査報告書』石岡市教育委員会
 崎崎彰一 1983「須賀野の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』(尾北地区・三河地区) 愛知県教育委員会
 齋 元洋編 2002「二川窯出土遺物の分類と編年」『二川古窯址群(Ⅱ)―豊橋総合動植物公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―豊橋市埋蔵文化財調
 査報告書第61集 豊橋市教育委員会
 齋 元洋編 2009『灰釉陶器のプラインドテスト』1・2・3 東海土器研究会
 土生朗治 1999「茨城県石岡市泉右遺跡―発掘調査報告書―』石岡市教育委員会・山武考古学研究所
 松井一明 1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」及川 司・鈴木良孝編『静岡県窯業遺跡(静岡県内窯業遺
 跡分布調査報告書) 静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
 箕輪健一 2001『常陸国衙跡―石岡小学校偏水プール建設事業に伴う調査―』石岡市教育委員会
 箕輪健一 2009『常陸国衙跡―国庁・曹司の調査―』石岡市教育委員会
 山中敏史編 2003・04『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編・Ⅱ遺物・遺跡編 奈良文化財研究所